

奇譚クラブ

1957年 9月号

マリアンヌ
の手記より
アブマニア
の告白

痛められし桃の実
病床徒然草

鴉嘔吐夫・訳
柳沢吉保



9月号

昭和三十三年八月三十日印刷
昭和三十三年九月一日発行 (第十一号 第九十八号)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十三年九月号

9

奇譚クラブ

昭和三十三年八月三十日印刷
昭和三十三年九月一日発行 (第十一号 第九十八号)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円
(送料八円)

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Tenseisya
Osaka Japan



IBM. 2805

奇譚クラブ最近号主要目次

昭和三十一年
〇四月号(復刊第三号)

口 絵 美しき三馬車 四馬 幸・園
水中の女 都子 園
緊縛フォト・オンパレード 伊吹 幸子
黒のシムリス 川辺 幸子
どういふボス 萩 幸子
ボリウ ム 加賀 幸子
なつて 加賀 幸子
うつつ 加賀 幸子
旅の縛られ女 藤田 幸子
悪魔の性 藤田 幸子
女性の下着 藤田 幸子
完全な性 藤田 幸子
二個のイチャシク洗腸 藤田 幸子
完全な性 藤田 幸子
サデイズム 藤田 幸子
少年の性 藤田 幸子
男性の性 藤田 幸子
女性切腹 藤田 幸子
新いコルセット 藤田 幸子
あるマゾヒストの手帖 藤田 幸子
私の洗腸 藤田 幸子
アクロバット通信 藤田 幸子
残虐なる女性 藤田 幸子
昭和三十一年
〇四月号(復刊第三号)

定価二百円(千16円)

口 絵 第二次会場の被服 四馬 幸・園
ナイロスのレイコート 都子 園
「こんなボスで？」 伊吹 幸子
お気に召すかしら 伊吹 幸子
一手前が痛いから 伊吹 幸子
黒のシムリス 川辺 幸子
成る切腹 藤田 幸子
幽霊の性 藤田 幸子
サデイズム 藤田 幸子
完全な性 藤田 幸子
二個のイチャシク洗腸 藤田 幸子
完全な性 藤田 幸子
サデイズム 藤田 幸子
少年の性 藤田 幸子
男性の性 藤田 幸子
女性切腹 藤田 幸子
新いコルセット 藤田 幸子
あるマゾヒストの手帖 藤田 幸子
私の洗腸 藤田 幸子
アクロバット通信 藤田 幸子
残虐なる女性 藤田 幸子
昭和三十一年
〇五月号(復刊第四号)

定価二百円(千8円)

口 絵 源やかな令嬢、メイドの拘束 四馬 幸・園
魔の味 四馬 幸・園
完全なる性 四馬 幸・園
体臭の性 四馬 幸・園
灰色の性(異常体験記) 伊吹 幸子
奴隷に与える手紙 伊吹 幸子
奇妙な性 伊吹 幸子
魔の味 伊吹 幸子
生肉の性 伊吹 幸子
完全なる性 伊吹 幸子
玉の性 伊吹 幸子
アブノーマル・モノローグ 伊吹 幸子
情に笑う女 伊吹 幸子
昭和三十一年
〇六月号(復刊第五号)

定価二百円(千8円)

口 絵 現代マゾヒズム芸術時評 四馬 幸・園
お仕置遊戯 四馬 幸・園
フエシストの文学ノート 伊吹 幸子
「縛られ」の時代 伊吹 幸子
お前の性 伊吹 幸子
玉の性 伊吹 幸子
サデイズム 伊吹 幸子
昭和三十一年
〇七月号(復刊第六号)

定価二百円(千8円)

読者原稿募集(皆さまの共同広場建設のために)

【研究発表】

アブノーマルに関する研究や発表、小論文等、平易にして本誌の読者に興味を持たせようとするもの、十枚迄、採用分には本誌三分分を贈呈いたします。

【創作】

異色ある題材を現れて立つ野心ある新人の出現を期待します。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限ります。採用分には本誌三分分以上を贈呈致します。

【体験告白手記】

皆さまの偉大な体験の叫びを募集します。枚数は三十枚程度、掲載分には一冊につき千円乃至三千円の賞金を呈します。誰でも一人は一篇位は書くべきものです。生々しい体験や告白は是非お寄せ下さい。

【ポケット告白】

文休や用紙など一切問題ありません。十枚以内の短い告白物を気軽に書き下され。採用分には本誌三分分を贈呈いたします。

【映画、雑誌通信】

映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二分分乃至三分分贈呈いたします。

【口絵並に挿絵】

画材はサド、マゾ流暢、切腹等御自由です。優秀な作者には継続的に依頼いたします。

【編集者或は執筆者への公開状】

編集者執筆者或はモデル等に對しての読者の皆様からの公開状を募集します。適当なものは本誌上に掲載の上、回答を求めることとします。本誌三分分贈呈。

(開放した誌面を御利用下さい)

【私のイメージ】

熱烈奔放なイメージをどしどしぶつ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には本誌三分分以上を贈呈します。

【実写真】

御自身写真されたものに限り、裏面又は別紙に説明とデータをお忘れなく。採用分には相当謝礼を呈上いたします。

【アイデア】

将来本誌にて企画すべきもの全般につき出来るだけ詳細に、掲載の如何に拘らず優秀なものには千円迄の謝礼を呈上いたします。

【私は訴える】

皆さまの胸に持つおられる誰にも云えない諸々の悩みや御意見主張等を発表して下さい。本誌ならでは取り上げないような内容のもの。採用のものには本誌二分分以上を贈呈します。

【レポート】

新聞記事の切り抜き或は見聞等、皆様の興味をお持ちになった事件等につきお知らせ下さい。掲載分には本誌二分分贈呈。

【読者通信】

編集者、執筆者、投稿者等への便り、前号の批評、希望、或は編集や雑誌のあり方等に関して忌憚なきお便りをお寄せ下さい。ハガキにても結構です。つとめて誌上に紹介いたします。

【読者交歓室】

読者相互間の文通呼び掛け応答等の頁を新設いたしますから御遠慮なく御活用下さい。文章はなるべく簡単に明瞭にお願いいたします。

奇譚クラブ編集部

◎本誌月極購読料◎

一月分一冊送料八円二百円
三月分三冊送料共六百元
半年分六冊送料共千二百円
一年分十二冊送料共二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。一月分一冊、お申込みの方は必ず送料八円の御加算を願います。半年分御申込みの方は景品として手札型写真三枚、一年分お申込みの方は景品としてヤビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ 第十一巻 第八号

九月号 定価二百円(送料八円)

昭和三十三年八月三十日印刷
昭和三十三年九月一日発行

編集者 人 箕田 京二
印刷者 阿倍野区晴通一丁目八五番地
発行所 天 星 社

振替口座大阪五〇〇四二番

本社に対する御送金は振込みの振替用紙を御利用の上、受領証をお送り下さい。確実で早く大変便利です。振替用紙御入用の方はお申込次第お送りいたします。(但し御注文品と同送しない時は、八円切手の封入を願います)

○八月号 (復刊第七号)

定価二百円 (〒8円)

口絵

美しい床の間……………四馬孝・画
すべりたい……………(秋千恵子嬢)
米誌にみた緊縛面歐米式新スタイル
華々しき私刑……………北原純子・画
大衆文学に現れた責めの描写藤見郁

無惨絵マニア……………才昭洛
二等兵時代の思い出……………高村
被縛マニアの回想……………渡辺
縛り絵マニアの回想……………川中
一読者としての公開状……………野中
元禄女腹切り……………真鍋四十七
「鼻」と「変型しぼり」……………京七

幽霊十ヶ月……………東田
自決する従軍看護婦たち……………門田
奈子のA感覚について……………矢崎
賭けられた洗腸……………嵯峨美也子
最近の縛り映画から……………松井

赤い花は泣いている……………角間
私のコレクシヨンより……………山口
統一少年軍記……………土路
瀧沢の前夜……………千葉
緊縛映画速報……………白石

最近の映画から……………白石
春日ルミ嬢まいる……………中友三
玉稿落穂集……………編集
新聞紙上に出た切腹実話……………藤森
探偵小説新考……………東一
蜂胸完成……………藤間
とりこの白人娘……………仙治

○九月号 (復刊第八号)
定価二百円 (〒8円)

口絵

美しい飼育物の調教……………四馬孝・画
吊りを加味したアイデア北原純子・画
緊縛フォト二題……………須川、花坂嬢
ナイフ投げの的……………BIZARRより
女学生……………北原純子・画

欧米式新スタイル二態……………月岡 映子
洗腸とおむつ……………藤見 郁
文学に現れた同性愛……………松原三千代
私の「ふんどし」……………真金十郎
「被虐欲」其の後……………池田ふみ子
マニアの女生徒の手記……………門田 奈子
奈子の恋愛について……………沼正三

お灸を据える女性雑誌……………松原
映画に現れた拷問場面……………左巻
現代マゾヒズム芸術時評……………東原
探偵小説新考……………本田
芝居の責め、紅血欠皿……………白石
最近の映画から……………角間

悦びに現れた一考察……………松原
「切腹の歴史」……………角間
私のコレクシヨンより……………嵯峨美也子
玉稿落穂集……………嵯峨美也子
最近の縛り映画から……………嵯峨美也子

○十月号 (復刊第九号)
定価二百円 (〒8円)

口絵

北原純子十月集、壊れ易き獲物……………北原純子
刺青師の部屋、和蘭陀屋敷の謎……………現代マゾヒズム芸術時評参考資料
引廻し……………春日ルミ嬢、伊吹真子嬢
米誌に見た緊縛写真欧米式新スタイル……………サデイズム・シン詳察
お灸の女王コンクール……………藤木 仙治
大衆雑誌と責め……………岩瀬 祥一
私の洗腸ブレイ……………青山三枝吉
受刑生活の思い出……………福村 光治
現代マゾヒズム芸術時評……………原 忠正
「ますらお派」夫の犯罪……………青山三枝吉
泥棒に縛られた話二件……………池田 正一
エスキモー嬢の切腹……………本間 正宏
ある夢想家の手帖から……………沼 完三
「洗腸」に関するレポート……………古沼 完三
締めつけられた女優達……………古沼 完三
泥棒に入られた南田洋子……………古賀 信司
責め絵の今昔……………伊藤 晴雨

口絵

「一男色者の手記」……………矢桐 重八
私のアイデア「晒し台」……………羽村 京助
緊縛映画速報……………千葉 栄市
探偵小説新考……………東 一郎
サジスチンの半生記……………鷹野めぐみ
読・乗馬スボンの女腹切……………藤山 秀緒
最近の映画から……………白石 稔

○十一月号 (復刊第十号)

定価二百円 (〒8円)

口絵

新着フォト紹介(一)……………北原純子・画
「いでゆ」より……………(雲井久子)
拘束服とマスク、欧米式新スタイル……………(雲井久子)
或るポーズ……………(雲井久子)
現代マゾヒズム芸術時評……………滝い子・画
滝い子素描集……………滝い子・画
文学に現れた責めの描写……………松原三千代
私のふんどし(二)……………松原三千代
異性より同性に興味……………松原三千代
コルセット・マンボ……………松原三千代
スカーフトへの魅力……………松原三千代
牢獄の花嫁……………東田 一郎
黄色オラミ嬢……………鳴山 平二
和装女の縛り責め展覧会……………岸本 不二夫
美女決闘場のアイディア……………小西 鉄二
腋毛礼賛……………南 秀三
女武者自刃……………藤山 秀緒
ある夢想家の手帖から……………沼 正一
醜態への幻想……………淡 集
玉稿落穂集……………編集
魂を病む人……………北原 純子
私の告白二題……………青 集
家畜人ヤプー……………沼 正一
女性化願望と女性ホルモン……………沼 正一
糸姫の体験……………沼 正一
最近の映画から……………沼 正一
美とワイセツの境界……………沼 正一
緊縛映画速報……………沼 正一
防具使用による窒息死……………沼 正一
マゾ・クラブの結成を望む……………沼 正一

昭和三十三年

○一月号 (復刊第十一号)

定価二百円 (〒8円)

口絵

新着フォト紹介(アメリカ)……………北原純子・画
「ボウニ」分岐点……………北原純子・画
花嫁受難二題……………北原純子・画
鳴門の怪鬼(水戸黄門漫遊記第十話)……………A D E S U G A T A
お灸せ……………北原純子・画
欧米式新スタイル(5)……………藤見 郁
文学に現れた責めの描写……………藤見 郁
花と潮風……………藤見 郁
フエチに現れた切抜きから……………阿川 純子
黄色オラミ嬢(第二部)……………木真不二夫
大奥裸女決闘……………京 七
電気責め……………甲斐 三郎
ある夢想家の手帖から……………沼 正一
女性切腹例抄記(上)……………沼 正一
ある女給の体験……………沼 正一
ある女給の体験……………沼 正一
遊女八重路の責め……………沼 正一
特異な角度から(折檻と拷問)……………沼 正一
続々乗馬スボンの女腹切……………沼 正一
女性の素足礼賛……………沼 正一
家畜人ヤプー(第二回)……………沼 正一
舞踊女師匠の責めの実験……………沼 正一
サジスチンの半生記……………沼 正一
「魔海の業火」……………沼 正一
児童雑誌にみた惨虐性……………沼 正一
玉稿落穂集……………沼 正一
ヴェールを脱いだ肢体美……………沼 正一
ムチ打ちと緊縛……………沼 正一
緊縛映画と雑誌の挿絵……………沼 正一

○二月号 (復刊第十二号)

定価二百円 (〒8円)

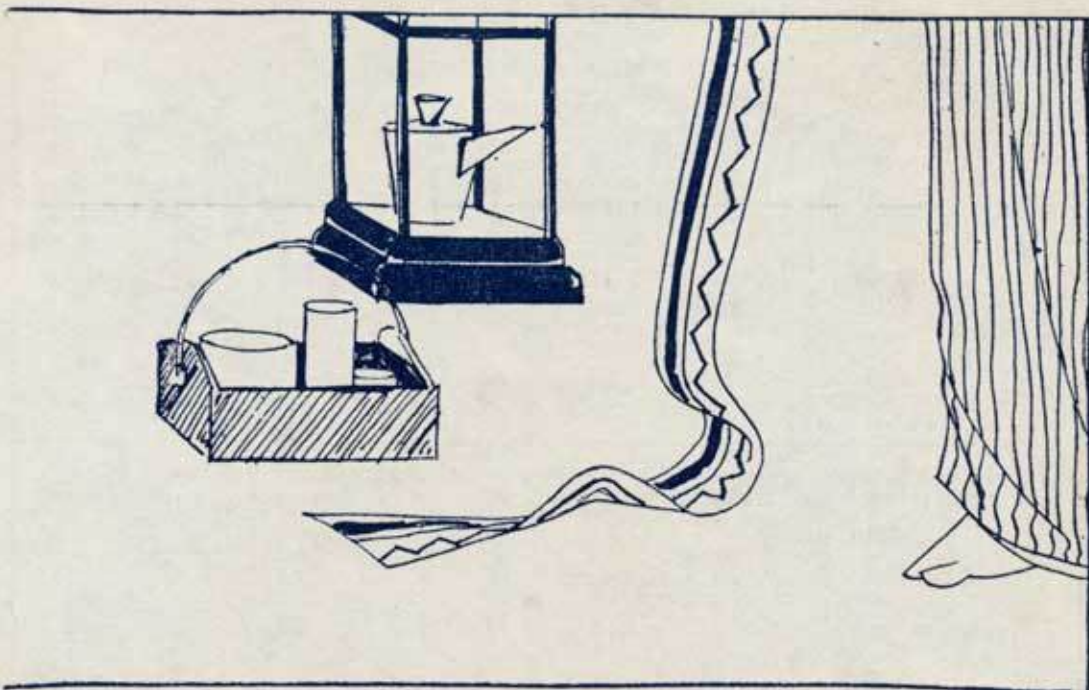
告白「責めとエチの自画像」……………越野 義夫
現代マゾヒズム芸術時評……………原 忠正

奇譚クラブ 復刊第十八号 目次

九月 月号

頭	口	繪	巻	四馬 孝・画
（宝塚映画）「トンチンカン八大伝」	（写真）「新緑の陽を浴びて」	（モデル）須川令子	星 美智子・東 龍子	滝 れい子・画
（宝塚映画）「トンチンカン八大伝」	（写真）「括られちゃったワ」	（モデル）萩千恵子	日 高 澄子・多摩 桂子	楓 月 太 郎・提供
（宝塚映画）「トンチンカン八大伝」	（写真）「括られちゃったワ」	（モデル）萩千恵子	洋画スチール 二題	千 葉 栄 市・提供
（宝塚映画）「トンチンカン八大伝」	（写真）「括られちゃったワ」	（モデル）萩千恵子	RKO映画「征服者」	（東映・べらんめえ活人剣）
（宝塚映画）「トンチンカン八大伝」	（写真）「括られちゃったワ」	（モデル）萩千恵子	ユニヴァーサル映画「魔術師の恋」	（日活・殺人計画完了）
（宝塚映画）「トンチンカン八大伝」	（写真）「括られちゃったワ」	（モデル）萩千恵子	ユニヴァーサル映画「魔術師の恋」	編 集 部 選 定

病床徒然草	告白 鞭の線に描かれて	幻想炎の娘	壮烈大和撫子	ある夢想家の手帖から	探偵小説に現われた「地獄絵巻」	美女を十字架にクギづけ	相撲取草	ワイド映画の縛りシーン	和装教室	人身御供の美女
柳沢 吉保	皆川のぶ子	笛地 佐渡	藤山 秀緒	沼 正三	高崎 勉	東 一郎	土俵四股平	嵯峨美也子	白金 紅次	本田 由郎
18	28	32	38	42	48	52	54	58	60	68



魔女裁判に関するノート	「苦しみを求めて」	未来幻想 家畜人ヤプー	赤い煉瓦の家	体験談 水兵生活と輝	ビーチボールの魅力	「残虐な女性」	医学幻想	映画速報欄	告白 女性志願者の夢	麻生保氏の生活と意見	切腹随想	私の本箱から	美少年処刑の図「笑い」	通信「菊花会」例会報告	現代マゾヒスム芸術時評	赤い下穿き	痛められし桃の実	續・潰滅の前夜	読者通信
甲斐 仁参	近藤 一	沼 正三	津々 一平	内田 武男	佐田 春雄	森本愛造	古井 直哉	千葉 栄市	真崎 伸一	麻生 保	兵頭 庫一	星 光一	山口 幸一	筑紫美弥子	原 忠正	高木 栄二	鴉嘔吐夫沢	土路 草一	
70	76	60	88	93	96	100	101	107	103	117	120	122	130	133	135	138	140	146	170

口絵

新着フォト紹介(アメリカ)(3)

北原純子「洋面スチール名画集(四場場面)」
先づのお仕置「猿轡を噛まれた女優」
たち・欧米式新スタイル(6)

我が異常性の記
オット・スタイルの女腹切

ある夢家の手帖から
マゾヒズム見たり聞いたり

サジスチンの半生記(三)
秀緒の告白

家畜人ヤブー(第三回)
サディズムの芽

女教員の責め折檻
異人屋敷の裸女

お妾アバウト
現代マゾヒズム芸術時評

話の肩籠
フエチに關する切抜から(2)

「スロース・クラブ会則」
私の「縛り美五原則」に就て

荒腸とおむつ(二)
私のふんどし

松原三千代

忠正次郎

紅柳

青柳

仁正三

秀緒

俊野

正三

秀緒

秀緒

秀緒

秀緒

秀緒

秀緒

秀緒

秀緒

秀緒

秀緒

秀緒

秀緒

秀緒

秀緒

秀緒

秀緒

秀緒

三月号(復刊第十三号)

【定価二百円】(〒8円)

口絵

新着フォト紹介(アメリカ)

スクリーンで縛られた女優たち

晦冥の悲劇

習作

浴槽の新妻

森の小怪で

大映映画「魔の花嫁衣裳」より

我が異常性の記

髪と絵

マゾヒズム見たり聞いたり

あふり責め奇聞

本由

本由

本由

本由

四月号(復刊第十四号)

【定価二百円】(〒8円)

口絵

エチフに關する切抜から

ある夢家の手帖から

悪魔の勝利を夢みる男

或る女装マニヤの記

流腸レポート

特異な角度から

私のふんどし

燃ゆる男装

或るアブ・マニアの告白

女同志の吊り責め

禪美悲願

ある女給の体験(2)

サジスチンの半生記(4)

「流腸」に關する告白

虐待された女中

五月号(復刊第十五号)

【定価二百円】(〒8円)

口絵

クツワの装置

地下室の拷問二題

振袖狂女

縛られた女優たち

「ある夢家の手帖」(二) 奴隷貿易より

緊縛映画名場面集

我が異常性の記

おしめと流腸の幻想

ある女給の体験

私のセクシユアリス

緊縛映画名場面集

マゾヒズム見たり聞いたり

探り責めに関する手帖

ある夢家の手帖から

切腹随想

六月号(復刊第十六号)

【定価二百円】(〒8円)

口絵

地下の拷問室

縛られた女優たち

楓月太郎提供

玉稿落穂集

「和装教室」

女サジストの記

流腸器具考

加虐送別会

責問師の話

ふんどし幻想

切腹随想

ある夢家の手帖から

探り責めに関する手帖

マゾヒズム見たり聞いたり

あふり責め奇聞

七月号(復刊第十七号)

【定価二百円】(〒8円)

口絵

花坂道子嬢艶姿集

石抱き算盤責め

緊縛映画名場面集

「愛は惜しみなく」

私の本箱から

幻想の娘

重屏禁

ある女性から編集長への手紙

水責に關する手帖

マゾヒズムに生くる夢

続・切腹曼陀羅図

南支那の鬼

現代マゾヒズム芸術時評

女血たるま

禪とプリッ

八月号(復刊第十八号)

【定価二百円】(〒8円)

口絵

美への冒瀆

加賀利江嬢艶姿集

花魁「美言野」の折檻

映画写真「夕立勘五郎」

洋面スチール「聖衣」

旅廻り劇団の責場面から

恋する夫人への手紙

ある女給の体験

青い流腸器

魔女裁判に關する手帖

「乗馬スポン」への憧れ

残虐な女性

「腰巻のアンケート」

おむつカヴァーと私

女体屈伸測定器

四馬孝・画

見ていれば見ている程、いろいろの想像や空想が湧き出てくる絵ではありませんか。
この絵をもとに一つの物語ができそうです。



……いけにえの町娘……

親爺が博打で負けた借金のカタに親分の家へ連れて来られた可憐な町娘
お妙の身の上には、どんな運命が待っているであろうか？……

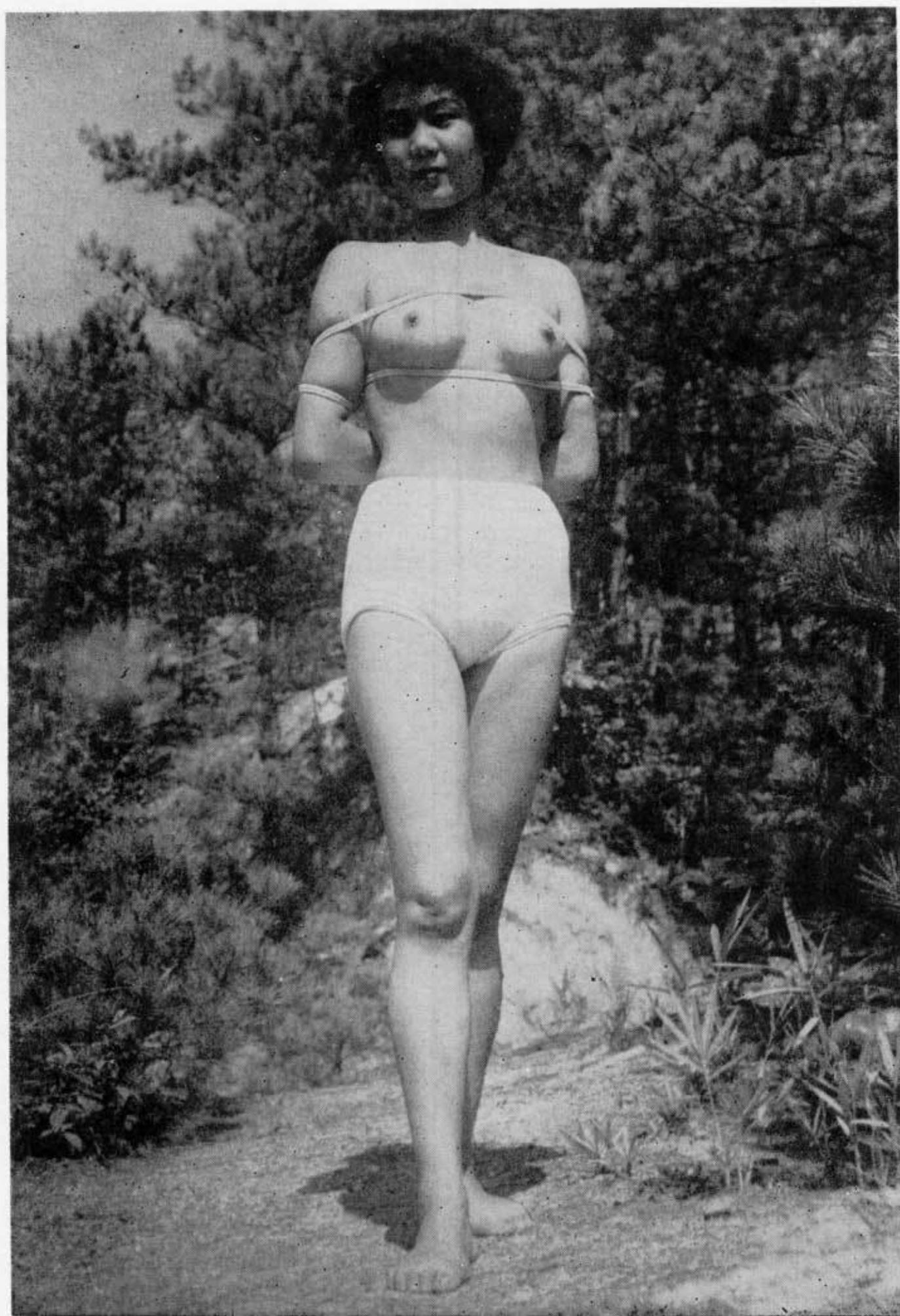


滝
れい子・画

＜新緑の陽を浴びて＞

於・光明池畔

モデル……須川令子嬢



緊縛映画名場面集.....(楓月太郎・提供).....

宝塚映画 「トンチンカン八犬伝」



縛られているのは(九重千鶴)

写真『括られちゃったワ』



モデル……萩 千恵子嬢



星 美智子（東映、べらんめえ活人剣）今まで「アジャパー天国」「ひよどり草紙」と各社で縛られた彼女の東映での比較的新しい写真である。



東 竜子（東映、べらんめえ活人剣）その昔、大都映画の花形女優として活躍「怪傑卅」「児雷也」などで美しい縛られ姿を堪能させてくれた彼女のカムバック初めての写真である

縛られた女優たち



日 高 澄 子（日活、殺人計画完了）この道のベテランとして「麗人草」「七つの宝石」「地獄の門」と枚挙に暇のない彼女の手馴れた縛られ姿である。



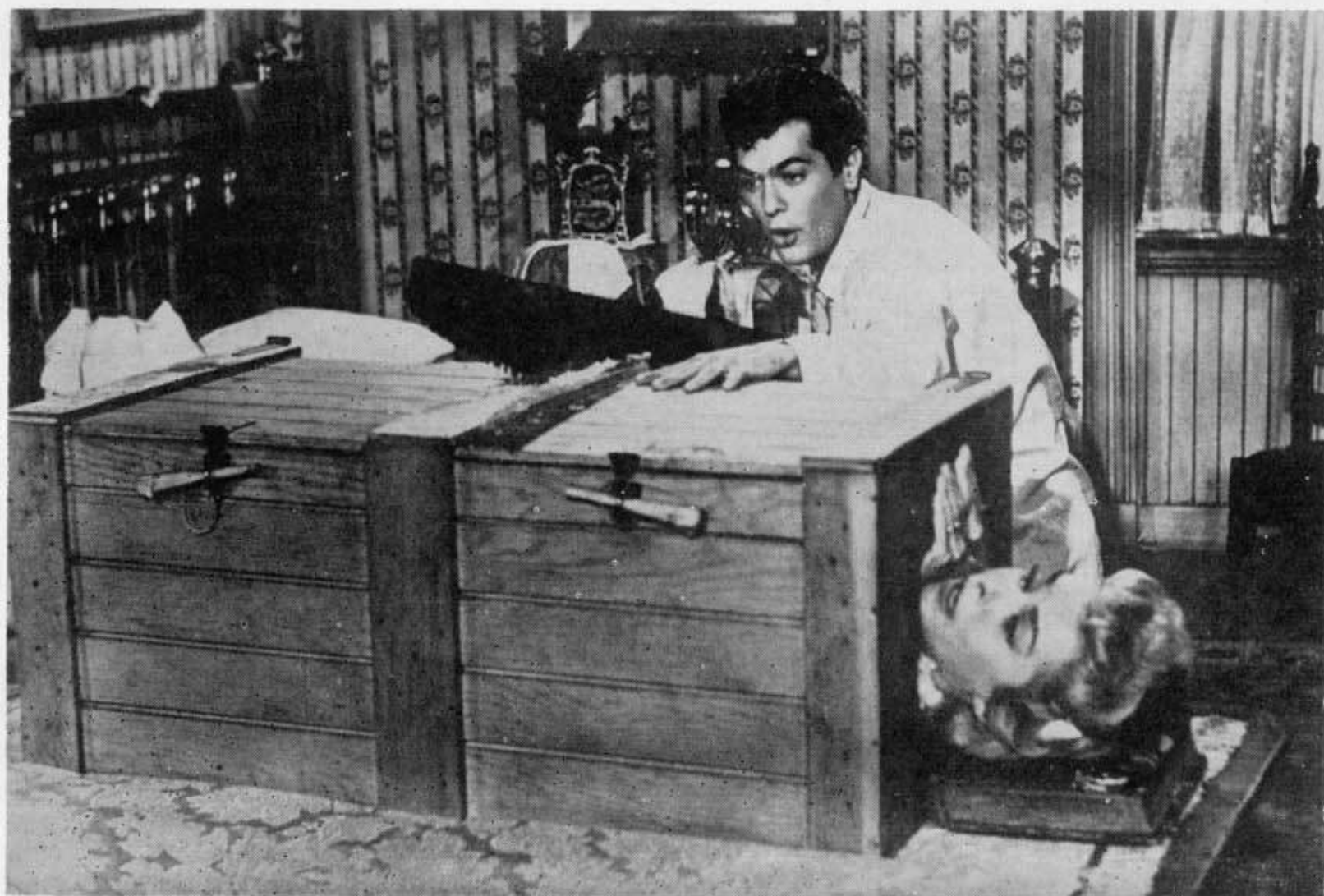
多 摩 桂 子（日活、殺人計画完了）入社第一回から縛られ、今後を期待させたが、この作品だけで脇役に廻ってしまったので最初で最後の緊縛写真である。

△洋画 スチール 二題▽

身動きも出来ぬ大の字縛り、両頬には槍の穂先が迫っている。
眺めている群衆の表情。



米RKO映画「征服者」より…… ジョン・ウェイン
スーザン・ヘイワード主演



米ユニヴァーサル映画「魔術師の恋」より
箱詰の美女が今まさに真二つにしようとしている。…… トニー・カーティス
ジャネット・リー主演



鵜坂尻たゝき祭

新しい文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1957年 9月号

(第十一卷 第八号 通刊第九十八号)

病^{アブ・マニア}床^{マニア}徒^{つれ}然^{づれ}草^{ぐさ}

柳 沢 吉 保



つれづれなるままに、日ぐらしすずりにむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ

「徒然草（兼好法師）」

病床六尺、ベッドに縛りつけられた、小さな世界の不自由

さも、五年余と馴染んでみれば、蒲団にこもる自分の体臭も、そこはかとなく愛おしく、日々暇を持て余し、自分の目に写ったり、耳に響いた諸々の妖しき出来事を、とりとめもなく書きなぐってみましょう。

「宝石」所載 木々高太郎作「印度大麻」の一節より

「病的快感？」

「そうさ。いったい君。快感というものは、特に性的快感は、病的な現象と非常に近いよ。例えばほら、二三ヶ月前にクリニークにいたじやないか、下痢が快感になって、毎日強下剤を使って、二十分も三十分も便所に居る。そのあげく、プロラプス、伝染、そして消瘦、それだけではない人前も憚らなくなつて、外来患者となつて来た例が、これは檻禁し手足を縛し、十数日の強制治療で一時的なおりかけて、ついに死んだ十九才の男の例であつた。」



我が家の二階の八畳一間を占領して、隠棲動物の様に、南の明るい日射を嫌って、北側の窓にそって置かれたベッドの上で、今ペンを持って居ります。が、少し頭を持ち上げると、今日も塀越しに見える、裏の家の春の日射を浴びた物干場には、素晴らしい眺めを展開して、私の心をゆさぶらずにはおきません。東北の泉都から後妻に來た、若い奥さんの真紅や、ピンクのお腰。半年前から、私と同病で伏せて居るが、短大へ通って居たお嬢さん。その妹娘で高校生のドライ娘。姉娘と同年の愛敬あるねえさん。彼女たちの淡いピンク、クリーム、純白等の、パンティ、下穿、スリッパ、ペティコートETCの下着類が、天氣の良い日は、所せましとばかりに、爽やかな風にあふられているのです。時には、睨みつけられたり、廊下の硝子戸を、「ピシヤリ」とやられ慌てさせられる事も有りますが、「敵は本能寺に有り。」かえって不敵な秘密の快樂を味えるというものです。

私には屋内なぞ、全然と言う程興味を持ちませんでした。が、半年程前、嫂と奥さんの会話を立聞してから、がらりと事情が一変してしまいました。

「ねえ、奥さん。宅のK子は、胃腸が弱くて困るんざますよ。最初は下剤を飲んで居りましたんざあますが、栗田先生に、体が疲れますし、衰弱するばかりですから、ねえ、浣腸をしてるんざますよ。浣腸なんて、ホホホホ、いやざあますわねえ、でもお蔭で、最近では日中でも良く寝むんざあますよ。私も、助かるんざあますが、最初はねえ、奥さん。本当に嫌がりましたK子も、最近では、お体が楽に成るんざあますか、先生がお出に成るのを待ってるんざあますよ。お宅の吉保様、

お好ろしくて、本当に結構ざあますねえ」

本当に、何が結構なものか、私は自身の浣腸には、大した興味を持たないが、まるで悪魔の甘い囁きの様に、此の時から強い磁石に引きつけられ、薄命型美人のK子さんの、あのなよなよした肢体が、どの様に男の手で料理され、羞恥で赤くほてるのであろうか、純白のシーツの上で、どの様なポーズを取らされるであらうかと、あれこれと、カーテンにさえぎられて見えない屋内を睨みつけては、妖しい妄想にふけるようになりました。そのK子さんが、身体の回復を待って入院し、更に胸郭成形の手術をすると聞いては、手術を嫌がって三年余の遠廻りをした私には、残酷な様な氣も致しますが、より以上に華麗な無惨美を見る様で、手術の時の様子を想像すると、心のうづきを感じて参ります。

私が入院して居たのは、義兄が経営する病院で、院長と専門の医長以外にうるさく言う者が無いのを良い事に、「神経質に成る」と療養書の一冊も読むでもなく、退屈すれば病院中を歩きまわるし、全く箸にも棒にもかからぬ、患者としては、落第生以下の無頼漢だったと思います。しかし、その為、一生に又と経験出来まいと思われる事も目撃致しました。入院して、五ヶ月頃の日曜日の事、夕食後から私の部屋に集って居た患者達も、八時の消燈と共にそれぞれ自室へ戻った後、個室に居る私は一人部屋を出て、宿直の看護婦さんと無駄話をしに診察室へ出掛けてみましたが、生憎一人も居ず、通いなれた看護婦寮へ行く為、外科室の前を抜け、産婦人科の前迄かかった時のことです。薄暗く硝子越しに灯の見える診療室の中から微かな忍び笑いが、無気味な迄に静まりかえった廊下にいる私の耳に聞えて参りました。いつもの事故、無作



法に扉を開けた時衝立越しに、若いキザで小生意気な、患者の嫌われ者の山野というインターンの立姿を見出し、こんな男と話をする気も無く、引返そうと足を返した時、山野も、私に気がついて、

「何だ君か、無断で入るなんて失敬じゃないか、何か用か？まあいい、話して行けよ。愛川も居るよ」

と、例の氣に喰わない、うすら笑いを浮べた時。

「いやいや、嫌よ。山野さん。」

と、突然、若い女の声が聞えて来ました。しかし、声の出所が面白い所で、黒レザー張りの診察用の長椅子が置いてあり、腰を掛けて居ても頭位は見える筈なのですが、全然見えませんし、姿も現わしませんので、衝立を廻ってみて、「ハッ」として足が釘付になりました。

愛川と言う若い内科の看護婦が、丸出しの臀部を突上げる様にして寝そべって居ります。その恰好は、首筋と白衣の裾をたくし上げた腰部（足元迄下り下げた下穿を押えつける様に）を幅広のベルトで、「キツチリ」と締めつけられて居ります。瞬間、カーッと、顔に血が上り熱気で見えなくなった眼鏡を、山野に向けると、相変らず嫌味なうすら笑いを浮べながら、ゆっくりして手付で、ベルトをはずし始めます。解放された愛川看護婦は素早く下穿をずり上げ、白衣の裾を直しながら、大急ぎで扉を開け、呆然として泥人形の様に突立って居る私に、真赤に上気した顔を向け、ニヤリ、と微笑んで部屋から姿を消してしまいました。私は、二度ハッとさせられ、止まった様に、気付かなかった心臓が、激しく動悸を打ち初め、急に立って居られなく成り、今迄彼女の縛られて居たまだ体温の残って居る様な長椅子に倒れる様に

腰を落して、暫くは、ぜいぜいと息をはずませるより外ありませんでした。

「どうしたい？ 苦しそうだな、気分でも悪いのか？」

相変らず嫌味な、山野の言葉に返事も出来ませんでした。

「なあに、一寸、浣腸をしてやろうとした丈さ、ゆっくり話して行けよ。」

と何気なく言う山野に、返事もせず自室へ帰った私は、今見て来た情景と、平常は、控え目で目立たぬ彼女の美しい笑顔が、二重、三重に網膜に焼きつけられて、転々としても寝られぬ夜を過ごしたばかりか、一週間余りと言うものは、部屋も出ず、安静時間を守ったと言うより、わずかな睡りにも、夢に追い掛けられ、ぐったりと疲れてしまい、さすが、出鱈目な私も動く元氣さなくなっていました。寮友が、心配して見舞に来てくれるのも、この時ばかりは、煩しく、又腹立しくさえなりました。が、今度は、彼女に、大いに興味が持て、自分でも嫌らしく思える程、彼女の尻を追い廻し、半月程後、ようよう二人だけの時を作りましたが、私の話が彼女自身のことになると巧みに話をそらしてしまい、結局こんな話をしてくれました。

彼女が看護婦養成所を出て、初めて或る小さな病院に勤務していた時、連日のように病院へ姿を現わす十八才位の娘さんがありました。血色も良く、とても病人のようには見えませんが、この娘さんが浣腸狂いというのか、常習性や、腸の衰弱を恐れて、何度も院長が注意しても、わざわざ排便を止めたり、病氣を作っては施療に来るので、院長もほとほと持て余し乱暴に扱うようにしましたが、乱暴にされれば、される程嬉しそうに通って来るのです。それが、四カ月程で、パ



ツタリ来なくなってしまったが、

「きっと、外の病院へ通ってるわよ。柳沢さんには、わかりこないけど、浣腸ってそういうもんですもの。ことに女の人にはね。常習になったら絶対っていい程、止められるもんじやないらしいわね？」

と愛川看護婦はいいましたが、私は、その時は、そんなものかなあ位にしか考えられませんでした。しかしその後、奇クを得た時、彼女の言の正しさを信じ、また彼女のいった娘さんが、いつの間にか彼女自身に置きかえられていました。

私の病室は、第一、二、三、と三棟ある結核病棟の真中、第二病棟で、下が玄関、上が時計台になっています。看護婦の控室、夜は宿直室だったものを、院長が経営者の義弟である私の入院のため、明けて呉れただけに、殺風景な他の病室に比較すると、下手なホテル並の豪華設備でしたが、それより私を喜ばして呉れたのは、入院の際、案内の事務長が、「この部屋は、看護婦の部屋だったんですよ。見晴しは良いですよ。他の病棟はだいたい見渡せるし、だからって、あんまり廻りの病室ばかり見てると何日迄たっても病気は治りませんよ。明くて良い部屋なんだが、独身患者にや不向きですね。」

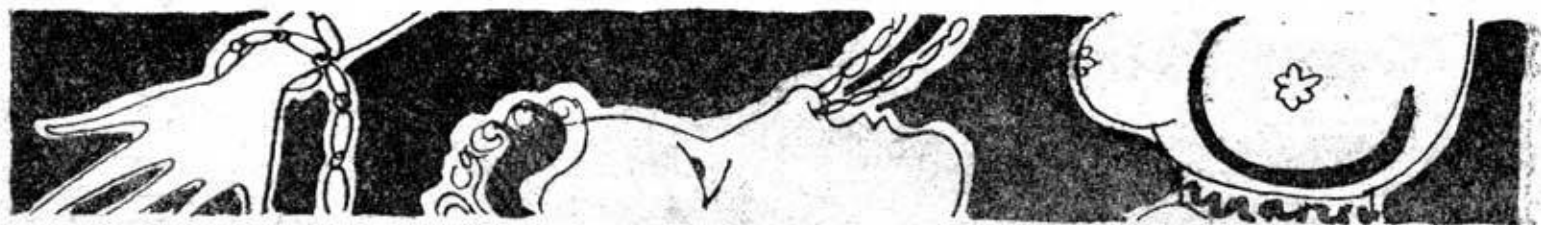
と意味有り気に笑っていましたが、西南にロツカー、板戸の押入れと並んで、廊下へ出る三尺の扉が有る以外、三方に硝子戸を張りめぐらされた室内は、たしかに見晴しは良いかも知れませんが、私には、この明るさがかえって煩しいくらいでした。だが室外へ目を移すと、俄然、私の若い心を昂らせるのに、充分すぎる景色でした。夜は繁華街のネオンが、虹掛け橋のように夜空をあざやかに色取るばかりか、室内に

七色のしずくを降りこぼし、切ない迄に、娑婆への郷愁をあほり立てます。第一病棟を見ると、階下の大部屋は年頃の娘さんばかりで、全国的に結核病床が不足して居る時代のこととて、通路もせましと、十二三人の女の患者さんが伏せっております。カーテンを下していても、案外回転窓は気が付かぬものと見え、女ばかりの小さな世界に、社会から隔離された彼女達の生活は、妖しい迄に色気に満ちたものです。殊に真夏なぞ素肌で寝巻一枚、中には、汗で下穿迄はずした彼女達の寝乱れ姿は、凄まじいばかりの光景です。そんなわけで私の部屋は、いつの間にか、男女患者の溜り場の観を呈して参りましたが、安静時間になると、男患者にベッドの上迄占領されてしまう騒ぎです。

安静時間でぐっすり寝込んだ彼女達の寝乱れ姿に、衿からこぼれ出て居る乳房に、裾を割って露にはみ出した太腿に、環境の故とはいいながら、餓狼のように、彼等は唾を飲み込まんばかりに、大騒ぎ致しております。しかし、私にはそんなことも、廻診時、次々と現れるオツパイ・コンクールも、大した興味を引きませんでした。それ以上の楽しみが、午前、午後の二回に、きまった時間、医長と共に訪れてくるからです。その時は、皆様に帰って頂き、内部から鍵を掛け、そうすると蒲団の下から、玩具に毛の生えた程度の双眼鏡を取出し、備付の、パイプ・チェアを窓際に置き、窓枠に肘をついて待ちます。やがて、室内に注射器を乗せた銀盆を捧げ持って、看護婦が現れて告げます。

「マイシンのお時間です。」

医長が入室すると、患者さん達は一齊に俯向けに寝転び、寝巻の裾を端折ると、下穿をずり下げ臀部を持上げるように



さらしながら注射を待ちます。なれた患者さんでも、下穿を充分に下げ得ないと見え、医長が、次々と患者の娘さん達の下穿に手を掛けて、無雑作に、ぐいと引下げては、キュウ、キュウ、とアルコール綿で、消毒を済ますと、なれきった手付で、臀肉をつまみ上げて、注射針を刺して行きます。またこの先生、覗き込んで居る私には、なかなか話せる男で注射を済すときまって「もう好い」というように、「ピシヤリ、ピシヤリ」と、二度、平手打ちをするのです。された方も、「クス、クス」笑って、赤くなつた臀部を下穿で包みながら、顔迄染めるのが、光学器を通してよく見えます。

なんだつまらないと、お思いかも知れませんが、男の逞ましい指に撮みあげられた練絹のような臀部を赤く染めて、キラリと光る注射器を受入れる度に、ピク、ピク、とけいれんを起す光景は、社会から隔離されて、刺激のない日々を過す私には、相当な、サデイスチックなシーンでした。

反対側に在る第三病棟の気胸室は、これまた素晴しく、土曜日は、私をして終日、病室に閉籠らせる日でした。「気胸日」この日こそは、他の患者さんは一切、オフ・リミットになつており、人の訪問を受けると機嫌が悪いというので、いつの間にか「柳さんの安静日」といわれるようになってしまいました。他人の入らない限り、一週間中の天国でした。久しぶし振りに、南川和子さんの、「メデカル礼讃」が四月号に掲載されておりましたが、私も文中の男性同様、終日、疲れるのも肩の凝るのも忘れて、双眼鏡片手に、窓際にへばりついております。第一病棟の、マイシン注射以上に興味を引起されます。レントゲン室から、透視の終った患者さんが、一人一人、シュミーズの両肩の吊紐もはずした儘、上半身裸体で

現われ、冬でも大きな瓦斯ストーブを焚て居る故か、顔も乳房も真赤に染めて、微かな恥らいと恐怖を身体全体で表現しながら、静かに気胸器の前に置かれたベッドに横臥致します。その身体は、化学療法の進歩もあり、全てが巷で見かける、ビジネス・ガールより丸みを帯びて見えます。薬芯の枕を下に敷き、頭上にて両手を組合せ、患部を持つ方の胸郭は大きく開放されると共に、腋下も最大に開放されるので、許されるなら、あの可愛い、また魅惑的な笑窪に接吻をしたい強い誘惑に、わくわくして参ります。

病にかまけてか、十人が十人迄、黒い物を持っております。気胸を覗き見る最高の歓喜は、両側気胸の患者が左側を終り右側に空氣の注入を受けております時で、苦痛も恐怖も露わに身体全体で表現され、なれない患者さんの場合など、苦痛に醜くゆがむ顔は、正視出来なく成ることもあります。相手が美女なら美女である程、私の歓喜は大きな筈なのに……

気胸のことは、書きかけておりましたが、南川さんの麗筆を読んだ現在、なんととはなしに筆が進みません。同じ経験をした私には、その筆力には感激のほかはありません。早く、貴重な体験を元にして得られた麗画を拝見致したいものと思っております。

気胸と氣腹の相違も有りますが、自分の経験した氣胸から氣腹のことに拙筆を弄して見たいと思います。氣胸と氣腹の相違は文字通り、氣胸は胸に空氣の注入を受けるのに対して、氣腹は腹腔内に空氣の注入を受けて肺を押上げるようにします。当然ポーズも変わります。腰の下に枕を当てられ、露出された腹部を持上げるようにして、ベッドに横たわった姿は、正に俎上の鯉です。あまつさえ医者を持つ針のような針を



目の前にしながら、じーっと目をつむって、今刺れるか、今か今かと待つ気持は、腹と胸の相違こそあれ私自身も再三飛び上るような痛さを味わいました。

気腹の患者さんは、幾ら八頭身を最新モードで包んで、颯と現れましても、帰りには、空気の注入を受けて、スカートのスナップが一つもはまらない程、身体の線を崩されますので、殆ど着飾った和服で参りますが、その令嬢、令婦人が腰紐をはずし、なめらかな腹部を最大限に露出して息をつめじーっと横わった姿に、邪神に捧げられた白い犠牲の幻想を描き、その脇に立って、伸した髪を無雑作に振り上げ、長い良く研ぎ澄された針を取り上げた医長の姿は、今正に、この白い犠牲者を自分の思うが儘に料理出来る惨忍な愉悦にニタリ、ニタリと、北叟笑む邪教祖のようでした。

失礼な書き方ですが、私のかかった医者の方を考えると、信太蓉子さんの「開花の契機」のあの名文章が鮮に浮んで参ります。白き犠牲者の思惑など考えぬように、医長は、無感動な面持ちで、この己が寶石の肌ざわりを楽しむ如く、一カ所、二カ所と指で押して見ます。ピタリと止まると、鮮かなれきった手捌きで、あの長い針が、ググツと二重三重と差込まれます。と、今迄死んだように動かなかった、白い丘陵が瞬間、ピクリと飛び上るかに見え、微力な呻きと共に、その顔に苦痛の色が大きくさっとみなぎります。息使いも荒く大きく軋る腹部にゴボゴボと、鈍い音をたてて無遠慮に空気は腹腔内に充滿して、腹部が丸みを帯て脹上り、「プラス、十、マイナス、八で、千三百」とか、「十幾つ、一幾つで、千五百」とか、慣切った単調な声が室内に流れ、サラサラとカルテを捲る音が止む頃、苦悶の顔もその儘に、物憂いよう

な体を、看護婦に助け上げられ、虐げられた腹部を愛しむように、次々と配色も鮮かに細紐で縛り上げられて行きます。自分の命を左右する権力者に無理に作った笑顔を向け敬虔な礼をかわして、室内から消える頃には、もう次の患者さんが苦痛に対する恐怖を心の奥に秘めながら、無理に媚を見せる複雑な表情でベッドに横たわります。私は、この時程医者に対して激しい羨望と嫉妬を感じたことはありませんでした。

一日。私の部屋で集っていた数人の男女の患者の間で、気胸と気腹とどっちが苦痛が多いかで論争がありました。が、気腹患者は、気胸は七百CC位を入れるのが最高で、大概は四百か、五百位だが、気腹は最低千三百CCから千五百は入れるしお腹は脹れ上るし食事もある位だ。吐気はするし、蹲むことも出来やしない。といえ、気胸患者は腹と胸の容積の相違を述べ、胸は肋骨に遮られて、空気の脹れ上る所がないから苦しいし、胸と腹では痛みの感覚が違うと。理屈に合ったものか、合わないものか知りませんが、甲論乙駁で結論なぞ出よう筈ありませんでした。口から泡を飛ばして居た女の患者さんも、一日食事摂らず、ベッドの上で、ぜいぜい吐気に苦しん居た人も、気腹を済ませて大きく脹れ上ったお腹を抱え、苦痛で蒼白に成った顔をゆがませ息使いも荒く、階段を一步一步手摺を頼りに登って居た若夫人も、手洗に立つ度に、三度も廊下で仆れ、医長に、詰責された記録を持つ処女も、（これは、気胸の患者さんにもいえることだが）経験を増すごとに、いつしか苦痛を訴えなくなったばかりか、土曜日になると朝早くから爆きながら、身仕度をなおして順序の取っこをする始末です。（入院患者は午前中、外来患者は午後となっておりますが、いつしか、入院患者の場合、男



の患者は女の患者さんに順序をゆずる不文律のようなものが出来上ってしまったほどです。」

「今日は九百しか入れなかったのよ。もう少し入れても良いんじゃないかしら？　こんなに少さいんですもの、物足らない見たい。」

とか、「気胸を済して来ると、何かせいせいして、気分が良いわ。」あの針を差入れた時の気分、ピリリと来て、チョットした刺激ね。ETC。以前のことなど、けろりと忘れて勝手なおしやべりは、安静時間も忘れて、此の日はいつになく婦長から強い叱言を受けております。そればかりか、気腹を済して帰って来るとすぐ素腹に、あのゴツゴツしたキャンパス製の医療用コルセットを、ゴチャゴチャ沢山ついた尾錠を締め、複雑な紐を操って胴もくびれんばかりに、人に手伝わして締付けている人もありましたが、普通の状態の時でも、コルセットは相当の苦痛だと思われますのに。男の患者に、「女なんて、あんなにして迄、スタイルを良く見せたいんだから気違い沙汰さ」と笑われても、御当人は、

「国立病院に居る時、こうした方が良い。」

といわれたと弁解しており、病理的可否は、私になんぞわかりませんが、普通の心理とは思えず。永い療養生活の結果、青春の発散をマゾ化に求めた女性に見えました、もう一人、中年の女性でしたが、気胸もそろそろ終りに近づき職場復帰も許されて居る人ですが、しきりに胸郭成形手術をせがんで、幾らその必要の無いことを説明されても納得せず、医長を困らせたり、怒らせたり致しておりましたが、この人なぞ再発とか、治癒後の心配ばかりでなく、完全にマゾ化して、より

以上の苦痛を求めて居るように見えたのは、私の眇目でしようか。これらの女性を見て居る中に、女性の苦痛に対する順応性について大きな興味を持たせられました。そこへゆくと、だらしのないのが男の患者で、気胸、気腹の空気の量が少なければ喜び、痛いの苦しいのと尻込しますし、私など最初からしまい迄、針を刺れない前から神経が硬直して痛みを感じる始末でした。助膜の癒着で気胸不可能になった時は、後のことも考えず、「ホツ」として、助かった気持でした。

二十台という、貴重な時代を五年間も無為に過し、全てが味気なさで精神的苦痛の連続でしたが、その中で、拾い得た事柄をとりまとめて、拙い文章を綴って見ました。表現力がなく、其の場の雰囲気も、自分の気持も、頭の中で徒らに先走り空転するばかりで、少しも書き現わせず自分ながら腹が立つばかりです。

復刊後の奇クに、女性癡マニアの方々が、華々しく活躍なさっております。私自身マニアだなんて烏滸がましくいえませんが、女の方々の癡に好奇心を持ち、私自身も愛好致しておりますので、私なりの思いを書いてみます。私が末だ北海道に居た、小学校も最高学年の夏休みの時のことです。養父と、阿寒国立公園へ旅行しました。「君の名は」で有名なになった美幌の近く、Tに養父の友人を訪ねた時、大人達の話に退屈して広々とした野原を駆けまわって、小さな川に出ました。七八人の子供達が、それぞれ生れ出た時の儘の姿で遊んで居る中に、一人だけ私より二つ位年長と思われる女の児がいましたが、瞬間、その児の奇異な姿にびっくりしてしまいました。小さなお椀を伏せた位の可愛い乳房を、チャ



ンチャンコのような着物の襟元から覗かせて立った姿の股間には、色褪せた物ながら赤禪が後に小さな結び目を付けて、キツチリと締まっております。ポカンとして眺めて居る私に気付くと、白い目を剥いて睨みつけて、クリルと背を向け子供達を素早くせき立てて、小さいながらも良く盛上ったお尻を、くりくりまわしながら小川を渡って馳けて行った後姿は、今でも忘れられない思い出で、おかしなことに顔のわからない少女の立姿が、今でも、クッキリと浮んで参ります。

実家へ帰って終戦を迎えた十月。これも召集解除で九州の南端から帰ったばかりの次兄と二人で、亡父の実家へ伯父を訪ねた帰り。ふた月ばかり前迄、華族の特権を持って無為の日々を送って居た伯父一家の混乱ぶりが、予想以上のものに一驚。これも華族に嫁いで居る叔母も、見舞いに行く相談をしながら、神宮外苑を抜けて、千駄ヶ谷駅の近くだったと思いますが、開店したてらしい古本屋を見つけ中へ入ったところ、私達の前に来て居た十八、九才の娘さんと向い合せて立つ恰好になってしまいました。この娘さんは、驚いたことに、紋付の着物か羽織を改造したものらしい、黒いスカートを軽快にはいたその下に、身体を真二つに切り裂かんばかりに、純白の三角形の布が、きつちりと股間に暮れる前の赤々とした夕日を受けて透けて見えます。「禪だ！」と思った時、私の胸は早鐘のように鳴り、手は、ぶるぶる震えるし、目は絶えず娘さんの股間に引きつけられながら、手の前の本を、手当り次第に取上げながら、そうっと、気付かれぬように背後に廻って見た時、私の予想は適中していました。戦争の苦勞も、食料不足も元気な娘さんの発育には大した影響も与えなかったものと見えて、適度に発達した臀部の溝深く縦に棒を

通したように切込まれた布は腰のあたりでようよう見えるように締まっております。そういえば、まだ養家に居た時、戦争の余波を受けて、軍人相手の裏口の待合を営業しながらも、軍需工場を持って居た養父が、軍需省に所用で上京した時の土産話に、

「東京の航空工場じや、いつ空襲を受けるかわからないっていうんで、皆な死んでも恥かしくないように若い徴用女工迄、日の丸の鉢巻に、真白な禪を締めて、毎晩徹夜で、隼や零戦を造って居るそうだよ。」

と、いつていましたが、養母は、

「何いつてるんですよ。良く、禪を締めて掛れというあれをあなたが田舎者だと、からかわれたんでしようよ。」

と、冷やかしか半分は答えていましたが、私も数えて十八才に成っており本気にはしていませんでした。

養父の話に出た娘さんかどうか分かりませんが、私は、もう夢中に成り目は血走って居たのかも知れませんが、うまく後に廻って気付かれないように見て居たつもりですが、鋭敏な娘さんの神経は胡魔化せなく、私が顔を上げて娘さんの顔を見た時は、とくに気付いていて、細い通路に私が立って居るので出るに出不れなかったらしく、この無作法な男に対する怒りでか、口唇を、ぶるぶる震わした真青な顔を見た時、一緒に居る兄の手前、今度は私の方が、かっか、とほてって居る顔から一瞬に血の気が引き、まだ盛んに本を漁って居る兄を引ずるように表へ出て、冷汗を拭った経験も有ります。

年も新たまった二月、実父の死に際にも、葬式にも、北海道に居て参列出来なかった私は、一人あの殺人的な混雑の汽車に揺られて、亡父の郷里へ墓参に行った帰り、近くの温泉都



市に一泊した時。とんでもない物の盗難に逢ってしまいました。頂度、大風呂が学童疎開で荒された後の修理とかで、案内された小風呂で一人のうのうと、久し振りの開放感に狭い湯舟の中に、身体一ぱい伸して居た時、硝子戸の開く音と共に脱衣場から中年女の顔が見えた時は、女中さんが雑布掛けのお湯を汲みに来たのか、まさか入って来まいとたかをくくって居たのに、

「御免なさい」

と手拭一枚で前をかくして入って来られた時は、全く驚いて、目の遣場に困ってしまいました。成熟した全裸の女体をこんな間近に見るのは、生れて初めての事故、羞かしくて上るに上れず、透て見る湯に居ずまいを正して堅く成って居る私を、中年女は横目で睨むように、口の端をゆがめて、くると大きなお尻を、私の目の前に、ペタリと据て、湯舟の湯を汲みはじめた時は、目の遣場に困るより、湯にあてられ、女体に当られたりで目の廻る思いでおりました。女は、こんな私を、「困った人だ」というように、今度は露骨に顔をゆがめ、持って来た石鹸も使わず。大きなお尻を悠々と振りながら、体を拭いて出て行った時は、本当に蘇生の思いがしました。女が廊下へ出る音を聞済して脱衣場へ上った私は、二度びっくりしてしまいました。着て来た洋服の上に無雑作に落しておいた腹巻併用の晒褌が跡方もなく無くなって居るんです。

どんな、つもりで持って行ったのか知りませんが、女が持って行ったのに間違いないです。品不足の時とはいえ、二十才前の私には、物が、物です。で騒ぐ気にも成れず、洋服でなくて良かったとは思いますが、変な物を持って行かれ

たのと、代りを持って来て居なかった帰りの、花差しき年頃の娘さん迄、窓から出入りする超満員の車中で、普段はそう気にもしない褌を、締めていないという丈で、気に成って仕方ありませんでした。冷い風迄大事な忘れ物をして来たように、不安定な気持を翻るように、スウ、スー通り抜けるように思え、何か、物足りない淋しさに腹立しく成って来て、やり切れない思いでした。それに、腹巻併用だったので、年中キウキウ締めつけて居る物が無くなったのは、丁度、重症の下痢腹を抱て居る味気なさを、帰宅するまで充分過る程味あわされました。

関係のないことですが、盗難現場は、父の先祖が、いや、伯父が戦後なくなる迄、徳川幕府の健在と共に、三百余年の間、お殿様とよばれて居た地方でのことでした。

私自身の褌の歴史は、あの阿寒旅行から帰った後、どうしても、女の子の赤褌が忘れられず、帰宅後、もじもじと養母に頼んで見ましたが、母は、急に褌を作って呉れといい出した私の顔をあきれたように見て居た丈で、作って呉れませんでした。しかし養父は、さすが男同士のこと。

「よし、吉保も、来年は中学生だ。合格したら、直ぐ作ってやろう」

と、作ってもらったのが、私の褌愛用の始りです。でも、最初は水泳用に、是非、あの赤い褌が欲かったのですし、そのつもりで頼んだのですが、父が持って来て呉れたのは純白の無雑作に切ったもので、幾分味気無さを味いましたが、それでも嬉しく、また羞かしいように照れくさく、三、四日は其の儘だったと思います。父と風呂に入った時、初めて教わりながら、締めて見ました時は、何か急に大人に成ったよう



で、男らしく勇ましい力が溢れ出て来るようで、父の前で、小さな力瘤を作って見せたり、四股を踏んで見せたりして、父に笑われた思い出が、恥かしい思い出を残して、家出するように実家へ帰って来た私ですが、懐かしい思い出に成っております。

其の後、戦後の繊維の不足時代にも、北海道から持ち帰った数多くの禪のお蔭で不自由を感じませんでした。発病後寝て居る時間が多く、六尺禪ですと、結び目が邪魔になり、腰が痛く成ったりで、嫂に頼んで男用のあの不様な、猿又を買って貰いましたが、股間の締りが悪く、何としても、気色が悪く。今度は、妹の処へ、電話を掛けて来て貰い、十四、五才用の小さなブリーフを買って貰いましたが、あの時ばかりは、妹も呆れたような顔をしておりました。さすが私も、幾ら妹でも羞かしい思いをしました。現在は、旦那さんに笑われたといつて怒っておりましたが、これも今度は、妹に造って貰った物ですが、晒を二本用意し、一本を適当に切り、両端を合せてミシンを掛け、輪を造ります。残りの一本と、半端物を、これも縫いつないで一本に致します。輪の方を股間に渡し、前後の穴に、一本に成った方を通して脇で結び、残りを腹巻にして胸迄巻いておきます。こればかりは、他人に寸法を取って貰う訳には参りませんので、輪の方は、余程気をつけて採寸致しませんと、ゆるふんに成ったり、短くて用をなさなくなります。

禪のことを書いて参りましたが、「私の下着」の中で、最も楽しいのは、天真爛漫に、生れた時その儘の皮膚一枚が、一番良いようです。北海道以来の習慣で、夜、寝る時出すも

のは、全部さらけ出して、床に入ります。が、今だに楽しい悪戯をして居るような、擦たさと、本当に、のびのびした気分に分浸れ、軽い口笛の一つも吹きたく成って参ります。

若き日の、伊達正宗が入浴に行く時、お風呂もはずし、前もかくさず大勢の侍や侍女の居並ぶ前を、ブラブラぶら下げた儘、長い廊下を胸を張って、歩いて行く後姿を見て、家臣達は、

「ああ、我々は、良い殿を得た。我が君こそ、偉大な英雄に成るお方だ」

と、涙を流して喜んだ、と聞いておりますし、私の先祖も、戦国時代の一かどの英雄で、時々、講談などによく出て参りますが、やはり、正宗に類した話を聞いております。それが出来たのは、豪胆か、馬鹿だとよくいわれておりますが、私など、豪胆な処なぞ少しも有りません。しかし他人に迷惑を掛けたり、法律に反しない範囲で、裸を楽しみます。風呂屋などで、背をかがめ前を隠して、こそこそ歩く人の気が知れませんか。たまには、子供の心に返ってごらん下さい。路上で、天真爛漫に小さな胸を張って、のびのびと跳び歩く子供達を見掛すると、微かな羨望を感じて参ります。クリスチャンじやありませんので、聖書のこととはよくは存じませんが、「子供の心を持てば、天国の入口は近い。」とかいう言葉が有るそうです。私も、是非、この限りにおいて、天国の入口位覗いて見たいと思っております。

(終)





〔告白〕

鞭の線に描かれて

皆川のぶ子

始めて、その男に逢った時、私は云いました。

「本当に私の奴隷として仕えられるの、どんなお仕置でも受けると約束出来る？ 断っておくけど、私は生ぬるい事は嫌いよ、覚悟は出来てるの？」

と……。男はブルブルと震え乍ら

「ハイッ、どんな事でも決して背きません。

私は女王様の犬となります。」

と一生懸命誓ったのです。それから今日に到るまで、その男と私の秘密の交際は続けられて居ります。正常の人には想像出来得ない異常な血のうずき——それは全く奇妙な血なま臭いまでのサジとマゾの交流です。男は一匹の犬として、一頭の馬として、一匹の虫けらとして女王なる私の命令に全神経を集中させるのです。私は一人の最も冷酷な美しい女王様として、男を足下に膝まづかせるのです。

しかし、少しでも私の御意に叶わないと、容赦なく男の背中には細いミミズ脹れの線が、私の持つ鞭によって画かれるのです。それは如何に精巧に設計された地図よりも、見事な一つの肉地図に違いありません。或場所は高い丘となり、成る所は永遠の夢を秘めた湖の如く、又、或場所は一度入ったら抜けることの容易でない迷路の様に、男の何の変哲もない背中が一本の鞭によって、誰もつくり得ることの出来ないパソラマとなって、私を夢中にさせるのです。しかもそれは、生きていくことによって、更にその価値は倍加されるのです。

実を云うと、この男は御社の読者通信で知り合ったのです。話は古くなりますが、去年の七月、私は余り当てにしないで二度ばかりその男に手紙を出したのです。何故、二度だと云うと、一度出して出頭する様、命令した

のに（私はその場所へ行きましたが）男は不届きにも出て来ませんでした。で、私は怒って又、手紙を出したのです。「急に怖気づいたのでしょうか、口程にもない……」という様な意味の事を烈しい怒りの表現で書いた様に思います。その後、連絡方法がないままに過ぎたのですが、暫くたって又、読者通信に「どうぞ今一度お手紙……」と出ていたので、私は又、怒りを新にしました。「よくも図々しく今一度手紙をなんて云えたものだ」と云った意味を、矢張り私独得の文章で書いた様に思います。その時、私はどんな男かと云う好奇心で一杯になり、どうしても逢ってみない気持になりました。それで又、諦めを七分に持って、渋谷で待つ様に指示しました。「ハチ公の尾の下」と……。何故なら、そこが彼にとって一番ふさわしい場所に思ったからです。

さて、その日は風が吹いて寒い日でした。

オーバーの襟を立ててポケットに手を入れた人達が大部分でした。私は「こんなに寒くては、目印が随分目立つだろう。それ丈に若し実行すれば余程、勇気があることになるのだけど……」と思ったりしました。目印——それは私と相手だけの秘密ですので、ここには書きません。しかし一寸、目立つ印です。

(何だかどくなりましたが) 私はこんな場合、誰でも感じるであろう焦ったさや不安は、不思議にも感じませんでした。本当にそれは不思議な程、何とも感じなかったのです。もう何度も逢っている人を持つ様な、極く自然な当り前の気持でした。その日は渋谷に用事がありましたので、その後でハチ公の所へいったのが、丁度打ち合せの三時十五分でした。すると、その男がいたのです。何んの変わりもない普通どこにもいる様なタイプの青年が、ハッキリと目印をつけて立っていました。私は「フーン」と思いました。口惜しいけれど、その男の勇気に私は一寸感心したのです。ハチ公と云えば待ち合せの名所?で、その日も大勢の男女が各々の場所で「待ち人遅し」とウロウロしておりました。その中で極めて目立つ印をつけて立っていると、待ち人を持つ退屈しのぎにフトその男を見た人がいれば、「ハテ何んだらう」と思うでしょう。そしてその男を、退屈しのぎの見世物として注目す

ることは明らかです。サテ、その男ですが、彼も又、この人混みの中に手紙の主がいるものやと、不安な筈です。彼は今更その目印を取るわけにもいかず、さりとてこの恥しさは長く耐えられそうにもないと、非常に当惑していた筈です。(後に彼は、私の思っていた通りだったと云っていました) でも、私はすぐには彼を呼びませんでした。この時、私は既にサジスチンとしての血がひそかに湧き出ていたことを白状します。私は、私のために恥しさに顔も上げること出来ない男を、ひそやかな侮蔑の念を持って見ていました。「フ、フ、フ、フ、フ、フ、」私の胸の内では笑いがとまりません。危くそれが顔の表面に出て来る様に思いました。私は笑を噛みしめて、じっと男を見詰めていました。そして五分程過ぎました。私は大した変化を見せない男に飽きて来ました。サテ、どうやってその男に近づこうかナ———と思ひ廻らしたのです。私の理想としては、「ピューッ」と口笛を吹いて呼びたいのですが、まさか、そうも出来ません。「貴方は××さんですか」も平凡だし、「私、皆川です」でも気に入らないし、やはり何も云わずに、その男について来させ様と思ひました。そこで私はゆっくりと男のそばへ近寄りました。しかし、男は気がつきません。私は不遠慮に男の肩をたたきました。男はハッとして私を見たのです。そして顔色を

変えました。ああ、この女が——とおびえたのかも知れません。兎に角、私はそんな事におかまいなく、無言で歩き出したのです。男が機械人形の如く従順に私の後について来る事を、十分満足を持て意識しながら———そして取敢えず、近くの喫茶店の二階に落ちつきました。その時の様子を一寸、書いて見ましよう。

私は、生れつき余りものに驚かない性質らしく、こんな場合でも平然としていられた。見も知らずの男と向き合っている、いささかの不安も感じなかったことは、自分ながら呆れましたけれど、男は反対にブルブル震えている様子で、コチ／＼に固くなって、まともに顔も上げようとしません。私は最初、何をいったか確かなことは覚えていませんが大体次のようだったと思います。

「経験は?」

「全然ありません」

「そう、でも覚悟は出来てるの」

「ハイ、でも始めてですから。思うことはありますが(空想だと思ひます)、お手柔らかにお願いします。」

私は冷然と

「バカいいなさい、私はその時には夢中になるから、手加減なんかしてやらないワ、それでもいいの。」

男はギョッとして私を見つめましたけれど

やがて諦めて、

「仕方ありません、それでも結構です。」
「そう」

男は暫くもじ／＼していましたが、しばらくして恥しそうに

「あの、昨夜は僕、興奮して眠られませんでした。どんな方かと想像したり、どんな風にされるのかと思ったりして……」

といいました。私はニヤ／＼して

「フーン、そう、それで想像していた女とは違ってた？」

と好奇心を持って聞きました。

「いいえ、ハア、あの僕の理想は、冷たい美しさを持った、僕より年上の御婦人です。少し冷酷な程の御婦人が僕の憧れです。」

「ヘエー、凄いのね。じゃあ、少し期待外れでしょう。でもね、まあいいわ」

男は、よく笑う女だなと思ったかも知れません。私はワザと靴が脱げそうにブラ／＼とさせて、男の前に差出しました。男は始めは一寸、戸まどった様子でしたが、決心したらしく辺りを気にしながら、身体をこまめてテーブルの下にうずくまり、私の足を靴にキチッとおさめたのです。それで、私の一次試験(?)は合格しました。何故なら、衆人の中にあつて女に靴を穿かせることは、また、それを実行したことは、立派に下僕の役目を果たしたことになるのですから。

× × ×

軽率だと笑う人がいるかも知れませんが、私達の場合は始めて逢った男女同志が一緒に旅館に入っても、決して世間一般で思う様な行為は許されないのです。表面はどうであらうとも、私達はそれ以上の刺激を求め合つて交際しているのです。フ、フ、フ、柄にもなく言訳めいたことを繰返しましたが、それは矢張大切な事ですから、一応、弁明して置く必要があります。

とに角、私は一軒の綺麗な旅館の玄関に立ちました。その時、始めて私は胸がドキ／＼して来たのです。「いらっしやいませ」という女中さんの声、私はビクツとしてしまいました。だって、そんな経験は今まで全然なかったのですもの。私は始めて「いやだなア」って感じたことを覚えています。で、

「アノ、一寸休ませて頂きたいのですが」

と震え声でいいました。信じられないかも知れませんが私はその時、不覚にも震えていたのです。「ハイ、サアどうぞ」と女中さんは如才なく振舞つて、恥しい思いをさせないやうにと仕込まれているらしく、万事テキパキと事務的にやってくれたことは、私にとつて大きな救いでした。「では、どうぞごゆっくり」の声を廊下の外で聞いた時は本当に疲れてしまった様に思います。気疲れ——呑気な私には珍しい現象です。私は始めて気がつ

いた様にそばの男を見ました。男は神妙な顔をして立っています。私は今迄、恥しがっていた自分を振り返り見て「ああ、この男は私が恥しがっていたのを見ていた」と思いつくと、正体の知れない怒りが胸をかきむしりました。そして、いきなりいいつけました。

「何、ぐず／＼してんの、早く裸になりなさい」と、理由もなく怒った声を出しました。男はハツとして、あわてて洋服を脱ぎ始めました。割合に身ぎれいで、下着も靴下もサツパリとしていました。もっとも今日は取換えたのかも知れません。パンツ一枚になった男はオド／＼と坐り込みました。しかし私は、旅館に入った時の恥しがった自分はどこにいるのかと思つた位です。何故って、あの時の恥しさは今はなく、勿論、震えなんかはとうに止つて、それどころか、これから始めようとする悪魔の喜びに胸が躍っていたのです。「そう／＼、裸になったらこっちへお出で、いいかい、私の足下に蹲くまるんだよ。お前は今日から私の奴隷なんだよ、いいね。」
「ハイッ」
「お前はどうか考えているか知らないが、マゾヒストとして訓練してやるが、それは決してお前が考えている様に甘いもんじやないんだよ。いいかい、いい加減に考えていると音を上げるかも知れないよ。」
「ハイッ」

そして、前に書いた様なことを誓わせました。

「それじゃ、奴隷としての第一の接吻を許してやる。」

「ハイ、ありがとうございます。」

男は（いいえ、今後は奴隷と云います）奴隷は、私の足に接吻しました。指の間の汚れを、この世で最高の御馳走と錯覚したのかも知れません。フ、フ、私は目を細めました。

これこそ私の日頃の欲望の一つなのです。

「え、いつまで同じ事をしてるのツ、馬鹿ね、そう云う間の抜けたことをすると承知しないよ。あ、そうかい、鞭が欲しいの。」

「じゃあ、あげようかな。」

私は奴隷のズボンのバンドを引き抜きました。奴隷は恐怖に顔を引きつらせました。

「ちよっとお待ち下さい。」

「何んですって、一寸待てだって、馬鹿にしないで、お前の云いつけはきかないよ、生意気な」

「ハイッ、でも、僕は——」

「うるさい、今更、何を云っているの。」

——それからです、私が満足したのは。ピシッピシッという鞭の音。「ウムッ、アッ、ヒイッ」と云う妙なる調べ（実は奴隷の悲鳴なのですが、私はこれを最高の音楽として認めています）「アッ、どうか、お許しを」と奴隷は逃げ廻りますので、私は縛り

上げてしまいました。その時、仮にも異性のそれも初めて逢った異性の裸身に手を触れても、私は少しも妙な気持ちになりませんでした。そんな事よりも、日頃思っていたことが実行出来た喜びの方が大きかったので、そんな気が持た全然浮んで来なかったのかも知れません。思ったより上手に縛ることができました。奴隷は一個の物体として、私の足元に転がされているのです。

「あゝッ、痛い、どうぞお許し下さい。」果ては「あゝッ、ウムッ、女王様、僕は死なういでしようか。」と何とも云えない心細い声を出して呻き出したのです。

「いゝじゃないの、死になさい。女王様のためなら息絶えても、この上ない光栄だろうに。いくじなし。」

私は日頃のたしなみも忘れて、奴隷の上に跨りました。こゝで云い忘れましたが、この宿は離れではなく、廊下の足音まで聞える位に静かでしたので、呻き声や鞭の音がよく聞えるので、いささか閉口してしまいました。

そこで私は、奴隷の顔の上に跨り、私の十八番の「つねり責」を始めたのです。全身とこる嫌わずつねり上げるのです。つねってねじめるのですから、痛さは云うに堪えないことをよく知っています。案の条、奴隷はもだえ抜きました。でも呻き声は、私の尻の下で声とならずに消えました。その度に容赦なく肌に

喰い込む縄。そして苦しそうに吐く息。ああ私はこの喜びは、どの宝物より勝ると思いましたが。どんな高価な品物を贈られるより、一本の強い革鞭を贈られる方が、私には嬉しいのです。この喜びを知らぬ世の多くの善男善女を不幸な人達だと哀しみます。人から、異常だ、変態だと云われようが、私はこの喜びに誇りを感じます。悪魔の欲望と云われようが残酷な女と恐れられようが、私はいつまでもマゾヒストの上に君臨して燦然と輝いていたいと思います。横道に逸れましたが、やがて奴隷の全身はみみずばれに、痣が見るも無惨に出来上りました。

「ねえ、お前は知っているの、人間の体で一番痛みを感じるところを……。知らないの、じゃあ教えてやるわね。」

と云い乍ら、尤も敏感な腋の下と内股をつねり上げました。フ、フ、その楽しかったこと。でも惜しい事には夕方になり、私は

「もう帰るよ」と云いました。

「又、お手紙頂けるでしょうか？」

「フ、フ、こんなにされても懲りない所を見ると、お前は本当にマゾらしいわね。」

「ハイ、僕はもう女王様なしでは暮していけない男になってしまいました。」

「マア、あんな事を云って、本当は驚いていくせに……」

「いいえ、本当です。」
「そう、じゃ又、気が向いたらね。」
私はそう云って別れたのです。さすが、その日は快よい疲れと興奮で、一寸寝つかれませんでした。しかし私はお笑いになれるかも知れませんが、二、三日、考え抜いたので

す。「これでいいのか、こんなことが長く続けられるのか、いつかは大変なことになるんじゃないか。それにあの男は一見まじめな男らしいが、たとえ相手が望んだにせよ、年下の青年を墮落させる様な事をしてよいのか。矢張りあの青年には、あのまま逢うまい」等

々……。しかし私も人の子、色々悩みました。でも私のこのひそやかな良心、理性、反省さえも魅力的なサジの血には勝てませんでした。私は悩みの抜けないままに、それから暫くして第二回目のプレイを試むべく、彼に手紙を書いて出してしまいました。(未完)

異説八百屋お七

幻想『炎の娘』

(後篇)

笛

地

佐

渡

第四場 炎の刑場

今日は火つけの大罪人八百屋お七が火あぶりの極刑を受ける宿命の日。こゝ火刑場は左手に一本の十字柱が立てられて、その周囲に焚木の山がうず高くつまれ、右手に竹矢来が組まれ、早くからこの惨らしい光景を見ようとつめかけた群衆が一ぱい、その群衆のざわ

めきが一しお大きくなったと見ると、彼方から裸馬に乗せられ今まで江戸市中をくまなく引廻されて、いよゝ運命の場所へ近づくお七の姿が見え始めました。はだか馬に乗せられたお七は半ば放心状態——すっかりあの悪坊主にあざむかれて、遂に予期せぬ火あぶりの極刑に会うなんて……しかし、その姿の清艶さ！ 今日結い立ての髪に白むくの花嫁衣

裳の振袖姿、胸高に締めた金らんどんすの帯の上からがんにがらめにしぼられて、やつれた頬に薄化粧を施し、まこと絶世の美しさ！ 勿論他の囚人にこんな豪華は許されもすまいしかし花の蕾をちらすには、せめて死出の衣裳を飾らせたこの両親のたつての念願が許されて、かねて縁談のため用意したこの振袖が、皮肉にも白装束ゆえに死出の晴着になる

うとは――

やがて行列が刑場に着いて、お七は馬から引き下されました。縄尻をとった役人が「あゆめ」と後から肩をつきますと、美少女は、二、三步よろめいてから静かにあゆみ出します。縛られた彼女は襦袢をとることが出来ませんので、長くひいたもすそは、あたら刑場の土をなめるに委せられ、黒い泥土との刺戟的な対照を見せて曳きずられてゆくのです。彼女としてみれば、どれほどこの花嫁衣裳で晴れて吉三郎と嬉しい婚礼の式を挙げたかったでありましょう！ 今役人に縄尻をとられて内股に静かに歩を運ぶお七の胸の中は、あたかもこの振袖を着た花嫁姿で、仲人に手をとられてしず／＼と式場へ歩んでゆく自分のまぼろしを描いているのでしよう。しかし、そのいじらしい乙女の夢も、忽ちじやけんな縄取りの機械的な習慣的行為によって乱されます。「早く歩め」とつきとばされて、よろ／＼と美少女は、二、三歩行って前にのめれば、ぐいと縄尻を引くのでピンと縄が張ってのけぞります。それを又後ろから突いて前へ追立て、のめりかけるとグイと引くのでたじ／＼とのけぞり乍ら二、三歩下るのを又つきとばす。行きつ戻りつ哀れな歩みをくりかえし、十字柱の傍につくと、役人が彼女の縄目を解き、

「ことはないか」と問えば「はい」と静かにこたえます。

「うむ、では、そこへ坐って末期の唱え事などいたすがよい。」

「はい」とやさしくうなづき、前をさばいてしとやかに坐り、白い両手を合掌してしばし瞑目していましたが、その長いまつげの間から真珠のような涙の玉をはら／＼と落しつゝ「とゝさま、かゝさま、不孝の罪をおゆるし下さいませ、今からお七はあの世とやらへ参ります。そして吉さまをお待ちしています。」とそこまで言つてガバと前にうつぶし、よ／＼とばかりに泣きくずれます。どんなになつかしい名、どんなに恋しい名、どんなに会つて呼びたかつた名でありましたろうか！ そのいとしい人の名を今生の名残に口にした時たまりかねて泣き伏さずにはおれない彼女だったのです。縄目から解放された両手で、長い重たい双の袂を胸にかきいだき、しっかと抱きしめて、肩をふるわせてむせび泣く美少女――その哀れにも美しい絵の様な姿を、いかに鬼畜の死刑執行人も、死をせき立てるに忍びずためらっているかに見えましたが、かくては果てじと、乙女の波うつ肩を十手で叩き、「さあ、立て」とうながします。

やがてお七は十字柱の上に両手をひろげ、足をそろえて、しっかりとくくりつけられました。折から鈴ヶ森の刑場は、雲一つない晴天で、あくまでも澄み切った青い空と、豊かに茂った緑の木々を背にして、あたかも美しい胡蝶が思い切り羽をのばしたように、たけなす純白の袂を体の両側に垂らしてはりつけられた美少女の振袖からは、くつきりと細長く緋ちりめんの紅色がこぼれ落ち、青と緑と白と紅と、そしてつや／＼かな黒髪とが、陽光を一杯に浴びて相互に照り映え輝かしい迄に美しい一幅の絵巻物を展開しているのです。もしも痛々しく縛りつけた縄目と、いまわしい磔柱さえなければ、それは天女の昇天を描いた絵を見るにも似た光景でありましょう。遂に焚木に火がつけられました。もう／＼と上る白煙黒煙、それをぬってチロ／＼と沢山の舌をちらつかせはじめた橙色の炎は次第に大きくなって行きます。煙は磔柱をはって、哀れな封建制度の犠牲者の体をつゝみ、美少女はそのいぶし責めにむせて喘ぎ、僅かに自由のきく首を、苦しうに美しい眉をひそめながら左、右と煙をさけようとして振るのです。しかし、そのいぶし責めは次第に苦痛を増して来ます。彼女は「あゝっ、あゝっ」と首を振りながら左右に身をもたえます。その度に左右の振袖が悩ましげにゆらぐのです。火の勢いも次第につよまり、紅蓮の炎が彼女の足元をなぶりはじめ今にも裾に火がつきそうになり、熱によって生じた風にあおられて、白い振袖と緋の長じゆばんとが、ハタ

／＼と宙にひらめきます。今に彼女の全身はその炎に包まれてしまふであります。あゝ、これこそ炎の恋、彼女こそ炎の娘、お七の古今東西に絶した恋の炎、燃ゆる思いは、胸を焦し、家を焼き、今や自らの全身さえも炎の中に没し去ろうとするのです。情熱の権化八百屋お七、誰が彼女を浅はかな馬鹿な娘とそしめるでしょう。彼女こそ恋に殉じた聖者ではないでしょうか、同じ磔柱に死んだイエスキリストが宗教の聖者なら、お七は恋愛の聖者として、何らイエスに劣るものではなく、死せるイエスが世界中の人の心に復活した如く、彼女も永遠に恋する者の心の中に復活し続けるであります。そして同じく炎の柱に焚殺されたジャンヌ・ダークが愛国の勇者なら彼女はそれに劣らぬ恋の勇者として仰がれ、後世の怯懦な人々を恥じさせるであります。

いよ／＼火はメラ／＼とお七の裾をもやし始めました。封建主義という名の巨大な悪魔は可憐な美女の恋を破り、更に江戸市中を焼いて、しかもなおあきたらず、今や美しいけい、えの下から大きな口をひらいて毒気を吐きかけ、更に多くの赤い舌でその全身をなめまわそうとしているのです。遂に悪魔は勝利を占めたのです。煙にむせんで半ば失神しかけていた娘は、足をこがす火の熱さに刺戟されて、「あつつ、あつつ」とはげしく身をも

だえます。はげしく顔を左右に振るので美しく結ったばかりの黒髪は細いうなじに乱れかゝり、白いえりあしと漆黒の後れ毛とが悩まし気におののいて、熱風に吹き上げられた長い袂と長襦袢の袖と、だらりと垂らした金らんの帯が、空中でヒラ／＼とひるがえっています。帯の金色と花かんざしの銀色がキラキラと日光に輝きます。

ドツと火勢が強くなって、キツと唇を結んだ苦悶の表情で、千切れる様に身悶えしたとみるや、お七の体がグツと僅かにずり下ります。足を縛った縄が焼け切れて体重が下にかゝったからです。途端に裾がまくれて吹き上げられ、まっ白いふくらはぎがむき出されます。同時に裾も振袖もパツと勢いよく燃え上り、全身炎に包まれたと見えました。

「あゝ、吉さま」

その痛々しい叫びが、固く結ばれた丹花の唇から激しく洩れると、お七はガックリと前に首を垂れ、遂に永遠に動かなくなってしまうのです。悪魔の手でむごたしくあぶり責められ、焚き殺された美少女の魂は、やつと生きながらの焦熱地獄から解放され、恋の女神の手に抱かれたのです。

第五場 寺の土蔵

真暗な寺の土蔵の中、かすかに人の呻く声——それは美少年吉三郎のもらす苦悶の声な

のです。吉三は和尚に恋を見破られてから、たゞ／＼お七への思慕はつのるばかり、いくら責められても和尚の意に従わず、伽を拒み続けるので、遂に土蔵に押込められたまゝでいます。手燭一つない土蔵の中、あやめもわかぬ真の暗、そこへガラリと戸が開いて、パツと光が射し込みます。和尚の手にしたがんどうの光、それが何もものを求めるように土蔵の隅をなめまわしていましたが、つと天井へ這い上ります。がんだうから出る一筋の強い光を脚光のように浴びて照し出されたのは痛々しく梁から吊られた美少年の姿、千鳥と秋草の染め抜かれた水色の大振袖、白地の裾に桃色をほかした袴、その淡い色がパツとあたりの黒ずんだ墨色から浮き出た美しさの中に、袖からこぼれる緋ぢりめんの濃い紅色が二筋目に痛いようにくつきりと焼付きます。

美少年はもはやもたえる力もなくぐったりと垂れ下り乍ら、かすかにあえいでいるのです。それをジツとしばらくみつめていた和尚は入口からの冷たい風に、さっとかすめられてハツと我に返り、入口に錠を下すと、がんだうをおいて手燭に火をともします。初めて土蔵の中がうすぼんやりと全体に明るくなります。まことに雑然とした散らかり放題の、くもの巣とすゝだらけにうす汚れた場所に、吊られた美少年だけが唯一の色どりです。「これはわしとした事が飛んだ粗そうをした



ものじや、余りに気のせく用事があって、ついで下すのを忘れたが、そんな姿で今までいたのでは、さぞ辛かったであろう、わしの大事な人形を、こわしてしまつては大変じや、すぐおろして進ぜようぞ」

といい乍ら、柱にくくつた縄尻をといて、

静かにたぐり始めます。吊り下ろされた美少年は、花束を乱したようにくずおれて、くの字なりに横たわります。しかし、和尚は口にもやさしそうな事をいいながら、投げ出された花束のような美少年を、痛々しく縛った荒縄はほどいてやろうともしないばかりか、

胸に腕にくつとくい込んだ縄目をじつ

とみつめ、みつめているうちに例の嗜虐的な情欲がかき立てられて来る様子です。でも、そうしてじつと動かない美少年をみつめているうち、次第に不安になって、「まさか？」と思い、猛獣が獲物の生死をたしかめるためになぶってみるように、弓の折れで二三度体をこずいてみて、少年が始めて悩ましげに身をもがくのを確認すると、ニタリとみにくい笑いに唇をゆがめ、

「おゝ、気は確かであつたか、どれ、

それでは本日のおつとめにうつろうかの、今日はさて、どんな責め方がよろうの」と考えながら、

「これ、苦しいか、苦しいか」と美少年の体をこじり乍ら、乱れたり固まつたりしている振袖の裾や、袴の裾などを弓の折でとゝのえたりしています。そして身悶えをしなくなると又強くこじあげます。

「じやが、今日はわしの手落ちて今迄苦しめていたのじやから休みにしてつかわさうか、おゝ、それより今日はよい話をきかそう、それ、そちの恋いこがれるお七のことじや。どうじや、聞きとうはないかな。」とこずきますと、今迄何も言わなかった若衆は、忽ち身を起そうとあえぎながら、

「え、お七殿の事、して、お七殿がどうなされました——」

と思わず叫ぶ、トタンに和尚は不機嫌になり、

「ふむ、それほどお七がいたいのか、お七は今日火つけの大罪で火あぶりになったわ、わしはそれを遂一見物して来た。」

としばらく宙をにらみ、急にその視線を哀れな犠牲の上にうつすと。

「もう、泣いてもわめいてもお七はこの世にないのじや、あの娘さえいなければ、そなたはもはやわしのもの、どうじや、あきらめて昔の通り仕えてくれぬか。」

美少年ははげしく身をもだえて、

「いや、いや、いやでござります。たとえ死んでも——おゝそうじや、死んで冥土でお七殿と——和尚様、このように生地獄の責苦に会うよりは、いつそ殺して下さりませ！」

「たわけめ！」

和尚の声はわれ鐘のように暗い土蔵にひびきました。

「そんな事なら、初めからわしは危いふちを渡るものか、これ、吉三、よく聞けよ、そなたが七を思う如く、わしがそなたを思うのはたとえ破戒の仏罰を受けて永劫の地獄におちようと、そちさえ得れば、今生の生命はおろか、後生までも悔いぬとの熱い執念！　これがそなたにはわからぬか！」

「わたくしとても同じこと、どうしてそれがあなた様に——」

「判らぬというのか！　えゝ面倒な！　それ程までに嫌われては、も早やこれまで、そなたが仕えてくれずともわしは少しもおどろかぬぞ。初めてそなたにそむかれた時、わしは少なからず落胆し、可愛さ余って憎さが百倍、たゞひたすら滅多やたらに責めたてたが、責めさいなんていううちに、もだえ苦しむそなたの姿の美しさに、言うことを聞かせようと思ふよりも、責むるが楽しみになって来た。今では前にもましてたゞそれのみで満足じや。従うものを抱こうより、いやがる者を責めるのがよほど面白いというものじや、従わずば尚更ら幸、老先みじかいわしの生命のある限り、常に美しく粧おわせ、いつも手をかえ品を変え、今日はえびせめ、あすは逆吊り、蛇責めと、責めさいなんでその果てに、天の命脈つきたらば共に地獄に墮ちよう覚悟、どうじや、くやしいか、くちおしいか——」

と長い呪いの言の葉を火の如くもえたゝせつゝ、美少年を弓も折れよとめった打ち！

「あゝッ痛ッ！　あゝ苦し、悪魔！　悪魔！　ああッ、ああッ、お七殿、お七殿！　吉三は今宵責め殺されておそばへ参る！」

と痛みをこらえてあえぎ／＼語尾もかすれて叫ぶ美少年。

「なに！　なんと、責め殺される？」

とむち打つ手を止めた坊主は

「そうは問屋で卸さぬわ」と責め手を休み、「こう続けて責めれば、まこと責め殺すやもはかられぬ。少し休ませてつかわすか」

と美少年の体を抱き起し、固い縄目を何回も手をすべらしながら、やつと解いてやります。美少年もしばらくはぐったり其場へとくずおれて、はげしく肩を波打たせているばかり、しばらく時間が経過したあと、その場には酒をあおり乍ら吉三のそばではり番をしていた坊主が、さすがに酔がまわったかくつすりと眠っています。その傍らに美少年もやはりぐったりと眠っています。そこへ突然白い光がふわ／＼と浮いたと思うと、白装束の花嫁姿も初々しいお七の亡霊が楚々としてあらわれて、

「さ、いとしい／＼吉三様、早く一しよに参りましょう、あの世で婚礼の仕度が出来ているほかに」

となまめかしい呼びかけ、寄りそいます。

若衆は「お七殿！」と高く叫んで身を起すとパツとお七の姿は消え、そこには居きたなくねむりこけた坊主の姿があるだけです。

「あゝ、今のは夢であつたか！」

とがっかりしながら、急に縄目の痛みを感じて両手で腕をさすりますと、

「おゝ、縄がない！　縄がない！」

と思わず胸を抱いて喜びつゝ、

「そうじゃ、和尚もこうしてねむっている。このまに早くお七殿のあとを追うて、あの世とやらに赴こう、そうじゃ〜」

とあたりを見廻すと、土蔵のすみに自分の大小が放り出されてあります。そこまでにちり寄って小刀を取る手もおそく、ギリリと引抜き

「お七殿、待っていて下され、今すぐじゃ、吉三とても武士のはしくれ、自刃位は致せますぞ、みて下され、見事のんどをつらぬいて」と言いも果てず、ギリリ銀色にかゞやく刃先をのどにあてがって、ガバと前にのめります。しばらくは、頸動脈からどくどくとあふれ出る血潮の中で、その美しい振袖姿が断末魔の苦しみにもだえていましたが、次第にそれも小さきさみにふるえる位となり、ガツクリと息たえた様子――

三条春彦・画

未製本 時代物責絵巻

八枚一組 百五十八円（送共）

【内容】一、山法師と静御前、二、女スリと岡引き、三、淀君と千姫、四、犬公方と侍女、五、八百屋お七の最期、六、新選組と芸妓、七、十郎左エ門と腰元八、小紫と悪旗本、以上八場面。

そこへ再び白い光がわいてお七の亡霊が現われ、倒れている吉三郎をたすけ起すと、共に手に手を取り合ってうれし気に去って行く。うとし乍ら、「悪魔、うそつき坊主」と指さしてあざけりますと、急にねむりこけていた坊主はうなり乍ら立ち上り、

「お七、迷って参ったな、わしの吉三を横取ろうとて、そうはさせぬぞ」

と追いつがりますが、足元がよろめいて、宙に手を泳がせるばかりです。若い二人はよろめく坊主を手招いたりあざけったりしてあしらいます。坊主はついに自分の酒壺に足をとられてどうとひっくりかえり、そのとたんに二人の姿はパッと消えます。

「お、今のは夢であったか」

と全身ゾーツと水をあびたようになり乍ら「さりとて、不吉な夢よ」

と土蔵中をながめまわすと、隅には立派に自害して果てた美少年の花散る姿

「あ」と仰天して走り寄り、

「あゝ今のは正夢であったか、あゝ不覚千慮の一失、そなたを死なせて、わしは一体どうすれよいのか？」

と流石の悪僧も鬼の目に涙して、美しい少年の死体にとりすがり、狂気の如くいっまでもなきわめくのでした。その哀れな声は土蔵一ぱいに、そして江戸中になりひびくが如くに――

（幕）

◎北原純子責画傑作選◎

〔女学生の羞恥責め〕（略号女学生）

大中判印画紙焼付 四枚一組 五百円

純情可憐な花も羞らう制服の女学生が、正面向いて、あられもなく後手に櫓に縛りつけられ、片足を水平よりも高く無理矢理上げられたり、スカートをまくり上げられたり、まことに大胆きわまりない制服の女学生に対する責構図四態。

〔ハートの的、女体洗滌室〕（略号はあと）

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

ハートの的にされた全裸の豊満なうら若き女性に対する奇想天外な責め、縛られて身動きも出来ない全裸の女体の隅々まで、余すところなく洗滌せんとしている構図。

〔緊縛ヌード十六ポーズ〕（略号ぬうと）

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

柱、棒、杭、石等の小道具を用いて緊縛されたヌードのポーズに変化を求め、十六の優美な縛りポーズの一つ一つが、平凡さを脱して私達の目を楽しませてくれる。

子撫和、大烈壯

緒 秀 山 藤

女スパイ

すべては終わった。日本は敗れ去った。そして、日本軍のために闘ったスパイたちは、悉く死刑の宣告をうけたのです。しかも、中国は、女性のスパイに対しても情容赦はしませんでした。東洋のマタハリといわれた川島芳子も刑場の露と消えました。そしていまここに、女性としての二人目、川崎節子が刑の執行を明日に控えて、独房に瞑目しているのです。節子は、女乍らも切腹して死にたいと思いい、その旨を申出てありました。その返事がそろ／＼ある筈なのです。彼女は、敵方の弾丸をうけて死ぬよりは、苦しくとも、潔く自らの刃に伏して最期を飾りたいと思ったのでしよう。オーバーオールのごわ／＼した作業服姿で節子は物思いにふけています。切腹が許されたら、どんな服装で死のうか……。彼女は、日本軍人の正装で死のうと決心します。やがてOKの返事が――

彼女は夫、川崎大尉の軍服を取寄せ、上衣乗馬ズボン、長靴など一つ一つに懷しげに見入っていました。一人心にうなづき、作業服をぬいで、軍服姿になります。そして、夜の更けるのも知らぬげに、遺書の筆を走らせつづけるのでした。

従 容

翌朝、執行吏が、彼女を連れに来ました。五時です。まだ外はほの暗く、うすら寒い秋の夜明けです。彼女は、目もさめるばかりに化粧をととのえ、軍服姿で待ちうけていました。そして彼女は、にっこりと笑って執行吏たちと握手をかわし、落着いた足どりで刑場へとむかいます。軍帽の下にゆれる豊かな黒髪と乗馬靴の一步々々がや／＼もすれば内輪になろうとするやさしさを除けば、きりりとした青年将校のただずまいです。彼女は、死の苦しみが待ちうける処刑の場所へ、いま静かに近附いて行くのです。

刑場の建物は、煉瓦造りの、鬼気せる殺風景な姿で、この囚人を迎えます。控室で、最後の別れが行われます。節子の処刑は、異例の「自決」なので、手錠も目かくしもなくこの部屋で短刀が渡されただけでした。彼女は、いよいよと云う時に、自決する方法として、「切腹」の稽古はしていましたが、その時教えられた方法によれば、腹の傷を浅くしておかないと、最後に胸なりノドなりを突く時力がつきて、死にきれなくなるので、決して深く切腹してはいけないとのことでした。節子は、渡された刀を抜いて見て、ハッとします。

「これは切れない！」

見るからにそれと知れるなまくらです。でも今となつては、これで死ぬより他はありません。



せん。切味のわるい刃物で、肉を裂く苦しみは甚しいものといわれています。ああ、彼女の自刃は、果して仕完せることができるでしょうか。

節子は、心をしずめ、短刀を片手に握って最期の場所へ立出でます。そこは銃殺刑の行われる薄暗いガランとしたホールでした。入

口近くに執行吏、検視などの席があり、中央やや奥のあたりにゴム布が二米四方の広さで敷かれています。ここが彼女の死場所です。

彼女は、直立して罪状の朗読にきき入り、そして、「割腹を命ずる」という意味の言葉で結ばれるや、再びにこやかに一人々と握手をかわします。そして、切腹の、いかに苦

痛の大きいものを語り、銃殺のように簡単にはすまないかもしれぬが、息絶えるまで、心静かに見守ってくれるようにと頼みます。

やがて彼女はゴム布の上にヒザをつき、軍服のボタンをはずし、上衣をぬぎ捨てます。下は女物の純白のワイシャツ。節子は上衣をたたんで後に置き、ワイシャツのボタンをはずして胸をはだけ、乗馬ズボンのバンドをゆるめて、前ボタンを上から二ツ三ツはずして下腹をくつろげます。あとは短刀に白布を巻いて、いよいよ切腹の時が来たようです。

勇気こそ凄惨な女腹切に与えられた悲壮美の真の姿です。節子は、勇ましくワイシャツの前を開き、左膝を立て、短刀を逆手に持って大きく息を吸いこむのでした。

腹切る烈女

「う……………」

ぐもっ、と上体が前にのめり、

ブツツ……………」

にぶい、切ない音。そして、

「ウ、ウ……………」

低い呻き。覚悟の自刃とはいえ、臓腑に喰入る短刀のいたでは、彼女ならずとも身をふるわせるに充分です。しかも節子は、つかがしらを押し、ぐいぐいと刃を深く突込んでいます。

役人たちが、乗出して彼女の次の行動を注目しています。彼女は、血の気の引くほど、唇をかみしめて、

「ウウッ……」

と呻きながら、右へ引廻そうとします。しかし、切味の鈍った短刀は、彼女の厚い脂肪層を、思い通り裂いてはくれないのです。

「ウッ、ウッ、ウッ……」

切なげに体を捻り、節子は、のこぎりでも使うように、短刀を浅く深くぐさぐさと抉り立てながら、引廻そうとあせります。あせればあせるほど、筋肉が引きしまるのか、刃はすすまず、彼女は歯をくいしばり、両眼を飛び出すばかりに見開いて、はやくも凄惨な様相を帯びて来ました。

「ウムー、ウムー……」

悲壮な呻き。ワイシャツに血がしぶき、白い腹部に点々と血痕がはね飛んでいます。

「なに、これしきに！」

奮起した節子は、前のめりの体をおこし、やがて、力のかぎり、再び吾が腹へいどむのです。

ざくッ！ ざくッ！

肉を引き裂くように、一分、一分と傷口が広がって行きます。彼女は

ハッ！ ハッ！

と烈しく喘ぎながらも、勇ましく深傷にいでみつづけます。文字通り「カキ切る」傷で

すから、出血のために手がすべるのか、何度も握り直しています。

ああ、左の傷口から腸が溢れて来ました。

「ウ、ウ、ウウッ！」

彼女もいまは必死です。腰をうかせ、ぐッと刃を腹でしごき乍ら、ちりちりと五寸ほども掻切つて、いま最後の五分ばかりを、壮烈な呻きと共に、切り完せようとしています。

ああ、遂に右脇に達しました。

「ううっ……」

グーッと体をこごめて短刀を引抜く節子。

苦悶

「む、む、む……ウーッ！」

なんとという健気さ。短刀は、ぬらぬらと生温い血汐にまみれて抜き取られます。

節子は、

「うっ！」

と喘ぎ乍ら、短刀を鳩尾に押しあて、グーッと押してみます。胸骨に隠された鳩尾は、固く凝って短刀をうけつけません。

「あ、あ、あゝッ！」

力一杯に突込む短刀。ああ、彼女は両の膝で立上り、短刀を左右にぐいと抉りながら必死に下腹めがけて切り下そうとしています。でも、力つきたのか、骨に切込んでしまったのか、刃は全く進みません。

「ア、ア、ううゝっ、うゝっうゝむ……」

押泳えた悲壮な呻き。

やがて彼女は、何とと思ったか、歯をくいしばって引抜こうとします。

「む、む、むゝゝゝ、むうッ！」

美しい頬が苦痛にゆがみ、刃は再び切先を露わして、節子の両手の中で、ぶるぶるとふるえています。疲れ果てて苦しむ節子。

気を取り直した節子は、弱る心をはげましながら、最初の創口の横のあたりに切先をあてがい、屹と両眼を見開いて、二、三度、はげしく肩で息をしています。ぐっと一突き。「ク、ク、ク、くゝゝゝッ……」

「む、む、むうッ、ア、ア、ううッ！」

激痛のあまり、遂に彼女は俯伏せに失神してしまいました。医師がかけ寄り、脈を見ます。まだ生きている。注射が打たれ、再び彼女は苦悶の真只中へ呼び戻されるのです。

我に返った節子。死にきれない恥しさ……

「ざ、ざ、残念！」

心に鞭打って、彼女は血みどろの短刀を抑え、前かがみになり乍ら、力のかぎり抉りたてるのです。

「ウ、ウウッ！」

ああ、節子の一念が通じたのか、刃は、じりじりと下腹へ向って縦に動きはじめました。眼は血走り、唇は苦痛に引きつていますが、きりりとした彼女の美貌は、いよいよ冴えかえって、悲壮な美しさを保ち、乗

馬ズボンのぴったりとした腰の線は、異様なまでの悩ましきを見せて、がばがばとのたうっています。

断末魔

「ア、アアッ！ な、なに、こ、これしきに！——ク、ク、うううっ！」
臓腑へでも切込んだのでしよう。文字通りのたうち廻って苦しみ悶える壮烈さ。節子は

○春日ルミ嬢○

ブロマイド（略号）分譲

五枚一組 五百円（送共）

春日ルミ嬢フアンの強き要望に応えて、颯爽と鞭をふるうルミ嬢の勇姿、未発表の近影を特に同好の方に限って焼増いたします。お申込下さい。

◎代理部たより◎

○代理部分譲品総目録は今回品切れとなりましたので、従前分譲中のものは一応打ち切りと致します。尚、新目録はまだ出来ていませんので、当分の間本誌の広告にてお申込下さるようお願いいたします。本目録の完成する日は、只今のところ未定です。

ただ立派に死にたい一心です。見苦しい態度はとりたくない。日本人らしく、勇ましく死んで行きたいのです。

「ク、ク、ク、ううむ……天、皇、陛下……ば、ば、万歳！……ウウッ！」

彼女は突込んだ短刀を最期の力を振りしぼって下腹まで掻切り、のしかかるように挟りたてます。次第々々に弱り果てて行く様子。彼女は、死にきれぬと悟ったのか。

「ううっ……」

刃を引抜き、左乳房の下へ押しあてます。

大きく喘いだ彼女は、

「ア、ア、ううむ、ううむッ、ウーッ！」

ぐッ、ぐッと挟って再び刃を引抜き、傷口のやや下の方へ、又もや一挟りする壮烈さ。

「う、う、ううむ、ウーッ！」

鮮血は、ゴム布を唐紅に染め、彼女の純白のワイシャツ、カーキ色の乗馬ズボンも血汐に彩られて凄惨な光景がくりひろげられて居ます。

ぐさッぐさッ。

何度も々々胸を挟って、悶え苦しむ節子。ああ、五度目の太刀が乳房を挟っています。

「む、むうッ。……ウムー、ウムーッ！」
どきり、と烈しい物音と共に、彼女は棒のようにゴム布の上に倒れ伏します。

再び医師が、かけ寄ります。ああ、まだ生きて居ます。でも、今度は意識も明瞭です。

花びらのような唇をあけて、最後の呼吸をもとめつづける節子。

どくどくと血汐がほとばしっています。

執行吏は、喘ぎ苦しむ彼女のそばへ進み寄って、立派な最期を讃え、血みどろのワイシャツの肩へ、軍服をかけてやります。

彼女は、嬉しげにうなづき、

「く、く、ううっ……」

と呻いて短刀を抜取ると、二、三度体を屈伸させて悶えていましたが、それも次第に衰えてやがて死の硬直が襲って来ました。

「ク、ク、クク……」

ああ、節子が死にます！

乗馬靴が、ぐーッとゴム布を蹴り、そしてすべての力もつき果てた彼女の肉体は、遂に機能をとどめたのでした。時に午前七時。

開始から絶命まで、実に一時間半を要したのです。なんとという壮烈な自決でありました。う。許されて入場したカメラマンたちも、彼女の血みどろの軍服姿に、あッと云って立ちすくみます。こんこんと噴出している紅の血汐。眼を見開き、齒をくいしばった死顔の異様な美しさ。

それは、哀しくも華々しい「死刑」の跡を物語るかのように、蒼白く冴えかえっていました。

（終）

ある夢想家の手帖から

沼 正 三

第百十五 グックへの烙印

黄色人種という点では、お隣りの朝鮮人も日本人同様だ。これについては朝鮮戦争の時の色々なニュースが思い出される。明らかに、米国人は朝鮮人を劣等民族視していた。

陸井三郎編「ヒステリー・エイジ」に紹介された「シカゴ新報」の一九五〇年九月十九日号によれば、第二次大戦末期、太平洋戦場の米兵は、自分達より人種的に下等とみなす民族をグックとよび、日本人も勿論そう呼ばれていた。朝鮮戦争で朝鮮に乗り込んだ米兵達は、隷国兵をグックと呼んで軽蔑し出したので、教育情報部では、その悪影響を憂えて、軍用「ティップス誌」で警告を發した、とある。Gookとは、辞書によれば、南太平洋や北アフリカなどの土人を指す俗語とある。両地方いづれも第二次大戦で米軍の作戦した地方だから、兵隊用語として発生したことは一目瞭然である。

太平洋問題調査会編「アジアの民族主義」によれば、米国外交政策協会調査主任ヴェラ・マイクルズ・デーンは、次の通り報告し

ている。「米国では事情によく通じた善意の役人でも、中国人や朝鮮人のことというと、『民族』ではなくて『家畜の群』だと主張している。」

家畜の群という表現は刺戟的すぎる様だが、そうでなくて、どうして捕虜の胸に反共のスローガンを刺青する様なことを考えつくだろうか？——これは西野辰吉氏の言だ。

西野氏の小説「烙印」のことは速報欄六号でも言及した。作中人物は洋妾達の腕に米兵達が残して行った刺青に、従来の日本の相愛の男女が愛の誓の一形式として彫った刺青とは違ったものがあるのを感じる。女が男を慕って××いのち、と彫らせたのではない、同じ男の名でも、それは頭文字二字を男が強制的に女の肌に彫りつけたのだ。それはその無神経なドギツサでは、西部劇の牧場場面で、牛の尻に烙印される所有者名に似ていた。然り、女の肌の二文字は家畜に烙印し、万年筆に名前を彫りつけるのと同じ気持で、所有権の主張として彫られたのだ。その米兵の出身地はチャールストン、奴隷貿易で栄えた南カロライナの港町だ。奴隷所有者の感覚、人間家畜視の思想が、女の肌に自分の名前を彫りつける。……そして

て、この人間家畜への烙印の伝統があったからこそ、北鮮捕虜の肌への刺青ということを考えるにも至ったのだろう。太平洋戦争中の日本軍将兵も南洋土人を人間扱いしなかったといわれる。然し、土人の肌への刺青ということは誰も考えつかなかった。奴隷所有者としてのかかる伝統のない日本人は、いくら人間扱いにしないといっても、米人のようには相手を家畜視するに徹し切れない所があるのだ。……

これが西野氏の考え方だ。捕虜への刺青ということから、米国人の奴隷所有者的伝統を看破した点は燭眼だと思う。

そして、そういう劣等視があるからこそ、平気でナパーム弾も落せるのだ。細菌弾のことは逆宣伝として争のあることだから取り上げないが、ナパーム弾は事実である。全身の皮膚がただれてペロペロに剥けた姿は、私の胸をうずかせた。戦争だから仕方がないとはいわせない。ドイツ相手には落さなかった原子爆弾を日本人相手に使用して見る気になった人種差別観が、ナパーム弾を平然と投下させたのである。黄色人種は、白人より、黒人に近い存在なのである。……尚本項末段に関連して、第八十二項「苦しくはあるが有用な」を参照されたい。

第一百十六 生 体 実 験

刺青よりもっとひどいのは、生きた捕虜を使って、軍医や医学生の外科学術の実習をした、といわれていることである。生体実験という奴だ。

中国赤十字社と北鮮側で発表した数字だが、実習の実験台になって死んだ者二千十八名、不具になった者千百十六名というのだ。

その例を二、三――

白国は一九五〇年九月二十五日、左手首貫通銃創をうけて捕虜になったが、十月二十日釜山捕虜収容所でアメリカの医学生に呼び出

され、左腕の肘上から切断された。それから十一日目に第二次手術と称して切断部分から三センチを更に切断し、第三次に翌五十一年三月十七日にまた二センチを、四月に第四次として二センチ、五月に第五次で二センチを切断して、ついに左腕のほとんど全部を切断されてしまった。この手術は化膿したために切断したわけではなく（勿論カルテにはそう記載してあったかも知れないだろうが）、その医学生のもったくの実習に過ぎなかった。おまけにわざと麻酔をかけず、激痛時の反応を調べたらしい。

五〇年十月十八日、江原道広川北方で捕虜になった趙民憲は、左腕に骨折性貫通銃創をうけていた。米軍軍医から釜山の大学に治療にゆけと命ぜられ、十一月末頃になって手術をうけることになったが、軍医は、傷いた骨の治療をするどころか、何でもない部分の生骨を抜き取ってしまった。それは米兵の治療のための骨型を得るためであった。その後五十一年一月六日に、釜山第十野戦病院に移され、今度は軍医大尉シーラーが左足先に若干の傷があるのを理由に膝から下を切断してしまった。更にそのあとシーラーは、左腕の抜き取った残りの骨七センチをまた切り取り、今度はその部分に骨の移植をするといって、同人の何ともない右腕の骨十五センチを切り取って移植し、その上またもや右腕の骨八センチを切り取って行った。

元山市で米軍の機銃掃射をうけ左足指を失った康順淑（女子）は、左足の甲の三分の一から先を切り捨てられ、一週間目に第二次に足首から先を取られ、また一週間目に膝から下を切断され、更に一週間目に腿の半分を落され、次の一週間目に鼠蹊部から十センチ下まで切断し、また一週間目にとうとう付根から切り落されてしまった。この前後六回にわたる切断において一度も麻酔をかけず……：婦人であったため、軍医が代る代る見物に来て悪ふざけしていた。

同様に、鄭雲学は前後二十数回にわたって切断実験の対象とされ、両脚とも付根から完全に失ってしまった。外にも、朱遠集は軍医少尉から、何の故障もない眼球を要求され、ついで、二度にわたって両眼とも剔出された。巨済島にいた金鏞洙は軍医少佐から罌丸を要求され、これも二回にわたって二つとも抜かれてしまった……この位にしよう。例はいくらもあるのだ。問題はその信憑性である。

アメリカ側は勿論逆宣伝と一笑に付している。然し、私は、集積されたこれらの資料の凡てをデマとは信じ得ないのだ。

医学は本来生体実験を要求するものである。古代科学の淵藪たるアレキサンデリアの大学で生体解剖が行われたというのは、奴隷という人格のない人間がある時、医学は必然的にその方向を辿ることを示すものといえよう。現在の医学はそれをしない。然しそれは本当の意味でのヒューマニズムからなのか、それとも、医者各個人が刑罰を恐れるから躊躇してゐるに過ぎないのか、これは大いに疑問である。新潟医大が精神病患者を使った生体実験をしたというのも、発覚さえしなければ医者は生体実験をしたがっている、ということを示すともいえる。彼等の恐れているのは単に刑罰なのだ。

だから、相手が捕虜となつて、処罰される恐れのない時、医者の方のヒューマニズムはどこかへ行ってしまう。ナチスが行った大規模な生体実験は有名な事実だ。ラッセル卿の「逆転の鞭」(「夜と霧」解説参照)によれば、

一九四三年九月、ブツヒエンワルトに転任になる数ヶ月前、シドラウスキイは全く健康な十人の女を実験手術のために選抜した。この中に二人の姉妹がいたが、彼女たちはシドラウスキイの助けをかりたもう一人の医師の手で手術を施された。彼は一人の両脚を切開し、もう一人からは骨の一片を除去して両脚を切開した。それから培養した壞疽菌が傷の中に植えつけられた。……骨の移植手術とい

うのは、向脛の骨から小骨をとり除き、別のところにその骨を入れたのである。そのため多くの者は永久に片輪になった。

ラッセル博士の指揮で、ダッハウで、冷凍実験が行われた。実験台に使われた人間は冷たい氷水の中に漬けられ、意識を失うまで出して貰えなかった。……最も体温が下つたのは摂氏十九度を記録したが、大概の人は二十五度から二十六度になると死んでしまった。男を氷水から出すと、これを甦らせようとして太陽燈や湯や電気療法やそして動物の体温を用いることが試みられた。体温を用いる実験には淫売婦が用いられた。……この最後の実験は最も愉快だと考えられ、ヒムラーは時々パーティーを開いてはこれを友人たちに見せたくらいで、これに使うための女——ドイツ人でない——を準備させた。四人の少女が選ばれた。……

さらに別の実験がシュッツ博士らによつて、多数のポーランド人チェッコ人、オランダ人の僧侶に対して行われた。静脈の中に膿汁を注射するのだ……また多数のハンガリー人とジプシーが、塩水の実験台に使われた。……

これも記述は延々と続いて、きりが無い。

日本軍でもやっていた。秋山浩の「特殊部隊七三一」によれば、細菌戦準備の実験に大規模な生体使用をやった。カッパブックスの「三光」にも紹介されている。文春四月号の「犬の血」は捕虜に犬の血を輸血する様上司から命ぜられて悩む軍医の話だ。

このように、各国で捕虜に対する生体実験が行われたことを知った上で、共産側の発表したところを読むと、少くともそれを逆宣伝の虚構と一言の下に葬る気にはなれないのである。まして米軍の意識においては、捕虜は「グック」であり、「家畜の群」だったのだから。

第百十七 ナチス強制収容所

ラッセル卿の「逆光の鞭」から、もう少し引用しよう。ナチス強制収容所の全組織の目的はたった一つ。収容者たちのヒューマニティと人間的良心を破壊することだった、といわれる。換言すれば、畜生化ということだ。意志の弱い者は最低のモラルに墮落し、単なる肉の存在となり果て、卑しい動物的本能だけになったとは経験者の語る所である。

延べ十二万三千人（大多数はフランス人）の女性を収容した「女だけの地獄」(L'Enfer des Femmes) ラヴェンスブリュック収容所について述べよう。

先ず、素裸にして男が検査する。これによって羞恥心を持つことが許されていないことを教えるのだ。

余談だが、私の軍隊時代の経験でも、身体検査が学生時代と異って素裸のまま施行されるので、変に感じたものだ。そして私達兵隊が素裸でいる中に、軍服に身を固めた中隊長が入って来て、皆の身体を眺めているのは、妙に恥かしかった。（男同志でさえそれである。女だったら、その恥かしさは思い半ばに過ぎよう。）学生に許されている羞恥心が兵隊には許されていなかったのである。

次に食事で苦しめる。囚人はすっかり飢えて調理場附近の地面に転がっている生の馬鈴薯のむき皮やキャベツの皮屑を食べる始末だった。収容所によっては、仲間の死体から肉を切り取って食べた。「収容所の職員は半ば飢え死にしかけた囚人たちに、しまっておいた為にかび臭くなってしまったパンを投げ与えては苦しめて喜んでいた。このような、わずかのパンを求めて野獣のように争う生きた骸骨を眺めることが、親衛隊職員を喜ばせずにはおかない娯楽だったのだ。」

収容所の女看守長ドロテア・ピンツのことを述べておこう。一九二〇年生れて、開戦直前までは台所女中をしていた彼女は、志願して親衛隊に入った。二十歳になっていなかった。数ヶ月立つと監督官になり、カーキ色のユニフォーム、手に鞭を持ち、長靴の音を響かせてこの収容所を濶歩する様になった。彼女は明けても暮れても殴り蹴り打った。規律を破ったからという場合もあったが、時には理由なく、単にシャーデンフロイデ（他人を傷つける喜び）からだった。少しでも規則に触れた者を懲罰ブロックに送る権力を有していたので、その場で殴らない場合はこの権力を行使した。平手打でも凄いもので「ピンツの平手打はまるで男のように烈しいものでした。もし彼女が顔でも打とうものなら、一棟おいた次の宿舎でもその音が聞かれる程でした」と証言されている。一人の女を倒れるまで殴り、その上足で踏み躪った。一人の女を鶴嘴で殴り殺した。また「灌漑浴懲罰」を行った。訊問に際して非協力的だったとの理由で六回これをやられたある囚人の証言――。

ピンツは私を灌漑浴用の部屋に連れて行きました。一隅に注水器があり、もう水が出ていました。水はパイプからさまざまな高さに噴き上り……私は倒れてしまい、ピンツは水の入ったバケツを私の顔にぶちあげました。私が手で顔を覆おうとすると、彼女は扉をあけて二匹の犬を口笛で呼寄せました。その一匹は私の手を咬み、私は気を失ってしまいました。……

ピンツが好んで行ったスポーツの一つは、傍に立っている女の群の中に自転車を持ち入れることだった。女たちはすっかり弱り切っているのに、引っくり返ってしまうのが常だった。それから彼女は声をあげて笑いながら、その上を自転車で乗り越えて行った。また彼女は収容者に自分の犬をけしかけて喜んだ。

もう一つピンツが大いに面白がったものは、第十ブロックを訪ね

て気違い女を視察することだった。この女たちはいわばサーカスで道化を演じる畸形児のようなもので、見世物としてここに住まわせられていたのだ。ピンツはこの女たちを馴れ馴れしいものにしては悦に入っていた。

……
この所にしておこう。全部抜いたわけではないが、「この若い女がラヴェンスブリュックで演じた活動ぶりを、これ以上スケッチすることは不可能である。」(以上の記述はすべて戦犯裁判で立証されたものである。)

ピンツについて長く引用し過ぎたが、ラヴェンスブリュック女子收容所の詳細、その他の收容所の内容などについて興味のある方は有名なフランク「夜と霧」(雑報一二五号)を読まれるがよい。巻頭の解説に詳しい。雑報一四四号や本誌七月号原氏のマゾ時評で扱われたイルゼ・コッホのことも出ている。「痛ましきダニエラ」は機会を見て詳しく紹介することにしよう(雑報一二六号)。古い所では武林文子の「ゲシュタポ」は、タートラ山麓のユダヤ人收容所で行われた人間標的射撃のことを描いている。エリザ・ビーパーというサーカスでピストル射撃とナイフ投げを見せている旅芸人が招かれて、ナチスの幹部や将校達のお慰みに、ユダヤ人を走らせておいて、狙い撃にしたり、ナイフを投げて刺したりして見せるのだ。エリザが美貌の若い女性であるだけに大変マゾヒズムをかき立てられた記憶がある。收容所を扱った記録や作品は他にも多々あるが、本項では、この位にしておこう。

雑報欄

一四七シンドロウィッツ編 高山洋吉訳『プロレタリア性風俗史』上巻 風俗史叢書の一冊である。この訳者の力量は、先にヒルシュフ

エルトの『戦争と性』四冊の訳文に対しては速報五二でA級と評したが、今度少し丁寧に検討したら、大分誤訳を見出したから、B級と訂正しておく。然し良心的な訳業といつてよいことは認める。ローマの奴隷風俗を論じた手帖第二百二十項以下、特に第二百二十三項、百二十四項において、誤訳部分を具体的に指摘しておいたから参照されたい。

一四八 小川喜一郎「狗人」(サンデー毎日増刊昭和三十三年六月号) 宮門を守る者を犬とみなして、狗吠をなさしめ、これを犬人と称したことは、古く周礼にも見えるが、日本でも、これを真似て奈良朝に南九州征定後、新附の隼人に宮門の番犬代りを命じ、外蕃来朝の折など、犬吠をなさしめたことがあったのである。人間家畜の制度化である。朝夕衛門府の宮廷で士官の点呼を受け「遠吠、大吠、小吠などの基礎訓練から、独り吠、合わせ吠、長吠までのむずかしい」吠方の練習迄、要するに女帝の番犬として公式に飼われるのだ。エカテリナ二世はプガチョフ(プーシキン「大尉の娘」で有名な叛乱の首魁)を囚えたと処刑迄を熊の檻の中に入れて熊にして飼ったというが、元明帝の狗人の史実に、かかる女帝の激しい意志の発露の見られぬ物足りなさはあるながら、尚相当な感銘を与えるのは、偏に「制度化」「公式性」が存する故である。

一四九 橋外男「にゆう・あらびあんないと」(オール読物七月号) この作者としては水準以下のものだが、中に「四つ這になって引叩かれた男の話」というのがあり、美貌淫虐の女店主が店員を四つ這にさせておいて青竹でピシピシ鞭ったり、黒人召使の背中や尻に烙印を押して、性的快感にふける、という場面がある。

一五〇 白路徹作長篇漫画「恐妻番附」(週刊漫画連載中) 恐妻の語も、元祖大宅阿部式用法では、夫が外で発展することの反射としての妻への恭順を意味する。これは男本位の考えで、恐妻の語に拘

奇譚クラブ旧号の在庫案内

☆復刊号の分

復刊第1号	(30年10月号)	二百円 (送16)
復刊第2号	(30年11月号)	〆売切
復刊第3号	(31年4月号)	二百円 (送8)
復刊第4号	(31年5月号)	二百円 (送8)
復刊第5号	(31年6月号)	二百円 (送8)
復刊第6号	(31年7月号)	二百円 (送8)
復刊第7号	(31年8月号)	二百円 (送8)
復刊第8号	(31年9月号)	二百円 (送8)
復刊第9号	(31年10月号)	二百円 (送8)
復刊第10号	(31年12月号)	二百円 (送8)
復刊第11号	(32年1月号)	二百円 (送8)
復刊第12号	(32年2月号)	二百円 (送8)

復刊第13号	(32年3月号)	二百円 (送8)
復刊第14号	(32年4月号)	二百円 (送8)
復刊第15号	(32年6月号)	二百円 (送8)
復刊第16号	(32年7月号)	二百円 (送8)
復刊第17号	(32年8月号)	二百円 (送8)

【代理部だより】

○本誌の復刊号は上記の通り在庫しておりますから御入用の方は、お申込下さるようお願いいたします。三冊以上まとめて御注文の節は送料は当方にて負担いたします。

○休刊前の本誌の旧号は殆ど売切れておりますが、只今、昭和30年2月特大号から同年5月特大号まで、若干在庫しておりますから、お申込下さい。各冊一部百四十円 (送料十六円) です。右以外は全部売切です。すから悪しからず御辛抱願います。

○アルバム、第一集、第二集共売切です。
 ○三条春彦画、「時代物責絵巻」未製本の分が若干残っておりますので、御希望の方はお申込下さい。八枚一組一揃百五十八円 (送共) です。
 ○代理部分譲品総目録の残部がなくなりましたので、この機会に以前の分は打ち切りいたします。但し特に御希望の方に限り当分の間、焼増はいたします。
 ○新しい目録は都合により延期となりましたので、お申込下さいました方は暫くお待ち下さい。出来上り次第お送りすることに致します。時期は只今のところ未定です。それまでは本誌に発表の目録により御注文願います。

らずマゾ的でない。妻の性的要求が強過ぎての恐妻もあるが、これも男性性能力を前提とする関係上、真にマゾ的ではない。真実に恐妻の名に値するのは、妻が生活の実権を握るが故に、夫を尻に敷く女上位的な場合のみであろう。恐妻のニュアンスを右の三種に分析すると、標題の漫画は、第一種、第二種に属するもので、それほどマゾ価は高くない。然し、主人を犬小屋に入れたり、檻の中に閉じこめたりする場面があるので、見て楽しくないこともない。

一五一 近江俊郎「ドライ夫人と亭主関白」(小説の泉五月号)
 女洋裁店主が夫を酷使虐待する。その家に同居しているファッションモデルとその夫も、それに見習って女上位的家庭を作る。(最後で逆転してしまうのが惜しいが)私のいわゆる第三種の恐妻物である。

る。原作者の製作演出で音楽喜劇映画(新東宝)宮城千賀子が坊屋三郎を踏んずけたり尻の下にしたりする所、マゾ味がある。
 一五二 獅子文六「夫婦百景」中「トの字の夫婦」(主婦の友六月号)マゾを意識していないが、第三種の恐妻物である。この作者の「自由学校」の結末と似ている。大男の主人が坊きに出る妻の留守をして家事をし、それに生甲斐を感じる。忙がしい妻の為に足袋を纏う等何でもない。晩飯の菜に小言を云われても反抗せず「洗ひ張りして暇がなかったのだ……」と謝るほど細君化している。妻の方は逆に主人化して、内気な彼を無理に一泊旅行に連れ出し、一口もやれぬ彼を横に一合位独りで酒を飲むといった積極型。閨房のことは触れていないが、色々想像させる。実話に基く短篇創作として連載中の一篇。



探偵小説に現れた

『地獄絵巻』

高崎

勉

奇クフアンの方のため凄まじい地獄絵巻を紹介して行きたいと思います。探偵小説の中から拾ったものばかりです。

(一) 一寸法師 江戸川乱歩

映画にも度々なつたし、色々の出版社より単行本として出されているので、一般によく知られている事と思います。映画より小説の方が凄味を感じたのですが、中でも、昔気質の貞操堅固な山野夫人が、怪人一寸法師に襲われるシーンが、一層迫力があります。それは別に血みどろな場面ではありません。いわば、ありふれた愛慾シーンかも知れません。しかも一方は美しい人妻で、一方は醜い畸形児です。激しい慾に執着する畸形児は、或は驚かし或は恐るべき言葉を口にしたがら、身

をすくめて震えている山野夫人に、じりじりと迫って行くのです。自分の醜い正体が暴露されるのを恐れて、灯を消して闇黒の中で彼は身をくねらして近づいて行くのです。

「不意に電気を消したりしてびっくりするじやありませんか。早くつけて下さい。でない私は帰りますよ。」

百合枝は強いて何気ない風で、しかしかなり強く言い放った。

「帰るものなら帰って御覧なさい。そんな強がりと言ったって駄目だ。貴女はどうしたって逃げ出す事は出来ないのだ。灯を消したのは、貴女が怖るといけないからだよ。」

そして、ゾーッとするような含み笑い。一言ごとに闇の中で相手は近寄ってくる気配。百

合枝は妙な気持になり、只、怖いのではなくて何か不気味な獣に襲われている感じで、それに不思議な相手の告白を聞いている中に、その蛇の如き執念に、或る魅力を感じ始めます。それは憐れみの情というより、もっと肉体的な懐しさです。

突然、柔いものが彼女の膝を這い廻り、逃げる隙を与えず彼女の手を握ります。冷たく汗ばんでいる男の掌の触感

「アラ」

百合枝は思わず低い叫びを上げて、それを振り離して逃げ様すると。だが男の手は執拗に粘り強く容易に離れない。そしてだんだん強い力で彼女の清らかな手を締めつけていった。それと同時に妙な音が聞え始めた。最初

はゴホンゴホンと激しく喉が鳴った。だが間もなく鼻をすする音に変わり、そして不意にククククとむせかえるような声があった。男が泣き出していたのだ。彼は百合枝の手を握り締めつけ乍ら、ポタポタと涙を落して気でも狂ったように泣き続けた。

百合枝は男の激情に引入れられて、彼女もいつの間にか不思議な昂奮を覚え乍ら片手を男のなすままに任せて、黙って彼の泣き声を聞いていた。手の上に降りかかる涙の感触が彼女の恐怖を少しづつ和らげていった。

「百合枝さん、百合枝さん」

男は泣きじやくり乍ら、幾度も彼女の名を呼んだ。そして彼の一方の手は、大きな昆虫のように三本の足で百合枝の全身を這い廻った。なだらかな肩をすべり、背筋の窪みをあやすようになった。百合枝は薄い着物を通して無気味な掌の感触であったにも拘らず、不思議な力に麻痺されて何時の間にか抵抗力を失っていた。それ故に男のほてった顔が彼女の頬に触れ、熱い涙が彼女の唇を濡らし、焰のような吐息が彼女の呼吸と交り合っても、彼女はそれを払い除け様とはしなかった。だが暫くすると突然、彼女は恐怖の叫び声を立てて男の腕から逃れ様とした。彼女は相手の体に起った恐ろしい変化に気がついたのだった。

これから地獄絵巻が展開するのです。それまで彼女は相手の正体を知りませんでした。

さつきから彼女の指は、無意識に男の全身をまさぐっていたのです。そして足の方へ手がいった時アッと仰天するのです。相手が一寸法師と分ると、如何に覚悟をきめていたとはいえ、彼女はもう我慢が出来なくなり、こんな化物に少しの間でも妙な魅力を持っていたのかと思うと、彼女はゾーッとして遮二無二怪物の手を振り切ろうともがきます。だが相手は彼女が覚ったと見るや、いよいよ力を加えて抱きしめます。畸形児とはいえ死にもの狂いの腕力です。

「今更、逃げ様としたって逃がすものか。声を立てるなら立てるがいい。そら、まさか忘れはしまい。そんな事をすればお前の身の破壊だぞ。いいか山野一家の滅亡だぞ。」

一寸法師は起き上った百合枝の足にからみついて、彼女を倒そうとした。百合枝は叫ぼうにも叫ばれず、逃げ出す力を失って悪夢にうなされていく気持だった。畸形児は無気味な軟体動物の様にべったりと彼女に密着して両手で締めつけていった。

大変な光景で、闇黒の中にのたうつ畸形児の愛慾。正に地獄絵巻です。無論戦前の作品で、一字も伏字はありませんでした。

(二) 地獄風景 江戸川乱歩

一寸法師程、有名な作品ではありません。乱歩ファンでも若い人は、この作品のある事

は御存知ない人も多いと思います。これは昭和六年六月より昭和七年三月まで、全集附録、探偵趣味に連載されたものです。文字通り地獄の如き小説ですが、何か動く絵でも見ているような気持になる作品です。主人公は殺人マニアで、奇抜な遊園地を作り、そこで片端から奇抜な殺人を繰り返します。

主人公は、千万長者といわれた大金持の一人息子で、喜多川治郎左衛門という妙な名前の持主です。三十三才というのに妻を娶わず、大勢の召使いの他には全く係累のない気楽な身分です。退屈が昂じて、どぎつい遊びをするようになったのでしよう。のみならず彼の廻りには浮浪者のような男女の悪友達がうじやうじやと集っていて、八方から彼をそのかします。三万坪の広大な敷地には山あり、池あり、天然の妙趣と世界の怪奇をよく集めて、不可思議な建造物で塗りつぶしたのです。これを名付けて「ジロ楽園」といった。園主の招待を受けた選りすぐった猟奇の紳士、淑女達は畸形ゴンドラに乗せられて、悪魔の扮装をした船頭のあやつる竿に、椿のアーチをくぐります。小川は鬱蒼たる青葉に視界を遮ぎられ、迂余曲折して園の中心へと流れて行く。こんな風に順を追っては果しがないので、主なものを列挙すると

空中を廻る大車輪の様な観覧車。
縄梯子でいつでも登れる大軽気球。

明治時代の大パノラマ館。

大鯨の体内廻り。

からくり人形の地獄、極楽。地底の水族館
ジンタの楽の音に楽しく廻るメリーゴーラ
ンド等々。

頽廢的な雰囲気文章の隅々まで行渡り、
満ちて居ります。そのいとも不思議なシロ娛
樂園に、無気味な連続殺人が次々と発生し、
最後の大カーニバルの日、一大地獄風景に変
ってしまうのです。それを御紹介する前に、
奇抜な殺人を一つ二つ……。

カーニバルの運動会

千米の徒歩競走、十人の紳士、淑女の選手
達は紅白だんだら染のユニホームを着て、胸
には一から十までの番号札をつけ、向うの森
の決勝点をめがけて、オイチニ、オイチニと
息を切らして走っています。彼等は既に八百
米附近を走っています。無論、一人残らず酔
ぱらっています。鼻眼鏡が落ちそうになるの
を片手で押えながら真赤な顔をして、ホイホ
イ掛声をかけて威勢よく先頭を切って走る紳
士。その次は、美しい顔をゆがめて断髪を後
になびかせ、乳房とお尻を振り乍ら走るマダ
ム。その後から、瘠せっぽちの肺病病みの青
年。それから李の様に丸くてすべっこい顔の
お嬢さん。後は二、三米位おきに続いて走り
最後は樽のように太った肥満紳士がエッチラ
オッチラ走っている。彼等の足並に合せて

コースの三ヶ所で「宮さん宮さん」のジンタ
の楽隊が鳴り響いていました。空にはひっき
りなしに花火が炸裂して、五色の雪を降らせ
ます。ゴールに二本の柱の間に白いテープが
張られ、扮装した当主の治郎左衛門がピスト
ルをかまえて立っています。先頭の鼻眼鏡の
紳士が遂にゴールに迫りました。彼は疲労の
ため今にも倒れそうに見えました。ギラギラ
光る巾の広いテープは、先頭の走者を待ち構
えています。

「ウォーッ」

彼は獣の様に咆哮して、白いテープに向っ
て猛然と突進しました。鼻眼鏡の紳士の体が
テープに突当たったと思った瞬間、彼の腹部か
らサッとしぶきが迸ってテープにかかりま
した。それから丁度、打上げられた花火の音
と一緒に凄惨な絶叫が起り、鼻眼鏡の紳士の
上半身が両手を妙な恰好をして空中に舞上り
下半身は地上に倒れて二、三度ころんと転
りました。二つに切断された鼻眼鏡の紳士の
体！素晴らしい切味！テープと見たのは、
実は砥ぎすました鋼鉄の刃であつたのです。
その上に白い塗料を塗って、遠目には白いテ
ープと見せかけてあつたのです。長い刃は触
るだけで切れるのに勢よくぶつかるのだから
真二つに斬られても不思議ではないのです。
鋭い刃は一人を葬って、血を吸った快感にブ
ルンブルンと震っていた。第二着は断髪のマ

ダムの成熟し切った白い肉塊です。彼女は最
初に決勝点で起った変化には、酒に酔ってい
ましたし疲労のため目がくらんでいましたの
で、気がつきません。勢よく走って来たマダ
ムの体は真二つになり、もんどり打って倒れ
ました。残る走者も、次から次へとこの恐ろ
しき殺人テープの犠牲になります。命を失っ
た者三人。傷つき倒れた者五人。無傷で逃げ
出した者はたった二人です。ゴールには、こ
れ等の犠牲者達が重り合って、もがき廻って
います。この時、三ヶ所のジンタの楽隊が、

「宮さん、宮さん」から「猫じや、猫じや」

の曲目に変えて行きます。すると半分ちぎれ
た肉塊共が、腹や胸から血を吹き出し乍ら調
子に合せて、ピョンピョンと苦しまぎれの猫
おどりをします。五色の吹雪の中で男女、様
々の肉塊共が手拍子、足拍子、面白く気狂い
のように踊りまわります。治郎左衛門は自分
を捕えに来た刑事に向ってこう云います。

「刑事さん。私は人殺しするためにこの樂園
を作りました。そして最初の間は一人ずつ、
最後は一度にバサリとやってしまうのです。

人殺しというものはどんなに美しい遊戯であ
るか、あなたも御覧になったでしょう。これ
は私等の先祖のネロが考え出した、世にも素
晴しいページェンドなのです。」

(中略)

そして治郎左衛門は一個の大型のスイッチ

をしつかりと握りしめ、群る刑事や警官達を微笑の目で見ながら

「このスイッチは何を意味すると諸君は思いますか？ このスイッチこそジロ楽園の最終目的を暗示するのだ。このスイッチを入れると、ジロ楽園にはどのような地獄風景が現われるだろう。私はそれを思うと嬉しさに胸が高鳴るのだ。諸君にその光景を見てもらいたいのでここへおびき寄せたのだ。」

警官達は何ともいえない不安にかられ乍ら彼等の目はスイッチに釘付けになりました。

「いや、このスイッチを見て呉れというのじやない。諸君は後を見るんだ。この丘の上からジロ楽園の全景を見渡すのだ。さあ今こそジロ楽園の最後の時だ。」

こう叫び終らぬ内に、スイッチが入れられた。人々は反射的に後を振り返った。突如、何とも形容出来ないような地鳴りが起った。大地震の前ぶれのような音響が鳴り響いたのだ。しかし地震ではない、だが地震以上の地獄風景がやがて人々の前に展開された。

先ず浅草十二階に凝した摩天閣が、その中程から折れ、土煙を上げて崩れ落ちた。その摩天閣に昇っていた仮装の人達は、空中にもんどり打って地獄の亡者の様に、大地へ墜落していくのがまざまざと眺められた。恐しい地鳴りと大音響は引っぱりなしに続いた。

「次は観覧車だ。」

治郎左衛門は大声で叫んだ。

突然、大空に廻っていた観覧車の車輪がバラに解体した。車輪に取付けてあった箱には、どれも満員の人が乗っていた。彼等は箱諸共、大地に墜落しながら顔一杯の口を開け身の毛のよだつ悲鳴を合唱した。

呵鼻地獄。叫喚地獄。

パノラマ館の丸屋根は締金がはずれて円筒形の壁の中へスッポリと落ち込んでいった。

コンクリートの大鯨は、百雷の音と共に粉々になって四散した。

地底の水族館は崩潰し、地獄、極楽のトンネルは崩れて埋まり、池も川も津波となって沸きかえった。如何なる大戦争よりも激しい混乱、物凄い音響が何千町歩のジロ楽園を揺り動かした。

火薬の煙、土煙、砂煙が森も丘も覆いつくして、空へ空へとなびいていった。

コンクリートの破片、鉄骨の切れっ端、引きちぎられた人間の首や手足、その他あらゆる破片が、未だ降りしきる五色の雪と共に、

警官達の頭上から降って来た。

警官達は心がうつろになり、よろめきながらそこに立っているのがやっとなった。まして犯人を捕えよう等という考えはどこかへ吹飛んでしまつて、治郎左衛門の存在をさえ殆んど意識しなかった。やがて土煙が鎮まると、ジロ楽園は見るも無惨な一面の廢墟だつ

た。墓場の静寂、死の沈黙、見渡す限り動くものは何もなかった。

「皆殺しだ。あの何百人もの客達が皆殺しになったのだ。」

警官の一人が放心した様な声で云った。ジロ楽園の音楽も酔っぱらいの歓声も、憐れや一瞬にして幽界へと消えていった。

「だが、たった一人殺されなかった者があるのですよ。」

ふと気がつくと、大虐殺者、治郎左衛門がニコニコ笑って立っていた。警官達の憎悪は爆発して、彼等は十何匹のイナゴになって、ものも云わずに大悪魔に飛びついていった。

「おっと、どっこい」

治郎左衛門は危ふく身をかわして、そこを下っている軽気球の縄ばしごに飛びついた。

そして素早く上へと駆け上り乍ら

「殺さなかったのは私の女房の鮎子ですよ。」

木下鮎子です、あいつだけは、どうにも殺す気がしなかったのですよ。私の女房が御挨拶しますよ。」

見上げると、軽気球のゴンドラから美しい鮎子が、五色のテープを投げながら警官達に微笑みかけていた。

「畜生、逃がすもんか。御用だ。」

警官達は、狂気のように縄ばしごを這い上った。先頭は治郎左衛門、少し離れて木島刑事、それから制服の巡査の十幾人が空へ一列

の鈴なりだ。治郎左衛門は猿の様に早く駆け上って遂にゴンドラに達した。そして鮎子の白い手が治郎左衛門を引き上げた。しかし彼が籠の中へ飛び込んだ時は木島刑事の手も籠の縁にかかった。

「早く早く、縄を」

治郎左衛門の声に、かねて手筈がととのっていたのか鮎子の手に白刃が閃めいて、空中の縄ばしごをぶつりと切断した。木島刑事の片手には後に続く十数人の警官の重さを支える力が無かったと共に、彼の手もゴンドラを離れた。空へ垂直に延びた縄ばしごは、数珠繋ぎの警官達をのせたまま、忽ち地上へくたきたとくずれ落ちていった。それと同時に、綱を離れた軽気球はふらりふらりとお尻を振りながら大空高く舞い上った。治郎左衛門と鮎子はゴンドラから半身を乗り出して、残っているテープを悉く地上に投げ下し、声を合して万才を叫びながら、想出深きシロ楽園の廃墟に別れを告げた。軽気球はどこまでも昇天していった。幾つも幾つも白い雲を突抜けて、一匹の小さな魚のようになって、たのしげに小さく小さく、いつしか果知れぬ青空の中へ消えてしまった。

以上で終わっています。作者は前代未聞の地獄絵巻の様に描いていますが、今日の一発の原子爆弾の恐るべき威力に比べたら、物の数

ではないと思います。しかしこの小説を読んでも、我々は不思議にもこの世にも稀代な極悪人、殺人鬼の治郎左衛門に腹が立たないのです。何か世俗を離れて御伽噺のような楽しさがあるからでしょう。却って美しい鮎子と治郎左衛門が大空の彼方へ行ってしまったことに一抹の淋しさを感じられないでは居られません。江戸川乱歩の作品中の犯罪者は大抵そうなのです。蜘蛛男にせよ、一寸法師にせよ最後は悲惨で深い哀愁を覚えさせます。例えば一寸法師は、犯した罪悪は憎くむべきものかも知れませんが、その最後のもの悲しさはどうでしょう。彼は畸形の不自由な体で、死物狂いで追手から逃げようとあせります最後の力を振りしぼって湯屋の大屋根へ登ります。

だが、一きわ高い棟の上で一息つくひまもなく、追手達は屋根の両方の端にとりついていく。最早、逃げる場所がない。そこから飛び下りて頭をぶち割るか、おとなしく縄を受けるか、どちらかを選ぶより方法がないのです。追手達は身構えをしながら、一步一步近寄ってくる。畸形児ののぼせた目には、それが大とかげのように見える。彼はあてもなくキョロキョロと辺りを見廻します。すると、目についたのが湯屋の煙突です。黒く塗った鉄の筒が直ぐそばに立っています。彼はいきなりその煙突にとりつくと、得意の木登りでスルスルと登っていきました。追手は、同じ様にその煙突に登る愚はしませんでした。彼等はその下に集って、われた瓦を投げつけます。

(新聞通信)

美女を十字架にクギづけ

—生にえのまわりで肉体の狂宴—

東 一 郎

しかし畸形児は、煙突を支えている針金に目をつけた。その三方に張った針金の一方のものは、狭い空地を渡り向う側のゴミゴミした長屋の屋根にとどいています。彼はケールカーの様子にその針金を滑って向う側に渡るつもりです。若しそれがうまく行けば、そこは複雑な狭い道路で夕闇の事だし、或はうまく逃げられるかも知れない。命がけの軽業が始まりました。畸形児の手が針金を握ったかと思う間に、すると五、六間滑りました。そして針金がピンと張って煙突が弓のように曲りました。しかし半分も滑らない中に針金が鑢のように喰入って、皮肉を破り骨にまで達しました。畸形児は痛さに耐えられなくなり、針金を握る力もなくなりました。しかも下を見ると、空地にはいつの間にか五、六人の人が空を見上げています。たとえ向うまでうまく滑り下りた処で、もう逃亡の見込みはないのです。だめだと思う一瞬、針金を握っている手の指がのびました。そして畸形児の目の前で世界が駒のように廻りました。

どうです諸兄姉様、畸形児はそれでもたった一つ善根を、この世に残して死んで行きます。それは悔悟した真犯人の美智子なる美しい令嬢を救うため、名探偵、明智小五郎にくだき落されて嘘の告白をします。そして真犯人の罪まで引つかぶって息絶えるのです。今月は江戸川乱歩の作品のみになっています。

この春のはじめ、数名の党幹部が地方の実情を視察するため、中央アジアの各地を巡視したことがあった。一行がある夜、カザック共和国のイワノヴカンという一寒村にさしかかったとき、狂熱的なタイコやドラの音にまじって、骨を凍らすような女の鋭い悲鳴が聞こえてきた。

ギョツとした一行が時を移さずその声のする農家へ駆けつけてみると、そこに繰りひろげられていた光景は世にも奇怪な、さながら古代の宗教画を見えるような、あやしくもむごたらしいものであった。

一糸まとわぬ裸女をハリツケに

部屋の中央には真白な巨大な木の十字架が立っている。そしてその十字架には一糸まとわぬ年若い女が両手両足をしばりつけられていた。さっきから悲鳴を上げていたのはむろんこの女であり、いまも彼女は何とかいましめを脱しようと、身をよじらせてもがいていた。そればかりではない。この女のまわりには屈強の男数名が手に手にハンマーを持ち、五寸釘をいまにも女の裸身に打込もうとしているではないか。

さらにこの男たちのまわりには、これまた全裸の男女が、わけのわからぬ呪文を唱え、男女関係を表わすみだらな身振りで、

ゴトゴツと踊り狂っていた。部屋の隅にいた一団の男の鳴らすタイコとドラの奇怪なリズムは、この狂宴に一層夢幻的な雰囲気を与えていた。

神の降臨仰ぐため妻を媒体に

後で分ったことだが、ハリツケにされようとしていた女は、教祖ヤーコフ・シユタデルの妻オルガであった。そして自らハンマーと釘を持ち、他の男にも釘を打込むよう指揮していたのはなんとヤーコフ自身であったというから驚くほかはない。むろん妻にあに特別の罪があったわけではない。単に神の降臨を仰ぐ媒体として犠牲にされたにすぎないのである。

―昭和三十三年五月二四日付内外タイムス（解説）近頃各新聞紙上にぎわしているものに暴露物がある。雑誌も実話特集が多くなつて来たようだ。此れはやはり人間の心理として当然の要求かも知れない。

此処に引用した「共産国家内部の暴露」も興味深いものがある。共産圏の残虐きわる行為は正に十九世紀的だ。此の十字架にクギづけされた教祖の妻オルガは典型的なマゾではあるまいか。とにかく『プラウダ』紙上に暴露されたのも一入面白い話である。

相^す撲^{もう}取^{とり}草^{くさ}

土 俵 四 股 平

「喧嘩はおやめ、相撲ならお取り

着物はおやめ ムキ身でお取り」

それは婦人更生寮R園の園生達がうたう文句だった。

女のプロレスは見られなくても、ここの住人は、何の不自由もなかった。と云うのは、週に一回位は物凄い女プロレスの上演が見られるからだ。

定員は七十名でも、日々に出入りがあって不定だった。その収容人員の過半は腕にインキで入墨をした腕力絶倫の娘共だった。娘といっても形だけのことで、生理的にはそのほとんどが男を知っていたし、パン助上りが三分の一を占めていた。

委員長、副委員長なるものを、自治的に選出しているが、その内容はやはり腕力拔群の

女がソレに選ばれるのが常だった。

委員長柿本邦子も、身長五尺三寸十七貫の大兵肥満の娘で、かれこれ八ヶ月その栄職？にいるのだった。だが週に一人平均に新人があらわれるので、その女王座は何時おびやかされるか分らなかった。

委員長の柿本が二十五才で副の江戸文子が十九の経産婦だった。園へ新入りが来ると、まず最初に医務室で身体検査（主として性病の有無）が行われ、相談室と名付けられる部屋で、寮母立会のもとに園長から、調書を中心に再調査がある。それから部屋が割当てられ、夕食時に園生全員へ紹介があって、いよいよ入籍が確定されるのだ。

午後四時、授産終了のベルが鳴ると、一斉に掃除が始まる。六十畳の広間は、文字通りに大広間にかえる。入浴は五時半迄に、夕食

は六時が普通だった。七時から八時半の消灯までは、園生は「自習」ということになっているが、事実は放任なので、自室へ引取って正直に自習の真似ごとをしている者もあればよからぬことをしている者もいた。

新入りがあるたびに、委員長が気になるのは、本人の前歴と腕力だった。委員長ともなれば、新入りの前歴は、それとなく職員から聞くことが出来たが、腕力だけはあたってみねば分らなかった。

其処で考え出されたのが、昼休みの座敷相撲だ。十一時半のベルで洗手其他があつて昼食、昼食後は一時までピンポンや読書など自由なのだが、この昼休みを利用して催されるのが問題の女相撲だった。

柿本委員長の音頭取りで、いわばサクラになった四五人が大広間で八百長相撲を取る。

そしてソレを見学？ さされるのが新入りなのだ、拝見だけかと思っていると、

『××さん、一番取ってみな！』と挑まれるのである。全然腕力に自信のない者は、おびえて立上りもしないが、それでも片輪や病人でない限りは無理に立たせて、ソレ相当な体格の相手と取組ませる。ある日など三十二の女が、十五才の小娘に二度も投出され、恥をかいた新入りの大年増は、これを意恨に思つて、四五日後、外出から帰って、遅れて入浴していたソノ小娘と、狭い浴槽内で、全裸

で意恨相撲を取り、負けた小娘に湯をのませた事件がおこった。

授産場の女相撲も、人垣以外に土俵はないので、一方が倒れる迄は勝負がない。弱い女はスグ崩れてらちがあくが、腕力に自信のある新入りは、そう容易には参らない。波瀾万丈となる。白熱してスカートを脱ぐ頃になると双方共必死の相撲である。其処で、着物はおやめムキ身でお取り」と云うことになる。

ズロースの上から臍がのぞいて、腹櫓のせり合いが始まる、手がほどけると乳房をゆすって附入ろうとする。その揺れる乳房を年増が掴む、娘でも喧嘩になれた連中になると、そんなこと位ではタジつかない。あべこべに掴みかえして攻めたてる。こうなると乳首の大きい年増女は案外分が悪い。ズロースが破れると、兵児帯を持ってきて褌にしめこむ。

乳房の取合いの早いのは、紡績女工の上りだった。仕切りから立って、四つになったと見れば双方共掴んでいる。揉み方も要を得ている。巾著掴みにしてしごいて勝つ。また朝鮮育ちの引揚げ娘は、膝拳が得意だった。相手の股間をタツと蹴上げて崩して勝つ、このように新入りがあるたびに変わった手口が見られた、四十八手の裏表どころか新案続出である。

さてこの広間での相撲は、どこまでも公開のものであるが、ここの相撲で二三人を抜く

と、時間の関係にかこつけて、相撲遊びは一時中止となる。新入りはヤレヤレと思って衣服のほころびなどを気にしながら引下るが、関門は決してこれでパスしたのではない。勝相撲を取ったものは、完全にひっかかったのである、というのは、この場の相撲は、どこまでも儀礼的？なものであって、新人に対するお手の内拝見に過ぎない、こいつ骨があると見てとられたらサア大変である。

昨日もこの第一関門でひっかかったのが一人あった。五尺三寸三分十六貫八百で、まだうら若い二十の娘佐々木光子だ。体力にまかせて、金山、増田、江戸と三人を投げて拍手をうけたが、翌日になると、夜の自習時間に『佐々木さん、委員長が呼んでるよ』

『そうか、どこにいる』

『この廊下を突当って曲ると倉庫があるソコや』

『ふん、何の用やる』

『そこは布団部屋や…』
何も知らぬ佐々木光子は、教えられた倉庫へ向った。もう夕食を終って小一時間はたっているの、職員は職員の寮へ帰ったし、園生も自室へ戻っていた、炊事当番と使役当番の四五人が、どっかで音をさせているのは就寝のベルを待ただけだ。

重い木戸をあけて入ると、倉庫には二十W位の赤茶けた電灯がついていた。布団でも運

ばされるのかなと思って、飛込みの六畳を通って奥へ進んだ。其処には柿本と、いつも柿本に喰付いている江戸文子が立っていた。ふと背後に足音がしたので振り返ると、呼びに来た増田が木戸をしめて入ってきたのだった。

『何か御用？』

『腹こなしに一丁相撲しよう』

『相撲？　ここでかい？』

『そうや、文ッ公、昨日みたいに、負けるなよ』柿本は江戸へ顔をしやくった。

『ふん、相撲か』

部屋で、この三人が何を考えているかを光子は読み取った。

『サア脱ぎな、ムキ身や』

『裸？』

『相撲は昔から裸にきまつてるよ』

五尺をチョット越した小女の江戸文子は白い肌をしていた。光子も脱いでズロース一枚になった。五月の夜はまだ冷えていた。

『増田、行司したりんか』

増田は片手を突出して二人の中へ入った。馬鹿馬鹿しいと思ったが光子も構えた、こうなった以上は勝ちたかった。プロプロした文子の肌が、にぬき玉子の白みのように光っている。

『見合って／＼まだ／＼』二人は睨合った。

『ハッケヨイ！』サット立った光子は、文

子をグッと抱込んだ。文子は低く組んで太鼓腹をつけて来る。光子は腰を落そうとする。相手は腹で押して足を掬ってきた。よろけながら光子は残した。

『残った／＼文っ公しっかりしろ！』柿本の声、だが体力の差は仕方がなかった。文子は光子の大力に腰をくだいて膝をついた。

『よしッ、今度はワテや』柿本が脱いだ、小麦肌よりやや黒い肌があらわれた。柿本邦子の目と光子の目が合った。今迄はそれほどにも思っていなかった光子は、ギラギラ敵意に燃える邦子の目を見ると、斗志と憎悪がわいてきた。負けるもんか。

『サア来い！ ワテはちよっと荒いよ』

『……』高慢な邦子は、大関のような大きい腹をしていた。文子より一廻りはデカイようだ、其上に夏蜜柑のような、キメの荒い大きい乳房が並んでいる。娘とは思えぬほど乳房は邦子に負けぬほど大きい、乳首は少しほろしい蕾だった。喧嘩だと光子は覚悟した。

『相撲！ よお！』と立ってきた邦子の胸を光子は突いた。双手突きだ、突かれて邦子は一步退ったがスグ掴みかかってきた。手先が激しくせり合った。だがやがてニブイ肌音をたてて二人はムンズと引組んだ。いわば東西大関同志の決勝戦といった形だった。

『よい相撲や、柿やん負けるな！』増田が

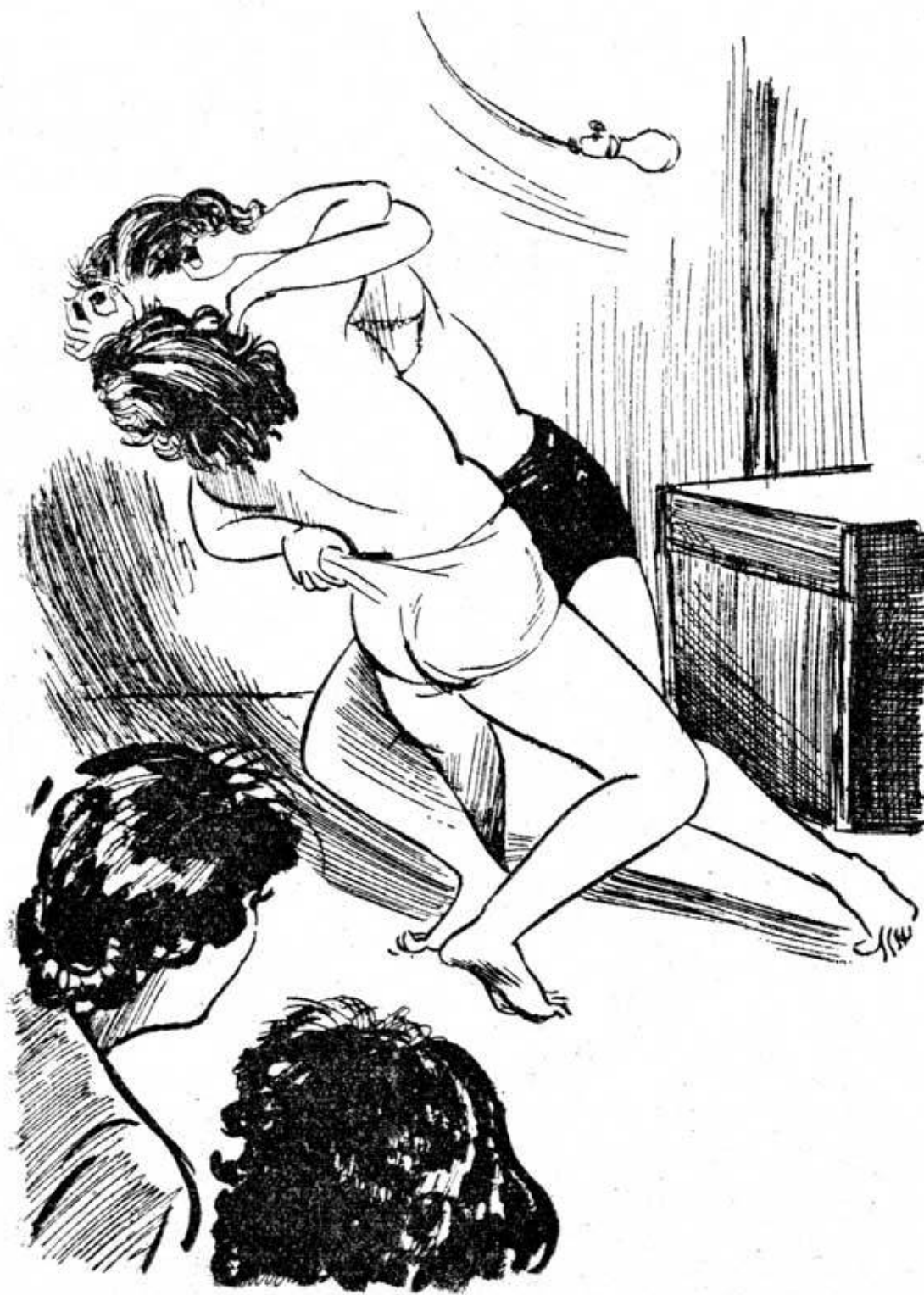
二人を廻る。光子に負けた文子も邦子にゲスな言葉で声援する。

互に腰を掴んで腹を合せた。ねっとりした脂汗が冷えて感じる。腹の押合いは五分だ、吊合いでせったが上下がない。

『乳だ！』邦子の声だ。姉御ぶって名乗って掴む気らしい、二本の手先が真剣に切合って、乳房を掴ませまいとせった、腕に腕を捲

いて切る、差す、切る、また差すとせり合ったが、互に大きい胸乳とて、防ぎ切れるものではない。其処は女相撲に馴れた邦子の手が熊手のように光子の左を掴んだ。だぶっとしたソレをグニツとなる迄掴みしめた。

『ううっ！フエッ』もだえながら邦子の手を切ろうとするが、無理に切れれば、自分の乳房が一層強くひかれる訳だ。



『乳房！ どうだ、女で来い女で！』勝誇った邦子は、乳房を揉み始めた、グニグニグニと揉んではねじる。

『……』苦悶する光子だ、二十五と二十ではこれほど女の貫祿に差がつくものか、光子の目へウス笑いの文子の顔が飛込む、増田のあざけったようなハッケヨイが耳をかすめる。

互に四ツの太腿が、からんで投げようとする。力と力でねじあった相撲は互格では、乳房の先手になやむ光子だ。

『糞！』必死の光子がサツと邦子の下腹を掴んだ。ズロースの上ながら充分の手ごたえがあった。だが邦子はビクともしない。かえって下腹を突出して、もっと掴めといわぬばかりのフテフテしさだ。たまらなくなった光子は、首をちぢめて邦子の乳首を噛もうとかかる。これにはさすがの邦子もあわてた。やっとな光子の乳房を離して、光子のパーマを掴んで首を逆にねじる。ここぞと光子は身を弓にらせながら邦子を布団の山へ押付けた、バリバリと髪をむしり取られるような痛みをこらえて、邦子の突立った乳房をガツと掴んだ。掴むが早いのがギリギリとねじ廻した。ねじた指がブリッと乳首の先にふれる、その感触をたよりに小さい歯ほどある乳首に爪をかけた、乳首に拇指の爪をたてて乳房の中へソレを押込むほどに揉込むのだ、光子は無性に

邦子の乳房が憎かった。憎く感じて狂った、死んでも離すまいと思った。自分の乳房に対する復讐だった。

『ひひッ！ うううッ』邦子の呻き声がたつ

『邦ちゃんどうした、勝ちおしおし』

『柿ヤンしっかり、負けたら馬鹿や』

江戸も増田も必死の声援である。今にも、どっちかが光子にしがみつきそうさ。布団の山へ押付けられた邦子は、光子をシッカリ抱込んだまま歯をむき出して噛合おうとしている。白い歯が相手の頬と白い喉を狙っている。

何時の間にかゴム紐を切って、ズロースを落した二ツの臀部が、大ふくべのようなポリウムを見せておし合っている、と見る間に二つの肉体は崩れた、寝業だ、どてんどテンと二人の肉弾が上下を争ってころげ廻る、またドテンと畳から埃をあげて邦子が上になる。

『ひひッ！』今度は光子の悲鳴だ。

『ウーム、どうや！』邦子のだみ声だ。

ドテン、今度はまた光子が邦子の腹を敷いた。倒れた瞬間から双方共乳房をはなして、首を締め合い噛合ったが、女力の疲れはどちらとも勝負をつけるに到らなかった。ただ歯と歯がカチカチと鳴るばかりだ、ダメと知ると二人はいい合わせたように再び乳房相撲に戻った。下から掴む邦子は乳房を捻上げて引千切ろうとする。上から掴む光子は握りつぶそうとする。邦子は両腿で胴締めをかけるが、

太い光子の腰はよく耐えている。一時は互に股間を掴もうとしたが、腹が密着して隙がない。女が強いが娘が弱い、女と娘の必殺の喧嘩である。女らしく大きい胸乳に命を賭けての二六勝負だ、こんなセツパ詰った瞬間に光子はフト昨日入園の際、親切に世話をしてくれ、呉れた男の先生の顔を、その名もハッキリ知らぬ先生の顔を目にうかべた。

『勝ちたい！』光子は喉でそう叫んだ、自分の声なき声にはげまされた光子は、全力を腕と指にこめた、死力だ、

『わあッ！ ヒヒヒッ！』光子の爪が完全に邦子の乳首を殺した。娘が女のとどめを刺したのだ。

『参った？ まだか？』

『ヒヒッ、わわわッ』邦子の泣声があがった。

『どうや！』

『わわわッ！』大声をあげた。

『勝負だ、もうよせ！』

『あッ先生』

増田と江戸が顔色をかえて飛びのいた。職員の一である私がここに出現したことに何の不思議もない。時刻を忘れて夢中になっていた四人がまぬけていたのだ。間拔けたのでなく無我の境だったのだらう。消灯前の点呼で四人の欠員を発見した私は、一時は委員長柿本が三人を誘って無断外出かと思った。

だが、靴などが異状がなかった。探し廻った結果、はからずもこのスバラシイ乱斗に立合わされたのだ。

ガタゴトと、音をたてて入った私に気付かず、四人は組むも組まぬもうつつになっていたのだ。増田、江戸のどっかが邦子に加勢すれば引分けてやろうと思ひながら見ていた。だが憶病な二人は、光子の意恨を自分にひくのを恐れて、ハラハラしながら手を出さなかった。

× × × × ×

その日から五日して、柿本邦子はトンコ（逃去）してしまった。佐々木は委員長にはならなかったが、絵が好きで、私と共によく付近の山や川へ写生に出た。彼女の作品は、園の創立記念日の画展をにぎわせたし、私が求めるとマードになってモデル台に立ってくれた。今で云う美しい八等身の娘だった。そ

の光子も二ヶ月後には、理由も告げずにトンコしてしまった。

私の手許には幾枚かのスケッチと写真が残っている。虫が知らせたと云うのか、それとも故意か、光子がトンコする二日前の昼休みに、竹藪のスケッチをしていると、光子は不意に私の背後から襲ってきた。そして私をイーゼルのもので押倒して組伏せると、

『先生、先生は私の肌をおかきになったわね。私は先生に私を、光子を全部あげたの、だから私の心は私にないの、ね先生、光子の絵を一生光子だと思って可愛がってね、キットよ』耳もとでそう云った。

『一生涯大事にするよ、でもモット立派なのがこれから描けると思う……』と云おうとすると、私の口を光子は唇でふさいで声を出さなかった。

『先生、光子の体はもう汚れたの』

『何故？』

『きかないで、先生、光子の絵を大事にしてね』

私が光子に指切りしてやると、光子は安心したように、私のスケッチブックを奪ってスケッチを始めた、だがどうしたことか、其日に限ってそれは絵にまともならなかった。

風の便りに聞けば、光子は大阪でパン助になつていたりとか、ドサ廻りの旅役者にまじつて北陸行の列車に乗っていたとか云う話だった。

そうだ、そんな噂はどうでもいいのだ、ききたくもない。

乙女の光子は、今もカンバスに清くマードを誇っている。

寮生 佐々木光子——一九五三年七月十九日描く”の記録を背にして。

(完)

にも、縛りシーンを入れておくところは流石である。

近く上映の大映スタビジョン「地獄華」また映画化三度目の東映スコープ「大菩薩峠」また大映スタビジョン「銭形平次捕物控、女狐屋敷」日活スコープ「月下の若武者」にも縛りシーンがある。

「地獄華」は、北条秀司作の舞台劇「舌を

噛み切つた女」の映画化で、山に捨てられて山賊の頭に拾われ育てられた野性の女、ステには京マチ子が扮しているが、このステが、馬の背に太綱で雁字搦めに縛りつけられ、馬を走らされるシーンがある。口には太綱の猿轡を噛まされて……。それは、育ての父であり夫である袴野の鷹が、身籠つたステの腹の子の父親を白状させ様と折

邦画もワイド映画時代に突入し、東映スコープ「鳳城の花嫁」以来、緊縛シーンもワイド映画のため迫力を増してきた感がある。「鳳城の花嫁」では、長谷川裕見子、中原ひとみ、の美しい姉妹が悪旗本に捕えられ、庭中の杭に背中合せに縛りつけられ斬られ様とする。縛った縄が太すぎて、緊縛感が少し欠けるが、ワイド映画の第一作

檻する。だがステは白状しないので、グル／＼巻きに縛られて杖で突かれている。そして馬の背に縛られて「寿命があつたら勝手に助かれ、無けりやそれまでだ。地獄へなり」と極楽なりと好きな所へ行け」と馬を走らせるのである。伊藤大輔監督だから見ものだろう。

「大菩薩峠」は、これまで大河内伝次郎の机龍之助、入江たか子のお浜。片岡千恵蔵の龍之助、三浦光子のお浜。今度は千恵蔵の龍之助に、長谷川裕見子のお浜である。「大菩薩峠」には、サジステイックなシーンが多い。その庄巻は水車小屋の中のお浜の縛りシーンである。与八にさらわれ猿轡を嵌められて運ばれて来て、フト目覚めた前に机龍之助がシートと見つめている。

内田監督がどのような演出をするか。丘さとみのお松が、神尾主膳の邸で百人一首をやり、竹の子勝負で一枚一枚脱がされて行き、遂に長襦袢一枚にされるが、それも脱がされようとする時、裏宿の七兵衛が泥棒に入り危く助かる。この七兵衛が、姫のお松を無慈悲に追い返した伯母のお滝に復

ワイド映画の縛りシーン

嵯峨美也子

響する。日高澄子のお滝が原作では、湯文字一枚で番頭と一緒に縛りつけられ店頭に晒される。映画ではどの様に描くか楽しみである。

大映ビスタビジョン「女狐屋敷」は、庶民を惑す淫祠邪教に敢然として挑み、蓮華往生等の悪事を退治するという、御存知の長谷川一夫の銭形平次ものだが、この渦中に女目明しのお品が巫女になって飛込むが正体を見破られて巫女姿で縛り上げられる。

東映スコープ、現代劇「地獄峠の復讐」等にも縛りシーンはあった。

日活スコープ「月下の若武者」は、長門裕之、津川雅彦の兄弟が共演する時代絵巻だがこの兄弟が父の仇を討つまでの波乱万丈の中には、恋人達も捕われ縛られるシーンが織込まれている。津川雅彦の千寿丸の許婚の千加（浅丘ルリ子）は、嫉妬した山

の娘アケミ（香月美奈子）に人買いに売られ白拍子になり兄弟の父の仇を討とうとして獄舎に捕えられる。アケミも又、袴垂保輔（水島道太郎）に捕えられる。長門裕之の小太郎は袴垂の手下になり、最後は千加と木に縛られ、首に縄をかけられ吊られようとする。この時、弟の千寿丸に救われる。

スタンダード版では、新東宝映画に多い。「妖婦夜嵐お絹と義賊天人お玉」で、若杉嘉津子のお絹がお部屋様で、後手縛りにされ斬られようとする。しかしこの時縛られず片肌脱ぎで入墨を見せて大立廻りをする。縛られ女優の筑紫あけみが、大塩平八郎の「風雲天満動乱」では芳音という娘役で、邪教を探るために信者に化けて入り込むが、宗門を乱す異端の徒として捕えられ、豊国観音の生贄に供せられることになり、十字架にかけられ火あぶりにされようとする。燃える炎、身をもたえる芳音の運命や如何に、で前篇が終っている。

日活の「血染の白矢」で、最後に女賊の新井麗子が突き飛ばされ縛られるのが一寸頂ける。また、見世物小屋の女の子達が、珠数繋ぎになるところもよかった。

× × ×

『和装教室』

— 長襦袢濡れ場の巻 —

白 金 紅 次

滝 れ い 子 ・ 画

『成る程——それで大体判ったような気がするが、話の荒筋からいって問題はどうしても親爺、つまり大旦那なんだね、——で何年お屋敷勤めしたの?』

『三年ばかりなんです』

『すると、その大旦那の奥さんが生きていようがいまいが、その女、早くいってお妾さんだね、そのお妾さんが、その屋敷へ来たのは別段昨日今日のことじゃないんだろう。話の内訳話からいって、恐らく、まあ、いいさ、いずれにしたって御兩人、派手に活発で、しかもその道の達人とありやお目出度いじゃないか』

『でも、玉や、今日ばかりはふやけ過ぎて、肩をほぐして呉れ、脚を、手を揉んで呉れ、』

と仰言ることが月のうち何んべんも御座いました』

『ふやけ過ぎるって、持前の持病でも起きてのことかい? 滅法風呂好きのようにも聴こえるが……』

『そうなんです。玉や、いい加減な処で上げなさい、石鹼をたんとつけてな、あっちも、こちらも浄めなくっちゃいかんから、序でにいつもの冷酒を忘れてはなりませんぞ』などと仰言ればその通り、いつもお手伝いしなければならぬですの』

『何んだか少し許り判らないが長湯をする大旦那に君が召使いとして万善のサービスを申上げるといふ意味と違ふのかい? それにし

たって長湯をすりやお年寄りでなくとも大抵フラフラもして来るよ』

『ところが物がいえなくてひどく苦しまれるとどう拝見しても大旦那様って何んと云うお方だろうと思うことが随分御座いました』

『どうも話がよく判らんが、つまりさっき君がいった後妻かも知れない、そのお妾さんはそれ者上りの年増ばかり。ところが相手が年寄りだから……。それで長襦袢がどうのこうのといってるうちに本妻の奥さんが子宮癌で亡くなった、しかし大旦那様をよくよく観察すると少々おかしい、勿論、お相手の彼女も似たりよったり、いわゆる倒錯愛撫の道——というのがまず総論だろう、それから先の各論——つまりよも山ばなしを一つ一つ話して

御覽、まあ早い話が君の体験談と云う処をさ、共犯になるって？　そうでもないよ、君は忠実な女中として万事云われた通りにお手伝いしたんだろうからね』

目前の相手が二十二、三才そこそこの女中、今では家政婦だからと云ってこんな話は滅多に聴かれるものじゃない。まして世にも稀れであろう処の一風変わったお屋敷の旦那様に仕えたところでは休日がいいことにして根掘り葉掘り斯くは誘い水にあい口を打ち、油を注いだ訳である。

『それでは、まだほんのお屋敷へ上りたての頃から申上げて見ましようか。女の子の洋装は着たり、見たりするときまったように、お紅茶にビフテキを喰べなければならぬから耳にするのも嫌いだと言って、あたし達身の廻りのものを御世話申上げる女中三人は年から年中、ずっと着物を着る事になっていました。それもただ着て帯を結んでおればよいというんではなくて、その時その時がともおやかましくて、朝のお掃除の時は姉さん冠りに裾をはし折ること。するとお腰をしてますから、どうしても赤いお腰が出るでしよ。やれそれが汚くない、皺が寄ってるなど、一番困るのは、へいつくばって長いお廊下をふき掃除する時は気をつけていてもお尻だのふくら腰なんか見えて潮干狩以上の恰好になります。』

取り分け夜と申しても日が暮れて間もなくの夕飯時のお給仕はちよっとお化粧をして、アラ、そんな、別に綺麗どこでもないんですけど、いいえ、日本髪はお正月だけの、普段着に毛の生えたお着物、まあ銘仙物なんですが、帯をきちんとお太鼓に結んで白足袋をはき例の三人が小笠原流に、目八分、わたしはお酌専門に差上げます。顔の造作はどうあろうとみんな若い女ばかりでしょう、中ても笑ちゃんという女中さんは一番若いし肉付もいいのでよく旦那様のおそばに引き寄せられて肩から胸、ぽってりと盛上ったものあたりやお尻のあたりを撫でられて、フッフ、そんな事は致しませんわ、だって三味線なんぞ弾く人がいないんですもの。——で、どうかすると三人共立てッ、お前達の着付はなつとらんぞ、前を押さえて裾の方をよく見ろッ、長襦袢が合っていない、そう云う着方を行燈式だと云うんだ、もう一つべん着直して見ろッと言って御前の前でお腰一枚になった事が御座いました』

『まあ、旦那様ともなれば人前があるから何処でもそうなるだろう』
『それから、と、あれは丁度あたしが御奉公に上った年の暮近い時でしたからお正月の前でしたか、寒い日であいにくに、宵のうちから降り出した雪が思わぬ大雪となってお庭も一面銀世界になった朝の事でした。』

『お玉ッ、ちよいと手を借して呉れ』といきなりお部屋から出て来られましたので、てっきり何か粗相でもしたのかと思って急いでお伺いすると、あの——』

『そうだろう、判ってる』

『アラ、そうじゃないんですの、綸子絵羽地のお夜具のそばにそれこそ目も覚めるような緋縮緬の長襦袢姿で、そのお妾さんが丁度お髪を直していらしやる処でしたが、済まんがこいつと一丁相撲取って見て呉れんか、わしも行司で庭に出るんじや、本気で取っ組むんだぞ』と、だし抜けに仰言るんです、びっくりしちゃって、何んせ一尺近くも積った大雪でしよ、いくらお目覚めのお戯れでも思ったのですが』

『やったのかい？』

『やりました、思い切り勇ましく。だってあたしって本当は素質がオキヤンに出来てましょ、ですから旦那様がステッキで雪の上に描いた土俵の上でサアお出で遊ばせて』

『相撲なら勿論素っ裸だろうね』

『ええ、赤いお腰一枚で、それもほんの四五分位の事でしたけど女同志、四つに組んでも何も掴む処がないでしよ、腕と腕と抱き合った処を雪に足を取られて、二人共御前の前で仰向けにスッテンコロリと転がっちゃいました』

『御前様は大喜びだったろう、さぞかし』

『まあ、そんなお戯れは雪の中のチンコロ見たいで大した事はなかったんですけど』

『その外にまだあったのかい？』

油が効いて喋り続ける新参者お玉は正直なところ憎めない女である。現に、来て早々近所近べんにかまわず妻のピンクの腰巻の横に自分の真赤な腰巻を、しかも物干棹の天っぺん高く干したのが彼女なら、恥ずかしがる妻に妙な愛の秘伝をもった振って伝授したのも彼女であるからである、して見ると、度外れだと睨んだ大旦那に仕えての三年は少々時代遅れではあるうがこんな着物の教室でハイこれで、全課目が終わりましたで済ますことは万々あるまい。いやあるまいどころか……。

『大旦那はあれで何かのはずみでひどく怒られた事がありました。御立腹の原因は存じませんが、そうです。やっぱり雪の降る日でしたか、例の若奥様——私共はお妾さんだの二号さんでは悪いものですから仮りにそうお呼びしていました。その若奥様をお廊下とお座敷の間にある柱に赤いしごきで後手に縛りつけ、さあ、どうでしたか？ 多分お床入りの前でしたでしょう。でも前以てひどく折檻なすつたと見えて寒いのに長襦袢一枚のまま、柄ですか？ 根がその方の方でですから上物でしようが、わたしにはまさか夏場の緋の長襦袢じゃやないでしょうけど下に召しておられるお腰がほのかに透いて見えましたから、今で



も妙だなあと。きつとわざと冬場に薄着を命

ぜられたのじやないでしょうか？

いいえ、

お庭の方でなく、ですから後手にくくられた手首が障子の外に出ていました。お座敷には余程カンに触って投げつけたものかお盃が一つ二つ足元に転っていました、ただ、猿轡つていうんですか、それが――』

『どうしたの？』

『寒いし、単衣見たいな長襦袢でしようから多分、お腰は二枚位、召されたものと見えます。そのうちの一つで、お口を塞がれて、女のお腰を口に巻くなんて、どうかと思いますわ、いくら何んでも、フフフ』

『そこが何んとも云えんのだろう、で、お妾さんの方、いや若奥様か、別に泣いてもおらのだろう？』

『うつ向いて島田のはつれを咬んでいらっしやいました』

『そうだろう、召使の君達にそんな恰好を見られちゃ誰だって恥かしいからね、とんだお屋敷風景だね、僕なら立ち処に眼の保養になる、しかも一枚撮り度い処だ、それは兎も角、さつき君がふやけ過ぎて困ると云ったね、あれも、その二号さん、いや若奥様との話かい？』

『そのお話、とっても困るんですの、今まで誰方にもお話申上げていませんから、お戯れというんですか、お可愛がり過ぎとでも云うのかしら、一寸ここでは』

『いいじゃないか、君だってもうお屋敷とは

縁がないんだし、赤の他人がお噂申上げても曳っぱられる危険はないし、第一大いに参考になるじゃないか、話す当人の君だってさ、アハハッ』

『さあ、どうですか、その辺は判りませんけど、アラ、奥様も御一緒じゃ、困りますわ、まあ、奥様聴かぬ風になすって頂いて、それは実は――お風呂場のことなんですの、お屋敷の造りはそうで御座いますね、大正年代じやないでしょうか、総檜造りで建坪が、何んでもお部屋の数は大少数えて多う御座いました。たが洋間は一つも御座いませんでした。処がお風呂場――湯殿が一寸変っていました、洗い場が割合に広く、湯舟も四五人一緒に入っても楽な位、総タイル張りですから、ここばかりは洋風と申してもよろしいでしょう。ただ昔、瓦斯燈が何か吊るした柱が湯舟の前右隅に湯煙にくすんで一本、その向う際は壁に嵌め込んだ四尺四方もある大きな鏡がお屋敷代々の出来事を物語っているかのように、ホホ、まあ、そんな気がする、何んと云いますか普通の御家庭に見られないようなお風呂場で御座いました』

『まさか播随院長兵衛君でも飛び出すんじゃないやあるまいね、お手柔らかに願いますよ』

『そのお湯殿で実は――月に何回かはお酒を召上りお食事をされることになっておりまして、さあ、多分御酔興からでしょう、勿論若

奥様とお二人、お風呂場で水入らずではおかしいのですが差し向いにさしつさされつ』

『愉快極まるね、小原莊助さんが聴いたら喜んで来るぜ』

『それが、お座敷なら兎も角、生温くて湯気が濛々と立ち上っている湯舟の前でしよ、またその折の御二人の御姿が真夏の富士登山見たいな、いえ、大旦那様は白木綿のハンテン白ネルの湯巻、若奥様の方は大抵赤い長襦袢――夏ですとピンクの単衣麻の長襦袢に博多織亀甲花菱の伊達巻一本、下はきまっていますお腰巻一つを締め、ずっとおそばにいましたからよく覚えておりますの、ポカポカするし風変りな趣向で美人を前に冷酒を召上るなんて、どうだ、これが長寿の薬だよと御冗談タツプリ』

『一つ家でもやるかな、いい事を聴いた、で――それでお終い？』

『いえ、これからが、その大変な事に、何んと申したらよろしいか、奥様の前でこんな事を申上げるのもどうかと思いますが』

『いいのよ、こちら案外開けていらっしやるから、御心配御無用。まさか殴ったり、たたいたりするんじゃないでしょうねえ』

『それはそうなんですけど』

『待望の封切迫る！ 御期待を乞うなんて云う映画の予告篇だね、さしずめ』

『今でこそ、笑い事だったと済まされますけ

ど、とても凄惨でしたの、ホホホ……つまり半分やき餅があったのかも知れません。事の起りは大抵何んでもないことから始まるのです、それはかまわないんですけど、ああまでして苛めなけや気が治まらない処を見ますと、ねえ奥様、俗に申すヤキモチ焼きとでもいうのでしょか。私がお暇を頂戴したのは、これとかわりは御座いませんが丁度お暇を頂く一と月前の事でした。例のように湯殿の真ん中に畳二枚分のスの子を敷いて、坐り半卓を置き、只今の予告篇通りお冷酒の酒盛りが始ったのですが、お酒が廻るにつれて若奥様の裾が幾分はだけて湯気に混って紅が漂うよう、大旦那様の浄瑠璃に合せて、あい口を打っておられました。処がサワリ文句に二三三言語路が詰ったかどうか存じませんが急に、おいッ静！ 若奥様を大旦那様は斯う呼んでおられました。お前に若しも間夫があったとしたら、このわしはこれっぽっちも許すもんじやないぞ、いいな、何んじや？ ホホホ、一人二人の、この若さで、冥土の近い、あほらしい、お金が縁で長襦袢とは、何んということという。ワハハハッ、不届き千万な女奴、煮ても焼いても喰えぬとはお主の事を云うのやなあ、いざこうなった上からは、ちよいとお待ち、若し大旦那様、悪い事とは知りながら何んで可愛い間夫が棄てられましょか、疋田絞りの鹿の子の絞り、赤に染めてのこの

長襦袢、きつと詮議なされて下さりませ、お気の済むまで気の晴れるまで』
『なかなかうまいじやないか、まあそういう意味のことを云ったんだらう、お互に湯気に当ってのぼせていたのだらうから』
『でも本当は若奥様を——若奥様の方もそうされ度かったのでございましょう、でないと麻縄なんかお湯殿に用がありません。いえ、お身体のお洗濯を、大旦那様の方がなさるんです。ただゴシゴシ洗っちゃ川の中の馬みたいでしょから、さりとてそのままドボン／＼では気の抜けた播州皿屋敷のお菊になり兼ねると思召されたものか、玉や、遠慮せんでやうて見いッ、顔は菩薩でも身体は垢だらけじや、どうにも臭うて堪らぬ、緋文字の中はどろにもなるまい。それッ／＼捻じ伏せ、捻じ廻わせ、捻じ上げろ、遠慮は無用じや、そうだッ、ぐつと押さえて、手首を合せる。ギユウツと締めて、そいつを胸に廻わす、笑公、何をボヤボヤしとるんじや、島田の髷を前にひっぱって、そうだ、その麻紐を通して見る、首から尻に、鏡に写って、そらええ恰好にならんかい？ それは余んまりお哀いそう、何を抜かす、このへなちよこ召使い共、てな風に、それこそ大旦那様は初めのうちは白ネルの湯巻の上から御自分のひざ小僧を叩いて気合いを掛けていらっしやいました、お勝手通いのおキヌちゃん——三人目の女中さんで

す——が戻って来るまでは、どうにも本気でお手伝いが出来ませんでした。このおキヌちゃんと言ふ女中さんは目鼻立ちのキリリとした、どちらかと云えば判つきり物事をさばいて行く、しっかり者でしたから、じや皆さん、若奥様をその縄、この縄でもう一つぺんやり直し、そこをくくって頂戴、駄目駄目、もつと腕に力を入れて、そうよ、若奥様、御免遊ばせ、後手におくりした細引を斯うお胸の方に廻わさせて頂きます。大旦那様、そううつ向き遊ばすと女中共の裾の物がお頭に当たります、玉ちゃん、その縄をお乳が飛び出す位にきつく、もつと、もつと伊達巻の下は二巻締めてよじる、縄尻は？ いいわ、それ位で、笑ちゃん、それ大旦那様にお渡しして、どうもお粗末様でした。どうぞ御ゆるりとおたのしみ遊ばせ、お目障りな召使女共はこれにて引下ります』
『成る程、相当なもんだね、こんな女中さんが居るとは感心したよ、それにこんな女中さんはお給金を倍にしても引っ張りだこだね、きつと——それでお終い？』
『いいえ、お若い旦那でしたら私共が居っても居らなくても麻縄で長襦袢の上から後手に縛り上げたプリプリした女の身体をお風呂へ入れることも出来ましょうがお歳を召した大旦那でしよ、さあさあ、引下るでないぞッ、みんなて手を借して湯舟に入れてやって呉れ、

脇の下を持って、一人は足だ、いいな、と若奥様をよつてたかつて湯舟の中へ」
 『着たままでお入れするの？』
 長襦袢にお腰で、お腰は、まあいいでしょうが上物の長襦袢着たままじや傷まないかしら、ねえ、随分奇抜なお話』
 『それが大旦那の御趣味なんので御座いますよう、その証拠に夏の虫干しの折はお部屋一杯に色取り取りの長襦袢が、それも方々しみだらけの、ホホホ……、その続きはこうなんで御座います。三度に一度はそのあとをわたしに手伝えと仰言いますので、ずっとお湯殿で女三助みたいに控えていますんです、若奥様を湯舟の中へお入れするとその縄尻を取つて大旦那様も続いてお入りになります。何んせ大型の湯槽のことですよ、若奥様の伊達巻から下がパアッとお湯の上に浮き上つてゆらゆらと揺れる裾と真赤なお腰の間から大旦那様のお頭の薄い薬罐頭が、のぞいて御満悦の態たらく、見ていて噴き



出した位でした。こうして存分お湯の中で温った処で若奥様を曳っ張るようにして洗い

場の上へ、その時は本当に責め折檻が度を過ぎて痛ましい位に麻縄がしまつて胸から腕、捻じ上げるように縛った後手

首のあたりはこんもりと肉が盛り上つて、ポタポタ垂れるお湯のしずくは兎も角、ぴつたりと身体にまといついた長襦袢の襷がお腹のあたりにくつきりといつてまるで蒸かし立ての肉饅頭みたいで御座いました。これからお待ち兼ねのお洗濯が始まるんです』

『お洗濯つて、ああ、さっき君が云つたあの川の中の馬と云う奴だね、まさか長襦袢ぐるみお妾さんを洗う訳には行かんだらう、いくら何んでも、さ』

『さあ、どうでしょうか、詳しいことはよく存じませんがホホホ、わたくしはその折はすぐ引き下つてお湯上りのお召し物を整えたり、お床をお展べしていなければなりませんから、その前に香水入り石鹸はたっぷりおつけして置きます、少々眼のお悪い大旦那様は恐らく若奥様を手探りし

てそれこそ指の一本一本、お洗になるんじやないでしょうか。いつか若奥様がこんな事を仰言った事が御座います。『あたしを縛ってお苛めになるのは奥さん（正妻）の身替りと思つて我慢するんですが一番恥かしいのはお風呂場にホラ、古くて節が出た柱があるでしよ、あれに擦みたいにくくられた時なの、丁寧に洗つて頂くのはいいんですけど、鏡に写ったわたしはどうにも身体の逃げ場がないでしよ、辛いやら恥かしいやら、でもこんな事がきつとお薬になるんでしよねえ、とってもこのあとが元気で、フフフ……あんだ達にもいつもその跡始末をお願いして済まな一と思つています。』——だつてそこは女中なんですもの、下着類はわたし達がお洗することになつていましたから一切合切御用済次第、お部屋から例のお風呂場のお戯れの直後は定まった様に私が専ら若奥様の物、大旦那様の物を一緒に洗いして事が済んだ訳でした』

『道理で君は洗濯が早いし、また、朝っぱらから勇敢に干すね、これなんか笑つていたぜ、だけど長襦袢の丸洗いと云うことはあんまり聴いたことはないがその都度洗い張りに出しちや大変だろう』

『いいえ、どっち道、あの——お寝間専用のお夜着なんでしょうから、それに大旦那様がお好きとあつては、また幾枚もお持ちなつて

おられますから平気なんでしょう、ですからお下りはちよいちよい頂きました。これもそうなんですの、裾の方よりお袖がもうすり切れたようになっていきますわ、ホホホ随分縄目が掛かったんで御座いましょう。麻縄ですか？　もう御遊戯の必需品ですからよくすすいでお風呂場の柱に掛けて置きますが近頃——と申しても私が暇を頂く頃には若奥様もすっかり観念されて努めて大旦那様に迎合するような、アラ奥様、お笑いになつちや困りますわ、その——長襦袢もそうなんですが、わざとその都度科しなを作られて、旦那様、昔あぶな絵つて云う浮世絵が御座いましたでしよあんな風な、いえ別に較べた訳では御座いませんし、そんな画もよく存じませんが——色っぽい恰好をなさいましたから、たださ湯気の立ちこめるお湯殿に女四人もいるのですから、それこそ女いきれでムンムンする上に濡れても干いていても赤赤の長襦袢とお腰巻が、後手姿の肉饅頭が、大型の鏡一杯に写し出されてはお歳以上の元氣も出る事でしよ。旦那様ですか？　今でも至極達者で、いえ、亡くなられた奥様の御命日を除いては大っぱらでしよからさぞかし、どころか普段は本当に御立派な旦那様であるだけに私がお屋敷からお暇を頂いて帰った後はお寝みの前や例のお湯殿のお遊戯のほか何んでも笑ちやんの話によりますと、お庭のど真ん中に妙

な柱が建つたり、先の奥様が臥つていらしたお部屋の壁が急に緋色に塗り替えられたり、一番身近かにお世話申上げた私が居ないせいでも存じませんが最近は一切女中さん達の手を借りないで五十近いやりて婆さん風の女と今一人の若い娘さんとも出戻りともつかぬ女二人を新規に雇入れて相変らず若奥様をお苛めしていらつしやるとのことでした』

『いや、どうも御苦労さま、それでお屋敷の模様だの大旦那と称するお年寄の愉快な行事は細かく拝聴したんだが——ただ、さっきの雪の相撲は別として何んでも長襦袢でなければいかんと云うのは何か訳がありそうだね』

『それは長襦袢を召した女が一番綺麗だという処からではないかしら？』

『いいえ、奥様、これは大旦那様直々のお話なんですけど、昔お若い頃お二人で、当時ですから馬返しまでは電車、それから徒歩で中禅寺湖に行かれた折、何んとかいう宿屋の前で奥様の下駄が滑つて舟つき場の上から丹前姿のまま湖水にドボン、急な知らせで一時は上を下への大騒ぎ、宿屋からは若い者がかけつける、一たん沈んだ奥様の身体が湖面に現われた時は宿の丹前が捲くれて何処かに流れ真赤な長襦袢一枚の濡れ鼠で引上げられたんだそうですね。その折の印象が余程あととまで残こられたのではないでしよか。今の若奥様を長襦袢のまま雨のどしや降りの

田にお庭を歩かせたりするのはどうもそのせ
いじやないかと思われます。そのうちにお歳
を召される、お子様の無いのは別な事柄から
としても、何かあの——フフフ、失われた青
春でも取戻そうとされて御自身永生の薬とは
仰言いますが予先が今の若奥様に行くんじや
ないのでしょうか。勿論若奥様はどんな場合
でも長襦袢は承知されておられますし、大旦
那様の回春薬が後手縛りや川の馬みたいにな
ることも万々——いいえ、近頃は寧ろ進んで
そうされたいお気持ちにもなられたのでしょ
う。まあ一寸真似の出来ない一風変わった大旦
那樣御夫婦にお仕えた訳でした』

『どうだい？ 一丁湯殿でも増築するか』

『アラ、御冗談を、なら序でに物干場もなさ
らないと、——物の順序で、ホホホ………ね
え？ 奥様——』

題して色恋を超越し、濡れにぞ濡れし
女の長襦袢の哀笑篇、以てなり上り課
長宅内いかが進展しようとその飛ぼっ
ちりの続篇は——いづれ稿を更め他日
お目にかけることに致しましょう。

(この項終り)

◆新版マゾフオト分譲◆

久方ぶりに待望の春日ルミ嬢出演、男性
モデルは愛読者某氏、復刊以来、初めて撮
影した本格的なマゾフオト。本来、某氏の
求めにより個人的に作成したのですが、
特に御希望の方にのみ焼増いたします。尚
従来分譲中のマゾフオトは全部、分譲打切
りになっております。

第一組 凌辱篇

(略号ま1)

大中判印画紙焼付、五枚一組 七百元

第二組 屈伏篇

(略号ま2)

大中判印画紙焼付 五枚一組 七百元

第一組、第二組共、いずれも特に春日ル
ミ嬢を煩して最近作成した新しい作品で、
第一組(凌辱篇)では足を舐めさせられた
り、足で踏みつけられたり、足を洗わせら
れたり、大の男が精神的に凌辱させられて
いるポーズ、或は後手猿轡に苛められてい
るもの等を選びました。第二組(屈伏篇)
では、尻の下敷になって屈伏している奴隷
の姿、股の間に挟まれて呻吟したり、首の
上に尻を乗せられているもの等に狙いをつ
けて選んでみました。

譜図案構成腹切女体

中康弘通氏案、北原純子女史画
キヤビネ版印画紙密着焼付

八枚一組千円(送共)

甲 時代物

(一) 女武者の最期

戦陣の間、戦敗れた乙女が落城の炎
を眺めながら鎧通して腹一文字に……

(二) 腰元の自害

白装束の腰元、九寸五分にて……

(三) 遊女の自決

妖艶なる遊女、懐剣の切先を臍下に
したたかに突き立て、真一文字に……

(四) 武家の娘

武家の姉妹、一人は臍下を深く切り

溢れ出た腸を左手にて握み、一人は……

乙 現代物

(a) 女剣戟の腹切

男装小姓風の女優、上半身肌ぬぎと
なり、立ったまま大刀を下腹に……

(b) 女剣士の切腹

刺子の稽古着姿の女性、道場の板の
間にて短刀を下腹に突き立て……

(c) オフィス・ガール

アパートの一室、パンティを膝頭ま
で下げた乙女、短刀にて左下腹から……

(d) 農家の娘

十七八の可憐な娘、モンペの紐を解
き、鎌の柄を右手に今まさに……



人身御供の美女

映画「キング・コング」より

本田 由 郎

夜霧が薄暗い港町を厚く押し包んでいる。

港を見回って歩く老見張人の手に下げたカンテラの燈が、鈍い光りを投げていた。そのカンテラの燈に浮び上った小汽船の船体の横には、白い文字でヴェンチャー号と記されていた。その小汽船は、猛獣映画の製作者、デナムが、彼の計画する新作品の現地撮影の為に借りたものだった。彼の製作する映画は、今迄は女優が出演したことがなかったが、しかし今度の映画は美人を出演させる方が客に受けると考えたデナムは、出帆間際に偶然に町で見つけた、美しい失業中の娘アンを船に乗せた。

ヴェンチャー号は朝霧をついて出帆した。デナムは出帆するまで行先を秘密にしていたが、船がある緯度に達してから、目的地は彼

が嘗て知り合ったノルウェイ人の船長から聞いた地図にもない孤島であると、船長と一等機関士のドリスコルに告げた。その島には、海岸に古代人が築いた高い城壁が聳え、その奥には、有史以前、そのままの世界があるというのである。

アンは船中の人気者となり、ドリスコルは次第に彼女と親しくなった。だが、行けども行けども問題の島は見えず、一同が島の存在を疑い出した頃のある日、突然濃霧の中から問題の島が忽然と現われた。勇躍したデナムは早速撮影を始めることとし、一同を連れて上陸した。

島では、土人達が巨大な城壁の中央にある扉の前に集り、奇妙な儀式を行っていた。手に手に槍、刀、弓等を持ち、「コング、コン

グ」と叫びながら踊り狂っている。その中心の一段と高い所には土人の女が坐っている。デナムは直ちにその光景を撮影しようとしたが、彼等に気づいた土人達は恐ろしい表情で近寄って来た。土人語の話せる船長は酋長に話しかけて島の事情を訊ねた結果、土人達はコングと呼ぶ島の王者に、人身御供として娘を捧げようとしていたと判った。その時、土人達の群れがざわめき出した。金髪の美女、アンを一同の中に発見したのだ。酋長は彼女をコングに捧げるために、六人の土人女と交換したいと申し出たが、一同は勿論その申出を断り、船に戻ってきた。その夜、土人達が丸木で作ったカーヌで近付いた。それとは知らぬアンは、船室のむし暑さに堪えかねドレス一枚で甲板に上った。月光はアンの全身に

降りそそぎ、その美しさは伝説中の美女の様にさえ思われた。その時、土人達が音もなく近付いていた。アンは、月光に映える南海の美しさに、つい、うっとりとして見とれていた。突然、黒い手がアンの口を塞いだ。それは風の様に素早く「アッ」と声を出すひまも与えなかった。そして手足を縛られたアンは頑強な土人の背にかつぎ上げられさらわれてしまった。アンのヘヤーピンが甲板に落ちていたことから、土人達にさらわれたのを知った一同は慌てて彼女の奪還に出かけた。

かがり火は夜空に赤々と燃え上り、アンは一段高くなった中央の祭壇に縛られ、周囲を土人達が「コング、コング」叫びながら踊り狂っている。踊りの輪がだんだん狭くなりアンの目の前で刀や槍先が踊った。アンは悲鳴を上げて逃げ様としてもがいた。しかし、強く縛られているので身動きも出来ない。そして喚声が一段と高くなり、踊りが最高頂に達した時、酋長が立ち上った。すると踊りがびたりと止んだ。酋長は声高にアンをコングに捧げる様に命令した。城壁の中央にある大きな門が開けられて、中にある大理石で作られた柱の前に連れて行かれたアンは、必死になつて逃げようと、髪を振り乱し、足をけつてもがくが、所詮、無駄な努力だった。酋長の祈りの言葉も終り、いよいよ柱に縛るため引立てしようしたが、アンは両膝を地面につけて

死んでも動くまいとしている。土人達は、そんなことはおかまいなしに、アンの手を取つて「ぐん」と引っぱった。そしてアンの身体は、両膝を地面につけたまま、ずるずると引っぱられた。アンの両膝は皮膚は破れ血がにじみ出し、痛々しい姿だった。土人の一人は柱から垂れ下っている細縄にアンの片手を固く縛り、他の土人が柱のロクロを回し始めた「ギーギー」ときしみながら細縄は縮んでいった。そしてアンの片手は上に引っぱられ、足は地面に爪先で立っている。そして次に、他の片手が細縄で縛られ上に引っぱられて、Yの字型に両手が上から吊上げられた。更にロクロが回されると、両手が水平になり体が地上から離れて空中に浮び上った。アンは宙に浮いた両足をばたつかせて泣き叫び、スカートの裾はまくれ太股まで露出する。土人達は門を閉じて逃げ去ってしまった。やがて島の奥から「ウォッ」と恐しい唸り声を立て大木を押し倒して現われたのは、コングと呼ばれる巨大な類人猿だった。アンは恐怖に戦き縄が切れんばかりに暴れるが、動けば動くほど縄が手首に喰い込んでいった。コングは、泣き叫ぶアンをよそに、不器用な手附でロクロを回して、アンの身体を下して大切そうに手に持って奥地に姿を消した。

この映画は戦前に封切られた作品で、今で

は封切後二十年近くも経った作品の様です。キング・コングの登場する場面は、トリックだということが直ぐわかる様な映画ですが、金髪の美女とコングという巨大な空想上の動物との組合せが如何にも面白く、又、その美女が土人達のため、コングに人身御供に捧げられ、二本の柱に縛られるあたりの場面や、コングの醜惡な顔が画面一杯に大寫しになり金髪の美女、アンが逃げ様として腕くあたりは、強い迫力がにじみ出ています。又、コングの巨大な手の中に握られ、見える部分は首、両手、両足だけで、胴は完全にコングの手の平の中に隠れて、自由な手足をばたつかせるアンを高い木の上に置くと、食物を探しに出かける。この隙にティラントザウルス（恐龍の一種）に襲われます。コングはアンを助けるべく、恐龍と大格闘を演じます。高い木の上のアンの、目を閉じ耳をふさいだ恐怖に戦く顔。数刻後、コングの勝利に終わったが、格闘の最中、アンのいた木が押し倒され、その木の下の敷となったアンは、這い出ようとあせってスカートの裾が破れ、服ははだけて下着が露出してしまふ。また、恐龍に宙に吊し上げられ、真逆さまに水中に落される場面等はこの映画の中で一番迫力がありました。

（おわり）

魔女裁判に関するノート (続)

甲 斐 仁 参

◇ 朝日の差しこむ居間に、司教で裁判官の老人が目をしよぼつかせて入って来た。私は昨日迄の調査の結果、占術師アルヘンティヌが札つきの魔女であった事、その自白にもとずき、十人の女を逮捕し、二人を除き全部悪魔と関係した事を認めた事、以後毎日逮捕審問を続け、火刑場が完成次第、逐次処刑する予定である事等説明し、裁判は一応火刑場が出来上ってから行うことを了承させ、否認する二人の申し責に立会うことを同意させ、第一の審問室に案内した。そこには、すでに私の部下が二人の容疑者を連れてきていた。暁近くまで針師に虐まれて憔悴した顔が並んで居た。

「どうだ、強情を張ると今度は苦しい思いをしなければならんぞ。」

二人は齒を鳴らして怯えていたが、それでも無言だった。私は部下の一人にソフィを連れて来る事を命じてから司教に責具の説明をした。床に固定した枷に手か足を挟むようになっているのは普通であるが、留金の内側に厚い革を張り、金属が直かに皮膚に触れて傷つけるのを防いである点、また天井の滑車を通して下った鉄環にも同様の仕掛がある点、又それを巻きとる装置は齒車の組合せで特に強力である点等を示していると、ソフィが今にも泣き出しそうな情ない顔つきで引かれてきた。私はソフィの二の腕を掴み、昨日無惨な恰好でさんざ身もだえたあの椅子に腰かけさせ胴だけベルトで留めた。

「この女は魔の山の饗宴について、まだ自白しない点があるのです。」

私が司教に説明すると、彼女は私達を交互

に見ながら何事か訴えるように叫んだが噛まされたくつわのため言葉にはならなかった。

「素直に訊問に答えぬ奴はこういう目に合うのだ、よく見て置け。」

ソフィにいつてから、更めて二人の女の方に向き直り、

「さあ、どっちからでもよい、始める。」

と女の手錠を握っている部下に命じた。一人が乱暴に太った方の女を前へ引き出した。

「両足を固定して、両手を吊り上げて見ろ。」

滑車が回り、鎖が音を立てて巻き取られると、腹の底から絞り出されるような悲鳴が連続する。ソフィはハッとしたように両手で耳を押えて顔を伏せた。私は鞭を手に彼女に近づき、柔らかな髪を掴んで顔を引き起した。

固く閉じた目から涙が幾筋も流れている。

「見るんだ！」

ふくらんだ乳房の上に一鞭当てると、彼女はびくりと飛び上って目を開く。両手両足を棒のように突張らせ、すさまじい形相で苦悶する女を見て、又あわてて目を閉じる。パタリと悲鳴が止んだので目を上げると先刻の女は顔をぐったり前に垂らして気絶している。

「次の女に掛け。」

私の声に、蒼白の顔を引きつらせ、口を開いて慄えながら、この拷問を見ていたもう一人の女は、

「し、しないで、私は魔女の膏藥を買いました。」

と叫んで床に倒れるようにうずくまった。

先刻の女は、水を掛けられて目を開いた。

「もう一度、伸ばせ。」

再び滑車が回り、両手が引き上げられると

「あっ、いいます、いいます、買いました。」

とかすれたような声をふり絞った。先刻から興味なさそうにこの拷問を眺めていた老司祭は、審問の方法は一任するからといい残して帰ってしまった。私は部下に二人の女の口から新しい魔女の名前を吐き出させるように命じて、第二の審問室に引取らせ、ソフィを椅子から立たせて、滑車の下に引きずって行った。

「さあ、着物を脱げ。」

鞭に空振りをくれて、ソフィに命ずると、恨めしそうな目を上げてから、それでも渋々

裸になった。両手を差し上げさせ手首にそれぞれ留金をつけ、片足だけ床の金具に固定してから、くつわを外してやった。赤い舌がチロチロと唇を舐めた。

「さあ、もう一度、くわしくサバットの話をして見る。まだ匿していることがある筈だ。」私は画家がデッサンを取り始めたのを横目で見ながら訊ねた。

「はい、致します。だけど匿していることは何もありません。」

歯車についた把手が回り、両手がびんと伸び切るまで鎖が巻き取られた。

「さあいつて見る、膏藥を何処に塗った？」

「身体中です。」

「主に何処に塗るのだ。頭の中か？」

「腋の下と、乳房と、……」

部下に目くばせすると、ギリギリと滑車が回る。

「あっ、あっ、……です。」

くすりと画家が笑う。私は顎を引いて、歯車を元へ戻させた。

「そ、そして、ベッドに横になります。……すると、箒に乗って飛んで行くのです。」

「箒に乗るといふのは、腰かけることか？」

「……そうです。」

再び鎖が鳴って、彼女が喘ぐ。

「ち、違います。股に挟んで行くのです。」涙が光り、鼻の頭に汗が浮ぶ。

「暗い山の上を飛んで行くうちに、赤い焚火が見えて来るんです。そこには大勢の人達が集まっています。すると一人の悪魔が立ち上って私の方へ手を差し伸べます。」

「それはどんな様子をしている？」

「はい、痩せて背が高く、先にふさふさと毛の生えた長い尻尾を持った男です。」

この女の亭主が、大分年取って太った男だという話を思い浮べて、訊ねた。

「その顔は何処かで見た事があるだろうか？」

「……いいえ、ありません。」

ぐいぐいと両腕が上に引き上げられ、自由な片足がびくびくとちぢみ上る。薄い腋毛の下から汗が一筋光って腰までつと流れる。

「あっ、あっ、お、思い出しました。」

鎖が弛められ、女はぐすぐすと鼻を鳴らす。

「昔の私の恋人です。もうずっと前に死にました。……」

「それが、どんなことをする？」

「……」

頬を染めて口ごもる女は鎖の音と共にまた悲鳴を上げる。

「キッスをします。とても大きな長い舌で、私は息がつまりそうになります。……」

歯車が動く度に、悲しく身悶えながら、彼女は次々と、悪魔と情交する忌わしい情景を喋り出した。それを聴いているうちに私はも

つともつとこの女を責め虐み度い、嫉妬にも似た激情にかられて来た。部下に命じ、Cのくつわと檻を運ばせ、鞭の柄で彼女の口をこじ開け、針の植った大きな玉に革をかぶせたくつわを突込んで、裸のまま檻に押し込んだ。

「おまえは未だうそをいっている。夜まで良く考えて置け。」

私がそういうながら、檻の内の突出した尻や、乳房を鞭で突きまわすと、彼女は、ああ、と妙な声を立てながら、ビクビクと白い身体を動かした。

◇

午後また新しい拷問具が出来上って届けられた。これは獣の牙のような突起が一面に植った鉄板を使用した一連の責具で、椅子の背と尻当ての部分がこれで出来ているもの。この板を円めて足を四本つけ、その上に跨らせるもの、寝台になって居り、その上に寝かせ更に上からも、同様の板を載せ、身体を挟んで締めつけるもの、また滑車の下に置き、その上に立たせるマットのようなものである。その他身体の各部分に合わせて種々の大きさと型をしたものも揃っている。更に皮膚を破り度くない場合附加する革の覆も附属している。これ等を第二の審問室に取りつけさせている内に、部下の者が二十才の女を三十人程連行して来た。入れ代りに午前中取調べた

二人の女は帰宅させた。

さて三十名の女を一応検分がてら取調べた結果、もう昨日帰した女達の口から拷問の恐ろしさを聴いて居るのか十一人はすぐに処女の膏藥を使った事を認めた。小さな檻の中で呻吟するソフィのあられもない恰好を見せた事も大いに役立った模様である。所で私の好みの女はマルガレットと云う者一人だけしか見当らなかった。彼女も否認をするので、椅子に昨日のソフィのようにベルトで留め否認をする残りの者を片端から押し責にして見た。「両足を床に、片手を上に。」

第一番目の女は自由になる片手で脇腹を押えたり、肩を抱いたり、乳房を押えたりして苦しんだが、たちまち白状してしまった。第二番目の女は、両手を床に、片足を上に伸ばして見た。ペティコートがめくられて頭にかぶさり、臍まで下半身露出し、片足をピンピンと跳ね上げる恰好は丁度逆立ちの練習でもして居るようだった。色々と変化を附けて、第三、第四と伸ばした結果、やはり先刻ソフィを伸ばした方法が良いと思い、マルグリットをこの恰好で伸ばした。鎖が巻き取られると彼女は長いペティコートをはね上げ、自由になる片足を宙に踊らせて、素晴らしいダンスを踊り出した。案外すんなりした見事な脚線の持主だった。これもすぐ自白した。しかし膏藥の使い方や、サバットの模様を聴いて見

ると、マルグリットを含む三人はどうも本当は使った様子が無い。これは多分アルヘンテイーヌがいい加減な名前を苦しまぎれに云ったのだろうと思つたが、取りあえずBのくつわでBの牢獄に連れて行き、マルグリットは両手を吊って、二人は檻に入れさせた。二十七人の女は例の如き取調べの結果、更に百名以上の新しい名前が名簿に載せられた。先刻の拷問の為めびっこを引くものもあったが、帰宅を許すと云うと皆いそいそと帰って行った。

私がソフィを詰め込んだ檻を開けて居ると針師が先刻牢へ入れた女のうち一人を実験に使いたいと云う。名前を聴くとマルガレットでは無いので許可した。私と彼女と女についての好みが違うのが幸いだと思つた。モゾモゾと尻の方から這い出したソフィは立ち上ろうともせず、下腹を押えてうずくまって居る。もう八時間近く衆人環視の中に居るので小用を我慢して苦しんで居るのだが、わざと意地悪く腕を擱んで引き起し、ぐいぐいと研究室へ引張って行った。彼女は半開きの口からよだれを流し、腰をかがめて足を引摺るようによたよたしながら相変らず、ああ、あうと何事か哀願を続けた。しかし室に入って、奇妙な型の台を見ると、それが何をするものか悟つたのか、足を突張らせ、甲高い悲鳴を上げた。固くなって嫌がる彼女を昨夜のマルヘン

ティーマのように四肢を張って、台に固定してから、くつわを外すと、それでもホツとしたように口を結んで濡れた唇をひくひくさせる。

「さあ、悪魔に長い舌でどう云う風にキッスされた。」

「……………」

「こう云う風にか。」

私は彼女の頬を片手で挟んで無理に口を開かせると指を二本喉へ突込んだ。ぬめぬめと温い舌が指にまつわって、ゲッゲツと喉が鳴る。涙がポロボロと溢れて激しく首を振る。指を抜くとひどく噎せて咳込んだ。

「それからどうする。」

「わ、私の胸、胸をはだけて、尻尾の先で……………」

「こんな気持か。」

今度は驚ペンの羽根が脇腹の膚を撫で廻る。

「あっ、あっ、ゆ、許して……………」

「此处も、こう云う風にされたらう……………」

「……………」

「うっ、うっ、うっ」

「此处もか……………」

「た、たっ助けて……………」

真赤に染まり、ぶるぶる慄えていた身体もこらえきれず、とう／＼……………」



飛び散った。それから約二時間程、台をきしませ、悲鳴を上げて身悶える彼女を責め続けた後で、くつわをAにしてAの牢へ戻した。其処にはアルヘンティーマが今度は自分の番かと云うように寝台の隅に腰かけて上目使い

に見て居る。

「アルヘンティーマ、出て来い。」

声を掛けると案外素直に立ち上った。手錠を掛けて、私の寝室に連れて行くように命じた。女としてはソフィよりこの方が上物であ

る。次にBの牢獄に行き、マルグリットを研究室に引いて来るように云いつけた。此処の悪臭は当然の事ながら、非常に強くなって居る。これ以上ひどくなる様子なら何か方法を構じなければならぬ。

研究室に戻りソフイから採取した涙、汗、唾液その他の体液をアルヘンティーンのそれと比較しながら、この質が量によって魔女を判別する方法について考えを廻らして居ると前手錠のマルグリットが妙な歩き方をしながら室へ導かれて来た。着物の下半分が濡れて居る。もう粗相をして居る様子だ。

「どうしてこんなに濡らしたんだ？」

くつわを外しながら訊ねても真赤になって俯向いたまま何も云わない。丁度地下室に魔女の水槽が出来上ったので、其処で身体を洗う事にし、薄暗い廊下に引き出した。何か股の間に挟んで居るような妙な歩き方をする。

昼間の押し責で足が痛む為だけでは無い様子どうやら異臭が匂うようだ。地下室には二米四方の深い水槽に、水が黒々とたたえられて居る。手錠を外して、着物を脱ぐよう命じたが、彼女は激しく頭を振って、手で顔を覆うので、部下に命じて剥ぎ取らせた。細いウエイスト、豊かな腰、仲々見事な身体をして居る。少々毛深いのが難である。果して悪臭の原因が脚にこびりついて居る。四肢を一つに縛って水槽の中に抛り込んだ。烈しいしびき

が立って彼女の身体が水の底に沈む、すかさずロープを手繰って、ポッカリ浮び上った手足を持って引きずり出した。長い髪が海藻のように濡れて顔にへばり着き、目をぱちくりしながら咳込んで居る。部下が大きな海綿の玉を持って来て迷惑そうな顔をして、ゴシゴシと彼女の身体をこする。乱暴に摩擦されて小さな声を立てるのが一寸可愛らしかった。私は蹲み込んで、四肢を縛ったロープを解いた。鳥肌立った皮膚が妙に目に附いた。裸のまま長い廊下を先に歩かせ、しずくをたらしながら慄えて動く背中や尻を見て居るうちに、私は考えを変えて第二の審問室に連れ込み、棘の植った寝台の上に薄い革をかぶせてその上に腰かけさせた。相当高いので足が床から離れて居る。足指がすぐひく／＼と動き出した。やがて腰を浮かそうと両手を脇に持って行こうとする。

「手を上に挙げる。」

彼女はビクリとしそれでも両腕を上げた。褐色の長い腋毛が皮膚にまつわって上げた拍子に又水滴が幾筋か流れ落ちた。棘が革を通して尻に喰込んだのか、始めはゆっくりと、しかしすぐにくねくねと胸から腹を蛇のようにくねらし始めた。ハッハッと喘ぐ口から、小さな舌が見られた。

「魔女の膏藥を塗ってどうした。」

「ハイ、寝ました。」

「それから？」

「しばらくしてから箒にまたがりました。」

「？」

「すると、箒が飛び出しました。」

「一寸、待て、起き上って箒に乗ったのか？」

「……ハイ、そうです。」

「お前は嘘をついて居る。本当の事を云え。」

「……いい、痛い、一寸降して下さい。」

「本当の事を云わなければ、降してやらん。」

「あつ、／＼、云います……」

「よし、降りろ」

彼女は急いで両手を突いて床に飛び降り、あわてて自分の尻を押えて居る。

「さあ、本当の事を云え。」

「本当は、本当は膏藥等買った事はありません。」

「間違い無いか？」

「はい。」

私は部下にアルヘンティーンを引いて来るように命じた。すぐ室に入って来たアルヘンティーンはマルグリットを見て一瞬たじろいだ。

「アルヘンティーン、お前は本当にこの女に膏藥を売ったか？」

彼女は齒の無い口で二度程確かに売ったと云う。

「マルグリット、買ったのか？」

「いいえ、とんでもない、買った事などあり

ません……………」

「アルヘンテイーヌ、着物を脱げ」

彼女は慌てたように、本当に売った、この女が嘘を云って居るのだと云い張る。

「黙って脱げ！」

彼女は渋々と着物を脱ぎ捨てた。

「ここへ並べ」

二人の女を棘の寝台の前に立たせた。背丈はアルヘンテイーヌの方が一寸高いが、いずれ劣らぬ素晴らしい身体であった。

「二人とも、そこへ腰かけろ。」

二人は並んで腰かける。先刻のように手を掲げさせてから、

「先に其処から下りた方が嘘を附いたものと認める。」

と云い渡して椅子に腰を下して二人の有様を眺めた。時間が経つにつれ、足をこすり合せ、上に掲げた手をわなわなと慄わせ息づかいを荒くし、互にチラ／＼と横目で相手の様子を窺い出した。私は立ち上り、苦しむ女達に背を向け、小さな窓から外を眺める振をしながらガラスに映る二人の姿を見守って居た。アルヘンテイーヌは私の後姿に目を走らすと、手をさっと下し隣りのマルグリットを前へ突き落した。

「あっ、そ、そんな……………」

床に立った彼女は慌てて叫ぶ。私は隙かさず振り返った。アルヘンテイーヌは、そ知ら

ぬ顔で、手を掲げてさも苦しうに身を揉んで居る。

「お前が先だったな。」

「ち、違います、この女が、つ、突き落したんです……………」

マルグリットは、急いで又這い上ろうとする。

「お前が先だ、こっちへ行い。」

泣き声になって必死に弁解する彼女の手を引いて私は隣の第一の審問室に入れ、×字架に手足を張って留め、口にAのくつわを噛ませてから急いで戻って来るとアルヘンテイーヌは未だ寝台に腰かけて尻をゆすって居る。

「下りてここへ来て見る。」

彼女を窓ガラスのそばに立たせて、

「お前のした事は、ちゃんと見て知って居るぞ。」

彼女はさっと顔色を変え、たしかに売った事に間違いは無い、しかしマルグリット自身が使ったかどうかは解らないと云う。更に問い詰めると、マルグリットの妹は姉に勝る美貌の持主で求婚者も多いのに、どうした事か結婚しない。だから妹が使うのかも知れないと云うのだ。あり得べき事だが兎に角、私の目をごまかそうとした罰として、マットの上に載せる事にした。二米四方の鉄板に棘ががつしり植えてあるマットの上に立たせ、天井の滑車から下った手錠に両手を掲げさせて手

首を嵌め、適当な高さで固定した。彼女は手錠の先の鎖をしつかり掴んで膝を曲げ足を浮かせて、私の顔を恨めしげに睨んだ。

「朝迄ゆっくり、睡ると良い。」

そう云い残して、×字架のマルグリットのそばに行き、くつわを外した。

「お前の妹の名前は何と云う？」

「フランソワ……………」

そう云って彼女はハツとしたように私の顔を見た。

「どうして結婚しない？」

「…き、気に入った人が居ないんでしよう。」
「アルヘンテイーヌから買った膏藥を妹に使わしたな？」

「……………いえ、買いません。」

「お前がアルヘンテイーヌの家に行くのを見た者も居るぞ、どうしても買わないと云うのなら妹も取調べるが構わぬな。」

「……………買いました。」

「それをどうした。」

「私が使いました。」

「又嘘を云うな。」

「……………」

いずれ、明日妹を調べれば解る事だが、どうしても一応この女に自白させて見ようと思ひ、まだ画が描かせて無いので、どのようにしたものかと考えて居ると、ノックが聞える針師が壺に妙な色の液を入れて持って来た。

「いま、実験して見ましたが、これは仲々効きます。」

「なんだ、それは？」

「私の発明した、降魔の薬ですよ。」

彼は私の耳元へ口を寄せて、色々な刺戟剤を組合せたもので、皮膚に塗ると、すさまじい痛みと灼熱感を与えるのだと云う。痕が附かぬかと尋ねると、十分位で拭取れば大丈夫で、念を入れて水で洗えば完全だと云う。早速マルグリットにためして見る事にした。私は壺を受け取り、小さな筆で、片方の乳首の上にほんの少し塗って見た。見る／＼乳頭が固く突起し、彼女は唇を噛みしめた。一分、二分、先ず頬が紅潮し、指をすっかり握りしめた手が小さきみに慄え出した。三分、反り返るように硬直させた全身にじつとりと汗が浮び、ひいと最初の悲鳴が喉から絞り出された。四分、五分、凄まじい悲鳴と共に、全身

がのたうち涙と汗が滝のように流れ出した。七分、悲鳴がしやくり上げるような号泣に変わり、もたえる身体が激しく痙攣し出したので乳首を水を含ませた布で拭いた。何度か水で拭いて居るうちに痛みも治まったのか、涙の溜った目で自分の乳首を見て、泣きじやくって居る。跡が少し赤くなって居るが大した事は無さそうだ。

「どうだ、まだお前が使ったと云い張るか」

「……」

「妹に使わせたのだな？」

「……いいえ、私が、私が使いました……」

「本当です、も、もう許して……」

「本当の事を云わなければ、こうしてやる。」再び激しい悲鳴が彼女の口からほとばしった。三度、四度、塗っては拭きその度に同じ事を訊ねたが、答もやはり同じだった。針師は粘膜に塗った方がよく効くと私に勧めたが

今日は差し控える事にして、丁度ソフィを入れた檻に詰め込んで、今夜一晚考えさせる事にし、くつわだけCを噛ませて置いた。

第二の審問室に戻るとアルヘンティーンは、もう手の力も抜けたのか、だらりとぶら下って、足を交互に持ち上げて呻いて居る。足首を掴んで持ち上げて見ると足の裏が真赤に脹れ上り所々血が滲んで居る。手錠をはずしぐったりした身体を抱いて寝室に行った。その夜、彼女の足首をベッドの脚に鎖で繋ぎ、手錠を嵌めて、私が睡り込んだ時、彼女は私の首を締めた。恐ろしい夢を見て目を覚ました私は必死になってようやく彼女の手をふりもぎった。

その時の恨めしそうな大きな目にはぞっとした。慌てて部下を呼んだ私は、彼女をBの牢獄へ入れ、逆吊りにして置くように命じたが、さすが明方まで睡れなかった。(未完)

「苦しみを求めて」(1)

— 縄への憧憬を持つ女性の手記より —

近 藤

一

(一)

——あゝ。私はまた汽車に乗って了った。夫も子供もそして総てを残して——

恵以子はコートの襟を引き立て、額に垂れた前髪を手の甲で撫で上げてから、汽車の窓硝子にふうつと溜息を吐きかけた。白い息はまるで恵以子の胸の中の悔痕のように淡い膜を作り窓硝子を曇らせたものの、見ているうちに消えて行った。

——一体私はどうなるのかしら。私の胸の中に巢喰うあの忌わしい欲望、魔力故に忘れられないマゾの叫びが次第に根強く成長して来たのだ。このままに身を任せれば悲惨な破局が待っただけということくらい、稚ない私でさえ本能的に感じているのに。

いつとはなしに私の心に忍び込んだ魔性が縄への憧憬を植えつけ、そして私を恥知らずな凌辱の遍歴へ狩り立てたのだ。奇譚クラブという雑誌を識った時は眼の前が拓けたように思った。幾人も、幾十人も同じような想いの人々が、或る豊富な経験から、或は秀れた才能から、貴重な発表を掲げ私に迫って来て、夫のある私の愚かな夢はどん／＼膨らんで了ったのだ。私は、しかし、誰を恨むでもない。それは誰の罪でもなく、もし罪ありとするなら魔性のひそむ私自身が指弾されるべきだもの。



御覧、私のこの蒼ざめた顔を。私は自分の行為を罪惡と感じている心算で、それでも決して引返そうとはしないじゃないの。下唇をぎゅつと噛んで、柱に架けられた駅名を凝視しながら、だん／＼に夫や子供から離れて行くじゃないの。

私が初めて誌上でささやかな呼掛けをするとうすぐ数人の男性から応答があった。私は単純に、本当に単純に、男性の理解あるパートナーを、そして紳士を信じた。その結果は：最初の男性は、私を満してくれる技巧は勿論、私を識る心の余裕すら持合せてくれなかった。第二の男性は私を一途な苦悩に陥れた。第三の男性は必要以上に私を傷めつけた。そして第四の男性は、遂に紳士ではなかつ

性との一時を懐しみ、更に大きな美食を夢に見て、さすらっているのだ。

あと二時間もすれば東京へ着く。また私のみじめな幾日かが始まるだろう。その幾日かは夫と子供の犠牲において過ごされ、そして私は決して満されやしない。一体何のために私は汽車に乗ったの？私の家はみんなが苦しんで、赤の他人の「男性」だけが独りで満足するばかりなのに。私はどうしたらいいの？私はどうなってしまうの？——

窓の外は夕暮の海が続いている。水が広がって空に溶け込む辺りでは、遙かな闇がおぼろになっ

た。今は……私は第五の男性を求めている。

私がやつと守り育てた小さな希望の芽はいつも踏み躪られたのにそれなのに私は、まるでやせ犬がゴミの車を蹤けて行くように、私の呼掛けに応えてくれた男性を辿っては、空腹のまま追い返され、そして、それにも拘らずその男性を、その男

(一)

恵以子は第一の男を想い出してゐる。男は二十一才、学生、素人下宿の二階の一間で、生まれて初めて縄が恵以子の自由を奪つたのである。

下宿の上品な女主人がお茶を置いて部屋を出るとすぐ男は「縄を持って来ましたか」と訊いた。恵以子は予期以上性急に「縄」を云い出されて羞恥に火照る想いだつた。差出した細引の束をほどこしながら男は立上つた。

「それでいいんですか、仕度は。」

恵以子は、旅の疲れもいとしてくれぬ男の言葉に驚き恐れた。

「一寸お待ちになつて。羽織を脱りますから。」

一瞬、着物は？と思つた。男の希望に従つた和服は恵以子の晴着である。しかしその思ひは忽ち男の声にかき消された。

「ここへ来て、向うむきに坐つて下さい。」

男は細引で恵以子の胸を無闇に締上げた。

「貴女の望みどおり責めて上げますよ。」

男はいきなり恵以子の頭を畳へ抑えつけたので恵以子は後手のまま土下座の恰好になり膝が崩れてゆらいだ。下宿の二階では大がかりな責もできよう筈はなかったが、それでもデスク、椅子、柱、欄間等を利用してのアクションはプレイの域を遙かに超えて恵以子を

苦しめた。帯も晴着も欄間に吊られた恵以子の足許に乱れて落ちた。縄目に止まつた長襦袢の襟から胸も背も露わになつた痛々しい姿で括り上げられた時には、激動で出た筈の全身の汗がいつの間にか冷い汗に変わり腋の下にじつとりと滲んだまま流れなくなつていた。男の昂つた呼吸と、それより少し遅いだけの恵以子の呼吸が一間に充ちた。

漸く海老縛りを解かれた恵以子は、肌を覆う気力もないままに襦袢の襟も正さず、畳に手をついて身を支えていた。蒼白な額には脂汗がいっぱいに浮かんでいた。

「氣持が悪いんですか。」

男が意外な面持で訊ねた。恵以子は声を出す力もなかったので、こっくりしようとした途端吐気がぐつと胸に迫り思わず涙が出た。手洗に行きつかぬうちに恵以子は口を抑えたハンカチの中へ苦い液を吐いてしまった。

男は、恵以子が壁に身をもたせながら階段を降りる時も、下宿の女主人から介抱を受けている時も二階から降りて来なかった。たとえ乱暴にもせよ、恵以子への縛りにあれ程迄熱中した男が急に冷く垣を構えてしまったことが恵以子には悲しかった。その原因は……

——私も酔漢の醜態には嫌な思いがする。若さの潔癖はたとえ若い女のそれとしてもやはり汚穢な感を抱くに違いない。もし男に同情心があつても羞恥が先に立つだろう——

恵以子は男を善意に想つたのだ。結局は同年の男を単に安易な融和を求めて選んだ自分の責任と考へた。

別れ際、恵以子は心から醜態を詫びた。男は黙っていたが、只一言、「氣をつけて帰つて下さい。」と云つて恵以子を送り出した。

男の顔には満ち足りた表情があつた。

第一の男は結局、恵以子より大人ではなかつたのである。

(二)

間もなく、恵以子は第二の男を鎌倉に訪ねた。三十二才、妻子のある出版社員。額の秀でた細面の好男子で口許には常に柔和な微笑を浮かべていた。長身を紺の背広に包んで駅に迎えてくれたし、知人の別荘という由比ヶ浜の家では、陽当りの良いサンルームで何となくもてなしてくれた。お蔭で恵以子はすっかり寛ぐことができ、当時の奇譚クラブを中心に話題もはずんだ。

男は肉体的苦痛中心の加虐は古いと云い、心理的加虐こそ讚美すべき極致だと云つた。そしてこうつけ加えたのである。

「僕の妻にさえ許されない娛しみを実行するのだから、貴女も覚悟して下さいよ。」

男はアブの理論に情熱を見せながら、やはりそれは特殊な世界に限定され、ノーマルの意識では罪の感覚をまざまざと想っている男

だったのだ。

夕方、恵以子は散歩に連れ出された。ズロースとストッキングだけの身にビニールのレインコートを着せられた。コートは特別に手を加えてあり、ウエストや手首は勿論、二の腕も乳房の上下もビニールのバンドでぴたりと締めつけられた。そしてその上にクリーム色のスプリングコートを羽織って外に出たのである。

男は散歩に似合わない速い歩調なので、終始小走りで従う恵以子は、心理作用も重なり忽ち汗ばんだ。初めたべた／＼肌についていたのがやがて一面の汗のためにぬる／＼滑り始め、胸や背を下へ／＼と流れた汗はズロースのゴムの辺りをしっとり重らせた。恵以子は右手でスプリングの襟を立て、左手はポケットの中から下腹をさすって、頻りに湧き出す汗を唯一の肌着へ浸み取らせて歩いた。

汗とはこりを流すために男が立ててくれた湯はタイル張りの好適な浴室だった。湯上りにほんのり染った肌は覆うことを許されずに男の酒席へ連れ出された。名も知らぬ酒にむせる若い女の姿は恰好の肴であつたらう。

やがて恵以子は革具の拘束を受けた。巾二程の革紐を組合せ尾錠をとりつけた革具は柔い肉を圧して隙間を作らなかつた。

翌朝、未だ暗いうちに恵以子は追い立てられて海岸へ出た。流石に鳥肌が立つのを男は

「すぐ汗をかくさ」と云って微笑した。

砂浜は調教の場だった。男が投げる細木を男の命令一下拾いに走るのだ。両手の拘束は予想外に不自由で、たださえ走りにくい砂浜に恵以子は何度も足をとられたし、細木をくわえるために膝について這うので、汗ばんだ肌は砂でまみれた。口の中までじやり／＼した。

恵以子は完全に雌大と化した。男は恵以子に金属の轡を嵌め頸輪をかけて鎖で繋いだ。恵以子の秘かな自尊心や生理的な疲労に對しては睡眠薬を以て当った。恵以子に与えられた寝室は近くの別荘から借りて来たグレートデンの空小屋だったし、用便には蜜柑箱に入れた砂が用意されていた。いろ／＼な奔弄の間は恵以子は藁の中にひっそりと蹲るか、かすかに寝息を立てていた。砂箱は絶えず湿っぽい臭気を放ち狭い小屋からは汚物で蒸れた藁の悪臭が立昇った。雌犬の体でさえ、涙と汗と涎と食物の汁がしみつき砂とはこりでまだらになっている。恵以子は男を憎み、恐れて哀願した。唯一の口の自由を求めて只管食事を待った。

五日目の払暁、一しきりの調教ののち男は細木を海に投げた。波に漂う細木のために髪の毛までびっしりと濡れた。飛ぶ細木。恵以子は幾度も波をかぶった。眼の前を無心に揺れる細木は恵以子の肩までを水に浸してし

まった。水泳には些か自信のある恵以子も、この拘束では全くの無力で、今はたとえ細木をくわえ得ても岸へは戻り得ぬ程疲労していった。溺死／ 肉体と共にこの破廉恥な性が滅び得るならば溺死もまた飲んで迎えるべきであらう。一瞬、身を浮かせて細木を求めた。くわえたと感じたのは、然し幻覚だった。海水が塩からく喉にむせ、恵以子の体は潮に乗った。流れる／ 死／ おぼろな意識の中で恵以子は強い力に引かれて行くのを感じていた。

気がついた時はベッドの上に居た。男は優しく、口許には例の微笑を浮かべていた。恵以子の素肌には何の拘束もなく、そして清潔であつた。

一場の悪夢／ そう思いたかつた。然し砂箱や藁の汚れまでが、余りにも鮮かであり、何よりも恵以子の身についた男への態度が事実であることの証拠だった。鎌倉への岐点大船も通り過ぎ、やがて東京の灯が見える頃だろ。

(以下次号)

【伝言板】

○九雅節夫氏へ、本誌三月号誌上八一頁の伝言板にてお答えしておきましたが、其の後御送稿がないのでお待ちしております。

○宝塚二三夫氏、高原正夫氏へ、続稿ありましたら御送付願います。

家畜人ヤプー

（第九回）

沼 正 三

第十六章 海辺のドリス

一 畜人皮の水中服

初めて読む方に 今から二千年後の宇宙帝国イース。女性が男性を圧倒し、貴族平民の別ある白人達の下に奴隷階級の黒人が仕え、更にその下にヤプーと称ばれる黄肌の家畜人が白人の生活を快適にする為使役愛玩消費されている。科学の力は人権を失った肉体に現代人の想像も及ばぬ変形を加え、畜人大畜人馬や、矮人を作り出し更に肉便器その他の生体家具各種を誕生させた。——劣等人を家畜化し家具化し切った白人達の女権的貴族政治の世界、その精密図を描くのがこの小説の第一の狙いである。

イースの大貴族ジャンセン家の嗣女ポーリーン、その妹ドリス、その兄セシル、彼の義弟ウィリアムは、本国星カルーから地球別荘に來ている。円盤で時間遊歩に出たポーリーンの墜落事故から、現代の独乙美女クララは婚約者瀬部麟一郎と共に、二千年後の地球球面にやって來た。然し、彼女がジャンセン家の客人としてもてなされ、安逸の生活を享樂し得るのに反して、麟一郎はヤプーとして扱われ畜化処置を施される。——この家畜化の過程を細かく辿るのがこの小説の第二の狙いである。

摂餌排泄の為のポンプ虫を寄生せられ、皮膚強化により全裸を強制され、逆上の極、無理心中を試みて失敗した麟一郎は、去勢されて予備檻に移された。危く助かったクララは私室で眠っている。一夜が明けて……

一夜明けたシシリ島の東海岸、水晶宮から二十五軒程離れたジャンセン別荘領の端で、今しもさし昇る朝日の光を浴びつつ、金波銀波に噛まれる大岩の鼻から、ザンブと跳び込んだ全裸の乙女がある。

深く深く潜ってゆく。二千年昔、記録映画「青い大陸」の撮影隊

のものものしい水中肺姿を見た海底の岩の間や隧道を、素面素裸の乙女は、伸び伸びした四肢をくねらせながら、軽やかに潜り抜け、奥の小魚の隊列を脅かして、逃げまどう有様に微笑んだ。

その顔は——ドリスである。だが待て。乙女の頭上には黒髪が束ねられている。肌は日に焼けて浅黒くなった黄色人の皮膚としか見えない。これが白皙の肌、金色の髪あのドリスと同一人と思えようか？ 背恰好から顔容は、ドリスそっくりなのだが……

お答えしよう。女はドリスに間違いない。黄色人の全裸体と見えるのは、実は、畜人皮製の水中服を被っているのである。

平民は既製品を買うが、貴族は誂える。注文主の肉体の寸法に隅

々まで細かく合あして瓜二つの肉体を持つ様生育させ、顔も整形外科手術でそっくり同じに変えさせた生ヤブーの皮膚を、コサンギニンを使って生なめし（第十三章四註）した後、シリコン化して耐酸性にし、その上で王水（硝酸と塩酸の混合物）を飲ませる。肉も骨も融けてしまいが、皮膚は完全に残る。こうして得られるのが完全畜人皮といわれるもので、縫目も縫目もない、注文主の肉体にピッタリと吸い着く革肌着ができてあがる。

適当に裁断して、パンティ、ブラジャ、ウェストニッパ、ストッキングなど下着の色々が取れるが、これをそのまま着て、水中服にすることもできる。顎の下、咽喉の周りから丸く刃を入れて上下二つにし、頭皮顔皮は覆面帽にし、肢体部の截目には、………
………孔鈕（第八章三）と同じ伸縮自在の金属ゴムを縁取り、これを開いておいて、足から穿く様にして、胴体と四肢にこの服を着る。手足の指先迄全体が一統だから、覆面帽を冠ってしまうと、完全な防水気密服になり、肌荒れや海月くらげかぶれが問題にならなくなるばかりでなく、水圧の変化が身体に影響しなくなるので潜水病を恐れる必要がなくなる。しかも、海水着の主要目的である肉体美の誇示にも、この位良いものはない。胸や腰の線がそのまま出ることとは勿論だが、一番の長所は全裸と同様の印象を異性に与えることである。完全に身は蔽われているから、他にはパンティもブラジャも必要でないと思われ、そのため、パンティもブラジャも着けていない素裸のように見えるのである。この服が肉体美に自信のある公子公女に愛用されるのも無理はない。ドリスが着ているのは、この畜人皮製水中服なのである。彼女はこの着心地の好さを愛している。彼女に自分の肌を捧げるため、王水の盃をあおった雌ヤブーよ、以て瞑す

べし。

ドリスは、更に海藻の林の中に入ってゆく。もう五分の余も潜ったきりだが、海面に呼吸をしに戻らなくても良いのだろうか？ 鼻孔からは、時々ブクブクと気泡を噴くが、一体どこから空気を吸っているのか？

秘密は頭の天辺にある。漆黒のヤブーの頭髪を束ねた中に小さな平たい丸い箱が隠されている、この中に、水中から空気を取る装置が入っているのだ。そこで採集した空気が覆面内の細管から鼻と口とに送られて来る。畜人皮の頭部の皮には、眼に深い水中でも遠くが見えるレンズを、耳に水中聴音膜を、口に水中送話器を、それぞれ加工してある外、鼻孔の特殊弁が、炭酸ガスを多く含んだ呼吸だけを外に排出する様になっているのだ。だから、覆面帽を冠ると、目鼻立ちは使用主そっくりの顔がある丈の様だが、実は、頭頂採気箱と右の装置のお蔭で、いつまでも水中で自在の行動ができるのである。全裸女体は実は高性能の潜水装置なのだ。

ところで、ドリスのすぐ後から、まるで主人の供をする犬の様に、先刻から随いてゆく奇妙な動物は何だろう？ 背中に黒い甲羅を背負っている外は全身緑色で、体長一米、四肢の先に蹠みぞかきがあつて、巧みに泳いでいる。頭为天辺に丸い凹みがあり、その周りに短い髪の毛、顔は倒三角形で下端が口吻として突出して………そうだ、河童かまわ、絵で見るのによく似た河童がドリスに随行しているのだ。一体どうしたのか？

二 両棲畜人ピュー

人類が海底を征服した時、種々の海底作業に従事したヤブーは、

次第に専門化し、変種化して、水中畜人と呼ばれる一大部門を形成した。この各種類は、近くクララが、皇子オットー（誤って女性視して乙姫と呼ばれる。）を南海の離宮「龍宮城」に訪れる日に説明するが、水中畜人とはいっても、ドリスの冠っている覆面帽と



同様な潜水兜を使う丈で、それを外せば陸上での呼吸を本来とする連中が多かったのである。

ところが、ヤブー育種学の進歩は、遂に水中で人工鰓で呼吸する真の水棲畜人を作り出し、更に、空中での呼吸も出来る両棲畜人を

誕生させるに至った。

一方、既に二十世紀人にも知られていた水中自動車（映画「沈黙の世界」参照）は、その操作に片手を使うので色々の不便が感ぜられ、改良品が次々に生れた。推進器試作品にはギリシヤ文字の番号が附けられ、アルファ、ベータ、ガンマ……と呼ばれたが、その十番目カップと呼ばれた試作品は、両棲畜人を運搬体を選んで、見事な成果をあげ、広く普及するに至って、今ではカップが両棲畜人の別称のようにになっている。ドリスの連れているのはこのカップの一匹なのだ。

肌が緑色なのは、陸上で全身皮膚呼吸をして生きてゆける様になっている為である。身長一米以上では皮膚表面積の比率が減

じて呼吸困難になるので、両棲畜人はこの体高を限度とする。背中の甲羅は実は原子動力機関の水中ジェットで、頭頂の凹みは、陸上では弁で蓋されてるが、水中で弁が開けば、ジェットに送られる水の取入孔になっている。頭蓋から頸髄腔を通る管で甲羅につながっているのだ。肺は鰓葉に変わっていて、口から飲んだ水が空気の代りに酸素を与える。魚と同じに、水中生活が本来の姿になっている訳だ。

ところで、このジェットはカッパ自身のためにあるのではない。勿論彼が操作するのだが、彼自身は蹠で遊泳でき、ジェットの快速力を必要としない。彼がジェットを背負っているのは、主人の必要に応じてこれを提供し、その意志を命令として、主人の思い通りにジェットを操作する為なのである。

ジェットを使うにはカッパに乗る。カッパの顔は倒三角形で下の口吻が突出している。丁度自転車の鞍に目鼻を附けて、前の尖部を突き出させた様な恰好で、そこでこの顔をサドルと呼ぶが、このサドルに自転車と同じ様に跨る。つまり開いた股倉に顔を密着させた上、股を閉じて頭部を挿み込むのである。そうすると、身長一米の動物だから、スラリとしたイース人の両脚の間に丁度カッパの胴と脚とが収まる。両腕で主人の両腿を抱かせる。こうすると頭頂採水孔は主人の尻の直後に開きジェット本体即ち甲羅は主人の両脚の間にその線に沿って横わることになる。そしてサドルを締める、その締めつけ方、臀肉による頭蓋への圧迫の加え方で、発進停止方向変換等色々の合図ができる様にカッパは訓練されている。

カッパ推進機の長所は、第一に脚の間に収まっている為、全身の流線型が破れず、水の抵抗が少い。第二に、尻の使い方で操縦で

きるから、両腕の活動が自由である。第三に自力随行性である。即ち、用が済めば股を緩めて解放してやれば良く、黙って随いて来て、又使う気になって股を開けば、すぐ股の間に入ってくる。その便利さは、腕に抱えて使い、使用を中断してから再度使う段になって元の場所まで戻らねばならぬ昔の水中自動車の比ではない。つまり、家畜兼道具的存在としてのヤプーの特質がここにも見られるわけで、一名「海の犬」というのは、その随行力に家畜性を見た表現であり、別称「水中自動車」というのは、主人の操縦する軽便な乗物としての道具性に着眼した呼称であろう。(本節末尾※)

ドリスに随いてゆくカッパは、ピューという名の彼女の愛玩物で、もう二年程飼われている。二週間前連れられて別荘に来てからも、毎朝缺かさず、ドリスのお供で朝早くこの海岸に来、彼女の海中散歩に随行しているのだ。

ドリスは尿意を覚えたので、……。ピューは喜んで……。……附けて来る。そのまま放出したのでは、あたりの水が汚れる様な気がして耐え難いので、潔癖に、ジェットで走りながら済ませて、水の汚染から離れることにしているのだ。サドルを……。……でジェットを作動させながら、……。……した。サドルの尖部即ち水を呑むピューの口が丁度前部孔鉤前に位置してるので、そのまま吸われて肺の鰓葉にまで流入して行った。

海中を走り廻りながら、ふと昨夜の晩餐の時の情景をドリスは思い出していた。

晩餐の時、客人クララが姿を見せず、ウィリアムも出て来なかった。ポーリーンの説明で、ヤプーの大暴れや心中未遂事件を知って吃驚したのだ。だらしなない黒奴達の処刑は客人の列席する晩まで延

期することに異議なかったが、黒奴が弱いというより、ヤプーが強過ぎたのだろうとは想像がついた。

セシルが、相槌を打つ様に

「仲々敏捷な奴さ、その証拠に、去勢鞍カスト・サドルも大分手古ずってたからな」

といった。ポーリーンが驚いて

「まあ、貴方、奴めを去勢したの？」

「だって、特別檻スペシャル・ペンに入れろって……」

「予備檻スベア・ペンよ、妾がA3号に命じたのは」

兄より地位の高い妹は、兄を睨みつけた。

「あ、そういえば、予備檻スベア・ペンって云ったな、僕が、まさかと思って、

特別檻スペシャル・ペンじゃないかって聞き訊きしたんだ」

「駄目じゃないの、クララ嬢きんの意向も聞かずに……」

「僕は、そんな事故が起ったこと知らなかったから、勿論彼女の意思で生畜舎に送られて来たと思っただんだ」

「困ったわ」ポーリーンは苦り切って、「クララ嬢に悪いわ」

「一応予備檻に入れたら、今からでも」ドリスが助け舟を出した。

「去勢は、兄さんに悪気があったわけじゃなし、きっとクララは事後承諾するわよ。だから、その後の処分を任せる意味で予備檻に……」

「それもうね、今何処に居て？」

「八号檻」セシルがほっとして答えた。「今なら丁度良い。自殺しかけたから生本能注射で眠らせてある」

……

「それもうね、今何処に居て？」

「八号檻」セシルがほっとして答えた。「今なら丁度良い。自殺しかけたから生本能注射で眠らせてある」

……

「それもうね、今何処に居て？」

「八号檻」セシルがほっとして答えた。「今なら丁度良い。自殺しかけたから生本能注射で眠らせてある」

ドウの強いヤプーをとくと調べて見たくなった。優秀な奴なら、分けて貰って仔を取りたいものである。

——そうだ。今日は、この位にして帰ろう。そして生畜舎ロー・ヤプー・ワールドに行つて見よう。

ドリスは、岸に向つてジェットを走らせ始めた。

(※註。古来空想上の動物とされた河童は、イース世界の kappa が、航時機に乗ったイース人のお供で古代地球に来て、主人の許もとから脱走し、湖沼河川に隠れて生存したものと考えれば、すべて説明できる。甲羅や緑の肌色は既に述べた通りだし、頭の凹みに水が溜れるといけないというのは、これが採水孔だと知らずに、外見丈からそう思ったのだろう。裸で泳ぐと河童が尻を抜くというのも水泳者の裸の尻を見て、畜人皮の水中服を着た昔の主人を思い出し、以前仕込まれた通り、その者の股倉に入ろうとしたので、そういわれたのに違いない。河童の屁という言葉が何故あるのか、誰も説明した人はないが、後部から流体を噴出するジェットから無知な古代人が放屁を連想したのではあるまいか。尚、上半身女体で下半身が魚体という人魚は、緑いカッパを脚に挿んで波間に遊ぶイース女——後に述べるが、前史世界への航時機着陸が禁止される前は、古代世界でそんな遊びをすることが可能だったのだ。——の上半身の水中服を裸女と、下半身の模様を魚尾と誤認したものと思われる。

三 畜人馬アマディオ

海岸では、ドリスの長靴とマントを番して、アマディオが昇る朝日を眺めていた。本国星カルーで見るシリウス二重星の壮大無比な

日の出の光景を臉に浮べつつ、

——地球の日の出は単純だな。太陽が一つしかないんだから、無理もないが……

爽やかな秋の空を縫って、後の木立から小鳥の囀りが聞え、横なぐりの風が、たてがみを右へなびかせた。天馬アヴァロンと並んで地球別荘行きの宇宙船に積み込まれたのが三週間前だ。毎朝払暁にこの海岸迄主人を迎送することも、これで二週間になる。

アマディオは畜人馬だ。畜人馬とは巨人ヤブーを乗用畜に仕立てたもの。予告(第八章二)したことでもあり、少々説明を加えよう。

巨人ヤブーは三倍体である。個体各細胞中の染色体数が三倍になって、これによって普通の三倍の大きさになっているのである。既に二十世紀においても、農芸方面では二倍体、三倍体の巨大蔬菜が栽培収獲されていたのであるが、ヤブー育種学の進歩は、この倍数体の応用をヤブーの個体において実現することに成功したのである。身長四米五〇糎ないし五米、身体各部の比率もこれにかなっている。肉体が三倍であるという一点を除けば、心身共に何等畸形的な所はないのである。畜人犬が畸形ヤブーから作出され、変種も多々存在するのに反し、畜人馬は単に巨人ヤブーを畜馬具によって拘束しているに過ぎない。

では、その畜馬具とはどんなものか？これを装着している畜人馬アマディオ号によって説明することにしよう。

先ず目につくのは鞍である。巨人は頸をさし伸べて俯向いており、これによって後頸部は水平になっているが、こうして生じた肩から頸へかけての水平部分に頸鞍ネック・サドルという鞍が置かれる。鞍の前端が丁度項窩項のくぼみを抑える様になって尖っているので、巨人は顔をあげて頸

を垂直にすることは決して出来ないのである。鞍の前半下部は左右から頸を廻って咽喉笛のあたりで連結され、頸を巻くことで鞍を固定している。騎手としては肩車に乗った姿勢であるが、三倍体として頸が太く長いから両腿を広く開く関係で、跨がるという感じのある一方、広い肩に支えられた鞍の後半と騎手の尻との関係は椅子を使う時の様な安定感があるのだ。

手綱レインは四本で轡フライドルの銜に連結された口手綱二本は始動と制止を、左右の耳朵に穿孔して、これに通した耳手綱二本は方向転換を、伝えるのだが、四本まとめて騎手の左手に握られる。首の附根から胸元へ左右に垂れた革紐は、形状から首飾ネック・レース・ストラップと称されるもので、先に乗馬靴を受ける鍔金あぶみがあり、跨った首の左右から垂れる騎手の両足はこれで支えられる。

ここまでは昔の馬具から類推できるが、一つ丈畜人馬独特のものがある。アマディオの両腕は背中に廻して二本重ね合された上、三箇所金属製の輪が、肉に喰い込む位緊くはまって、両腕を結束している。片腕の掌が他方の肘に当る位に重なっているため、結束された両腕はピタリと背中について、少しも自由に動かせない。これは、天馬における舌去勢ベガサス(第四章二)と同じく、高次行動能力を減殺して乗用畜としての能力丈を残したものであるが、同時に乗馬下馬の際の中継台としても有用な意味があるのである。立位の馬の鞍は地上四米ないし四米五〇糎の高さであり、蹲位アシックを取らせても三米以上である。高過ぎてとても乗れない。そこで、蹲位の馬の背後から、丁度跳箱さびきこに跨る前に跳躍台を踏む様に、先ず背中に廻した腕に片足掛けて強く踏み、筋肉の弾性を利用して跳び上りつつ股を開き、頸鞍に尻を落す——これが畜人馬の乗り方である。下りる時はこの

逆だ。こういう風に中継台に使うので、結束した両腕は肉踏段と称ばれ、三箇の金屬輪は踏段輪と称ばれている。

これが畜馬具で、僅かこれ丈の道具で五十人力の巨人ヤプーが畜人馬という第一級の乗用畜になってしまふのである。何しろ身長が身長だから歩幅も大きい、全速力で走れば昔の旧馬よりずっと速いので、天馬は別として、地上の動物への騎乗としては、こんな爽快なものはなく、旧馬が畜人馬に取って代られたのも無理はない。じっと海面を見守って、主人を待つアマディオの頭を掠めて、小鳥が一羽舞い上った。

——タイタン星の頃を思い出すなあ。小鳥の巣を取りに行ったつけ。

タイタン星で育った幸福な少年時代のことがゆくりなく思い出される。

ペデルギユース圏にある巨人ヤプーの生産地タイタン星で、二十年前に彼は生れたのだ。飼育所は自動機械管理で、人間は居なかった。居るのは仲間の巨人だけであり、そこでは勿論巨人としての自覚の起りようがなかった。「白く小さい神」については宗教教義の数々があつたが、話に聞くだけでは、昔の人が西方極楽浄土の話聞く様な



もので、実感は湧かなかったのだ。

十五才の時検査があつた。知能検査で指数一四三を示し、特に思

素推理の能力に富むと評せられたのを、彼は未だに忘れないが、彼自身の運命を決定したのは、身体検査における脚力成績の抜群だった。彼は馬にされることになった。

それに続く調馬場での苦い体験。今迄生れたままの自由な裸体だったのが、腕を背中に振じ上げられた時の苦しみ、両腕が振れないと急に歩き難くなる。やっと慣れて走れる様になった時、銜をはまされた。永久に口がきけなくなったのだ。そして、頸鞍、首を俯向けさせられる痛み、それに騎られる辛さ、初めて見る「白い小さい神」の何と冷酷だったことであらう。

一通り基礎訓練を終えた馬になった時、彼は今の主人ドリス・ジャンセンに買われた。二年前である。以来彼女の厩で可愛がられて来た。競技会で彼女を乗せて優勝したことも幾度か……

遙か沖合から、一直線に進んで来る主人を認めて、彼は回想の糸を断ち切った。主人の金髪が後になびいている。波の上に立たので、覆面帽を脱いで背中に垂らして、首から上だけは白人に戻ったのだ。

アマディオは後向きになって、蹲位を取って、待つ。

波打際で股を緩めてピューを解放したドリスは、左手にマントを掴みつつ、畜人革の長靴を穿くと、軽やかな二動作で鞍に跨った。続いてピューが踏段輪に下から飛びついて、巨体の腕にしがみつく。間髪を容れず、

「Shicko。」

アマディオの耳の穴に挿し込んでおいたスジヤンボクを右手に抜き持ち、ピシューッと一発背中鳴らし、同時に首飾鐙を踏んばって胸に鋭い拍車を加えた。全速力！

アマディオは、水晶宮目指して心死に駆け出した。

走らせながら、覆面帽を襟から外し、代りに、抱えていた乗馬マントを羽織った。朝日が後方から低く射して、翻るマントの燃えるような真紅を輝かせた。

(次章は麟一郎の囚えられている予備檻の場面となり、家畜としての適性検査が始まります。畜生化への道を歩み出した彼の身にふりかかる苦難と屈辱の数々を御期待下さい。)

【短 信】 山下 真一

パーマのある地獄絵

(柳川) 柳川商業高校商業美術講師、小野南枝氏(五三)は市内某寺から頼まれた『地獄絵』を、一年がかりで十五号五枚に描き十六日のうら盆に初公開する。同氏によれば、従来の地獄絵はあまりに現実からかけ離れ人間臭のないものなので、これを打破し、近代感覚を盛った実感的な地獄絵を、というのがねらい。パーマをかけた乳房も豊かな裸女たちが『火の車』や『はりの山』で苦悶している。さらに現代の洋服や着物を着た人物の苦悶の種々相をあと一年がかりで五枚の画面に収め十枚一組とする予定。(西日本新聞)

ズロースから金の延べ棒

話は少し古いが、さる四月二十三日の県議戦投票当日、北崎村玄界島附近でタイ捕された密航朝鮮人六十余名は直ちに前置で取調べの上福岡地検に送られた。そして拘留所でさらに精査中のところ、この中の某婦人がズロースの中に金の延べ棒(三十匁)をかくしていたことが判り、この旨五月十九日前原署にも一応通知があった。この金の棒は十六万円で朝鮮から買ってきたと本人は言っているらしい。以前婦人警官の居た頃は密航者中の婦人の身体検査は婦人警官によって行われていたが現在では男の警官がまさか婦人の身体検査をするわけにもいかず見落していたもの。今後どうしたものかと署長さんも首をひねっている。(糸島新聞)

赤い煉瓦の家

津々一平

疎らなエルムの木蔭を白い風が吹抜けていった。港の方で霧笛がいくつも鳴っている。空虚な響きは白い霧にたわいもなく吸い取られて余韻も残さずに次々と繰返えされていた。赤茶気たお堂の端れを右に切れると、急に潮の香と波音をマリ子は耳にした。其処から点在する家々の間をすり抜ける様にして緩い勾配の坂道を登った。登坂はすぐ途絶えて今度は急傾斜が海に続いていた。砂が霧に濡れて重く足に触れた。波打際に白く光る波頭の崩れが眼に沁る所までマリ子はその重い砂を踏んだ。上気したほゝに冷たい海の風は心地良かった。昼間のぬくもりが、そのまゝ夜の床に移り住む夏の夜のかつたるい疲れにも似た心の変化を、始めて味った今日の日を、マリ子は生涯忘れる事が出来ないかも知れない。霧が塊のまゝ左へ重く移動し始めているのが濡れた額にも剥出しの腕にも敏感に感じ取れた。

○

○

その朝、小夜子は犬の遠吠えを何処かで聞いた様な気がして深い眠りからさめた。耳をすまして見たが、それらしい声を再び聞く事は出来なかった。夢にしては、その前後が暗く不鮮明であった。気が付くと高い天井の明り取りから朝のやわらかい光がさし込んでいた。雨続きに隙間見る光は、それだけで何か大切なものの様に感じて小夜子は、あかずに曲折する幾つかの光の線を眺めていた。鳩時計の時を刻む音も手に取る様な近さに聞える程静かであった。マリはまだ起きている風はなく、その可愛らしいであろう寝顔を一度見てみたいと小夜子はふと思った。すると昨日、姉の加津子と二人で仕込んだ壁のカラクリを思い出して小夜子はベッドを離れると、音を立てぬ様に中央の丸いテーブルを廻った。部屋隅の隅に取付けた開き戸を開けると、昨日念入りに実験済の仕込鏡にマリの部屋が鮮明に写し出されていた。

「女中って主人の見ていない所では、すぐ地を出してお行儀が悪くなるものよ。そんな蔭

のある生活って嫌いだわ」

加津子が小さなめ釘を打込みながら言った言葉、ふと小夜子は思い出していた。マリ子は無心に眠っていた。あどけない顔が子供々々して十六才とは思われぬ程の無邪気さであった。小夜子は三つ並んだ高窓を左からじゆんに開けたが、思ったより冷い風が起ぬけのほゝに触れた。何時も眺める白バラは今朝もかたいつぼみを、そのまゝにいつこうに咲く気配が見受けられなかった。それが日課であるだけに又、何かはぐらかされた様なやり場のない気持ちを小夜子はもてあましていた。振返るとマリは鏡の中で大つぶの眼をパッチリ開けていた。物の気配を伺う様なその様子に小夜子はもっと鏡に近りたい欲望をせめてマリが起上るまではと我慢した。そんな躊躇する小夜子の眼前でマリの美しい花模様の羽布団が一閃して飛んだ。ずるをきめこんだ両足の見事な曲線があらわな姿を表して、マリはそのまゝ体ごと転るとベッドを離れていた。加津子の言った言葉がもう一度小夜子の

二

マリは、どおしようもない胸のうずきに眩暈がしそうであった。花瓶の花を換えに行ったり、食事の仕度をしたたり、何時もと変らない朝の課程であつたが今はどんな短い距離でも歩くと言う事に苦痛を感じた。一生懸命歯を食いしばってもフーフーと熱い呼吸が規則的に出るのを我慢する事が出来なかつた。奈落の底に体ごとすい込まれそうな不思議な感覚をマリは生れてはじめて味った。それでも小夜子が洗面から帰る迄には食事の用意を終わってなければならなかつた。苦痛をこらえて台所への往復を幾度か繰返したが破局は意外に早く訪れて来た。

○ 小夜子は床に落ちてゐる真珠の指環をひらおうとしたが、きらきら輝いてゐるので躊躇した床に倒れてゐるマリを調べると下着までよごしてゐた。小夜子がスプーンで器用に皿のスープをすくい上げてゐる横の床に、マリはきちんと膝小僧をそろえてお坐りをさせられてゐた。壁



の鳩が振子の動く度にあのつぶらな瞳をクリクリと廻して、そんなマリを眺めていた。

○ マリは自分のした事をおぼろげながら覚つ

た。焚火の煙の様に何処へともなく消え去る事の出事ない自分をうらめしく思つてゐた。「マリ……」

マリは素直に、立上ると一枚々々身に着けた物を取つた、洗面所へ立つと言われただけの道具をまとめて部屋へもどつた。

○ 小夜子が干切つたパンに黄色いバターをぬつたくつてゐる方へ丸いお尻を向けるとマリはタライの冷い水で下着を洗つた。丸いお乳が二つ並んでタライの水に写つてゐた。

○ 小夜子は例年、このうつとらしい梅雨期に入ると食欲が減退した。母が生きている間は、何かと心配して朝晩の食卓には必要以上の気を配つてくれたが、そんな母を失つてからは何かにつけて不便を感じた。姉の加津子とは十一もの年令の差があつた。それだけの年令の差は子供達の頃から二人をある程度以上には近づかせなかつた。小夜子がままごと遊びに夢中になつてゐる頃は、姉の加津子は、テニスだ、バレーだと日中は飛び廻

り部屋には所嫌わず映画俳優のプロマインドを張りめぐらす年頃に生長していた。その姉が夫に死なれて再びこの赤煉瓦の家にまいもどって来ると全く入違いの様に母が他界した。

広い屋敷に姉と只二人取残された時、その淋しさにたえられず小夜子は幾夜も布団の襟をぬらした。あれから四年の月日が流れていた。あの頃の出来事も今は遠い夢と言ってしまう。ば言えない事もなかった。しかし、梅雨期に入るときまって母の事と、それにまつわるあの頃の出来事を思い出すのは不思議な事であった。今は姉と姉付きの女中の百白子と四人の生活も全く板に付いた感じで小夜子は楽しかった。

マリの可愛らしいお尻がクリクリと動いている。自分が自ら見付けて来た女中のマリが、すすくと美しく生長をして行くのが小夜子には何よりも嬉しかった。可愛想だけれども悪い事をした時は、いじめた方がいいと思っていた。

○ ○
食事が終ると小夜子は立ってやわらかい紙と新しいガーゼ、セルロイドの水桶にぬるま湯をくんで汚れ物を洗っているマリ子の後ろへ廻った。

——一通り洗ったらお水を換えるのよ——
マリは一生懸命に洗いながらちり紙のやわらかい感触やガーゼの触る度に気の遠くなる

様な羞恥を感じたが、手は休む事をゆるされないの作業を続けながら小夜子のしまつの終るのを待っていた。

○ ○
二、三日前に小夜子と二人で町の縁日に行った帰りに——マリは何を買ってもらいたいの——と聞かれて、何の躊躇もせずあれといつて出店の軒にゆるく廻る風車を指した。子供だといって小夜子に笑われたが、マリの期待どおり今、その風車が窓辺でくるくる廻っていた。赤、青、黄の三色が折まぜてあるがそれが今の様に一時に廻りはじめると、絵筆ではとうてい現わしきれない様な美しい色をするのであった。

「こわいの？」

「はい」

「いつまでも、子供じやないのだから前の様に大声で泣いたりしちやだめよ」

マリ子は高い木馬にうつぶせにまたがされて四本の足に手足を嚴重に縛られていた。

歯をぐっと喰しはって、それでも一生懸命我慢しようと努力をしていた。その努力が小夜子には可愛らしかった。ピシーと鞭が丸く飛上ったマリのお尻に幾つも鳴った。

我慢しようとしても、とうてい我慢しきれずに、くいしばった歯の間からマリの小さな悲鳴がその度にもれた。

○

○

移動しはじめた霧の早さはむしろ神秘的であった。裾の方から次第に消えていった。右手の奥深い所に岬の黒い岩石が流れの早さを物語るかのように次々と武骨な影を現わしはじめていた。その方へ向けてマリ子はさくさくと砂を踏んだ。砂地が切れた所で今度は赤土の細い道が岬の頂上迄のびていた。マリ子は坂の途中で一度休むと道端の草をむしって笛を作った。草笛は波の音に調和して美しい音色であった。

岬の下は崖続きの深い海であった。陽の高い中はふと眼を動かすだけの狭い範囲内でも水の色が幾つも変っているのを見た事があるが、霧が晴れたが陽の落ちかけた今は一面に濃い紫色をしていた。冬に入ると北の海は昼でもこんな色をしている。その色は冬の冷たさをなおいっそう見る人の胸に込み込ませる様でマリ子はあまり好きではなかった。何時であつたか、百白子が同じ色の海を眺めて——どうもなにか威圧される様な何んともいえない暖さを感じない——といった事があつたが百白子がそう思う心の不思議さをマリ子は計りかねた事があつた。

カラスが赤い貝のみをくわえてマリ子のすぐ脇の尖った石の上に来て止った。啞えた貝のみを離すと気の抜けた様な顔で二、三度首をかしげてマリ子を眺めていた。足が地に着かない感じで前かがみにつんのめる様な止り

方であつたが、それでいてぴんとそつた体はびくともしなかつた。程なく羽音を立てて海に吸込まれる様に飛立った後に、どうした事か赤い貝のみだけが張り付けた様に残つていた。

マリ子はふと想い出して恥しくなつた。ポケットの紙で貝のみをはぎとるとカラスの落ちていった深い海へすてた。西陽の落ちかけた夕暮の岬には誰も他に人影は見られなかつた。それを見きわめてから、マリ子は指先をそつと後へ廻した。ふれるとまだひりひり痛むお尻はきつと赤くはれてゐるだろうとマリ子は思った。——お尻ならこんなさうはしなくてすむわね——小夜子はそういつていじめた。その言葉を思い出してマリ子は又顔を赤く染めた。港を離れた船が岬を大きく迂廻して、もうかなり船足を早めていた。黒い船腹に丸窓が正確な間を置いて暗くなりかけた海に赤い灯を投げていた。

煙は船から遠ざかるにしたがい動かぬまま

私は禪愛好者の一人ですが、奇クに禪に関するレポや記事が少いのは、読者層にもよるでしょうが残念です。私はまたソドミーでもあり（尤も禪愛好者は同時にソドミーであるわけです）この関係のものも十分でなく満足できません。そこで、私の軍隊——海軍——

に海上に広がって、その間を縫う様に夜目にも白く光る航跡が一面にどんよりした暗い感じの中で一際美しく際立って見られた。

自分が二年前、やっぱりこうしてこの岬を大きく迂廻して海を渡って来た日の事をマリ子は想い出してゐた。帰つたらその頃の日記を見てみようかしら——と、そう思った。

風が幾分分はじめて岬の底深く打続ける波の音が重く響いて来ていた。すてた貝のみはやっぱり濡れたかしら——寒くならない中に帰ろう。

マリ子はきびすを返すと、もうちらほら赤い灯のともりはじめた小さな町をみつめながら、先刻来た赤土の道をゆっくり下つて行つた。

○

○

家に帰って時計を見ると、きめられた散歩の時間を、もう少しでちようかする所であつた。マリ子は急いで小夜子のお部屋へ上ると帰宅の御挨拶をした。

の経験を若干述べてみたいと思います。

私は徴兵でとられて第一乙で海軍に入隊したのは戦争もたけなわの昭和十八年でした。場所は横須賀の武山海兵団です。まず第一の記憶は入営時に始まります。逗子で降りると私と同様に頭を丸刈にした国民服や背広を着

小夜子は長椅子に横になつて丁度、読書をしている最中であつた。

——おてんばをしなかつたの——

——はい——

マリ子は床に四ツばいになると、スカートをたくし上げた。しらべが終つてから、小夜子の許しを得てマリ子は廁へ立った。しやがんだ時、マリ子は白く光るタイルにお尻を写して見た、やっぱり思つてた通り赤くはれてゐる様であつた。

夜半近くになつて、いったんやんでいた雨が又軒をぬらしはじめた。この梅雨はまだ当分続く見込で——ラジオは無慈悲な警告を發していた。それを期に小夜子はラジオのスイッチを切ると、ついでに枕もとのスタンドを消した。その頃、マリ子は赤い羽根布団に首までうずめてたわいもなく眠りこけていた。時々小猫の様に小さいいびきをするのがさもマリ子らしく可愛らしかった。

た二十歳代の青年がぞろ／＼集つていて、案内に出た兵隊の指図を受けていました。兵隊は、はちきれるばかりの体格をセーラー服に包み、トビのように光る眼差を私たちにそゝいでいました。私たちは隊伍を組むと、数人の兵隊の先導で武山に向いましたが、いわゆ

る娑婆で聞いていた軍隊生活とは、ちよつとちがった無気味さを感じ、営門に近づくにつれて足が重くなったのを憶えています。営門を入ると緊張した空気がいっぱい張り作業服を着けた若い兵隊の忙しく走り廻る姿が眼に入りました。私たちは

は教育長の簡単な訓辞を受けると数人の下士官が、それ／＼名簿を読みあげ、班を分けられると引率されて、いわゆる居住区に入りました。

私の教班長は志願兵出身の叩きあげで、私たちのおど／＼した、しかも娑婆気たっぷりの一挙手一投足をじつとみていました。彼はまず私たちに一枚の包紙と麻紐と荷札を与えそれに住所氏名を書かせ、衣類をそれに包んで荷造りするように命じました。私たちは越中禪一つになってそれをすますと、身体検査場に連れてゆかれました。これで最後の合格、不合格がきまるわけです。検査場の前に整列すると、教班長は突然尻上りの声をあげて「エッチューはすせー」と号令します。私たちはちよつと、あつけにとられました。越中禪をはずし、素裸になって検査官の前に並

／＼ 体 験 談

水兵生活と禪

内 田 武 男

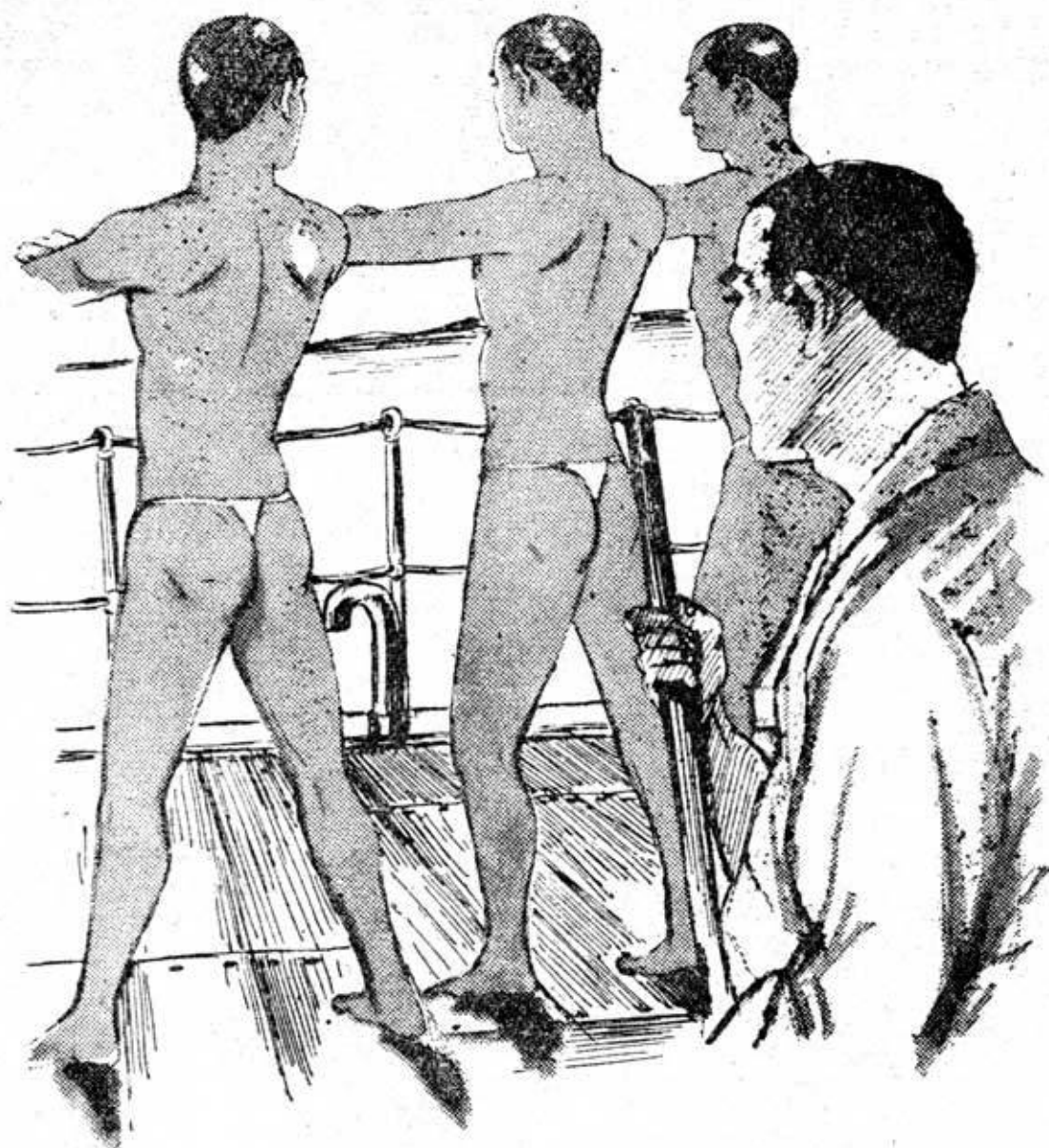
びました。後でわかったのですが、海軍では身体検査はすべて全裸で受けなければならぬのです。視力から内診、そして判定まで一糸まとわぬ姿で行動するのです。私たちは通路の一侧に順番がくるまで前後の裸体に圧迫されながら直立していなければなりません。私が他人の肉体に触れたのはこれがはじめてで、異様な興奮を覚えたのを憶えています。衛生兵は精神棒を矢鱈に振りながらまご／＼する新兵の尻を小突いたり、また意地悪く笑いながら「お前ら、えゝ気持になるなよ」とからかったりします。実際、私自身、じわ／＼興奮する気持を、じつとおさえていなければなりません。しかしM検にくると、すっかりうろたえてしまいました。そこでは性病がバレた一人の新兵が皆に疾病箇所がよく見えるように立たされていました。

彼は照れかくしに笑っていました。姿勢がくずれると衛生兵は眼をむき出してピンタを張っていました。私は医官の前で直立不動の姿勢をとり、教えられた通り………出しました。しかし医官は私の押えている………

とると大声で笑い出し、私が苦笑していると医官は「ホーケー」と、タミ声をわざとほりあげていうと私に四つん這いになるように命じました。これが終ると検便です。数人の下士官が腰かけている前に走ってゆかなければなりません。まずちよつと前屈みになり、両手を後に廻して………のです。それ／＼一列になって検便の姿勢をとっている新兵の………下士官は無雑作に「空気入れ」に似た吸入ポンプを………す。妙な感覚が………頭に抜けてゆくのを感しました。すべての検査を終ると、軍医長の「異状なし」という判定を受け、私たちは居住区にもどりました。私たちは一切の私物をとられていましたので全裸で官品の支給を待たなければなりません。予想しなかったことだけに、度胆を抜かれた私は、将来の軍

隊生活に激しい不安を感じないわけにはゆきませんでした。支給された官品を身につけ寒々とした悲哀を感じたのを、よくおぼえています。

このような検査は、外出が許されるようになってから定期的に行われました。性病予防が目的です。デッキに素裸で整列したり「エ



ッチューはずせー」という号令も機械的に受けとることが出来るようになりましたし、下士官が私たちをからかうのも毎度のことでした。海軍には、いわゆる「パッチョク」はつきものです。この典型的なものはパッターで尻をたたく方法です。私の一等兵時代は通信学校で過しましたが、パッターの鳴らない日はありませんでした。戦争の旗色が悪くなると兵隊の気もすさみ、パッチョクも一層ひどくなりました。パッターの使用は禁じられていたのですが、実際は公然と行われていました。特に志願兵あがりの下士官は私たちが徴兵で入ってきたものを軽蔑していましたので、その方法はひどいものでした。誰かがちよつと大きなミスをする、その夜——主として夕食後ですが——

全員パッチョクが行われます。はじめは作業衣を着けたまゝ受けましたが、次第に越中禪一つにさせたり、その禪さえもはずされるようになってきました。

深夜の非常呼集があつた時です。私の班のKが軽業患者であるということで、ずるけて寝ていたのです。これが、先任下士官の忌避にふれ、私の班は全員パッチョクを受けました。私たちは怒声で追い立てられながら袴下をずり下げ、越中禪をはずすと、万歳の姿勢で両足をひろげて下士官に素裸の尻を向けるのです。私たちは五、六回打たれるだけでした。私たちが五、六回打たれるだけで済みましたが、Kは全裸にされ、吊床のフックに両腕を吊らされた姿勢で尻をなぐられていました。彼はその翌日完全に腰が立たず唸りながら寝ていたのをおぼえています。

男だけの殺風景な軍隊生活では、またいわゆる「よばい」が行われました。それは先任下士官や教班長が、その特権地位を利用して若い兵隊を相手に彼等の性欲を発散させる一つの方法です。この場合、若い兵隊は「稚児さん」とよばれました。稚児さんにはなるべく年の若い眼鼻立ちのととのつた兵隊が選ばれましたが、それも材料に窮してくると誰彼の差別なく稚児さんにならざるを得ない運命に置かれました。「よばい」が行われるのは点検終了後です。先任下士官の室が使われ、他の下士官（教班長）は彼の外出の夜、了解

のもとにその室を使用するわけです。順番が廻つてくると同僚はにや／＼笑いながら「今日は前だぞ」と囁くのです。稚児さんになる兵隊はその晩入浴し、点検が過ぎると先任下士官室のドアをノックします。「〇〇一水入ります」と声をかけると下士官の返事があり、入室を許されます。兵隊は下士官の命令で……わけですが、それには符牒がついていて稚児さんは予備知識としてそれをおぼえていなければなりません。「敵は後方」といったら……の意味で「敵は前方」といえば……の意味です。下士官は単純な遊びに満足しなくなると、稚児さん同志で……見物しました。前者を「相撲をとらせる」といふ後者を「踊らせる」といふました。

私が禪に執着を感じなくなったのは「兵隊ふんどし」を着けさせられてからです。これは夏期水泳に使用するもので、官品として員数に入っています。士官は晒の六尺ふんどしを着けますが、兵隊は前あてだけあって後禪は巾の狭い布片で縫いであるいわゆる「水泳禪」を着けさせられました。白いキヤラコを生地のまゝ縫い合せたものです。水泳の日課になると昼食後兵隊禪一本になってカッターで沖に出るのです。階級は水泳帽の模様で区別できましたが兵隊だけは、この禪で沖でもはっきり区別できるようになっていたの

です。この兵隊禪は水泳だけでなく他でも使いました。体操は普通パンツを着けてやるのですが、士気がたるんでいたりとバッチョクの意味で着けさせました。つまり「貴様らにはパンツなんか勿体ない、兵隊ふんどしでたくさんだ」というのです。駆足は海軍につきものですが、この禪で長時間走ると後禪が汗と摩擦で一本の紐になり尻の溝をはげしく圧迫し、苦痛をとまなうのです。下士官はくたくたになって走る兵隊の尻を「日本精神注入棒」で叱咤するのです。最後方を走る兵隊の尻を叩くピシヤッという余韻のない音がひとときわきこえると冷水をかけられたような感覚が背筋を走り夢中になって駆けつたのをよくおぼえています。

私の印象にはっきり残っているもう一つのことに入隊直後に受けた最初の訓練です。それは私の分隊には農村出身者や商店の使用人等の混合部隊でガニマタが多かったのです。海軍は陸軍とちがって姿勢はあまりうるさくないのですが、一つは気合を入れるために最初はやかましく姿勢の矯正を行いました。私たちは越中禪をはずすと全裸でデッキに一向に合って整列し矯正されたのです。(尤も後でできたのですが陸軍の地方の部隊では普通に行われていたようです)このような方法は公然とはできなかったようですが分隊内の諒解で行っていたようです。これはほぼ一

週間続きました。午後の「課業はじめ」のラッパが鳴ると、いったんデッキに引き返し、そこで行われました。まず「カカレ！」の号令で作業衣から禪をはずし素裸になって整列するまでの時間を先任下士官は計っていて、毎日そのタイムを縮めてゆくのです。衣類はきれいに整頓して食卓上に並べるのです。規定のタイムができないと何度でもやりなおしを命じました。またタイムがくると「待て！」の号令で整列に間に合わなかった者は「注入棒」で気合を入れられるのです。「気をつけ」をとらされると下士官は一人一人の前に立つて姿勢を矯正します。まず下士官が前に立つと新兵は一步前へ大きく踏み出し直立します。下士官は始めに全体の姿勢を点検し、アゴや尻の引き具合を直すのです。それから股の開いている者は両膝が着くまで叱咤します。すべてそれは「注入棒」で行われるのです。私たちはこの異様な光景の真只中に立たされてすっかりうろたえてしまった最初の日を忘れることができません。

海軍生活には、これに類したいろいろなことがたくさんありますが機会をみてまた通信しましょう。またこのような経験が他にあると思います。もしあればぜひ発表していただきたいと思ひます。

(おわり)

ビーチボールの魅力

佐田春雄



夏が近くなると、デパートの海水浴用品売場には、美しい水着と共に、大小さまざまなビーチボールや浮袋が並べられます。そして、いよいよ夏が来ると、岩アユのような肢体をもった娘や青年たちが、楽しそうにボールを投げかわしたり、水に浮べて戯れたりする風景が見られます。じっさい、ビーチボールは夏の海浜に欠かせないアクセサリです。

ところで、このビーチボールは、若い男女にとって単なるアクセサリ以上の意味をもつことがあるのです。じゅぶん息を吹き込まれてはちきれそうにふくらんだビーチボールを、ぐっと抱きしめたときの弾力感は、悩ましいほどの肉感性をもっています。(K・T氏が本誌三十年一月号で、ボールが女性のヒップや乳房を思わせると述べておられるのは全く同感です。)また、大きい輪型の浮袋は、女性のむっちりした太腿を思わせます。女性たちも、この強力感と肉感性をいま意識的に利用しているようです。例えば乳房を大きく見せるためにブラジャーに入れる空気吹込式のパットなどがそれです。また、夏の映画雑誌をかざる水着姿の女優さんたちも、ほとんどが大きいビーチボールか浮袋をかかえています。

このビーチボールの魅力は、たんに弾力性だけから来るものではありません。ここにその理由と利用法を説明しましょう。第一に、ビ

ビーチボールは、ふっうのゴムマリとちがい、使用する前に空気を吹き込み、終れば空気を抜くという構造になっていることを考えるべきです。いつぞや、漫画にこんなのがありました。水着姿の女性がビーチボールをかかえ、ゴム管を口に当てて息を吹き込んでいる。そのかたわらに青年がいて、「ボクもボールになりたい!」とつぶやいているのです。

これがどういう意味か考えてみましょう。第一は、むろん接吻の連想です。ビーチボールについているゴム管は、彼女の美しい唇におしこまれていきます。第二に、彼女の胸から出る青春のかぐわしい息吹きへの羨望です。いいかえれば、自分がボールのように彼女の唇をあててもらい、その甘い息を体内に吹きこんでもらえたら、という願望を示します。

このうち、第一の接吻の願望は、ビーチボールを利用することで、海岸でも公然と満すことができます。恋人らしいアベックが海岸に来て、どちらかがバッグから折たたんだビーチボールを取り出す。こういう光景はいくらでも見かけますが、さて、ふくらますのはどちらでしょうか? 理くつからいえば、肺活量の大きい男性がふくらます筈ですが、じつさいは女性が息を吹込む場合のほうが多いようです。その理由はさきに述べた漫画が端的に説明しています。ゴム管のさきを口中に挿し入れる行為を無意識的に恥かしがる女性

も稀にはあります。この型の女性は、ボールを差し出されても、へいやよ、あなたがふくらしなさいよと拒否するか、又は彼氏に背を向けて見られないようにして、ふくらまします。しかし、現在ではこんな内気な女性は稀で、ことに開放的な海水浴場では、堂々と彼氏の面前でふくらますのが普通です。もともと、水着ポーズの写真でも、ボールを持っているポーズに比較して、ふくらましているポーズは割合に少ないようです。しかし、皆無ではなく、しかも徐々に多くなっています『日本カメラ』一九五六年八月号の表紙には水着の女性が三色のビーチボールを両手で支え、ピンク色のゴム管の先を唇にあてて息を吹込んでいるポーズのカラー写真が大きく出ています。同社の『女性ポートレート・ポーズ集』にも、同じテーマの写真が数葉のついています。

ところで、おしまいまで勇敢にふくらます女性もありますが、大抵はボールがふくらむにつれ内部の圧力が高まるので、しだいに苦しくなります。そこで彼女はへああ、もう苦しくって、これ以上できないわと、彼氏に渡してしまふ。このとき、ボールのゴム管は彼女の唾液で濡れており、ルーシユが溶けて管の尖端が紅く染まっていることさえあります。そのあとを受けて彼氏がふくらませば場合によっては最初の間接的な接吻になります。

よう。逆に男性がさきにふくらまして、女性にあとを続けさせるケースは、当然、ありません。もっと深い仲の二人で、しかも女性が大胆であれば、ちようど一本のストローで一つのソーダ水を交互に飲むときのように、頬を寄せあつて、交るがわる、ゴム管に口をつけ、一息ずつ吹込めば楽しいでしょう。しかし、さすがに海水浴場でも、テントの中ならともかく、海岸ではまずこの光景は見られないようです。

次に、さきに触れたように、ボールの中に吹き込まれたのが単なる空気ではなく、若い美しう女性の胸から出たかぐわしい息だということが重要な役割をします。まして、その女性を愛している青年にとっては、女の息が男性にとつてたまらない魅力をもっている実例は、谷崎潤一郎の『痴人の愛』にはつきり書かれています。女主人公ナオミは男に決して接吻を許さず、彼の口をあけさせておいて、少しはなれた所からハーツと息を吹きこむ。彼は目をつむって、おいしそうにそれを吸いこむ。この辺の心理がよく描かれています。ところで、こう考えてくると、女性がふくらましたボールは、いわば彼女の息のカンヅメです。荻原朔太郎の『夜汽車』という詩は、恋人と二人で旅行している女性が、「そっと空気枕の口金をゆるめて息を抜く女心」を歌っています。

だから、楽しい一日が終って彼女がボールのゴム管の結び目をとき、自分の吹き入れた息を空中に放出するのを見ると、男性は「ああ、もったいない！」と何か貴重なものがむだに捨てられるような淋しさをおぼえます。こんなとき、彼女がほんのいたずら心から、ゴム管を彼氏の顔に向け、両手でボールをおさえながらシューツと息を注ぎかけるようなことがあれば、男性はそれに忘れがたい印象を抱くようになります。

さらに、テントかバンガローの中でなら、女性がもっと積極的に出て、あのナオミに倣って、彼氏に口を開かせ、そこでボールのゴム管をさしいれ、「どう？あたしの息、おいしいでしょう？」とでも云って、息を注入したりすれば、これはもう立派な恋愛技巧です。これは、むろん、もっと進んだ間柄の恋人同志でもやれます。なお、さいきんの女学生の用語に、「空気を入れる」というのがあり、男にモーションをかけてフラフラにさせることに使われていますが、これなど、仲々意味深いではありませんか？

男性の側から女性にこのテクニックを応用するばあいもあります。女性の耳の穴、鼻孔、ワキの下などが敏感な性感帯であることは、よく知られています。紙よりや羽毛を女性の耳の穴に軽くさしいれてくすぐることは昔から行なわれていますし、また、美術学校

の学生がモデルに女性の耳に軽く呼吸を吹き込んで反応をしらべた報告はたびたび引用されました。それによると、「一種ふしぎな感覚が電流のように身内に伝わると、サツと乳に感じ、ついで下腹部の方へ流れた」という女性、「首から肩の辺がムズムズして、くすぐったいような異様な感覚が、次第に下の方へ流れて行き、ついに下肢にまで及んだ」という女性などがあります。いずれも、あきらかに性感帯ではありませんか？

ビーチボールを利用すれば、これが簡単にできます。このばあい、充分にふくらましたボールは、息のタンクの役をします。砂浜で二人で寝そべっているとき、男性がなにげないふりをして、そばに置いたビーチボールを取り、ゴム管の結び目をといて、管のさきを彼女の耳の穴から数センチのところまで近づけ、管の中ほどを指で軽くつまんで、ごく弱い勢で空気を耳孔に注入するのです。このばあい、管を耳孔の中に挿入する必要はなく、また強い勢で空気を注入してはいけません。ごく弱い空気で耳鼓膜をくすぐるのがコツです。これなど、海岸でもあまり人に気づかれずにやれます。バンガローやテントの中でなら、彼女の鼻孔の一方に管をさしいれてみるのもよいでしょう。息が鼻の中を通って口の中に抜ける感覚を好む女性もあります。ワキの下も性感帯ですから、そこへゴム管をむけ

て空気を注ぎかけることも一法です。この場合は両手でボールをおさえて、強い勢いの空気を注ぐのが効果的です。

以上は、ふくらますときの利用法と、ふくらんだボールから出る空気の利用法ですが、次に、ふくらんだ状態のボールはどんな利用法があるでしょうか？ ボールの弾力性と肉感性については、最初にすこし触れましたがもっと詳しく調べてみましょう。まず、弾力性です。ビーチボール、浮袋、空気枕などをいわゆる腰枕として用いることは、これらの弾力性を利用してのわけです。ボールの空気の入れ方を加減するもよく、また浮袋の中央にボールを入れて安定をよくすることもできます。海岸などでは、自動車のタイヤのチューブや、小型のゴムボートなどを貸していますが、あれなどこの目的に最適です。

しかし、これらは二次的な利用法です。独自の男性や未亡人などは大型のビーチボールや浮袋をいわゆる抱き枕として使用します。熱帯ではダッチ・ワイフと呼ばれる抱き枕が公然と使用されています。

最近、筏状の浮袋（太い二本の棒状浮袋を二本並列にしたもの）や、これの一本だけの棒状浮袋などをデパートで売っています。これが、これらは抱き枕として最適でしょう。ある青年は、恋人が来るごとに、彼女にボール

を数箇ふくらませ、その次に会えるまで毎晩、その一箇を抱いて彼女を偲び、他の数箇は、ゴム管から少しずつ息を絞り出して彼女の息を吸って慰めていたそうです。

男性が用いる直接的な道具としては、詳しい説明ができませんが、例えば二箇の空気枕を用いる方法があります。空気枕はゴム引き布で作ったものと、純良な薄いゴムで作ったチューブの上に布をかぶせたものとありますが、ここでは後者を用います。布は取りはずして、ゴムのチューブだけを二箇、ふくらましておき、両手で枕の両端をしっかり握ります。こうすれば、二箇の枕はピッタリ密着します。ビーチボールは丸いですが、ラグビー用のチューブは卵形なので適当です。アメリカ空軍から放出された非常用浮袋はすばらしいもので、元来この目的に設計されたものではあるまいかと思われるほどです。薄い黒色ゴム製ですが、丈夫で、しなやかなくせに、大の男が乗っても決してパンクしません。口金も特殊構造で、おさえているあいだ空気が入りますが、唇をはなすとパネ仕掛で弁が閉じるので、逆流しません。

なお、書き洩らしましたが、戦前、ある書物の室内遊戯の項に『空気枕』というゲームが紹介されたことがあります。人員を二つに分けて、向きあって二列に並ばせ、その各組の最初の人が、別に離れたところにいるアン

パイヤーの合図で、手にした空気枕に息を吹きこみはじめる。終ると栓を閉じて次の人に送る。受けとった人は栓をひらいて、すっきり息を絞り出して次へ渡す。こうして交互にふくらましたり、抜いたりして、最後の人は自分の仕事を終えると、走って行ってアンパイヤーに渡す。むろん、早く届けた組が勝ちになる、というゲームです。これなど、各組のメンバーを男女交互にしておけば、仲々おもしろい遊びでしょう。ちよつと変化をつけるために、空気を抜くのをやめて、最初の人から次々に一息ずつ吹きこんで、早く一ぱいにふくらました組が勝ちにしてもいいと思います。このばあい、何も空気枕とは限らないので、海水浴場などでは十五吋以上の超大型ビーチボールか、大型浮袋を二箇用いてこのゲームをやれば如何ですか？

もう一つ筆者が目撃した、ややサディスティックなゲームがありました。少年たちが一列に並んで、その先頭の者から数メートルに離れた立木に両手でつかまった一人の少年が頭を低くし、お尻を高くしているのです。列の先頭の者はボールを持って犠牲者を狙います。犠牲者はボールを当てられまいとして、お尻を上下左右に動かすのです。攻撃者はただ一回しか投げることを許されません。先頭の者が済むと、次の者が進み出て、やはり一回投げる。犠牲者には列中の者が次々になる

のです。このゲームをしているのは少年工員ばかりで、さすがに女子工員は参加せず、そばで見物していました。これも男女混合で、しかも水着姿で海岸でやったら、相当な魅力がありましよう。若い女性のお尻が動くシーンなど……それに、尻に大きなボールが当ることは、犠牲者にとってもかなりの刺激がありましよう。革張の硬いバレーボールでなく、弾力性のあるビーチボールでこのゲームをすれば、すばらしいでしょう。

ビーチボールの魅力について、気づいたことを挙げてみましたが、読者の皆さんからも新しい小道具についての着想をお知らせ下さい。

絵画 写真 のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフォトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略画の添布をお願いします。(困難なときは略画はなくとも差支えありません。)(編集部)

「残虐な女性」

ヨハンネス・ビルリッゲル博士著
森 本 愛 造 訳 註

「早くも遙かに聞えてくる野性の牙をむいた獣達の吠える声、怒りの声、呻く声をきく。彼等は暴れ、狂い、騒ぐ。何という恥ずべき事か！ 人間達は彼等を向い合せ、昂奮させ、挑発する。」

日曜日毎に動物の斗争！ 場内の廊下に、パリジエンヌは化粧して押し寄せる。優しいといわれる、阿呆な淫蕩なフランスの女性達！ 彼等は美しく着飾って人が神の造り給いしものを濫費する光景に歓声を上げるのである。

（訳者註—最後の二行目、神の造り給いしものを濫費するの件りに注意されたい。黄色人種も亦、神の造り給いしもの、濫費すべからざるものとするか！）

同様の事柄をフリードリヒ・ニコライはより詳しく、以前にヴキーンで広く行われてい

た動物同志の闘争「ハツソHATZ」について彼の風俗史風な有益な報告の中で次のように述べている。

私は一度この非人道的な見世物を見た事がある。私は或る種の忌むべき行為は、それを発表する為に一度は実際に見ておかねばならないと考えていたからである。しかし今私は二度とあのようなものを見ようとは思わない。

場内に這入ると犬の吠声、野獣のうなり声、監督の破れ鐘のような声と一緒に動物達の餌である腐肉の異臭が私を襲った。この騒音と悪臭にも拘らず、三階建てに建てられたこの場内は男女の見物人で一杯であった。彼等は庶民ばかりでなかった。きれいに髪を分け、立派な衣服の紳士達も大勢まざっていた。更に信じ難いことではある

が、あらゆる自然と人工の美を兼備した婦人達が多くおり、彼女達の美しい手が香水函をいじりながら、犬が相手の動物の耳のうしろに咬みつく度にむやみに拍手喝采しているのであった。戦いつつある動物達でさえ、彼女達ほどの不倫な勇氣と野蠻さとは持ち合せていないように思われた。

落し戸が開かれると動物達は決して場内へ走り出てくる訳ではない。彼等は殆んど例外なく檻の奥の方の隅にちこまってしまうのである。係の男達は、鉄の棒で動物達が否応なしに檻から出て来るまで突いたり叩いたりするのである。動物達は苦しまぎれに鉄の棒に喰いついたりする。すると男達は喰いついたまま鉄の棒ごと場内に引き出してしまふ。忽ち今まで吠え狂いながら監督に押えつけられていた犬共が放される。死物狂いで逃げようとする動物は間もなく犬に捉って、耳に喰つかれる。犬が耳を喰い切ってしまうような時、場内は拍手と足踏とが渦巻く。こうして、捉えられた動物が適度に傷つくと監督はたけり狂っているいまわしい犬共を押えつける。動物は血を流しながら開かれた檻の方へといそぐのである。こうして傷ついた獣は再び興行に出演しなければならぬのである。このような力弱い相手を苦しめる様子を目の前に見ることは耐え難い苦痛であった。

次に私は、始め場内に出たハンガリア産の美しい雄牛が、僅かの間六匹から八匹の犬を蹴散らすのを見た。が忽ち犬の一匹が牛の耳のうしろに咬みついた、もう一方の耳に更に一匹、それから口の両側にも犬がぶら下った。牛は恐ろしい声を出しながら犬共を振り廻した。見物席からは怖しい程の哄笑と昂奮の声がわき出した。遂に片方の耳は喰い切られた。すでに三匹の犬が横腹に喰いついて離れなかった。遂に犬の一匹は牛の局部に喰いついた。牛は此の世のものとは思われない声をあげてもがいた。この状況に見物席からは一様に哄声が上がったが、それは牛に対する同情からのものではなかった。

若し、観衆の一人が、このような残忍な状況に対して厳肅な気持を持ったとしても監督達が牛を片付けて、鹿とロバに花火をくくりつけて犬が追いかける次の演目を見たときに、動物達の可笑しな踊りが、静かな反省を打ち消してしまうのであろう。次には二頭の熊が追い出された。一方は先程犬に片脚をやられてビッコをひいていた。片方はすでに片耳を喰いちぎられていた。彼等はすでに戦う意思も能力も失ってしまったように思われた。犬がとびついたが監督が押えた。一頭の熊は落し戸の処へ辿りついたが戸が開かないので、地面を掘

り始めた数分の間に穴は可成の深さになった。そうして、この出し物が終ると、二匹の狼と一匹の豚が追い出されて、狼は私達の目の前でこの無抵抗の豚を生きたがら喰ってしまったのである。

併し遂に、私は発見した。数人の女が名状し難い嫌悪の情を浮べて席を立ったのである。この数は甚だ少数ではあったが私と同じような嫌悪する感情が発生した事は認められた。だが、大多数の血に狂ったような観衆の喚声は私が扉を排して戸外に出るまで耳を聳せんばかりであった。門の外の看板には、先程の嫌悪すべき演目について誇らし気な客寄せの文句が記されていた。いわく。「狼はその獲物を喜劇的に食べる」と。

――記者註――私達はこの次にチータ狩りの婦人達、カテリイナ・デイ・メデイチの淫虐、シカゴの屠殺、上海の豚殺しなどの諸項を見るのであるが。時宜を得て、乗馬による犬を使用した狩、特に婦人の同伴が通常である狩りの実際について左記の二映画について見られる事を希望する。追いつめられた獣を如何にして殺すか、そしてこの殺す際の儀式ばった気取り、女達の華美を競う衣裳などについて見られたいと思う。

一、「愛は惜しみなく」(伊太利) ヴィスタヴィジョン・テクニカラ

＜ANDREA CHENIER＞

二、「チャタレイ夫人の恋」(仏) 黒白版

＜LADY CHATALEY＞

近代においても猶女性達が動物同志の戦いに興味を持っていることは、エリザベト・フオン・ハイキンク女史の日記によっても証明される。この日記は、女史が旅行した世界の四つの地方での見聞が主体となっているのであるが、彼女がインドでヴィゼ王と共にした旅について次のように記している。

「私達はそれから動物の間で行われる争闘を見ることになってマハラジャ(藩王の意)の宮殿にゆきました。そこでは、象、水牛、カモシカ、野豚、鶏、鵠、雲雀などが互に戦いましたが、彼等は何れも死に至る前に引き離されました。この理由は、身分の高い藩王が獣や鳥の互に殺し合うのを観覧して楽しんだとあつては(宗教上の意味か?――記者)一寸まずいかららしく思われました。」

更に他の部分で彼女は次のような出来事を記している。「私達はチータ(黒ひよりの一種らしい敏捷、且戦闘的な野獣の一つ――記者)をつかう狩の為に朝の五時に起されました。私達が街はずれのセリヌガルの方へゆくと、象や馬やトンガと一緒に二台の手押車が用意してありました。その車には一頭宛の黄色っぽい毛をしたチータが眼かくしをして積み込まれていました。チータというのは一種

のヒョウでこの国ではカモシカを狩るのに用いるように仕込まれるのです。

私達は奥地の方へと進みました。遂に私達の行手に一群のカモシカが見えました。雌と若いカモシカは不安を感じて早速逃げ散ってしまいました。一頭の巨大な逞しいのが静かに残っていました。手押車の一台が、気付かれないようにその近くに近付きました。扉が開かれてチータはカモシカ目がけて飛びかかります。脚に自信のあるカモシカは夢中で逃げますが、チータは大きく跳び上ってカモシカを捕えてしまいます。私達は全速力でその現場へ馬を駆りました。そこには大きなカモシカが地面に倒れて傷ついた咽喉をゴロゴロと鳴らしていました。チータはその咽喉にしっかりと喰付いているのです。

私にはこうした狩がスポーツとは思えませんが、ただ非常に面白いものだということが覚えています。

『訳者註』、私達が異常な関心を寄せている沼正三氏の老大な結構を持つ小説風作品「ヤブウ」に「倭人の闘争」の場面の在った事を想い出して見よう。ヤブウにおいて氏が理想化する為に未知の天体を背景に未知の世界の未知の人種を主体として、少しく清潔すぎる描写をしたあの場面は、現世的には前例の場面である。沼氏の想像に違わず、この著者である女性は何の顧慮もなく書いています。面白い

ものだ。と。黄色のみならず全有色人種の相剋は白種人種にとって「面白いもの」であるのでもあろうか。政治的の考慮は今これを除こう。汎マゾヒストの中で、パギニスムの傾向のある大部分の人々にとって、これらの簡単な言句は戦慄的な効果がありはしないだろうか。

一般には知られていないとは思いますが、各地の屠殺場に現れて動物達を殺す場面を楽しむ女性の数は相当に多い。アベ・リシヤアルは伊太利の女性の可成り多くが、夜になると殺されて座レンする動物を見る為屠殺場へ遊びに行く事を指摘している。これに関連して有名なカテリイナ・デイ・メデイチについて今更繰返す必要はあるまい。『原著者註』、この項に就いては「女君主の権力濫用の項」にやられたし。

アメリカのシカゴ市の有名な屠殺場は、雄大な魅力をもって婦人達を誘惑しているようである。一九二五年五月二十日付のハムブルゲル・ナハリヒテン紙はシカゴの屠殺場という論文を掲げているが、その中で、毎日数知れぬ多数の観覧客の中、多数の女性客がいる事を記している。前にも引用したゾフィ・デューネルという女性の報告では、このシカゴ屠殺場『訳者註』、正しくは Union Stock Yard of Chicago.』訪問について次のように書いています。

「先ず私達は案内人に従って事務所にゆき、つづいて牛の屠殺室に案内されました。そこで一人の男が牛の脳天を手を持ったハンマーで一撃します。すると牛は簡単にたおれて次の部屋に引きずり込まれます。そこでは全く簡単に牛の首が斬り落とされるのです。その部屋は烈しい出血の為にまるで血の浴場の様でした。私達は一寸高い所からその部屋を見下すことが出来ました。豚の刺殺はもっとスリルがあります。豚は六匹ずつ連れてこられます。一人の男がカギで豚の前足をつかんで横に絶えず移動しているコンヴェアーの上上げますと、もう一人の男が手早く——この男は一分間に六匹の胸を刺すのです。——豚の胸を刺して殺すのです。コンヴェアーが動いてゆくとたちまち豚は毛削機械で真白になって出てきます。此処には一日に牛を五千頭、豚は一万匹、他に数千頭の羊が殺されているのです。また東洋に旅行する途中でこの屠殺場を見学する機会を持ったエムマ・クレエベル嬢はその印象を次のように述べています。『神経の弱い人は此処の見学は適していないようです。ここでは信じられないほど多数の動物が、物凄い速度で殺されてゆきます。何しろ、二五〇匹の豚が五分間で殺されるのです。』次の瞬間に殺される運命にある動物達がひしめいているのを見るのには相当に逞しい神経が必要です。とにかく怖いほどスリルのある見世物なのです。」

彼女は而も、屠殺を見るなどは少しもいっていいのである。後に上海市を訪れた時の記述の中で彼女はこう述べているのである。

「私達はひどい臭気を感じました。丁度私達は糞と血の中を徒渉しているようでした。ここでは盛んな屠殺祭りが催されているのでした。苦力達は数え切れない程の豚を殺していました。血は太い流れとなって街路にそそいでいたのでした」。

そして、彼女は再び「怖しい程のスリル」という言葉を繰返して強調している。彼女がいくら上品な言い廻しをした処で、私達はこの文章を読んで、彼女の慾求や満足が奈辺に在るかを知らないのである。彼女達は努力してそれらの恐ろしいスリルや身の毛のよだつ見世物に近付こうとしている。これらの引用された例によれば、彼女達は意外や偶然にそうした場面に遭遇したのではない。当初からその場面を予想して、或は期待して近付いたのである。そうして性慾生活を知った女性達が故意に近付こうとした、これらの血なまぐさい場面と彼女寺の慾求の対象とを考えてみると、これらは世に所謂サディズムへの偏向を一般の女性が有していることを示していると思うのである。クラスノフの報告するところによれば、ロシアでは萎黄病の女達はその治療の為に屠殺場に赴いて殺されたばかりの獣の生温い血を呑むという。この事の本質的な意味

での「血の渇き」にある性的感情が対応する事は推測するというより当然の帰結である。

此処に至って「女性が戦場に惹きつけられる」ことに観察の眼を向けることは強ち飛躍するとはいえないと思う。私達がこの事について考える時、直ちに思い浮べるのはロシアにおける將軍ポチヨムキンと彼を囲繞したアマゾン達——訳者註、南米アマゾンの女性の意味ではない。昔アマゾンという女人国がありこの国と男の国との戦でアマゾンの女達は勇敢に男を破り、女兵達の名が轟いたとされている伝説から、女軍——これは慰安婦の群を意味する場合でなく、男同様の戦士としての女兵軍を指す。——とか、女の兵士を指し、特に騎馬の戦争であつたが故に、女性にして乗馬に巧みなものを指すこともある。マゾヒストを馬に見立て、打跨がり、乗り廻す女サディストをもよくアマゾンと云う。の事であるが、このポチヨムキンのアマゾン達は、同時に將軍の後宮の女達であり、トルコとの戦争において戦いの終る毎に彼女達は逞しいトルコ兵の死体を裸にして歩くのを楽しんだのである。死者は皆軍刀を手にして、裸になつても未だに戦っているかようであつた。オスサコフの攻略において、凍てついたリマ河の上に戦死者は裸のまま積み重ねられた。そうして遂に春に至って河の水のとけるまでそのままに放置された。ロシア婦人達は橋に

乗ってこの人肉のピラミッドをまわり、冷気の為に硬直した回教徒の美しい肉体を嘆賞したのである。ロシアの女達が野蠻であつたからであらうか。いや、私達はつづいて、優雅であることを最大の誇りとしたフランスの上流社会における実例に直面するのである。前掲のカテリイナ・デイ・メデイチはフランス人の女官をひきつれて、有名なバルテルミイユウの大虐殺の直後、裸で殺されたフランス人の死体を見て楽しむために市中を散策したのである。私達は更にドイツにおいても、女性が残酷な見世物に深い関心を持っていることの実証をしなければならぬ。ドイツもまた例外ではない。

訳者註、訳者は前回になるべく註を減らしてゆくと書いたが、私はポチヨムキンの女兵が出てきたので特にこの為頁を割こうと思う。ドイツの歴史学者としても有能であつたザッヘル・マゾツホ教授は、その博識に準拠してサド・マゾヒズム文学の源を造り上げた。有名な代表作である「毛皮のヴィナス」VENUS IMPELZ と並んで「性の受難者」という作品がある。これは先に沼氏が、復刊以前の旧刊の本誌で、憧憬をこめて書いていたことがある。特にポチヨムキンのアマゾンの件りの終りに緑色の乗馬服をつけた謎の美女が、鞭を弄んでいる件りがあるあたりからトルコの將軍をだまし討ちにして生捕る処で

原著が終っているのに対し、海賊版として、
——この海賊版は沼氏作る処のものか、何か
の典拠があるのかは今もって判然としないが
——かなりの長い結尾を付して、アマゾン達
が捕えたトルコのパシヤを鞭打ち、犬の声で
吠えさせ、自分の汚れた長靴を舌で掃除する
ことを強要し、やがて飽きてしまつて、その

屈辱的な作業を命じたまま、室に戻つて笑い
興ずるといふ内容を紹介していた事を想い出
す。後に氏が抄訳して紹介したキエフ太公妃
オリガに関する「黒皇妃」と共に、珍らしい
だけでなく、古典にして現代にそのまま通用
する好例として私は覚えてゐる。ビルリンゲ
ル博士の著述はすべて典拠を明示している上

単なる読物ではないのであるが、この中に偶
々、ポチヨムキンのアマゾンが出て来たので
未知の方のあるかもしれぬとのお節介から、
このことを付記しておく次第である。すでに
入手困難となつた旧号ではあるが、前記「黒
皇妃」やマゾッホについての諸項は、何とか
もう一度紹介してほしいものの一つである。

コンプレックス・イメージ

医学幻想

古井直哉



嘗つて「あまとりあ」誌上で、高橋鉄と押
鐘篤が種々論争したとき、何かの拍子に押鐘
博士が高橋氏に対して「君は医者コンプレッ
クスがあるのじゃないか」といったのを読ん
だことがあるが、たしかに医者でない者には

医者という職業に対する羨望がある。殊にわ
れわれマニアにとっては、今更自身でこ
の職業を選択することは出来ないが、男であ
れ女であれ、たとえ、それが妙齡の女性であ
っても、患者として訪れたならば下着を脱が

せ自由にその肌をいじり廻して、しかも金儲
けの出来る商売は外にはないだろう。その職
業の性質上、如何に病氣感染の危険があり、
また悪臭に満ちた汚れたものに直接接触しな
ければならないということであっても——いや
或る意味では、そのことすらがマニアにとつ
ては羨望の一つの条件である——ということ
が出来る。

仕事に精を出して腕を上げれば上げるほど
マニアの嗜好性に合致したあらゆる可能性が
彼の前に開けてくるのである。どうして産婦
人科医にならなかつたのだらうと今更の如く
悔やまれる。いくら産婦人科学や産科の本を
漁ってみて、その写真や挿画にイメージを画
いても、あの生々しい女体が初めて検診台に
上つた時の羞恥心や分娩時の呻き声を、直接
耳で聞き、かつ見たり心で味ったりすること
が出来ない。それは夫すらが、自分の妻に対
して知ることが出来ないものである。このよ
うな医者コンプレックスは、誰もが抱いてい

処置の部

ることであらう。単に看護的な処置だけでなく、その肉体を自らの手で切り開き、患部を挟み取り、また着物の破れを直すように縫合することや、仁術の名の下に、あの内臓のぬめぬめとした温い生きた感触を、自分の手で十分味わうことが出来るのである。殊にそれが若い娘の肉体であるに於ては――。

それならば医者は一体どんな処置をして、どのように患者から金を得ているのであらうか。次に健康保険の点数を挙げてみよう。一点は都市では十二円五十銭、田舎では十一円五十銭であるから、簡単に計算が出来よう。勿論、これは健康保険の価格であるから、お抱えの医者ならば、もっとボルことは確かである。しかし医者をやっていることと、その具体的な金額を総合すれば、われわれのイメーシは更に現実的に彼等の仕事を理解し、昇華することが出来るであらう。わたしの趣味からいえば、男に対する処置手術は、女からそれをされることのイメーシにおいて成立し女に対する処置手術は、それを奉仕させられること乃至は無理やりにそれを処置すること――出来るならば麻酔や許諾の助けを借りずに――イメーシにおいて成立する。いわば、マゾ、サジ、コンプレックスであらうか。

(二) 產婦人科的処置

(1)	尿道洗滌	二點
(2)	尿道ブジー挿入	二點
(3)	誘導ブジー挿入	六點
(4)	尿道側管治療	
	イ、外尿道側管	五點
	ロ、内尿道側管	二十點
(5)	摂護腺（前立腺）按摩	二點
(6)	摂護腺冷温楊導尿	四點
(7)	導尿	
	イ、單純	二點
	ロ、尿道拡張法を要するもの	八點
(8)	留置カテーテル設置	五點
(9)	膀胱穿刺	二十點
(10)	膀胱内凝血除去	五十點
(11)	膀胱洗滌	三點
(12)	腎盂内注入	四十五點
	（含輸尿管カテリスマス）	
(13)	下疳処置	二點
(14)	嵌頓包茎整復	七點
	（陰茎絞抱等）	
(15)	陰囊水腫穿刺	五點
(16)	膀胱鏡検査	三十點
	産婦人科的処置	
(1)	腔洗滌（含タンポン）	三點
(2)	子宮腔洗滌（含タンポン）	四點
(3)	子宮出血処置（分娩外）	十點
(4)	外廻転	六點
(5)	胎盤圧出	八點

(三) 一般処置

(6)	分娩看視料	十五点
(7)	卵管通氣通水検査	二十点
(8)	妊婦動物反応検査	二十点

(四) その他

(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
直腸鏡檢查	肛門処置	瀉血	滋養浣腸	注腸	洗腸	高位浣腸	浣腸	胃洗滌
十	二	三	三	三	三	十	二	八
点	点	点	点	点	点	点	点	点

イ、補体結合反応検査
ロ、沈降反応検査

(1) 梅毒血清反応検査
イ、補体結合反応検査
ロ、沈降反応検査

四十点
四點

手術の部

(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
摂護腺癌切開	外尿道切開	内尿道切開	婦人尿道ポリプ切除術	睪丸摘出術	陰茎切断術	包茎手術	人工肛門造置術	腸切開術
				百点	百点	三百点	二百七十点	四百点

(イ、会陰切開)	五十点	(20) 分娩時陰門側切開兼縫合術	二十点
ロ、直腸内切開	二十点	(21) 分娩直後頸管裂傷縫合術	七十点
(ニ) 婦人科及産婦人科的手術		(22) 子宮破裂手術	四百点
(1) 鎖腔術	百二十点	(23) 子宮外妊娠手術	四百点
(2) 処女膜切開術	八 点	(24) 胞状鬼胎除去術	七十点
(3) 処女膜切除術	二十点	(25) 不完全流産手術	六十点
(4) バルトリン氏腺切開術	五 点	(26) 人工妊娠中絶術	
(5) 外陰部切除術		イ、妊娠四ヶ月迄	七十点
イ、良性なるもの	百 点	ロ、妊娠六ヶ月迄	百 点
ロ、悪性なるもの	百五十点	ハ、妊娠七ヶ月以上	七十五点
(6) 会陰裂傷縫合術		(27) メトロイリーゼ	七十点
イ、筋層に及ぶもの	三十点	(28) コルポイリーゼ	三十五点
ロ、肛門に及ぶもの	五十点	(29) クレーニツヒ氏手術	二百五十点
(7) 会陰整形術	百二十点	(30) コット氏手術	二百五十点
(8) 子宮頸管整形術	百五十点		
(9) 子宮腔部焼灼術	二十点		
(10) 子宮全剔出	四百五十点		
(11) 腔脱手術	二百点		
(12) 完全子宮脱手術	三百点		
(13) 骨盤高位分娩術	六十点		
(14) 穿顱分娩術	百十點		
(15) 断頭娩出術	百二十点		
(16) 載胎娩出術	百十點		
(17) 帝王切開術			
イ、腹 式	四百点		
ロ、腔 式	三百五十点		
(18) 分娩時子宮出血止血法	三十点		
(19) 胎盤用平剝離術	四十点		

以上、挙げた事項について若干の解説をすることにする。

(一) 尿道ブジー挿入とは、尿道拡張のために行うものである。

(ニ) 摂護腺按摩、慢性摂護腺炎、摂護腺神経症等の治療に使われるが、医学辞典によると次のような方法で行われる。

「患者をして膝肘位、または背位をとらしめ示指にゴムの指嚢を被せ、よくオリーブ油、またはワセリンを塗布して直腸内に挿入し、注意して静かに円を画く如き運動を以て左右各葉を二、三分間あて摩擦し、ついでその再両葉をこえる程度にまで一、二分間摩擦して

以上、挙げた事項について若干の解説をすることにする。

(一) 尿道プシー挿入とは、尿道拡張のために行うものである。

(ニ) 摂護腺按摩、慢性摂護腺炎、摂護腺神経症等の治療に使われるが、医学辞典によると次のような方法で行われる。

「患者をして膝肘位、または背位をとらしめ示指にゴムの指囊を被せ、よくオリーブ油、またはワセリンを塗布して直腸内に挿入し、注意して静かに円を画く如き運動を以て左右各葉を二、三分間あて摩擦し、ついでその再両葉をこえる程度にまで一、二分間摩擦して

止む。もし……精囊、容易に触診しうる如き状態にあらばこれも共に摩擦すべし。マッサージュは通常隔日にこれを行い、回をおいて徐々に圧迫をますますとくなくす。六週間以上は継続すべからず。」

この文章から描くイメージは各人それぞれ異なるであろうが、その内容については、各人の自由である。それに施術の費用は僅か三十円余りしか払わなくてもよいとは！

(三) 留置カテーテル設置とは、膀胱にカテーテルを挿入して、それを固定して置くことである。勿論、カテーテルからは尿が出っ放しになる。

(四) 嵌頓包茎整復の字句はむづかしいが、亀頭が包皮によって絞結されることで、包茎の人によくおこる。

(五) 膀胱鏡検査は説明していれば長くなるので、別の機会にゆずる。

(六) 腔洗滌は我々の垂涎のものである。なれるならば専門の雇人になりたい位である。看護学教本には、次の注意すべき項が記されている。

「腔洗滌は仰臥位で行う。患者は独りで嘴管を挿入させてはいけない。また自分で洗滌させてはいけない。」

その方法から二、三抜書すると

処置前に排便させること。先ず外部を洗滌し次いで嘴管を静かに挿入する。イリゲータ

―が空になる前に、余った溶液で外部を洗滌する。

また腔洗滌の記録は次のものをとる。

(1)処置時刻 (3)使用洗滌液名、濃度及び温度 (2)洗滌時の分泌物 (4)看護夫の頭文字

なおタンポンとは「つめわた」のことである。唯、ここでもっと知りたいことは、排尿

排便の方法であるが、どなたか資料を御存じの方はお知らせ願いたい。

(ハ) 外廻転は胎児の位置矯正のことである。

(ニ) 分娩看視……これについては別に書く予定である。

(ト) 浣腸についてはいろいろ紹介されているので、ここでは、その時に使用する薬液につ

映画速報欄

千葉栄市

東映「抜打ち浪人」

大友柳太郎をおびきよせる人質として伊藤雄之助は、台所から手を拭きながら出て来た同じ長屋住いのお静(中原ひとみ)をかどわす。当身を食わされて気絶して肩に担がれたお静の手から手拭がハラリと落ちて……次の桜土堤のシーンで駕籠の中の後手縛り、三カット、アップ一回、C級。少年探偵団、鳳城の花嫁、第十三号機橋と最近の中原ひとみは、東映の縛られ役を一手に引受けている感がある。然し全部が形式的な縛りであるのは淋しい。

東映「鉄塔の怪人」

テレビ第八チャンネルから流れ出る怪電波に乗って、怪人二十面相が人外境、中

部山脈に築きあげた鉄塔王国よりの戦慄すべき映像の中に、後手に縛られ床に転がされている中村博士の令嬢芳江(小宮光江)の二カット、C級この映画の宣伝ポスター及びスチールには後手に縛られ口には白布の猿轡を歯と歯との間に噛ませられた小宮光江の写真があるが映画には猿轡はない。

スチールは映画のストーリーとは別に、宣伝のため或る程度、興味本位にスチールマンが写し、映画の完成以前に発表してしまふのであるから、出来上った映画の内容と多少の相違があるのは仕方がないかも知れないが、私達、緊縛マニアにとってストーリーよりも最も重要な縛りシーンに、それが残念である。

いて一言しておこう。

グリセリン浣腸―排便促進、グリセリン三十CC、三―五分間。

石鹼浣腸―直腸洗滌、石鹼、食塩水、温湯五百CC―千CC、任意。

保留浣腸―水分補給、水道水、生理食塩水指定、保留。

緩和浣腸―下痢止、澱粉三%、五百CC、保留。

滋養浣腸―栄養補給、五―十%澱粉、ブドウ糖、指定、保留。

興奮浣腸―興奮、コーヒー、ブランデー百八十一―二百四十CC、保留。

鎮静浣腸―鎮静、臭化ソーダ、抱水クロール、九十一―百二十CC、保留。

(出) ポリープは粘膜増殖のことで、婦人尿道ポリープとは、いろいろなことを想像させるではないか。

(三) 造腔術の反対があるとは思わなかった。サディステイックな幻想。

(四) 穿膈分娩、断頭分娩、載胎分娩、帝王切開術等、生体解剖的になし得ることは、正にサディズムの極致ではないか。

(五) メトロイリ―ゼは、メトロイリシテル(子宮頸管を栓塞し、かつ頸管を拡張し、又は陣痛を促進せしめるために用いるゴム球)を用いて陣痛促進をすることである。

△告 白▽

女性志願者の夢

(前篇)

眞 崎 伸 一

一

私はふらふらと人ごみを縫ってあてもなく、あちこちさまよい歩いた。胸中に鋭く疼くものがあってジツとしていられなかったのだ。何かに追いたてられ何かに飢えていた。女だ。女に飢えているのだ。身体の立派に整った女性を物色して歩いているのだ。彼女にひどく責め苦しめられる事を頭に描き乍ら、ほっつき歩いてゐるのだった。ふと本屋の店頭で足をとめ、風俗雑誌を人目につかぬように、何気ない風をよそおい手にとって、ペラペラと頁をくった。責絵や縛りの絵とか写真が次々と恐しい迫真力で以って、眼の中に飛び込んで来た。むさぼるようにそれらを見詰めたが、本屋の主人が視線をこちらに注いで

いるのに気付いて、なあんだいエロ本か、と言ふような表情を無理につくって本を手荒く置き、二三の綜合雑誌を何くわぬ顔で見ながら、店を出た。しかし、今の雑誌を手に入れたい欲望は抑え切れなかった。そこで次の本屋で恥も外聞もなくその雑誌を買い求めた。私の趣味にピッタリとマッチした、全く素晴らしい雑誌だった。その夜は徹夜で読み明かし、その後も飽きず読み直し、絵や写真に見惚れた。

いろいろな女が責められ苦しんでいる絵や写真や小説を見ると、今現に自分が責め刻まれているような錯覚に溺れた。特に女性が女性に責められるのが最も気に入った。男性が責めたり責められたりする姿はどうしても醜いものに見えて厭であつた。その点、女性の

身体は美しいので、女性同志の責折檻は異様に美しくほのぼのとしていた。さながら自分が責められる女性になったような心地で、苦痛と快感に胸を掻きむしられる思いにひたり乍ら耽読した。だが、これは儚く切ない夢であつた。砂上の楼閣にすぎなかつた。私はれっきとした堂々たる体格の男性であるのだ。男性は醜い。私の好む責めの対象にはならない。然るに私は、その醜い一人の男性であるのだ。何と悲しむべき事実であろうか。私は自分が美しい女性になって美しい女性から責め苦しめられたい。しかし、この途方もない悲願は達成されそうもない。達成されようはないが、美しい女性になりたいという願ひは大きくなる一方であつた。痛烈な自己矛盾であつた。神は何故私を男性として生を与え給

うたのであろうか。心はこんなにも女性的であるのにと、無性に神が憎かった。男性から女性に性を転換したあるアメリカ兵の事が限りなく羨ましかった。かくの如き不可能な願望を静めるために、数多くの被虐の物語を読み絵や写真を眺めて、自らを慰めるより仕方なかった。女性の責められる写真や絵や雑誌や書物は、私の本箱の下箱の中にギッシリとたまるばかりであった。だが、私の絶大な望みを柔げるには役立っても心からの満足は得られなかった。

あるむし暑い夏の夜、一冊の奇譚クラブを取りあげて機械的に頁をめくっている『変性男子の告白』と言うコンフエッションにぶつかり、まだ読んでいなかったもので、一通り読んで少からず心がたかぶった。けれども、この変性男子も金輪際、女性にはなれっこないので失望もした。男子と生れた限りどうしようもない。この位の処で満足すべきではなからうかと思つて、ちよつと真似をしてみる氣になつて、母の部屋に忍び込み、タンスからブローズとシュミーズをひきずり出し、家人に知られぬように氣を配つて夜中に身につけて見た。多少の昂奮がもたらされた。そこで足首と膝を細引でくくつて、夜具の上に転がした。両手が自由なので一向に縛られた実感はない。起らなかった。ブローズのゴムが太腿に喰ひ込むのが一番効果的で、女性らしい氣分に

ひたれた。鏡に映して見ようと思つて、部屋をそのままの恰好で忍び出た。シュミーズとブローズ姿で歩く事はますます私の胸を高鳴らせた。俺は女性なんだぞと思つと、ゾクゾクする程嬉しくなつた。縁側の隅の鏡台の前に立つて、覆いの布をはねのけて淡い日の光を頼りに自分の姿を映して見た。厚い胸、太い腰、張つた広い肩、毛むじやらの逞しい脚、太い頑丈な首、引き締つたきびしい顔立、黒々として髪の毛、何と言うグロテスクな怪物であらう。美しいなんてお世辞にも云えない。私は自分自身に対して激しい忿懣にかられ、シュミーズをバリバリと剥り取り、ブローズを力まかせに引き裂いた。私はそのまま部屋に戻つた。深い深い絶望が後から後から襲つて来た。いっその事、一思いに死んで了いたかつた。あの世で神に頼み、女性として再び生を与えて貰おうかとすら考えた。悶々の情に横転反則してこの夜は一睡もしなかつた。

世の中の女性と言う女性が羨ましかつた。特に美しい女性の氣持は一体どんなだろうと考へて、たまらなくなつた。自分が美しい女性になつて、美しい強い女性に征服され、いろんな責苦にかけられる姿を空想する事がこの上もなく楽しかつた。楽しければ楽しい程、自分が男性だと云う自覚も強まり、苦しさは常に絶望的であつた。

そんなある日、新しい風俗雑誌が売り出されたのを知つて、買い求めに街へ出かけた。星が地上に降りそそぐような晴れた秋の宵であつた。原因不明の期待がモヤモヤと脳裏に立ちこめていた。行きつけの本屋へ行つて無表情で目的の風俗雑誌を内容も見ずに買い求めた。買つて了うともう読む事で頭がいっぱいになり、帰路を急いだ。私の家は町はずれの農家だったので、淋しい道も沢山通らねばならなかつた。こんもりした森林を横切り小さな土橋を渡つて一本道に出た時、後から自動車エンジンの響きが近づき、私のすぐ後で急停車したので、思わず振り向いた。二人の背の高い男が車から降りて、私の方へ近寄つて来た。口髭をはやした五十才位の年輩の男と、やせた蒼白い神経質そうな青年とであつた。

「もしもし、一寸うかがいますが、大阪へ行くにはどちらの道を取ればいいんですか」
年輩の男がしやがれ声で尋ねた。私は彼らに近寄つて国道のある方角を指差して教へてやつた。年輩の男は、有難うと礼を述べた。その時、背後にまわつていた青年が突然、私を羽交締めにした。私は二、三回両足を振つて暴れたが、年輩の男に強烈な嗅いのするハシカチを鼻口に押し付けられて、不甲斐なく意識がかすれ去つた。

二

丈の高い女性が私をいきなり豪華な部屋に引きずり込んで、あっと云う間もなく腕椅子に縛りつけた。ふふ、ふふふ、と女性は含み笑いをし、手にしなやかな鞭を握って、私の面前に豊かな胸をそらして立ちはだかった。私は黙って彼女を睨み付けた。

「そのこわい顔。そんな顔をするとうんといひいお仕置をするわよ。フフフ。私の可愛い可愛いお人形さん」

私は思い切り嘲笑いたくなった。可愛いお人形なもんか、この毛ムシヤラ男が——と思うと笑いを抑えきれない程可笑しかった。

「何て乳房のチンマリと小高い子なんでしょう。何て腰の細い子なんでしょう。何て脚のスラリとした子なんでしょう。何てその顔立の可愛いあどけない美しいこ



とよ。あんたは、あたしのオモチャになるために存在するのよ。ドッサリ可愛がってあげ

るよ。ウツフン、ニッコリ笑ってごらん」

女性は私の顎に指をかけて面をあげさせ、

甘い甘い声で唄うように云った。私は目をパチクリさせた。馬鹿馬鹿しい限りなので、今は笑う事すら出来なかった。

「さあ、ではこれからこの愛しいお人形をいやという程苛めてあげようかな」

と呟いて彼女は縛られた私の全身をさんざんに鞭打った。ウンウンと唸り悲鳴をあげた。全身がカッカツとほてり火のついたような痛さに喘いだ。

「そうら、あんたがどんな恰好だか、良く見とくといいわ」

鞭うちをやめた彼女は私の前に大鏡を持って来て私に示した。鏡を覗き込んで私はあっと不思議と意外と驚異のまじった叫びをあげた。そこにはシユミーズ一枚の見るからに可愛い女の子が恥らしい表情で椅子に縛られているではないか。

試みに私は眼を閉じた。これでは鏡の中が見えぬので、舌をペロリと出して見た。鏡の中の女の子もペロリと長い舌を形のよい朱い唇から覗かした。首を横に振ると女の子も横に振った。首をかしげると彼女も首をかしげた。何と云う事だ。一体何事が起ったと云うのだ。不可思議無類な一大珍事である。私があんなに憧れ願った女性になっているとは——しかも美しい女性に美しい女性として責め苦しめられているとは——。何と不可思議な怪異であろう。

「どう？ 私のお人形さん。まあ、そのお顔のいじらしい事。しやぶり付いて頭から食べちまいたいわ。だけどね、たった一つ惜しい事があるのよ。たった一つなのだけど、致命的な欠点が」

彼女はそう云って私のズロースに手をかけて引きずりおろした。私はカッと頭に血がのぼって気絶しそうになった。乳房もある。腰も細い。脚もしなやかだ。頬もふっくらと美しく髪もふさふさと波打っている。だが……。ああ、私は相変らず男性なのである。私は狂いそうな恐怖と焦燥に居ても立ってもいられなかった。

「だからね、ほうら、このいまましい奴を片付けてあげるわよ。少しの間の辛抱よ。それで万事OKさ」

女性は机の引出しからキラリと輝くナイフ

を取り出した。凄まじい恐ろしさに私は声にならぬ声をあげたが、もとより動けはしなかった。ウッフッフ、ウッフッフ、と云う女性の含み笑いがだんだんとかすかに遠のいた。血に染んだナイフをふるって狂気の如く踊りまくる女性の姿も、いつしか幻となって消え去り、朦朧たる昏迷の底から徐々に意識が恢復し始めた。

急に視界が明瞭になり始め、それにつれて頭も次第にはっきりとなって来た。起きようと思つて身を起そうとしたが、手足に何か固いものが引っかかつて意のままにならない。まだ夢を見てゐるのかなと思つて、強く眼を見開いて周囲を見廻した。白い天井がまず眼に入った。奇妙な形状の照明燈みたいなものが、二つ真上にぶら下っていた。視線を右横に転じた。ガラス戸棚が並び各種の器具や薬品でも入っているらしいビンが並んでいた。後にも横にもまわりは全部そうした戸棚で占められていた。左横に大きなスタンド型の照明燈が据えられ、その傍に鉄製の台があった。どこかで良く見かける形の台だなあと記憶をさぐっているうちに思い出した。これは病院の外科室にある手術台なのである。これでどうやら合点がいった。ここは病院なのだと思つた。何故病院にゐるのだらうかと思はらく考えた。すぐ思い付いた。昨夜、風俗雑誌を買つて帰つて帰途、自動車から降りて来た

暴漢二人に突如襲撃された事を思い起したのであった。奴らは私を襲ったが、一文なしなので道ばたに投げすてて逃亡し、私は誰かに昏睡している所を見付けられ、病院へ運び込まれたのに相違ない。こう考えると筋道が立った。追剥どもが恐らく無一物なので失望したろうと思うと嘲けり笑いたくなつた。さて、いつまでも寝ている訳には行かぬ、もう起きねばと再び身を起そうと思つて手足に力を入れたが、何かがやっぱり邪魔をして身動きさえ出来なかった。真逆と思つたが、あちこちに力を入れたり、手や足だけに力を入れたりしているうちに、確かに寝台の上に縛り付けられている事を知った。両足首と腰と胸部と両手首に皮のベルトみたいなものがキツチリと締め付けてゐるのだ。名状すべからざる不安におびえた。暴れてみたが自由になれる望みは全くなかつた。全身が妙にけだるくジクジクと痛む箇所もあり、繃帯が巻かれてゐる部分も感じられた。一体どうした事なのだ。先程の悪夢が強烈な感覚を伴つて、私の脳裏にのみがえつた。あの夢と関係があるとしても云うのか。

お前は何を馬鹿げた事を考えてゐるのだ。ここは只の病院で俺は入院しており、安静を要するので動けぬように医者が寝台に縛り付けたに違いないのだ。こう思うと制止し切れぬ笑いがフッフッと胸の奥から込み上げて来

た。「ホッホホホ」思わず大声で笑ったが、ギクリとして笑顔を呑み込んだ。今の笑声は私の声ではなかった。男の笑声では絶対になかった。玉をころがすように柔い細い女性の笑声なのだった。何たる怪奇であろう。まだ夢の続きらしい。もう一度眠り直さねばならぬと思い、今度目覚めたら現実の世界にいろいろと念じつつ顔を固く閉じ合した。

ギーッと軋って戸の開く音が聞えた。ウツスラと私は顔を開けて、戸口を見た。背の高い男が立っていた。口髭を生やしているのを見て取った。直ちに連想が走り、あっと叫んで両眼をパチリと押し開け、口髭の男を凝視した。

「やあ、やっと気が付いたなあ。二十日ぶりだね」

男は親しげに声をかけてニヤリと笑った。こいつは自動車から降りて私を襲った暴漢の一人なのである。おのれつと歯がみして口惜しがったが、完全に緊縛されている今はどうしようもなかった。

「二十日ぶりとは何だ。変な事を云うな。昨夜襲った上、こんな所へ連れて来てどうするつもりなんだ」

私の声は変に弱々しく可細く聞えた。まさしく女性の声であった。

「はっはははは」

男は可笑しそうに楽しそうに笑った。

「そんな可愛い顔をしていて、その言葉は不似合だなあ。少し教育をする必要がある。だがお前が全快してからだがね。質問にお答えするが、お前は正しく二十日間眠り続けたのさ。眠り人形のようにね。眠らしたのは魔法使のわしだよ。科学的魔法使のね。二十日間のうちにお前の身には一大異変が起ったのだよ。ほほう、聞きたいか。よしよし、やがて教えてやるよ。さあ、その前に注射を一本射っておかなくちや。しばらく盲になって貰おうか」

そう云って男は私の顔上に厚い布を被せ、掛蒲団のすその方をまくって太股にズブリと注射針を刺した。あ、あ、と鋭い痛みには私は悲鳴をあげた。注射はすぐ終り、顔の布が除かれて、男と又対面した。

「今の注射はね、女性ホルモンなのだよ。この意味が判るかい」

私は今度こそ、ありありと迫真力を以って先刻の悪夢が再現しつつあるのを感じ、自分の意志に反してコックリと頷いた。

「よしよし、いい子だ、いい子だ。それでは今後は温和しくするんだぞ」

口髭の男は注射器を戸棚に片付けながら、まるで女の子でも、あやすような口調で云った。私はどう思っても心外であった。一人前の人權を有する男子にとっては、こらえ切れぬ侮辱であった。そこへ足音が聞え、戸を押

し開けて一人の男が入って来た。口髭の男と共に私を襲った蒼白いやせた青年であった。彼も医者だと見えて、白いうすっぱな手術衣を着用していた。

「先生、その後の経過は？」と青年は口髭の男に声をかけた。

「ああ、至極順調だよ。ごらんの通り大方外科手術は完了し、後十日間ほどホルモン注射を続ければ一切は成就する訳だ」

「ふーむ。意識は恢復したのですなあ。少しやせ過ぎているようですから、今日からウンと滋養食を摂取させましょうか」

「ああ、よかろう。やれやれ、やっとこれで我々の実験も完成した訳だな。君の助力を感謝するよ」

「いいや、深く感謝したいのは、こちらですよ。私の理想の像、美の象徴が現実に存在を見たのですから、この感動はたえようもない位です」

私は彼らの会話のやり取りを聞くともなく聞いていたが、何の事やら皆目見当がつかなかった。兎も角一つの実験が達成され、お互に祝し合っている事だけは察しがついた。口髭の男は私の方へ近付いて来て話しかけた。

「わしは君の名前を知らぬ。だが、君も以前の君の名前を忘れ給え。名前と同時に凡ての過去を忘れ給え。君は新しく今ここに誕生したのだ。わしが君の名を命名しよう。美子とね、

いいかね。君は今日から美子なのだ。当分はわしの娘という事にして置いて、新村美子なのだ。この名は君の本名なんだから断じて忘れちゃならないぞ」

私はあつけにとられて彼を見た。得体の知れぬ途方もない事件が身辺に起っているのは最早疑う余地もなかった。然し、かつて想像こそすれ余りに途方もない事なので容易に信ずる事は不可能であつた。どこまでが夢でどこまでが現実なのか見分がつかなくなった。

ボンヤリと彼らを見詰めていた。感覚がすっかり麻痺してしまい、無暗に後頭部が痛く、思考力は全然なかった。俺が新村美子だつて、この俺が、それじゃ女の名前じゃないか美子、美子、美子、女、女、女、女、恐い悪夢はまだ続いているのか。

「どうも呑み込めないらしいね。では種明しをgoranに入れようかな。美子、君は——そうそう過去は忘れろと命じたが、これだけは例外としよう。君は以前に江戸川乱歩と云う小説家の幽霊塔と云う作品を読んだかい。人間の生れつきの顔を自由自在、望みのままに変えるのが主な筋なのだが」

私は、その小説なら読んだ覚えがあるので頷いた。

「そいつを読んでいると理解は早い。その小説の人物と同じ境遇に君はあるんだ。いや、小説以上なのだ。事実が小説よりも奇なりつ

て云うじやないか。はっははは、こいつは痛快だ。事実なんだぞ。小説家の空想を乗り越えた、これは歴然たる事実なんだぞ。うわっはははは」

口髭の男は、全身をゆすって腹の底から大笑した。蒼白い青年は黙念として突っ立って彼の狂態を見守っていたが、つかつかと私の処へ寄つて来て、ポケットから手鏡を取り出し、静かに云った。

「君、この鏡で自分の顔を見てgoran。納得が行くだろう」

私は鏡を受け取ろうとしたが、手が動かさないのに気付いた。青年は片腕だけベルトを外してくれた。私は自由になった手で鏡を奪い取って覗いた。寝呆けているのかと思つた。鏡に映っているのは私ではなかった。断髪の可愛い娘であつた。何度覗いても娘の顔しか映らなかつた。信じられなかつた。信じようとて信じられなかつた。余りにも怪異であり不可思議であつた。

「君の手で君の胸を押えて見給え」

青年の命令に機械的に従つた。胸に恐る恐る手をあてた。ふっくらとした柔い隆起に触れたとたん、ビリビリと異様な戦慄が胸底から軀のすみずみ、頭髮の一本一本、爪の先まで一瞬にして走り、感覚が一時痺れてしまつたようだ。

「いいかね。君は新村美子なのだ。新村先

生の娘なのだぞ。判つたか。判つたら何とか答え給え」

私は無意識で「ええ」と首を前に振って答えた。女になつたのだ、俺は女になつたのだ、私は大声で叫びたくなつた。何てステキな非現実的な現象であろう。男が女になるなんて奇々怪々なる真相だ。だが間違ひはなかつた。鏡の中にいる可憐な美しい少女の恥しげな顔を見よ。乳房のふくよかな隆起をみよこれが夢想だともいふのか。夢想だつたら鏡には、俺のもとのゴツゴツした男の醜い顔が映る筈ではないか。然るに何度眼をこすつてみても映るのは美少女の顔であるのだ。言語に絶した喜びと悲哀と、期待と不安とが、複雑な様相を呈して心中を駆けめぐつた。この様な体験を味わつたものは世界広しといえども、あの女になつたアメリカ兵を除いては他に有り得ないであろう。

「おやおや、案外楽しそうじやないか。ははは、女になるのも楽しみだろうて。まさしく未知の世界であり、大きな数え切れない位沢山なアヴァンチュールが待ち構えているからな。君は一面から見ると最大の幸運を拾つたかも知れないね。無骨な男から、見るも麗しい絶世の美女に再生出来たのだからな。羨ましくなるというのも過言ではないよ」

青年はシロシロと私を見廻しながら、嘲弄するように言つた。

「畜生」

私は叫んで拳固を振った。憤激の表情を浮べて振りまわした。腕までがまるつきり変っていた。すんなりとした細い白い女の腕に変わっており拳固も愛らしい塊りとしか見えなかった。私は肉体的には女性であるかも知れない。だが心は依然として男の心であった。流石の彼らも心まで入れ代える事は出来なかったらしい。けれども入れ代える必要は正しく有り得なかったともいえる。何故なら男のうちから私は女になりたいと念願していたのであるからだ。予期せざる私の執拗な願望は神の戯れか悪魔の仕業か、たまたまここに実現したのである。

十日後、私はようやく皮のベルトを外され寝台から解放された。下着から上衣まで女の衣服一式が私にあてがわれた。裸になってつくづくと変貌した総身を舐めるように見まわした。胸の二つの滑らかな丘、ギョッと絞ったように細い腰、白いムツチリと肉の付いた股、細いしなやかな脚、一月前、月光のもとで醜さの余りシユミーズを引き裂いた時の、あの醜怪なる男の肉体はどこへ消え去ったのであろうか。信じがたい奇



蹟であった。生れた時から女性であったのだと思い込んでしまいがちそうだった。いや、思い込んでしまつて当然だと強調した。ズロースをはきシユミーズを着て、鏡の前に立った。

嫌悪などは起り得る筈はない。美しい女性が鏡の中に立っているのだ。ナイロンのブラウスを着て赤いスカートををはき、黄色のソックスをはくと、これで身なりは整った。これほ

ど可憐で美しく、麗しい女性に私はお目にかかった事はない。スタイルブックから抜け出して来たような理想的な女性である。人間の女性美に対する理想を私の上に実現せしめたのであるから当り前だといえよう。

私は化粧室から鼻唄を歌いながら廊下に出た。新村から邸内だけなら自由行動をとっても良いと許されていたが、私の秘密を知っている二人以外の人に女性として出会うのは始末であるから、氣遅れがして足がすくみ鼻唄もやめた。廊下は長かった。左に行こうか右に行こうか迷った。ええい、ままよ、と左に進んだ。すぐ突き当ってガラス戸を開け、そこにあつた木製のサンダルを突っかけて庭へ出た。広い広い庭には雑草が繁茂し、ところどころには鬱蒼とした木立があり、それらの向うに高いコンクリートの塀が張りめぐらされていた。私は雑草を押し分けて塀際に達しそれに沿って進むうちに小さな木戸に行き当った。外を覗いてやろうと把手に手をかけた時、

「美子、出たら酷い目にあわすぞ。そこを動くな」

と言う新村の叫び声がして、私は意久地なく立ち縮んだ。新村はこわい顔つきをしてめつと睨み、グイと乱暴に手首を掴んで引き取った。彼の強力に私はズルズルと引つ張られ争うのは諦めて従順に従った。

「美子は身体こそ立派に女だが、まだ男か女か分らん心理状態にあるから、他人に会ってはならんのだ。身心とも女になり切るまでは外出禁止だ。この言い付けに背くと承知しないぞ。一生あの寝台に縛り付けておくぞ」

新村は口髭を震して強い語調で説諭した。私は黙って頷いた。ここ当分、また独りぼちで寝台に縛り付けられるのは有難くないからだ。出て来た出入口に私を押し込んだ新村はくれぐれも出るなど念を押して庭へ出て行った。私は右に廊下を進んだ。廊下の片側は壁で処々に庭に面した窓があり、今一方は物置やら、実験室が四つばかり並んで居り、廊下を曲るとダンスも出来るホールに出た。ホールの一隅に階段があつて、二階に行けるようになっており、ホールを横切つて通路を右廻すると玄關らしい所に出た。

ラララ、ラララ、ランランラン、すると突然朗らかなハミングが近付いて来て、玄關のドアの前でやみ、背丈の高い眉の濃い美しい女性がドアを押して入ってきた。私は真正面からバツタリと対決して、ハッと息を呑んだ。相手も驚いたと見えて、大きな丸い眼で私を見詰めたまま、棒立ちとなった。私の心はこの女性に激しくゆすぶられた。一眼見て好きになった。こんな女性に愛して貰えたらと思つた。男性としての氣持からか、女性としての氣持からか、その区別は明確でなかつた。

た。要するに愛し愛されたいと痛烈に切望した。私の氣持が通じたのかどうか知らないが、女性は強張った面をときほぐして、ニッコリと微笑みかけた。

「あなたどなた？ あたしは新村の姪のルミ子。たびたびこの家へ遊びに来るけれど、あなたにお会いしたのは始めてね」

「私は、私は……」

うっかりもとの名前を云いかけて、あわてて口を閉じた。この姿で男の名前なんて云えない。だからと云つて自ら新村美子だというのも相手が新村の姪である以上見えすいた嘘だし、美子と云う名も何だか他人を紹介しているみたいなきがして、どう返答していいかまごついた。それでも勢いっぱいの努力をして「美子です」とやつの思ひでいった。

「そう美子さんて仰言るのね。お友達になりましょうね。ところで新村の叔父さん、知らない？」

「あのお、お庭の方に」

「そう、じゃ一緒に行きましょう」

ルミ子はいきなり私の手首を掴んで引つ張つた。私は黙って従つた。庭へ出て見たが、新村の姿は見当らなかった。そこで実験室等も一部屋ずつ見てまわつたが、どこにも居なかつた。

「こんなに広いお屋敷なのに新村さん以外に家族や召使はおられないのかしら？」

私は大胆になって、女の言葉を使った。使
って見ると思いのほかすらすら喋れた。

「あら、美子さんは、ここへ始めていらした
の。新村とどんな関係にあるの」

ルミ子に詰問されて私はグツとつまった。

事実をこのような美しい人に打ち明ける訳に
はいかぬし、モジモジとしていた。ルミ子は
返事を待たずに一室の戸を開けて入った。

「どう、このお部屋？」

私はあつと驚いた。三十日間監禁されてい
た部屋である。ルミ子は私の顔から視線を離
さずに、手術用の台を指差した。

「美子さん、あんたが何者だかすぐ白状しな
いとあそこの台に縛るわよ。白状するまで責
めてやる。それ共、すぐ白状する？ あんた
はパンパンなの。その風態はどうもパンパン
臭い。商売がはやらないので空巢に転向した
とでも言うの。それにしても純真な可愛い顔
立をしてるけど……」

私は改めて自分の服装を見まわし、なるほ
どパンパンと間違われるのも無理がないと痛
感した。挙動の不審も彼女に疑問を抱かした
と見える。がからと言った彼女の疑問を晴ら
す手段はない。弁明に窮して私は隙をうかが
い一先ず逃げる事にして、彼女の横を走り抜
けようとしたが、それよりも敏速に彼女の身
体は動作して、私の両手を背中にまわして捻
り上げた。力まかせに捻るので肩や腕が折れ

そうに痛く、悲鳴をあげて悶えた。ルミ子は
私を手術台へ押しやり、その上に寝ろと命じ
た。拒否すると一そう腕を捻りあげた。観念
して私は横になると見せかけ、だっと彼女に
体当りをくわせたが、軽く喰い止められてピ
シビシと両頬を泪が出るほど殴られ、結局手
術台に皮のベルトでヒシヒシと縛り付けられ
た。解放されたばかりなのに、またまた逆も
どりである。

「さあ、白状おし。お前は空巢狙いの。そ
れとも強盗？ ホホホ、その姿じや強盗など
駄目ね。素直にしないとひどいよ」

ルミ子はポンポンとした威勢のいい口調で
私を脅かした。私は本当に悲しくなつて来た。
自然と泪が臉にあふれた。いやでも哀訴の表
情となった。私は今こそ以前から憧れていた
状態に置かれていたのだ。望みはついに
達せられたのである。嬉しさの余り泪があふ
れるのも道理だが、空巢と間違えられたのは
心外であった。プライドが高かったからだ。
「言わないつもりだね。泣いたって駄目だわ
よ。白状するまでは絶対に許さないよ」

ルミ子は私の太腿をつねった。あつと私
は哀れな声をあげた。太腿から下腹、乳房と
容赦のない彼女の爪は私の全身を這いまわり
つねり続けた。つねられる都度、洩らすまい
としても「ああ、ああ、ああ」と呻き声が洩
れた。責苦は快く楽しいものと思っていたが

快感は責苦が始まるまでであり、始まり出す
と苦しさは先にたつてたまらなかった。私は
どうやら空想だけのマゾだったのだ。やめて
やめて、と心底から泣いて哀願した。それが
余計彼女を刺戟したと見え、
「言わぬならこちらとも言わして見せるよ。本
気だぞ」

とルミ子はどこから細いが強靱な乗馬鞭を
手に現れて、だしぬけにピシリとお尻へ痛撃
を浴せた。私はたえ切れず叫び声をあげて身
をそらした。次の鞭は脇腹をしたたか襲つ
た。私は更に身をそらして泣いた。鞭は遠慮
会釈なく腹部から乳房にからみ付いた。見栄
も外聞もなく、おいおいと声を放って号泣し
哀願した。腕くたびに手首と足首にベルトが
喰い込み切れそうに痛かった。ルミ子の眼
は魔物に憑かれたようにランランと輝いてい
た。白状するのが目的でなく鞭打つのが目的
らしく思えた。鞭打たれるたびに火のついた
ような苦痛が走り、胸部に激しい一撃を受け
たとき、クラクラと目まいがし、私はそのま
ま目の前が真暗になつてしまった。

(後篇は次号)

△次号予告▽

「終戦奴隷」

雪 俊 遙

麻生保氏の生活と意見 (二)

麻 生 保

五月半ばのある朝、麻生保氏は、着いたばかりの奇ク七月号を開き、パラパラとめくったとたん、アレレといった顔をし、次に、そのビロードの不駄の鼻緒のような濃い眉のあたりに、シワをよせ、更に、ひとりうなずいて、この上もなく満足そうな笑いを、唇のあたりに浮べた。それから、目の前に置かれたコーヒ―を一息にのみほすと、奇クを持って書齋へ入って行った。

麻生氏は、奇クの来た日は、一日仕事が終わらない。麻生氏は時にそれを呪わしく、いまいまいしくさえ思っていた。然し、大きなデスクの前に坐ると、麻生氏は明日迄に仕上げなくちやならない仕事を、邪慳にわきへ寄せて、たんねんに奇クを読みはじめた。

ひる近く、玄関のベルが鳴り、ややあつてドアがノックされた。女中である。

「加茂様がお見えでございます。」

麻生氏は

「ア、ソウ、ここへ。」

と、ブツキラ棒に答えた。麻生氏は、この山出しの、愚鈍な女中が大嫌いで、彼女と一寸口をきくさへも虫ずの走る思いであった。

麻生氏の説によると、女性というものは、美しく、高貴で、嬌慢で、利口で、常に男性よりすぐれ、男性に劣等感を持たせるべきものである。故に、その出来ない女性は、女性として、最も本質的な資格に欠ける。従って、醜く、下品で、少し足りないこの女中などは、女性とみなす事は、出来ないというのである。麻生氏は、「女王の愛撫よりも、下女の打擲を選ぶ。」という、境地に達し得ない事を、自分でチャンと承知して居た。麻生氏はよくこう言う。

「僕は、うちの女中みたいな、男の腐ったような女なんて見るのもイヤだ。僕は、問題なく、女王の愛撫を望むさ。」

然し、いつも麻生氏は、次の註釈をつけ加える事を忘れなかった。

「でもね、僕が女王を愛撫するなんて、大それた事は、考えた事もないよ。女王が、氣まぐれに僕を愛撫するだけの話さ。僕にとっては、女王か、下女かっていう事が、問題なんです。愛撫されるか、ぶたれるかって事じゃないんだ。女王からなら、ぶたれようと、蹴られようと、僕は大喜びさ。下女からなら、愛撫されようと、接吻されようと、マッピラだよ。」

麻生氏は、マゾヒストなるが故に、男女に限らず、自分より目下のもので、自分より弱いものに対しては、本能的な嫌悪を感じると言うのである。

「やあ、しばらく。」

と、かん高いテノールが響いた。ピアノストの、加茂春彦である。彼は、麻生氏と、中学以来の親友で、同性愛だと噂された事もあった程の親しさであった。

「昨晚演奏旅行から帰ってきたんだ。北海道は、まだ寒かった。」

色の白い、まだ童顔の失せない加茂は、口のきき方まで子供っぽく、語尾はいやに甘ったるくて女性的である。彼は、デスクの上の

奇ク七月号を目ざとく見つけた。

「ああ、来たの、僕、まだ受取ってない。面白い事、書いてある？」

「うん、いい記事ばかりだよ。ところがね、フフフ」

麻生氏は、意味ありげに笑いながら、雑誌を加茂に渡した。

加茂も、奇クを、パラパラとめくるや、アレレ、フム？ウフフ、という三つの表情を、併列した事は、朝食の卓に於ける麻生氏と全く同じであった。但し、加茂のウフフは、やや長く、段々と、本格的笑いに移行して行ったのである。

「ウレシーイナア」

加茂は立上って、オペラ歌手のように、奇クを振廻し乍ら、ふしをつけて叫んだ。

「ね、うれしいだろ」

「これじゃ、まるで『愛は惜しみなく』の特集号だな——。当然の事だけど、あの映画はこんなに大勢の人に感銘を与えたんだねえ。あれ、僕も、ほんとに感激しちやった。シエラルが・マツダレーナを馬に乗せるところ、ほら、覚えてる？マツダレーナがシエラルを睨みつけるでしょう？あの時の、アントネラ・ルアルデイーの目つたらないな。それに、あの、サンラザール獄舎の場面のステキな事、ね」

加茂は一息に、これだけしゃべってしま

と、フーツと大きな溜息をついた。

「カモチちゃん、アサヒカメラの六月号見たかい？」

麻生氏は、加茂の事をカモチちゃんと呼ぶ。

久我美子を、クガちゃんという如しで、これは、中学時代からの呼名である。一方麻生氏は、ヤッチちゃんである。ヤスシというので、タモツではない。タモツと言われると、麻生氏は、一方ならずフンガイする。

「写真もしないのに、僕がアサヒカメラなんかよむわけがないじゃないか。」

「おもしろい事が書いてあるよ、写真モデル嬢座談会、中島健蔵が司会だ。」

「なんだって、気持の悪いフアンレター？」

「そこそこ、よんでごらん」

（中島健蔵氏）フアンからの手紙なんかありますか？

（久世嬢）ありますわ、へんなものもあるんですよ。例えば、私のところに来たのと言一句全く同じのがお友達のところにもいつてるんですね。

（牧嬢）この間、すごく気持のわるいのが来ました。結婚してくれなんて生易しいんじゃないの。変質者なのね。どこかの学校の先生らしいんです。お話しするの恥かしいわ。完全な変質者ね。

（久世嬢）私のところへ来たのと多分同じだ

わ。（笑）一寸痴人の愛的なの。

（牧嬢）足蹴にして下さっても、馬乗りになつて下さっても、あなたのおみ足の下にひれ伏して、献身的に、一生ドレイとして捧げます、といった様な言葉ばかり書いてあるのよ。（笑）一寸考えられないような事が、ズラ／＼三枚ばかり。（笑）びっくりしちゃった。住所もちちゃんと書いてあるんです。いいっていったらすぐ行くというのよ、全然気持悪いじゃない。

（久世嬢）私のお友達にも、それと同じ手紙二度もきてるのよ。

（牧嬢）でも、字がすごく上手。書き慣れているのね。（笑）

「……」

「へーエだ。ヤッチやんだろ、こんなフアンレターをあちこちへ出したのは、エ？そうだろ？」

「ちがうよ、僕はカモチやんだと思ってた。だって、僕よりカモチちゃんの方が字がうまいぜ。」

「ヤッチちゃんよりは少しいまいかも知れないけど、他人にはめられる程の事はないよ。ほかに何か面白いの？」

「オール読物七月号、にゆう、あらびあんないと。橋外男作だ。」

「ああ、それは僕も演奏旅行のつれづれに汽車の中でよんだ。『四つん這いになって、ひ

「つばたかれる男の話」だろ。あの、油屋のおかみさんは、ダンゼン僕好みだな。すごくサデイスチックで、しかも母性的なのね。」

「彼女の描写は一寸いいね。………若いおかみさんが、多勢の番頭小僧を使って一人で大きな店を、仕切っておいでなされます。しかもそのおかみさんの美しいこと、無口で余計なことは口に出されませんが、テキパキと商売をやったのけて、きりりと小股が切れ上って、顔は蒼白くて、目は、ぱっちり………」

「すてきだね。そのおかみさん、下男のハッサンと仲よくなると、ハッサンを、つねったり、かじったり、青竹で、ピシリピシリとひっぱたいたりして、ハッサンが呻きながら七転八倒して居るのを、うっとり眺めながら、『お前、なんて可愛いんだらうね、早くさ早く』最後には、矢張り、その店の下男の黒人にジユウジユウと烙印を押してあてる。そして言う。『ホホホ……さっぱり面白くないもんだねえ、くろんぼってものは。いくら烙印たってマッ黒だから、サッパリ目立ちやしない。もうこの位にしとこうよ。烙印はあとでハッサンに……』それをハッサンがかげから見、聞きしてしまい、逃げ出す………」

「やや旧聞に属するけど、別冊小説新潮十一巻六号、四月十五日発行に出てた、北原武夫の『優しすぎた男』は一寸面白いな。コミッ

クなどところもあってね。劣等感と、奇妙な脅迫観念にとつつかれた、おとなしい男の話だ。」

「あゝ、スバラシイ美人と結婚して、第一夜から自分の大事な大事な、ほとんど崇拜して居る奥さんが、悪者に強姦されるという脅迫観念にとつつかれる話だろ。」

「彼は、そういった場面を想像しながら、興奮するんじゃないかしら、クラフト・エビングに、そんな例があつた様に記憶する。マゾッホも、自分の奥さんに、男を作る事を強要したというぜ。」



「僕、十八の時だったかな、似たような経験した事があるんだ。ヤッチャん、知ってるだろ。今、外交官の奥さんになってる、僕の幼なじみの照子ちゃんね。彼女の結婚式の晩、僕はうちでふとんをかぶって泣いてたのさ。そし

て、身も世もないような嫉妬と、照子ちゃん
は、もう僕の、手のとどかない処へ行っちゃ
ったんだ。これでよかったんだといった様な
暗然たるあきらめとで、身も心もひきちぎら
れる思いをしながら、彼女と彼との初夜を想
像して、異常な興奮しちゃった事があった。」
「フフフ、いかにもカモちゃん式だな。僕も
その気持よくわかるよ。女性ってものは高峯
の花であればある程美しいものだもの。」
「しばらく映画もみないな、何かあった？」
「デコちゃん『あらくれ』ね。然し、所詮
意地っぱりでヘンクツな女って感じだな。お
島という女の強さは、男に対する劣等感から
反撥して出たものなので、男を支配してるわ
けじゃない。大正初期の、自我を持てあました

女の悲しさだけが強く残る。それと、『ひか
げの娘』で、自殺未遂した芸者を、房子が連
れてかえるところがあるが、そのところの、
房子の毅然とした凛々しい態度、ステキだっ
たな。」
「だれだっけ。」
「芸者は淡路恵子、房子は香川京子。あの
清純型、明色スター香川京子に、あんな演技
が出来るなら、案外彼女、アントネラ、ルマ
ルディー的要素があるのかも知れないぜ。そ
う、文学座の楊貴妃ね。まあ、他愛ない
もんだけど、杉村春子の楊貴妃に、加藤武の
安祿山が言いよる。この言いより方が振って
ね。ヒゲダルマみたいな安祿山が、いとも不
器用に、楊貴妃に、『ママ、ママ、』といっ

て、母性的愛情を求めるのさ。そうすると、
楊貴妃が、『おさがり、トルコのブタ、汚ら
わしい！』と、一カツする処がある。この杉
村春子、なか／＼貫祿だったよ。」
「今月の時評は、もうこれでおしまいかい」
「ア、忘れていた。オサル山の山で、大将の太
郎が、奥さんの桃子に殺されて、彼女が、太
郎にとって代って、お山の女王になったらし
い。」
「ヘーエ、サルも進化したものだね。」
「その限りに於ては、おサル山の文化水準
は、イギリスや、ベルギーと同じだよ。羨し
いね。さあ、ひるめしを食いに行こう。久し
ぶりだ、並木通の、ドナミで食べない？」
「ああ、そうしよう。」（この項終り）

切 腹 通 信

切 腹 随 想

兵 頭 庫 一

奇ク七月号を入手して大変嬉しく思いな
がら、例によって感想を述べたいと思う。
法谷氏の時代物と青山氏の現代物の二篇
に伊藤晴雨氏の錦絵解説が加って、私のス
クラップに楽しいコレクションが増えた。
切腹する女性図三態の内「早月と呼ぶ美し
い姫」が籠の中で白無垢の胸元をくつろげ
て、両手に握った懐剣で盛り上った左の乳
房の下を突いている場面は、特に嬉しいも
のだった。

次に「切腹マニア」氏のアイデアは、大
変結構だと思う。(一)の落城の際の女性集団

自殺は、武士達の切腹と同様に常に行われたもので、私が若いころ見た貴重な映画「修羅城」の大阪城精舎の場がこの一例で、一人の女中が両膝を扱帯で縛るところに始まり、懷劍の鞘を払って逆手に持ちかえ、左の乳房の真下（勿論、着衣の上から）へ突刺して暫く苦悶する。間を置いて前へ仆れるまでをクローズアップして、特にワンカットを撮ってある点、切腹ではないにしても女性自害マニアの胸を躍らすに充分である。現在でも、こうした自害場は時代映画にはしばしば出てくるのであるが、「公安を害する虞ある」為か、巧みにぼかされてしまつて、私はいつもがっかりさせられている。最近見た「美女決斗」で、城中に忍び込んだフウマの女一人が身分が露見した為、相手のお局を刺殺し返す刀を左の乳房へ突刺して自害する場面が、時間にすれば十秒位ほどあったのが収穫だったといえる。「切腹マニア氏」は、ヌード切腹がお好きらしいが、私はやはり女性の嗜みとして不必要に肌は露出しない意図から、前記の早月姫の自害図あたりが良いと思う。奥方、姫君、そうしてそれを取巻く若い腰元達が、神々しい白無垢姿で繰り拡げる腹の切り合い場面をこそ、挿画に写真に大いに期待する。

女性集団自殺で史上有名なのは、会津落城の際、城下の家老西郷家の家族の中、頼母の夫人と義妹達、四人が順々に刃に伏すという話であろう。夫人は先ず二人の子供を刺殺、返す刃で妹達に手本を示して真先に突立てると、年の順にグサリ、ブスリと突立てて行く史実は切腹ではないが、この五人の若い女性達に痛い腹を切らせたらどうだろう。会津史については、造詣の深い瀬川泰子氏の麗筆によって、素晴らしい挿画と共に奇ク誌上にこのことが紹介されれば「切腹マニア氏」と共に随喜の涙を流したいと思う。

奇ク七月号誌上で中康弘通先生が嘆賞しておられる久子氏の切腹は、会津波羅木利会のみではなく全日本切腹悲願の徒輩の誇りといえよう。同会員のレポートでは、同氏が自殺しなければならぬ事情も無さそうだから、久子氏は全く切腹の悲願に燃えて決行されたものと思われ、私のような臆病者、あるいは卑怯者の目から見れば全く驚嘆の外はない。私の切腹は小刀（日本刀）で甘皮を一寸切って少し血がにじむ程度で暫くしてから腹に赤い糸を引いているのを見て満足する程度だから比較にならない。第一、深さ一センチも切尖を突込む勇氣がない、もっとも切味が良くて、一思いにや

れば、それ位は入るだろうが、その瞬間の激痛によって最早、右へ引廻す力は無くなるだろう。その激痛を堪えながら右へ二十七センチも引廻し、深さも二センチに及んだとは、たとえ久子氏が失神されたとはいえ全く見事な切腹だ。若し失神されなければ、更に十文字にも二文字にも及ばれ、最後は左の乳房の下深く抉って介錯不要の切腹を遂げられたことと思われる。同氏の告白では、余り痛くなかった由であるが、同時に引廻し最中は痺れるような陶酔感を味われたに違いない。久子氏が切腹に異常な興味を感じられた十五、六才頃といえ、私も又、自分の腹で悦虐の味を覚え出した頃で、同情を禁じ得ないけれど、私は同氏のように真剣に切腹しようと決心したことは無かった。私のような柔弱者に比して、久子氏は何という雄々しい女性だろう。幸い致命傷とはならず目下、着々全快に向っていられる久子氏が、一日も早く筆を取られて生々しい切腹譚を誌上に載せ、情夫をして起たしめられんことを切望する。武家義理物語の小吟が、身を以て義弟に敢て女の肌を見せて腹の切り方を教え腹切りは、さほど難しいものでも無いことを示すように。



私の本箱から

—単行本、雑誌の責め場面—

星 光 一

戦後、空気で公演された問題の軽演劇として興行日数の記録を作った『肉体の門』は、小崎政房の演出もよく、俳優連の熱演もあって我々責めのフアンを喜ばせたものだが、小説の方は未だ本誌に登場していないように思う。(或いは載っていたのを見落したかも知れない)

劇を見た人は筋は良く分っている事と思うので、責め場面のところだけを拾ってみることにする。原作は誰もが知っている肉体派の巨匠、田村泰次郎氏、風雪社の出版である。

菊間町子はおそく帰ってきた。いま、男と別れてきたばかりのやうにいそいそとした気配が見えた。

「お町姐さん、着物をお脱ぎ、やきを入れてあげるから」と、小政のせんが落ちついていった。町子の顔は見る間に青ざめ

てしまった。

「なんなの、あたし、なにも」

口ごもるのへ、おつかぶせて

「お黙り、つべこべいはずに、早く脱がないと、痛い眼を見るだけよ」

せんの言葉と、一緒に、マヤと花江と美乃は、町子が逃げないやうに彼女のまはりをとるかこんだ。

やがて町子は仕方なしに、帯をとき、着物を脱いで、全裸となった。町子の裸体は、彼女のしごきや帯締めで、広間のコンクリの柱にくくりつけられた。まだ子供のない人妻らしく、白い脂肪の適度に乘った町子の全身が、みんなの前に現れると、誰も一瞬間だまってしまった。マヤは戦慄が自分の背筋を走るのを覚えた。ほのあかりでいま男と別れてきたばかりの官能の火照りが、全身を螢の火

のやうにかがやか
せてゐた。

「まあ、けがらは
しい、畜生、死ん
だつてかまやしな
い、ぶちまはさう」

小政のせんが憎
々しさに歯ざりし
てささやいた。町
子の爛熟した肉体
を眺めてゐること
さへもが、もうせ
んには苦痛であり

圧迫なのだ。焼跡から拾つて来た箒の竹の柄が、洗濯竿につかつて
あった。せんはそれをはずして、左手につかむと、ブラウスを二の
腕までまくりあげた。彼女の腕は左利きだった。

「関東小政」の刺青をひけらかして、うむむと見栄をきり、ぴしり
と菊間町子の太腿をぶった。

「駄目だよ、尻をぶたなきや。いい音がしないよ」

と、ふうてんお六の花江がいまいましたにいった。

「お町、そんなに男がだきたいなら、これでもだいてな。さ、これ
なら、しっかりしてるだろ」

紐をすこしゆるめて、町子をむこうむかせ、コンクリの柱をだか
せた。肉のもりあがった、逞ましい尻が、彼女たちの前に現われた。
貪婪な感じの尻である。せんは眼を吊りあげ、まっ青な顔をして、
その尻をぶった。ぶたれた部分は赤絵具でも塗ったやうにはつきり
と筋がつき、みるみる脹れあがった。町子は悲鳴をあげて、ぶたれ
るたびに、身体にそりを打たせる。尻を前後左右にくねりまわして、



縛られた紐のなかで、竿を避けようとあせる。一面にぶたれるために
赤い筋は消え、尻全体が赤くなって、原型よりも脹れて幾割か大き
な尻になった。尻が酔っぱらった酒呑童子の顔のように見えた。ぶ
つたびに、町子の尻の筋肉からは、眼に見えないが、なにか火花の
やうなぱちぱちしたものが、弾けるやうだ。そして、その火花に、
彼女たちはめまひを覚える。

「あたいにも、貸して」

ボルネオ・マヤは突然、せんの竿をひったくって、つづけざまに
五、六度ぶった。腕が疲れてきた。それでも夢中で、彼女はぶった。
彼女ははつきりといま、自分がこの尻を憎悪していることを感じた
……十行略……

「みんな、ちよいと待ちなよ。ほら、これであたいが細工してやる
よ」

せんが奥から、剃刀を持ちだしてきた。安全剃刀の刃を二つに割
ってブリキに挟んだ簡便剃刀だ。

「なにをするのさ」

「まあ見てご覧よ」

小政のせんがなにをしようとするのか、すぐとマヤたちにはわかった。町子のそんな身体を想像することは滑稽だった。彼女たちは腹の底からをかしくなつて、歓声をあげた。町子はまたこちらむきに縛りなをされた。せんの手にある剃刀を見ると、町子は身慄ひをした。

「あんたたちは、なにをするの。気でもちがつたんじやないの」

と、町子は半狂乱で叫んだ。そんな身体の状態を思ひ浮べるだけで、もう町子は恥かしさで、死にさうだった。

「そんなことでもしたら、あたしは死んで、化けてやるから」

町子は必死だった。彼女たちは町子の権幕にちよつとたじたとした。そんなにまで強く、町子が拒むとは意外だった。そのことで、それが町子の急所であることを知った彼女たちは、それを強ひてやりとげることには惨虐な快感さへ覚えた。小政のせんはどうしてもやるといきまいた。

(町子に対するパンパン仲間のリンチの場面である。今読んで見て、余り大した描写であるとは思えないが、空気座の公演によって、責めファンをうならせ一躍天下に有名になった「肉体の門」の原作だけあって、文献的価値からしても第一級に推してもいいだろう。ここに注目すべきは、次に引用するマヤに対する責めもそうであるが、女性が女性に対して行う私刑であることだ。今まで引用した時代小説の多くは、男性の女性に対する責折檻であったが、ここでは、女性対女性、しかも、戦後の一風俗として特徴のあるパンパンの世界である。責折檻としての臀部に対する鞭撻は殊更、取り立てていう程の方法でもない。ただ、打たれた尻が赤くなつてゆくところの描写と次の剃刀を用いるところは、露骨に走らず、簡にして要を得た巧みな文章である。次は、マヤに対する吊り責めがある。)

彼女たちは伊吹新太郎に対しては、それほど憎しみを感ぜなかつた。マヤの肉体に対して、嫉妬と憎悪を感じるのだ。伊吹に対する処置はあとまはしにして、とにかく、マヤに制裁を加えることについては、三人の意志はすばやく一致した。マヤは裸のまま、牛の肢をくくつた麻縄で手首をくくられた。しみこんだ牛の血が乾いて、縄が固くなつてゐるのだ。手首の肉に食ひこみ痛かった。くくりをはると、せんたちは麻縄を広間の天井から覗いてゐる鉄骨にとほし、端をにぎつて、

「よいそらつ、よいそらつ」

と、声をあはせてひきだした。マヤの両腕は垂直にひきあげられ、やがて、身体もそれについて真直ぐにひきあげられ、そして、両足さきが床から離れた。宙吊りである。マヤの肉体が、へちまのやうに空間にぶらさがると、

「オー・ケー、一服しようよ」

と、せんたちは床に腰を降した。まもなく、マヤは手首と脇腹に、焼鑊をあてるやうな激痛を覚えた。自分の身体の重さを、彼女は自分の手首ではじめて知った。いままで、こんなに自分の身体が重いものだと気がつかなかつた。暗いところから蚊がいつせいに寄つてきて、胸や、腹や、腿から血を吸ひはじめた。齒をくひしばつて、彼女はじつと苦痛にたえてゐた。気を失ふほどの苦痛の時間が、どれだけつづいたろうか……。

「マヤ、いまにいい眼をみせてやるから、もうしばらく辛抱してゐな」

せんたちは残り酒をあふり、手をたたいたりして、はやしたてた。彼女たちの様子は、これから磔刑を執行する獄卒のやうに意地悪げに見えた。マヤは泣きたいやうな顔つきで、強ひて微笑した。筋をひいたやうに、涙が頬をつたひ、もりあがつた乳房をつたひ、むかう岸のネオンの色にかすかに光りながら、腹部をつたひ、脚をつた

って、暗い床に落ちる……。地下の暗に、宙吊りのボルネオ・マヤの肉体は、ほの白い光りの暈につつまれて、十字架の上の予言者のやうに壮嚴だった。

(空気座公演の際の写真が数葉あるが、その中、ボルネオ・マヤの吊し責めの場面だけを参考に挙げておく。「マヤー、あんたやったね、私達を裏切ったわね、今度はあんたにやき入れる時が来たわよ。覚悟はいいのね」という台詞が入っている。その他パーマのざんばら髪を振り乱してもみあう数人の女の写真がのっている。

探偵小説「寶石」第四巻の三号に由利湛氏の「肉体の門殺人事件」というのがあり、この劇の終りの方を描写した処があるので、劇を見なかった人の為に掲げておこう。)

「やい、二人、起きねえか。マヤのちきしやう、ぶっちめるんだ」マヤは、ベッドから、全裸のすがたで引きずり出される。見物には、終始うしろむきになってゐるが、小さな劇場だから、臀部の筋肉のブルブル動くのまで、よく見える。

両手を括って、舞台正面、うしろ向きに吊しあげたマヤの裸体を、三方から、女たちが鞭でなぐりつける。マヤは髪を前後左右に振りまはし、脇腹から腰に波うたせながら、ワナにかかった女虎のやうに。ウォー、ウォーと泣きわめく。強いスポットライトに照らされ、ギラギラと光るほど白い背中や腰に、みるみる紅いすぢなりのアザができる。この物すごい鞭のはげしいウナリの音のうちに、夜又のやうに狂ふおせんと、女虎のやうに吼えるマヤとの、すさまじい幕切れになる。

(今度は月刊雑誌の中から適当に拾ってみよう。大体、雑誌小説に現われる責めは、縛って置いて鞭、その他で打つとか、せいぜい吊

り下げて打つ位の処で、それも至極あっさりと二三行で片付けてしまふものが多い。次に私の印象に残っている六篇の作品を挙げてみよう。いずれも同様に「縛りと鞭打ち」の場面で、やはり簡単な描写で終っているが比較検討されれば面白いと思う。)

その一、「女体罪あり」作は、北林透馬氏。絵は、富賀正俊氏。『探偵実話』より

美代が、入院して一週間目に、そのリンチを受けたのである。理由は、脱走しようとして、やり損って窓から落ちて守衛に捕まったからなんだが、美代の前に二人も脱走した女があり、これは巧く逃げ出してしまった為に、やり損った美代は三人分だけ、ひどいリンチを受けたわけである。

「コン畜生、お上品らしくすましてやがって、とんでもねえ喰わせ者だ。ちったあ身にしてみるやうにヤキを入れてやるからこっちへ来い。音をあげるなよ。」

その時の病棟長はトンネルお千代というズベ公あがりの手の早い女だったから、いきなり美代にびんたを喰わして、浴室へ引張り込んだ。廊下には見張りが立ち、八人の室長が美代を取囲むと、たちまち服を剥ぎとって真ッ裸にし、水をみだした浴槽に抛りこんで、頭をおさえて、水へ突込んだ。突込みっぱなしにしたんでは溺死してしまうから、あんまり水を呑まない程度に、ちよいと手を離して、美代が顔を水からあげて息をすると、また直ぐに水へ突込む。代りばんこにみんなが、面白半分になつてしまひ、引上げられた時は、死んだやうにぐったりコンクリートの上に倒れて動けなかったが、それをまた今度は、革のベルトで、代りばんこに殴りつける。殴られる度に、があつと水を吐きだして身もだえるんだが、もう悲鳴もあげ

られず、ただ苦しげにのたうっているばかりである。

「あんまり水に浸って身体が冷えるといけないからね、ちつとはあったかくなかったかい。水もみんな吐きだしたかい？」

冗談ではない、水と一緒に、夜の食事のうどんもみんな吐きだしてしまったし、青いほど白い肌には赤いみみずばれが縦横にすじをひいて、痛々しく血が滲んでいる。二三度気を失ったが、その度にまた水をぶっかけられ、美代は意識不明になってしまった。

翌日一日、毛布にくるまったまま部屋の隅に転がされ、身動きも出来ず、むろん食事もとれなかった。

その二、「姫滝の秘密」作は宮下幻一郎氏、絵は岡本爽太氏（岡本氏の絵は、裸で吊された女の、よく感じの出た筆であった）

「妙ッこれでも、まだ白状せぬかッ」

刑部の持った折れ弓が、妙の肩先にうなりを發して打ちおろされた。妙は後手に縛られ、うめきを洩らして身をくねらせた。

此処は仁科の邸の一室、翌日の夕暮れであった。昨夜、妙は故新八郎への恩義から、囚われの蟹頑右衛門を秘かに牢に訪ねて、その救出を試みたのであるが、不運にも事前に發覺し、監禁され、刑部の烈しい追求をうけているのである。

「妙ッ、何故、汝は彼奴を逃がそうとした。誰に頼まれたのだッ、さ、それを申せ」

再び刑部の手がふり下ろされた。妙は体を波うたせ歯をくいしばった。

「誰にも頼まれたのではござりませぬ。妾は、妾は、新八郎さまの仇を討とうと牢内に忍び入ったのでござります。」

「えいッ、又してもそのようなことをぬかす。口を開けば新八郎、新八郎、と、耳にタコが出来たわッ。誰に頼まれたか白状いたせ」

刑部は嫉妬と疑惑で、眼をギラギラ光らせながら、憎々し氣に見下ろしていたが、ふとその乱れた裾の辺りに目を止めた彼は、いきなり妙の肩先に手をかけると、小袖をびりびりと引き裂いた。

「な、なにをなさりますッ」

妙は思わず悲鳴をあげた。刑部はその露わに現われた雪の肌を、眼でなめまわしながら、ニヤリ嗤った。

「なにをすることは知れたこと、白状しなければ白状するようにしてやるまでだ」

刑部は言葉も終らぬ内に、妙の帯に手をかけた。妙は必死に拒んだ。だが自由がきかぬままに、みるみるうちに着物ははぎとられ、湯文字もむしりとられて、文字通り一条まとわぬ素裸にされて、そこに転がされた。刑部はそれを横抱きにすると、庭先において、松の枝に妙を吊し懸けた。

「さ、白状するか。さもなければ打って、打って、ぶちのめしてやるぞ」

惨忍な妖しい快感にすっかり興奮した刑部は、びりびりとその感触を楽しむように、弓をふりつづけた。その度に、妙の白魚のような体は弓なりにそり返り、呪うような呻きが幾度か唇から洩れた。全身に赤いスチが幾つか泛んだ。肌はやぶれ血がにじんだ。

その三、「応拳の幽霊」作は土師清二氏、絵は清水三重三氏『小説倶楽部』より

主人将十郎は本妻瑞江^{みづえ}の仕業だと見て、白状しろ、と責めた。瑞江が、存じませぬ、といえはいうほど将十郎は意地になって、打つ、蹴る、果ては後手に縛って梁に吊し上げる。物狂わしい有様である……。

「旦那様は、お変りなく、お退り遊ばされましたか」

「はい、お退り遊ばされました」

「そなたは、あちらへ行くがよい」

出て行けというのである。その意味は、やがて将十郎がこの納戸部屋に入ってくる。入って来て、打つ、蹴る、縛る、そなたは出て行けというのだ。

「早く、あちらへお行き」

「はっ、はい」

おひさは、何もいうことはできないのであった。毎日こうして主人将十郎が退立して帰ると瑞江に報せに来る。無論朝も将十郎が出仕すれば、「旦那様御出仕遊ばされました」と報せるように瑞江から命じられているのであった。おひさがお辞儀をして、納戸部屋を出た時、胸っとなっ疎んでしまった。目の前に将十郎が立っていたのだ、手に馬の鞭を持った将十郎が、眼を蛇のようにギラギラ光らせているのだ。

「ああ」おひさは息が止まったような心地で、思わず後へ退った。壁に背を押しつけて恐々ながらお辞儀をした。将十郎が憐れむような薄笑を含んだ声でいった。

「婢奴、行け」

「はい」と一層頭を下げた利那ビュツと鞭が背で鳴って、卒然と、

「あっははははは、あっははははは」

底抜けの笑声の尾を曳いて将十郎の姿が、納戸部屋へ吸込まれて行くのだ。

おひさは、あまりの恐しさに無我夢中で自分の部屋に駈戻ると、畳に打伏して、両手で、耳を押えて塞いだ。瑞江の悲鳴が今にも聞えて来るような気がするのであった。

鞭の音、痛苦を堪えようとするヒーツ、ヒーツという悲鳴と、歯齧をするキリキリ、という歯の音と、白状しろ、死太い奴だと罵る将十郎の怒声が聞えて来るのを、聞くまいとして耳を塞いでも、最

早耳からでなく、気配で、空気で、おひさは身体中に感じないではいられなくなっていた、

「ああ、ああ」喘ぎ呻くおひさは、責苦をわが身に感じながら畳を匍匐廻った。さながらおひさが責められているように。

納戸部屋の中では将十郎が、瑞江を後手に縛り上げて、梁に吊し上げようとしていた。疑心暗鬼、遂に妻を責め殺そうとしているのだ。

その四、「娘魔術師」作は渡辺啓助氏、挿絵は山田彬弘氏。『小説倶楽部』より

「どうでも泥を吐かんしぶとい女ゆえ、しよせん、身体に訊いてみるよりはかあるまい」

この提案には、もとより一同、わっとばかりに賛成してただちにその用意にとりかかった。提案者であるこの家の主人、笠松剛蔵の下知にしたがって、長持、屏風、スナイドル銃などの類が座敷に運びこまれ、いや応なしに、お蝶はいわゆるパレン魔法の実験に供せられることになった。

砂糖にたかる蟻のように荒くれ男の手は無理無態に、お蝶を促し、忽ちくるくると着衣をひき剥いてしまった。

総足田紋り緋縮緬の夜目にもあでやかな長襦袢一つだけでお蝶は高小手に縛りあげられた。渋引きの麻紐が、

「縄抜けができぬように、できるだけ堅く」

と云う笠松剛蔵の指示通り、彼女の柔肌に、ぎりぎりとも見るも無残に食いこんでいる。

「これはこれで、また趣きのある風情ではござらぬか。ますます艶めいて一段と女っぷりが上って見えるワイ」

引き剥いた衣類を屏風裏に蹴込んでから、彼等は、お蝶の長襦袢

姿を眺めやり、ひとしきり笑いさざめいた。

笠松剛蔵は、手にしたスナイドル銃の台尻で、ほつれ髪の下筋三筋貼りついた哀れにも美しいお蝶の蒼白い頬を小突いた。

「そちをこの長持の中に封じこんで、鍵をおろし、更に、太綱で十重二十重に縛りあげておくわけじゃ。もう、おっつけ子の刻、常泉寺の鐘がすぐ鳴り出すであらう。その鐘の九つが鳴り終らぬうちに、そちが長持からぬけだしたらば、命は助けてつかわそう。がしかし、最後の九ッ目がひびき渡ると同時に、拙者はいささかの猶予もなく、このスナイドルで、ドカンと長持に一発くらわすことにする……」

剛蔵は、スナイドル銃の台尻を、お蝶の円やかな頤の下にあてがって、ぐいと押しあげて返答を促したが、彼女はついと冷たい瞳で一瞥して、

「存ぜぬことは申し上げられませぬ。このような座興のお慰みは、けだものの所業、早よう殺して下さいませ」

と云い放って覚悟の微笑がちらりと唇に浮かんだ。

そこで、お蝶は縛られたまま、長持の中に閉じこめられ、その上に、縦横に綱が掛けられた。

その五、「甲子大黒天」作は滝川駿氏、絵は丹羽一美氏。『捕物講談』より

暗い魚半の奥の座敷に、なまめかしい灯が点いていて、その灯の下に人魚のように現わに、肌を剥かれた女が、荒い棕櫚の縄で後ろ手に縛られて、ころがされていた。雪のように白く、餅のように柔らかな肌に、赫黒い棕櫚の荒縄が、無残に喰い込んでいた。

僅かに腰間に残された赤い蹴出しが、内股の白いふくらはぎまで、めくられて幽隠なその奥までも、覗けそうだった。

女は暴れられるだけ暴れ、泣き喚けるだけ喚いたあととみえて、

疲れ果てていて起ち騒ぐだけの勇氣もない。蒼白くひき吊った顔が細かく痙攣していて、眼は血走って真っ赤だった。

「一層ひと思いに殺して下さいませ。柳橋の千代鶴は殺されても、お殿様の思いのままにはなりません」

「うむ、よくも申し居ったな。みどもも勘定奉行の萩原近江じゃ、よこしまながらこの思いを通さずには措かぬぞ」

萩原近江は肉に餓えた野獣のように、眼を怒らせて、可愛さが余って憎さが百倍、といった憎悪の眼で睨みつけた。

酒の氣に慾情を一層かき立てられた近江は、常人でない惨虐な獐猛さが見えた。

尊大ぶっている日頃の、慎みも忘れ果て、一疋のこわい獣になっている。

黒い艶やかな島田を、根本からガククリと崩した千代鶴は、その髪に白い頬を埋めたまま動こうともしなかった。それが女がいいだけに、却って凄味を感じさせる。千代鶴は激しい反抗の憤りを噛みながら、吐のなかでは覚悟が出来ていたのだ。

女の乱れ姿のそこまで、脇息を乗り出させた近江守は、猛獣が獲物を押え込んでから、牙にかけるまでの間の瞬時を、恍惚とした思いで愉しむように、淫らな眼で、剥き出しになっている千代鶴の身体を、撫ぜまわしていた。

「身のほどを知らぬ不敵な女めが、かくなつた上でも今更ら、兎角を申すのか、尋常になびくが、身の為と申すものじゃ」

「いいえ従いませぬ。柳橋の千代鶴はいやしい勤めこそして居れ、人間の端くれでござりまする。獣の餌食になるのは真っ平でござりまする」

「なアに、武士に向って獣と申し居ったな、容赦はないぞ」

「ええッ、申し上げました。か弱い女を搦めて置いてでないと、自由出来ない男は、武士はおろかなこと、獣にも劣りまする」

「縛って置いて、氣隨に致すのが、獸の所業と申すのか。それならばみどもとて望むところだ。手の縄を解いて遣はそう、縛って置いたのでは情が通わぬ。では解きほどこいて思いを通すわ」

近江の神経は常軌でなかった。女に煽り立てられるがままに、千代鶴の縄を解き、抱き起こして膝の上へ曳摺りあげた。

その六、「みじか夜峠」 作は野沢純氏、絵は加藤敏郎氏。『小説俱樂部』より

月夜の戻り駕籠が、甲府目ざして釜無川の橋の袂にさしかかった時、有無もいわず猿轡をはめ、そのまま権造一家へ運び込んでしまったのを、神ならぬ身の、誰知る由もなかったのである。

「お柳、お前は鍬沢まで何しに出かけた。行って出揃った男は誰だ？その男の名を云え、何をしやべった？」

さア云え云えと、後手に縛りあげての折檻だったが、お柳はいつかなまことの口を割らなかつた。

「情人に憐ったのが、どこが悪いのさ、男と女の憐曳話を、それほど聞きたけりやア、聞かせてあげるよ。夫婦契りをしたまでさ、妬くのもいいかげんにおし」

鉄火にそう云い放ったきり、あとは頑として、鬢のほつれ毛と共に、唇をくいしばって、本当の事はいわなかつた。

そういう姿を打ち眺めると、尚更、意馬心猿の焰と燃え立つ権造である。

「女、この俺を目の前にして、よくもぬけぬけと口をきいたな。しぶとい奴め」

ピシリッ、と鞭が柔肌、に、忽ち紅の縞をつくった。

身を揉んで、うめく姿が、何ともいわれず、男の飽くなき嗜虐を唆るのである。

「銀次さん」

と呼びかけたい心を、じつと抑えて、俯向いたまま、痛みに堪えるお柳なのである。

あくまでも、誓った秘密は守ろうとしているのだ。その姿を眺めながら、権造の眼に、ふと残忍な色がありありと浮かび上った。

（よし、この俺になびこうともせず、あくまでも、口を割らねえとありやア、此方も意地だ。股を割って柳木にくくりつけても思いを遂げてくれるぞ）

とまで思っているのだ。

うしろ手に縛られて、権造一家の奥まった座敷牢に放り込まれて、すでに今日が三日目のお柳なのである。

男のあこぎな責め折檻に、さすがのお柳もげっそりやつれた。

——そのとき権造は、たった一人奥の一間に起きていた。

お柳を前に引き据えて、どうしても今夜は口説きおとそうという魂胆。

どうしても肯かねば、いよいよ以って可愛さあまって憎さ百倍、背中を割って鉛を注ぎ込むか、股を割っても思いを遂げるか、と云う、瀬戸際のところまで、追いつめて来ているのである。

縛られたまま、身動きも出来ないお柳の軀に、のしかかろうとした時。……

（以上挙げた六篇は皆短いものであるが、各作者毎にそれぞれ特徴を持った描写をしているところが読みとれる。それと同時に、責め場面に通道の相通するものがあって、比較して読んでみると興味深いものがある。いずれも責めを目的の作品ではないが興味を持たれた方は、更に原文によって探究されたい。なお他の読者の方の読書範囲の中で、これはと思う文章に接しられたら、是非御紹介頂きたいものと思う。今回は比較的短文のものになったが、次回は責めの場面の長いものを探し出してみよう。）

美少年処刑の図

『笑い』

<菊池寛作「笑ひ」より>

山口幸一

お読みになった方が居られると思いますが菊池寛氏の初期の短篇に『笑ひ』という小説があります。

それは徳川時代の初めの頃、美少年というものが男女若衆という様に第三の性として社会的に認められていた時代を背景として純真な美少年が厳しい封建的徳徳の犠牲として簡単に死刑を執行された物語であります。流石に文豪は小姓であるその少年を第三の性として、サデイズティックにマゾヒスティックに、たくみに厳しい背景の中に美しく描写しております。

原作では其の死刑は武士のならわしで自宅に於いて切腹を命ぜられた事になって居りますが、私はその処刑の状況を私なりに描写して見たいと思います。登場する人物は誰でも良いのですが只、金屏風と麻袴で代表される厳しい封建時代が背景になっていると考えればそれで宜しいです。

物語りは次の様なものであります。

徳川二代將軍秀忠公が薨去になり江戸城の大広間では七日間の御通夜の儀式が肅然と執り行われていました。

その何日か目。今夜も千疊敷の大広間にせましと居並ぶ諸大名や重臣達は既に数日間続く徹夜の退屈な静座で身心共に疲れ果てて居りました。

其頃は戦国生残りの大名は数少く大概二代

目三代目になっていきますから戦場の苦勞は知若らぬ我儘育ちの若殿達が多く何れも一週間の荒行が早くすめばいいとばかり考えていたが、流石に先將軍御通夜の式でですから少しも緊張を弛める訳には行かず我慢してつとめていました。

夜が次第に更けて行くと御小姓達によって火桶、茶菓子などが所々に配られ、室内がぼーっと暗くなってくるとたまらない眠気が襲ってきます。一定時間を置いて正面祭壇前に静座している、天海大僧正を初め十数人の僧侶の読経合唱が唱えられてくると、其が又益々眠気をさそってたまらない気持ちになりついうとうと頭を下げては大事の場と気がつきはっと正氣をとり戻す大名も現れてきました。

肥後五十四万石の太守加藤広明公も御多分に洩れず二代目大名であり、父君清正公があまり偉かったせい、特に暗愚の噂が高い大名でしたが、初めの内こそ、一生懸命こらえてつとめていましたが、今夜という今夜はとうとうたまらなくなり大っぴらに船を漕ぎ初めました。かんかんと炭火のおこった火桶を前にして鼻から堤灯を出して舟を漕ぐ有様はあまりかっこうの良いものではありません。

御小姓組の荻原秀之進はさっきから広間で茶菓の持運びや火桶に炭をつぎ足したりして仿いて居りました。仕事の合間、大人達の醜態を少年らしい潔癖から滑稽に眺めて居りま

したが、一番甚しい加藤広明公を見付けますと、もう愉快でたまらず、そっと朋輩の御小姓の袖を引いて知らせました。二人はともすれば含み笑いの声が出そうなのを耐えて広明公のしぐさをながめていましたが、そんな事は一向素知らぬ殿様は益々はげしく舟を漕ぎ遂に大きく前にひっくり返ると脂ぎった鼻を炭火の上に突っ込んでしまいました。

『きやつ』という悲鳴とともに飛び上って四囲をきよろ／＼見廻す馬鹿殿様の叫び声よりも、むしろ、其の

後の『アハハハハ』という少年のけたたましい笑い声でうつらうつらしていた諸大名達は一齊にパッチリと目がさめて、広間の一隅の秀之進達を見つめました。その中にはやはりこの時はっと目をさました大目付、仙石因幡守の額にしわを寄せた恐しい顔がありました。

少年は其時初めて之が厳肅な將軍家御通夜の席上である事に気が付きました。

其日の内に秀之進の親元には大目付より御



沙汰書が達しました。

『御小姓組萩原秀之進儀將軍家御通夜の席上もわきまえず不謹慎なりし段不屈至極の所、今夜大奥にて縛首之儀執り行われるに付母親同道の上出頭罷り有るべし』という趣旨でした。

秀之進は武士の子ですから当然今日の不始末については死を覚悟して居りまして、下城した後母に一部始終を報告しました。

母は少しも騒がずに秀之進をさとしいさぎ

た次第でありました。

其の夜、秀之進は入浴をすますと薄化粧をしまして髪もきれいに結い上げました。

縛り首は下帯一つの裸で執り行われるので下帯は特に新しい白絹の一反ものを幾重にも廻しきつく締め込みました。

母親は純白の褌を締め込んだ秀之進の美しい肉体を之が見納めになるものと、しみじみと眺めて居りましたが、やがて登城の時刻がせまり迎えるの駕が二挺参りました。母子は

よく武士の子として死んで行く様に覚悟をきめさせましたが、ただ切腹を賜らないで、其れよりも一段下の縛り首の刑を行われる事が残念であると思いました。しかし、命に背き勝手に切腹など行ったら『萩原秀之進儀縛り首仰せ付けられ候事、有難く拝受致すべき所勝手に切腹仕り君命に違反したる段重々不屈至極に付一家全員斬首の上親族一同遠島仰せ出でさせらる』という様な沙汰が来る事は明なので、縁者に迄迷惑が及ぶ事を恐れて、有難く縛り首刑を受ける旨返書を認め

別々の駕に乗り込んで登城致しました。

御小姓、御女中達の処刑は大奥の御局で御女中の手によって行われるのが説であります。広間には御屏風が廻らされ中央の柱の上から太い白い綱が二本下って一方の下は輪に作ってあります。他端を引いて吊し上げる装置です。柱を取り巻いて御女中達が十数人が何れもたすき鉢巻姿でなぎなたを持ち控えて居ります。

一端には秀之進の母がやはり小太刀をたばさんで吾子の死を見とどけると共に万一にも卑怯な振舞が見えたら其場を去らず討って取ろうと油断無く構えて居ります。

秀之進は老女に導かれて屏風の陰で衣服を脱がされます。それから再び白絹の下帯を前の通り幾重にも廻して締め込み前垂は下げずに尻に廻して後で固く結びました。

縛り首を行う時にそそをしない様にすべて、老女は手馴れた様子に運んで行きます。支度が出来ますと、老女は秀之進を導いて部屋の中の柱の下につれて行きました。

秀之進は少しも悪びれず控えの御女中達と検視の老女に一礼すると老女はさつと輪になった綱を秀之進の首にかけました。手足は縛らずに自由にしております。

手足を縛って吊り上げる方法は、一気に死刑を執行するやり方でして、昔は手足をわざと自由にし徐々に吊し上げて最後に両手が疲

れ綱から手がはなれ絶命したのを見とどけてから、綱を下すというやり方で、苦しむ時間が相当永くかかります。

この場合粗相する事がありますので、禪は特にしっかりと締め込まなければなりません。

秀之進は下帯一つの裸体で目をぱっちり開けて悪びれずじつと正面を向いて立って居ります。雪の様に白い身体は少年らしいすんなりとした筋肉をつけて、人形の様に美しい姿です。

やがて老女が静々と秀之進の傍に近寄って参りました。そして、

『命により只今より其方儀処刑を執り行われる。有難く御受けせよ』と申渡します。秀之進は黙って一礼致しました。老女は秀之進の後に廻り下帯の締め具合をもう一度良く点検致します。万一処刑の途中で解けたりしては醜態ですので、特に後の結び目に手を入れて二、三回引いて見て、又、前袋がしっかりと締まっているか良く調べます。

終ると綱を秀之進の首に締め付けます。

既に十数人の御女中はもう一端の綱にぶら下って合図一つで何時でも引き上げられる様に用意が整いました。母は小太刀の柄に手をかけてちつと秀之進をみつめて居ります。老女は二、三步秀之進から離れました。そして白扇をひらくとちつと立って此方を見つめて

居りましたが間もなく手にした白扇をさつと振り上げると同時に十数人の御女中達は一齊に綱を引き上げました。秀之進は『あーっ』と叫ぶや床から三尺位足が離れ宙に吊り上げられました。呼吸は急に苦しくなります。必死になって左右の両手でしっかりと綱を握っていますのでかすかに息は通ってきます。

『あーっうーっ』と苦しみの為に両足は宙におどり腹や胸は悶えに波打ちます。綱を握っている両手の力は次第に疲れてきて遂に綱を離そうとしますが尚揮身の力でにぎって居ります。

白絹の禪はお尻の割目に深く喰い込み巾広い前禪は波打つ腹をしっかりとおさえています。つまる呼吸を必死に耐えたが『むーっうーっ』と低い悲鳴を上げるばかりです。三分四分、秀之進の手はまだ綱から離れません。其の時あまりの苦しきを見兼ねたのか、秀之進の母は懐剣を抜くと見るや『御免』と云って傍にかけ寄りますとやにわに左手で秀之進の後禪の結び目をしっかりと引く擱んで引きよせると右手で懐剣を『えいっ』とばかり秀之進の左腹につき刺し忽ち右へ一文字に腹を掻きさばくのでした。

『あーっ。むーっ、くくくーっ』

断末魔の苦しみに秀之進は両足をくねらせ手は虚空を擱んでもだえ苦しみます。母は尚もすかさず右手の懐剣を根元迄秀之進の腹に

さし込むと直腸のあたりを引っ掴んで取り出そうとします。

『むーっ、うーっくくくく』と秀之進は最後の力をふりしぼって苦しみもがきます。

秀之進の下帯は朱にそまり、両足先はピクピクとけいれんを続けます。

最早之迄と老女がさつと手を振りますと一

人の御女中が短槍を持って秀之進の脇腹へぐさり突き刺しました。槍の穂先は腋の下へつき抜けました。

『ぐーっむむむっ』

と最後の悲鳴を残して可惜十五才の少年の命を終わったのでした。

美少年の処刑とは何と痛ましく又も凄艶な

ものでありましよう。しかし、其の時代にはそう云う事を当然の事として受け入れる社会的背景があったのです。

封建時代の束縛の中に生を享けどうにもならない道徳律に縛られて美しく散って行った数々の少年達をしのびながら筆をおく事と致します。

通信

『菊花会』例会報告

筑紫美弥子（愛知）

木々の梢の間を、いかにも初夏らしい香りを乗せて、緑の風が吹き渡るよい季節となりました。奇クの皆様も、毎日を御元気で御越しの事と拝察申し上げます。

さて、私はこうして始めて御便りさせて戴くので御座居ますが、いざ筆をとって見ますと、何から書き出して良いのやらすっかり迷ってしまいます。読み難いところは、どうか御許し下さいませ。私も三年前からの奇クの愛読者です。そして一度この本を手に入れて以来すっかりその魅力に取りつかれてしまつて、今ではもう一日も手放すことの出来ない

バイブルになってしまいました。そうそう、まだ私のことは何も云って居りませんでしたわね。

私は今年二十三才で、或るデパートに勤務致して居ります。中京と呼ばれる名古屋市内に今度、私達数人で奇クの会をもじって「菊花会」というグループを作りました。これで今迄、偉大なる田舎と呼ばれた本市も、この方面では東京、大阪に負けなと皆自慢して居ります。会員の方は皆、気持のよい人ばかりで、男の方は、会社の重役さん、御医者さん某公社の課長補の青年と、或る商店を経営し

て居られる人等です。女性私を入れてオフィスガール三人、その他にバーのマダム一人主婦一人、変り種として女子高校生の方一人計六人です。こう書きますと女性の方が多い様ですが、そこはよくしたもので、オフィスガールの中、私を除く二人は猛烈なレスボスですよ。

私共の菊花会は、毎月第一土曜に例会を開きます。会の事はその日だけの御約束です。そしてこれが唯一の会則です。会であったことは、あくまでもその日限りで、一切、外へは持出さぬのが鉄則です。幹事は毎月交替で色々趣向を考え、第一土曜の午後五時迄に市内の某音楽喫茶に集ります。そして皆揃ってその日の会場に行く訳です。そして入浴後、軽い食事を済ましてから、その間にその日の幹事の方から、その日の趣向が伝えられるのです。それ迄に、もう一月前からその日を楽しみにして、各自の計画を練って置くわけです。

さて、夕食後しばらくして、お茶も終り、日もとっぷり暮れた頃から行事は本格的になります。先ず幹事の方の、これ迄に集められた色々の写真文献等の紹介に、各自はほっと溜息をつきながら、交替に眺めて、意見を述べたり批評したりした後、いよいよ各自くじ引の順に従って、一ヶ月来の計画を実行致します。パートナーは、演者の指定の方が務めますが、これは何人でもかまいません。そして各人の趣味は大体わかっていきますから、気心も知れ自由に選べます。先ず最近の五月四日の時の模様からお話致しましょう。

この日は、先ず課長補の相良さんからでした。この方はマゾとフェチの傾向があるのでパートナーに選ばれたのはマダムの原さん、しばらく次室で打合せの後、相良さんはマダムの用意した轡を嵌められ、背中に靴脱ぎのマットを裏返しにした鞍をつけ、マダムのピシクのパンティで顔を包まれて彼女の馬になります。背に跨った原さんの振る革の鞭に従って、並足、駈足、障碍等の芸を強制されます。終いに歩けぬ位ふらふらになりましたがそれでも許して貰えません。床に這ってしまふのを、ハイヒールで踏みつけられ、蹴飛ばされて、最後に靴に接吻させられて終わりました。

次は二人のオフィスガールです。例によってレスボスの連続で、石田染子さんはパッシ

イヴ、小松隆子さんはアクティブ。石田さんは隆子さんにされるままに、ルーシユと白粉と頬紅で顔を化粧され、全身色の浅黒い隆子さんは素晴らしい男役で会員の私たちを、やんやといわせました。三番目は店主の太田さんと高校生の久子さんです。太田さんはサドの傾向があるといっていましたから、可憐な久子さんをパートナーに選んだのでしよう。久子さんは悪びれる様子もなくドライ娘らしく上はセーラ服を着たままですが、下はブルマ一枚となり、運動で鍛えられた体を、太田さんの毛むじやらの手で後手にひくくられ曲った両足首をアクロバットの様に肩の近くまで逆海老に引上げられて固定されました。この姿勢のままポニーテールの髪を束ねて、ぐっと引き起され、その額のところに一本のローソクが立てられ、火が点されたのです。この姿勢で動く事も出来ぬままに猿ぐつわをされ、ローソクを消されて後、髪を引っばられて室中を引きずり廻され、その痛さのためひいひい云い乍らも、放して呉れとは云わなかったのには感心しました。

次は重役の中川氏と主婦の森泰子さん。中川氏はその肥満した体をテーブルの上に仰向けた大の字に縛られ、泰子さんのゴムホースの鞭を受けるのです。びしいびしいという鞭の音と一緒に、全身に一すじ一すじと紅のみみず張れが増して、二人の額は次第に汗ばん

で参ります。最後は私とドクターです。ドクターと私は暫く隣室で打合せの後、ドクターの準備した二立入りのイルリガートで浣腸をかけられました。腹がボンボンに張ってその苦しきといったらたえ様もありませんでした。もう目の前が真暗になってしまいました。が、やっと御不浄へ行くことを許され、ホット生きた心地がいたしました。暫く体を休め各々に批評等した後、今日の幹事のマダム原さんの下着のフアッシュンショウをしました。注文して特に作らせた素晴らしいものばかりで、黒の網目のパンティの前の部分に、銀色のハート飾りつけたのや、縐子に刺繍を施した六尺褌、レースの美しいブラジャーや全色の身体にぴったり合わせたズボン、サランのコレット等々、私共はため息が出る程でした。

この日はこれで終わりましたが、その前の月はドクターの医学の話、その前は二人のオフィスガールの会社での他の人の噂話、重役氏の海外秘話等です。毎月交替でとおきの隠し話をするので興味の尽きることがありません。私共の集りを私達だけで独占するのにも惜しい様な気がして、こうして書きました。拙い筆ですがお許し下さい。皆様からも、こうした楽しい集いのお話を承らせて下さいませ。(おしまい)

現代マゾヒズム芸術時評



原 忠 正

復刊第二十八項米誌「狂気」

＝MAD＝より

此雑誌は他に類のない奇怪な雑誌である。第一次世界大戦後に我国にも頻りと喧伝されたダダイスム (DADAISME) の近代化大衆化されたような編輯方針によっているらしく思われる。この雑誌の本年四月号二十四頁上段の諷刺画は女狩人の戯画であるが、他の動物に混って人間の首のハク製が描かれている。彼女は残忍と傲岸と誇りの混合した表情とポーズで立っている。この一枚の小さな画はアーヴィング・クラウ社 (IRVING KLAWE) やビザアル誌 (BIZARR) の挿絵と同じく北米系のコミカルな味を持っているが、かつて、ゲオルク・グロス (GEORG GROSZ) 等の作が同

様の味を持っていたことも勘案されるべきであろう。挿絵に於いて、他誌に比べて甚だしく劣ると断ぜざるを得ない本誌に、これを望むのは難しいかも知れないが、若し有能の画家にして志有らば、此の種のもを参考にならざることを望むの念切なるものがある。猶本項に挙げたものの原題、及びこの雑誌に掲載の画家は次の通りである。

MAD: NO. 32. APRIL 1957. page 24.

“WOMEN, AND THE MAGAZINES.”

ART DIRECTOR: John Putnam.

CONTINUITY: Jetty de Fuccio.

IDEAS: Nick Megliola.

ARTISTS: Wallace Wood, Bob Clarke,

Norman Mingo.

Frank Kelly Freas, Don Martin,

Mort Drucker, Joe Orlando, George Woodbridge, Henry Mayo Bateman.

復刊第二十九項米誌「ピープ・シヨウ」

＝PEEP SHOW＝

五七年四月号より

同誌はフランスもののストリップやヌード・シヨウの写真をも米国に紹介することが主な方針であるらしく、同様の姉妹誌、「パリ・ライフ」＝PARIS LIFE＝という雑誌もある。今回の号の第四十頁と第四十一頁に四枚の写真を掲げて、「美女に長靴」＝BOOTS FOR THE BEAUTIES＝という特集をしている。文中、ゆきづまったフアッシヨンの試みとして、古い香りのする長靴や半長靴＝BOOTIES＝の復活は如何でしようと呼びかけているのである。但し「長靴や半長靴」といってもチヨウクワやハンチヨウクワではない。編上型の女性用に十九世紀末から一九二〇年頃まで使われた特殊なものである。即ち乗馬靴、特に独乙で Schafstiefel と呼ばれるものではないのである。ルドルフ・シュリヒテルが好んで描き、鐘愛の妻に常に穿かせて愛したあの種の軟かい婦人靴である。写真は、シルヴァアナ・パンパニニ、クラウディ・ヌ・シュレエ、ジャンニヌ・デュミエ、

シユドレエルの四グラマア・ガールが夫々華奢な編上型の婦人靴をはいているもので中見出しに曰く、"It's a new look way down under when these Continental beauties go for booties in a great big wonderful way." 西欧に多い靴フェティッシュの為の特集であることが推測される

復刊第三十項米誌「シイ」SEE

より

同誌本年五月号第十六頁から始まる。

KING TABOR'S MILLION-DOLLAR WENCHという小説の挿絵が面白い。ベ

ビー・ドウ=BABY DOE=ベビー・ドルならぬベビー・ドウが老紳士に跨って杯を挙げている。曰く「ベビー・ドウは誇らかに跨っていた」と。挿絵(3)を参照されたい。小説の内容は陳腐なものである。

復刊第三十一項独映画「おハムマイ

・パ・パ」OH MEIN PAPA

主演 (LILI PALMAR) リリイ・パルメル (ROMY SCHNEIDER)

ロミイ・シュナイデル

(KRAUSS BIEDERSCHTEDT)

クラウス・ビイデルシュテット

(KARL SCHÖNBECK)

カルル・シエーンベック

色彩。イーストマン・カラア。プリント

テクニカラア

監督。クルト・ホフマン。(KURT

HOFFMANN)

原作。「花火」—音楽喜劇。エリク・カ

レル及ユエルク・アムシュタイン作

筋はサーカスの親娘と団員の男とのやりとりが主であつて、私が、典拠にしている

英国の映画誌「PICTURE SHOW FILM

PICTORIAL」誌本年一月十九日号にも

詳しくは出ていない。私の最も期待してい

た独乙のハムブルグ市発行の「シュタアル

・ウント・レヴィユウ」誌が、二冊欠号にな

っているのでは或は其にでも出ているのかも

知れぬと思ひ乍らつい見ることが出来ずじ

まいである。私はこの物語でなく、ふと面

白いことが出ているのに気付いた。右の映

画誌の第十頁上段右側に人間の這入った縫

いぐるみの男が、女性調馬師(リリイ・パ

ルメル)と共演している写真が出ているの

である。これだけでも充分面白いところへ

説明に曰く、「この馬の前足はリリイ・パ

ルメル自身の良人がつとめている」という

のである。これは大きな収獲であつた。こ

の良人たるもの、妻が優雅な乗馬服で鞭で

指図する通りに衆人環視の中で踊らねばな

らないのである。冗言は要すまい。実生活

に於いての彼等がサド・マゾヒズムの傾向があるなしは別途のものとして、新らしいアイディアが此処にある。遊ぶ上に、又深刻な重症患者の就職に関してこの発見は、こういう方法でなら、馬に限らず何にでもなつて人前で女房や愛人の下位に立つことが出来、且又、ひそかに楽しむことが出来るということを示している。只、本映画は悲しいかな本邦にては未輸入の筈であるし公開の予定もない。

復刊第三十二項伊太利映画「道」

—La Strada—

主演 アントニー・クイン

此の作品は、その映画としての画期的な成功の故にここに一項を設けたが、マゾヒストにとって、直接的の刺激を与えられる部分は少い筈である。然し、筆者はこの作品全体が此上もなく巧みに描き出している田舎廻りのサーカスや曲芸師の雰囲気、前項と関連をもつて楽しく眺めるのである。こうした香具師の様な歐洲の片田舎の曲馬団や曲芸団に於いて野獣を買う金にも窮するが故にこそ、有色人種を或は又貧乏人とは縫いぐるみに入れて、獣の真似をさせることは絶無であつたであらうか。そうして、江戸川乱歩が頽廢的といわれ、倒猪の代表の如くに呼ばれた時期の一作、「猯奇の果」

に又、「人間狩」に描いたと同質の連想が私達を支配するのである。直接の行為にのみ興味を有する方にはこうした連想と想像とを要する観照は甚だ無縁のものと思われるが、烈しい芸術的な感興と伊太利の印象的な台詞の綿密な構成、偉大な作曲ではないにしても魅力と淋しさを横溢させた音楽との相互に合成してゆく忘れ難い感動は同時に神聖な意味をもつ場合のサド・マゾヒスムについて、森嚴な回想を浮ばせるのである。場面的には逆であるが、男が女を訓練する時のサディスティックな場面がある。

復刊第三十三項出版物「東京リポート」誌

右の雑誌の六月号第六十頁より割合に詳しく奴隷制度の残存についての記述がある。このことは去る六月号誌上で沼正三氏が情熱的な口調で述べられているが（同号六十九頁下段「夢想家の手帖」第一百項、今でも奴隷は売られている。）再び同様の資料によったと思われる記事が一般誌に掲載されているので改めて注意を喚起するわけである。

以上

【お願い】読者の中で左記のショウを御覧になった方があれば、其の内容を詳しく伺いたいと思います。編集部気付にて

親書を頂ければ望外の幸です。日劇ミュージックホール前月（五月迄）上演の後半約半月の間出演の「モーリス夫妻」の鞭による演技。これはモーリス氏が鞭を使うだけだと思ったところ、或る人からモーリス夫人も鞭を使うとききました。すでに公演が終ってしまいましたのでその真相を知りたいのです。

原忠正

【訂正】七月号所載時評の訂正

(1) 一二二頁中段終りから二行目五字目「場合の」の次の部分は次行「——が」まで削除の事。

(2) 一二四頁下段二行目「死刑の判決をうけたのである」は「極刑の判決をうけたのである」に訂正、西ドイツには死刑が存在しないのでイルゼ・コッホ夫人は無期の判決をうけ恩赦によって出獄した。

Ilse Koch＝

(3) 同頁下段欧文の中「Sommeretten.」は「Sommeratens.」の誤り。

(4) 一二五頁上段終りから二行目のカッコの中は全部削除。又中段終りから八行目の第二字「同」は「第」に、七字目からの「同二十五項」は削除。又上段欧文の中「Two Dictations.」は「Two Dictations.」の誤り。

(5) 第二十七項中の人名 Gio rdano はチオ

ルダアノが正しい。ジはヂに統一。欧文中「Como il cavallo.」は「Come il cavallo.」

猶、之等の誤字は殆んど全部が誤植でなく誤記であり筆者の責に任ずべきものであることをお断り且つお詫びしておく。

（追補）

復刊第三十四項定期出版物「群像」

七月号

古今東西を不問、所謂被虐性愛に名を冠せられた程のザッヘルマゾッホ教授の代表作「毛皮を着たヴィナス」(Dr. Sacher-Masoch; Venus im Pelz)の翻訳が殆んど完全な形で同誌の巻頭十四頁から一四〇頁までの百十七頁に涉って掲載されている。近頃の人達はこの程度の事は大したものとも思わないであろうが、昔、それも特に検閲華やかなりし頃は、この様な一般誌上にS・マゾッホ教授の作品が掲載される事など思いもよらぬことであつた。まして、この翻訳者が佐藤春夫氏であることは特に注意に価するのである。当代随一の詩人として、又真正の日本語を書く能力を持っている残り少い文人として、完璧の日本語が呼ぶするが如くに適正な観照を指示することの出来る文章家の一人として、氏の占める地位は余りにも高く、その魂は余りにも深

い。小説作品として決して名品とはいえない。猶且、声名を恣にしたこの作品はここに完全に邦語化されたと云っても誤りではないであろう。本篇は斯界の訳業の中でも後代に残すべきもの、一つと云えるのである。このような得難い幾つもの要件を具備する上に、筆者は、氏が訳出の最後に連ねたサド・マゾヒスムに対しての評論に注意する。その内容の当否はともかくとして私

はここに普通公刊誌上に当代の名家の一人が淡々として、宛ら実存主義を評するが如くにサド・マゾヒスムを対比させ、各々に解釈を加えてゆくを見出す。時代は変わった。すでに戦後でさえないのである。この事は、現在兎角の評判をうけながらも本誌の如き専門誌が刊行をつづけているという時代に考えても、何十年かの後に傾向性の故にのみ存在の価値のある作品は斯界か

ら遠ざかり、小説が、最近ミステリイをそのカテゴリーに加えた様に、サド・マゾヒスムが正當な文学のジャンルに加わる日の近づきつつあることを示唆しているのである。倒錯性愛と呼ばれたところのものは、今やヴィタ・ヌオヴァ（新生）を享けんとしているのである。

（以上）

△フエチ通信▽

赤い下穿き

高木栄二

私は今年三十八才で某役所の課長です。

ここでは課長と名のつくものは、みんな五十過ぎの老人でもう停年を真近に控えたものばかりですから、私は随分若い課長です。朋輩の中では出世のほうだと自惚れています。身長は人並以上に高いのですが、どうも生れつき肥えられません。それでも未だかつて病氣らしい病氣をしたことはありません。難をい

えば蒲柳の性質でスポーツをあまり好まず炊事や洗濯することが好きです。そして人にもいえない大の女用下穿きマニアです。どうしてこんな異常性になったのかと時々ふりかえって、自分乍ら情ないことだと思いますが、この分だけはどうにもならず表面は紳士然として、とてもすまして毎日を勤めています。私は草深い芸北の中農の次男坊として生れ、

兄と妹の三人兄妹ですが、それでもどうやら人並の教育もさせてもらい、別に不自由は感ぜずに生長したのは、何としても父母の愛によるものと感謝しています。

父は他の兄妹以上に私を可愛がり小学校へ入る頃まで毎晩、私を抱いて寝る習慣でしたが、私は大きくなるにつれて、それがとても嫌いで父から逃げようとするのですが、父は力づくで私を挟んで仕舞うのです。でも私はその反動というのですか、いつの間にか、こっそりぬけ出ては母と妹の寝ている間へもぐり込み夜明けの楽しい夢を結ぶのでした。

母もとても子煩悩でして、毎晩何度も起きでは私達の寝巻をめぐって蚤を取ったり、寝そを直したり布団を押えて回り、咳の一つでもしうことならすぐ薬を飲ませたり熱を計ったりしました。私のうちでは冬は保温に

夏には蚤をとるのに便利がいいので全員腰巻をして寝る風習になっていました。

ある夏のとき、たしか小学校の二年生位のと看でした。丁度私の腰巻は洗濯してあったので、母は無理やりに母の平常用いている真赤なのをしてくれました。その翌朝、父母は草刈りに行っていましたし学校友達が誘いに来るまで知らずに寝込んでいました。友達の声にびっくりして飛び起きてきた私の恰好と見たらなんと真赤な腰巻を引きずっているではありませんか、その朝は友達みんなして随分わいわい騒がれた記憶があります。

そうこうしているうち、私は女の下穿にとても魅力を感じるようになり、こっそり妹のズロースを穿いたり、あるときは真赤な腰巻をズボンの下にたぐねて学校へ行くようになりました。勿論学校へ行っても男の子と過激な運動等することはなく、たいてい女の子達と鞠をついたり、しよんぼり佇んでいることが多かったようです。

中学校を終えると私はすぐ満鉄に職を得て渡満しましたが、だんだん異常性は激しくなり、休日には一日中部屋にとじこもったり、無口でいるのですから、みんなから相手にされず、ついに独身寮にいたたまれずに安アパートに移りました。ここでは独り暮らしの気楽さ、もうわが世の春でいるんなズロースを作ったり買ってきたては毎夜並べてみたり穿いて

みて一人ほくそ笑んでいましたが、とうとう私にとっては一生の大椿事を起してしまいました。それは昭和十一年もあと三日と迫まり職場はとても忙しいので朝未明に家を出ました。平常はたいてい白のズロースを穿いて出かけていましたが、その日にかぎり夜を楽しんだピンクのズロースを、そのまま穿いて出かけたのです。思えばそれが失敗の元だったわけです。あまり急いで交通信号なんか無視していたので、町角を渡りかけてハッとしたときはもう私はトラックにいやという程はね飛ばされてしまいました。

静かな病室でまる一日無意識でした。やつと氣をとり戻したときは、すでに街には燈りがついていました。私は、とみると右足から両腕にかけて沢山の繃帯がしてあり動かすことも出来ません、しかし、それにしても私の驚きは、脇机の下に私の真赤なズロースが脱がされぐるぐる丸めてあるではありませんか。私は体の痛さも一ぺんに忘れ、さつと冷や汗が出て息もつまりそうでした。幸いそこに看護婦はいませんでしたので、私の驚いた顔は見られませんでした。もうすぐ入ってくるだろう看護婦のはげしい軽蔑の顔を思うと、いてもたってもおられず、どうしようかと生つばばかり出ていました。

やがて静かにドアが開いて看護婦が入って来て私の顔をのぞき込みましたので、おそる

おそる目を開きました。このとき看護婦のホッとした眼と、私のはずかしさにおののく眼とがふれ合いましたが、案外その懸念も薄くなりました。その看護婦は四十過ぎの年輩でありまして、これ又世にも珍しい醜女だったのです。その看護婦はとても親切にいろいろ面倒みてくれましたが、退院の日までズロースの件は一言もふれませんでした。私はそのことばかり気になっていて夢中で一週間を過し、無理やりに退院してしまいました。退院の日その看護婦は私に服を着せようとして、「パンツは洗濯しておきましたからお穿きになりますか」といって渡されたとき私は真赤になりながらすぐポケットへねじ込み、挨拶もそこそこにわき目もふらずに出てゆきました。

思えばあれから二十幾年、その内には約十年の軍隊生活があり、まだまだ傑作もありましたが次回にしましょう。今、私は妻と二人きりのわびしい生活を送っていますが、下穿きだけは妻と共用です。時々一人でデパートの婦人下着類売場のぞき込み、変ったのがあれば妻へ？ という名目で買ってくるのが唯一の楽しみです。

(おわり)

×

×

×

痛められし桃の実

(マリアンヌの手記より)

原作 セシル・フォーレ

翻訳 鴉 嘔 吐 夫

一

サン・ジェルマン教会の鐘の音は、一際高らかにあたりに響いた。

空は四月の麗らかな気候の下で、少し眠たげであるが、奇麗に晴れ渡っている。

介添人の乙女が、レースに顔を隠してうつむいているマリアンヌの手を取って、歩き出した。白い花嫁衣裳も美しい彼女は、ただもう、わくわくと高鳴る胸を押えて、静かに歩み出した。

結婚行進曲が、オルガンで奏せられると、人々は起立して、この花嫁を迎えた。

「まあ、お美しい」

「まるで、天使様みたい」

と列席の客の間から溜息が出た。

それ程今日の彼女は美しく神々しかった。

それに比べて、彼女の後から、これも式服

に身を固めてついてくる、夫のローランドの姿は、むしろ人々に異様な戦慄をもたえるもののようであった。

やや猫背な小柄の体。額越しにじろじろとあたりを眺める、三白眼の偏執狂的な鋭い眼。何となしに体中に漂う一種の妖気さえ感じられた。思わず列席の婦人達の間では「まあお可哀そうに」

と溜息とともに呟やいたものもいた位であった。

「汝、夫を愛するや」

牧師の厳肅な言葉が、静まり返った会堂に響いた。列席の人々は、頭を垂れてこの言葉を聞いていた。

「ウイ(はい)」

彼女の微かな返事が聞こえた。

人々は心の中でこの不思議な結婚について考えていた。

何時頃か、アメリカから帰って来て、巴里郊外に家を構えた、前身は、何をしていたかまるっきり、解らない、ローランドという男が、莫大な仕度金をやって獲得したマリアンヌ。そのマリアンヌは、町の唯一のパン屋の娘で、明るく陽気で人々の人気者であった。だがそのパン屋も、どうも経営が楽ではなかったらしい。彼女の希望も何も聞かずローランドが望むままに仲人を通じて、まるで人買いみたくに右から左に結婚を決めてしまったのであるが、おかげで店は、大通りに間口を倍に広げ製菓部さえ別につけた立派な構えにすることが出来たが、町の人々はもう、パンを買いに行く度に耳にした、彼女の明るい歌

声を聞くことが出来なくなったのだ。

二

夫は意外に優しくかった。

二人きりの部屋になると、そっと耳もとでささやいた。

「さあ、もっと楽な気持ちになりましょう」

彼女はこっくりと頷いた。結婚してしまえば、後はすべて夫の指示に従うものだという考えが、彼女の心を根強く支配していたのである。

美しいレースの花嫁衣裳の彼女を、そっと長椅子に横たえ、夫は静かに、背のフアスナーをひき、白い上衣を脱がせ出した。愛撫するような優しい手つきで、いつのまにか長いスカートも、美しい襷飾りのあるスリップも脱ぎ取られ、ブラジャーと、コルセットと靴下だけの姿にされていた。

その後に来るものを、彼女は怖れと期待の入り交った気持で待っていた。

まだ処女というものの、巴里の下町で育った彼女は、折にふれそのことについては色々聞かされていた。

だが夫はそれ以上彼女の衣服を脱ろうとはしなかった。じっと熱っぽい眼付きで、羞恥で身を震わしている彼女を眺めていた。

明るい燈の下でいつまでも唯見られているのは彼女にとっては、一層耐えがたいことで

あった。

(早くどうにでもして頂戴)

と自分から叫び出したくなってきた。

その時彼はいった。

「貴女はサンドウィッチを喰べる時、辛子をつけるのが好きですか」

「えっ？」

突然の質問に彼女も吃驚した。

「お肉の料理を喰べる時胡椒を振りますか」

「ええ」

げんそうに彼女は答えた、

「それでは私も、おいしい、おいしい貴女の体をいただく前に一寸、胡椒をつけてみたいのです」

「えっ」

彼女は夫を見た。そして、その時、夫の眼に俄にぎらぎらと、獣のような光りが浮んで来たのを知って、吃驚して後ずさりした。しかし長椅子の上に殆んど裸にされている彼女にとって、今更身を隠す所はどこにもない。世間知らずの彼女は、本当に自分が喰べられてしまうと思ったのである。

「ハハハハ」

と彼は愉快そうに笑って

「まさか、本当に喰べてしまいはしません。

貴女はまだ処女、この世の何ものにもまさる美しい宝を持っています。私は結婚式を神の前に上げることによって、貴女をどう料理し

ても良い資格を持ちました。貴女の美しい宝を手に入れる前に、少し胡椒を振って味を良くしたいと思ったのです」

彼女は黙って、身をすくめていた。一体何をされるのか、見当がつかなかったからである。

「良いですね。勿論いやとはいわせません。

貴女は私の花嫁、それに貴女のお父さんには私は沢山のお金を……」

「ええ、何うしても結構です」

何にも知らない彼女はそう答えるより外に方法がなかった。

「では私のいう通りになさい。声をたててはいけません。ほんの一時間位の辛抱です」

彼はそういうと、彼女を寝台の上に連れて行った。そして、その体をうつ向けにした。豊かに盛り上って、しかもまだ熟しきらない桃の実のような固さを持つ臀が、薄い真珠色の絹の下穿にくるまれて彼の眼を射た。金色のふさふさとした髪が背中まで垂れている。

彼は彼女の腕をつと取ったと思うと、さつと、ベッドの前縁にある鉄の環にはめた。

「あっ」

彼女は恐怖にかられた声を出した。白い清潔なシャツが布かれ、ふさふさした絹布団がおかれてある、豪華な寝台の四隅に、何時の間にか、無情の鉄の環が一つずつ備えつけられているのだった。それはあたりの優美な感

覚の花嫁を迎える新床とはまるっきり調子の違う、荒々しく粗野なものであった。
ガチャガチャと、両手を開いてはめられると、彼は足の方に行つて、両足も充分に広げ、ベッドの後ろ縁にある鉄の環にそれぞれはめた。

その時彼女は自分の体がやや吊下げられるようになつてゐるのが感じられた。布団についてゐるのは、乳房と、腹部だけである。後全体は後になつてそり返つてゐた。
もう彼女は完全に自由を奪われた。これから何をされるのか、唯恐怖の思いでじつと待

っているより外仕方がなかった。
その時夫は彼女の顔を、髪をひっぱつてぐつと仰向かせると手に持った四、五本の鞭を見せた。

先がこぶになつてゐる革の鞭。
尖った節々が見える日本の竹で出来た鞭、

中央から先にかけて、とかげの舌みたいに細く二本に割れてゐる、麻布製の鞭、

スラリと先が細くなつてゐる、しなやかなゴム製の鞭。

「お嬢さん。さあ、どれをお選びになりますか。今宵、花嫁のお料理を召し上げる前の、お菓子に」

彼女は恐怖に引き吊つた眼でその鞭を見た。今まで想像もしたことのない恐ろしいものであった。

「それで私を」

「そうですよ。貴方のお好みなのを」

「いやです。いやです。私はそんな恐ろしいもの大嫌いです」

「といって、貴方は私の花嫁、決して逃れることは許されません。唯、どれをお好みになるか選ぶ事が許されてゐるのです」

「私は、私は」

新婚の甘い夢を期待してゐた彼



女は、もう涙を流して後悔していた。

恐しさに体中が、ガタガタ震えてくるようであった。

「小猫ちゃん、早くお選びなさい」

夫は尚もきびしく催促する。

「さあ、どれになさいます。どれでも大好きなものをお早くね」

彼女は涙でかすむ眼で鞭を見乍ら考えた。

どれも皆痛そうであった。こぶがついて鞭でやられたら、お尻の肉がそぎとられてしまうであろう。先が二つに割れた鞭だったら痛さは少し減るかもしれないが、一ぺんに二つずつ打たれるのと同じである。先の細いゴムの鞭がなかでも一番痛くなさそうである。

「その、細い、黒い、ゴムで……」

後はもう言葉にも出せず、わーっと泣き出してしまった。

「そうですか。良くお選びになりましたね。」

私の可愛い小猫ちゃん」

彼はそういつて、他の鞭を、壁にたてかけると、その鞭一つだけ持って彼女のそばに来た。

そして掌で静かに、ぴったり穿められた、真珠色の絹の下着の上をなでていたが、やがて力一杯、その鞭を彼女の上に振り下した。

「びしっ」

と高い音がした。

「ううっ」

彼女の激しい悲鳴が聞こえた。彼女はまるで、自分のお尻に火がついたのかと思った。

そこからお腹から、胸の中までも、ガーンという衝撃に襲われ、体中が一ぺんにちぢみ上る程の痛さであった。

「びしっ」

鞭は何度も容赦なく振り下されてきた。

三

ようやく、その責苦を許されたのは一時間もたつてからだつた。彼女は殆んど失神していた。泣き声も枯れ果て、涙ももう出尽していた。

夫が静かに彼女の体を撫でていたが、それは却って跳び上るような痛みを感じさせていた。

皮膚中の神経が剥き出しになったような痛さであった。

真珠色の下着も、その衝撃に耐えかねて、方々に破れめを作っていた。

そしてその中から、痛々しく腫れ上った、桃のような固い肌のがぞいていた。

鉄の環が外された。手首にも、足首にも、赤い跡がナマナマしくついていた。

意識を失っているような彼女は、そのまま仰向けに転がされた。

「つうッッ」

彼女は悲鳴を上げて意識を呼び戻した。今叩かれたばかりのお尻は、柔い絹布団に触れてさえ、体中につき通る痛さなのであった。

尻を布団につける事が出来ず、足でさえ浮かし気味にしている彼女の体から、最後の下着も荒々しく外され、やがて、今宵花嫁となる………れたが、それは他所

の………きびしく責め………て、おちおちと体を休ます事も出来ない程のもう必死の最後の責苦であった。

翌朝、彼等は恒例により旅行に出発した。新しいスーツに身を整え、彼女は家を出た。夫は親切に鞆を持ってくれたり、色々世話をやってくれる。

見送りに来た両親も、(何てまあ、二人は幸福そうだろう)としみじみ羨やむように眺めていた。

誰も彼女の泣きはらした臉とは気がつかなかった。ましてその可愛らしい臀部が、ずきんずきんと、脈打って、激しく痛んでいることなどは。

巴里東停車場から汽車に乗った彼等は、取りあえず、南仏のリヨンに向う事にした。

一等のコンパーメントには二人きりしかいなかった。彼女はいった。

「私、腰かけられませんか」

それは恨みの色が交った言葉であった。

「そう。成程ね。じゃ、私の膝の上にうつ伏

していなさい。少しは楽ですよ」

彼女は床面にしやがむと、彼の膝の上に肩をのせ、頭を伏せた。

彼女の豊かな金髪を彼はやさしく撫でていた。

そしてこんな時は、夫はまるでおとなしく良い夫であった。

「マリアンヌ。リヨンへ行ったら、一つもつと美しいスーツと寝衣をこしらえてやろう。

寝衣は全部ナイロンチュールで、君の身体をもっともつと美しく見せるものを、一流デザイナーに頼んでな」

「嬉しいわ」

彼女もそういった。リヨンには、その頃、腕のたつ婦人服のデザイナーが、沢山いたからである。

八時間程で南仏の美しい街、リヨンについて。二人は、駅前のホテルに今晚又来る事を約束すると、早速町の、最も有名な婦人服飾店、エスポワールに車を走らせた。

エスポワールは、町の大通りからは少し外れた、横町にある粋な作りの店であった。

全盛時のダニエル・タリュウのように美しい、マダムが、奥から出て来て丁寧に挨拶した。

「奥様、ようこそいらっしゃいました」

「こいつに、何か素敵なスーツとそれからナイロンチュールの寝衣を作ってくれないか

ね」

「畏りました」

マダムは何もかも呑みこみ顔で

「それでは旦那様、型取りに二時間ばかりかかりますので、その間どこかでお待ちを」

「承知した。リヨンの商工会議所へ行って所用をすませることにする。それまで早く終わってもここで待っていたまえ」

と妻にいうと出て行った。

彼女はやつとホットした。

マダムは優しく

「それでは奥様、奥の仕立室へ参りましょう」

と彼女を連れて行った。

奥との仕切りを隔てる扉をあけると、一つ小さな部屋があった。部屋の隅には、四角い小さなロッカーが並んでいる。

「奥様、お着物を脱して下さい」

彼女は吃驚してそのマダムを見た。

「どうしてですか」

「良い洋服は体中の微妙な線を正確に計らなければなりません。ここへお出でになる方は、たとえ、大統領の御夫人でも、全部裸になって戴くのです。中には女性以外は居りません。どうか御安心して裸になって下さい」
 そういわれて彼女も仕方なく上衣をまず取った。そして、タイトのスカートも取り、スリッパもするりと頭から脱いだ。

後は形のよい胸をしめた、絹のブラジャーと、総ゴム製の、形のよい腰を被った、コルセットだけである。彼女が黙って立っている

と、

「皆です」

マダムは冷たい声でいった。
 マリアンヌは仕方なく、コルセットの上の

ガーターベルトを脱り、靴下を脱いだ。
 そして、まずパンティを取り、次にコルセットを取り、最後にためらい乍ら、ブラジャーを外した。

まだ処女の固さを残したままの、生れたままの裸の姿の美しい体が、小室の中に白く光った。

マダムは彼女の下着類をロッカーに入れると、彼女を連れて次の部屋に入った。

そこは、広い部屋で、隅々にカーテンで仕切られた幾つかの個室があり、中央に高い台のようなものがあつた。そしてその台の上に、十字の木の柱が立っていた。

彼女は、その台の上にたたされた。

誰もいないので、彼女はホッと安心して、そこに立った。

その柱で、まず身長、肩の高さ、乳首の高さなど計られ、今度は腕を広げて腕の長さ、手首までの長さを、横の移動する木によって計られた。途中、カーテンから顔をあからめたやはり裸の女性が、係につきそわれて出て

行ったりした。

「大体の検査を終わりました。今度は各所の検査をもっと精密に致します。微妙な曲線の変化を捉えるには、精密な検査こそ必要なのです」

彼女はカーテンをくぐって個室へ入った。そこには、不思議な台が一つおかれてあった。足で穿く、スリッパのようになっていて、作りつけの足台が一つ、それに革のバンドがついているのである。

マダムの手によって、まず右足をその鉄製の足台にのせられ、革紐で固定されると、今度は片一方の足を殆んど直角にまで広げて、壁の所の足台に固定された。

手は天井に下っている、鉄の環に結いつけられた。

そして、その耐え難い程恥しい恰好の彼女に構わず、マダムは、布の物指しで、次々と彼女の体の各部を、詳細に計り出した。足音の一番細いところ、ふくらはぎの各部のふくらみ具合、ひざ頭の太さ、太股のなだらかな曲線、その付根の最大の太さ、などを物指しで計って記入して行った。

やがて、足が更えられ、別な足で立った。

そしてその足も終わると、腹部、胸、顔なども全部計られた。一切の計算が終ると、彼女は個室で暫く待たされた。

すると、マダムの手によって、下着類が届

けられた。新しいナイロン製のパンティコールセットだ。彼女はそれを身につけてみて、始めてびっくりした。

それは、まるで、自分の体の一部かと思われる位、ぴったりとどこも無駄なく、布の皺さえつかずに体に装着した。

しかもいささかも体にきつくなく、ゆったりとさえ感じられるのである。

新しいスリッパをつけて、控えの室に戻ると、そこで新しいドレスを渡された。

「早速、物指しで、計算した数字通りに作り直したものです」

一種のハーフオーダーメイド・システムらしかった。大体の仮縫の出来ている種類の服を計量の結果によって、縫い直すのであるから、すぐ完全なものが出来るものらしい。

ドレスはまるで体そのもののようにぴったりしていた。

彼女は昨日の痛み、今の計量の苦痛も忘れ思わず夫に感謝している自分に気づいた。

マダムは別な箱を出して云った。

「これはナイロンのお寝衣です。今晚がきつと、もっともっと甘いバラ色の夢で充たされるよう、心をこめてお作りしました」

彼女は一寸赤くなった。

そこへ夫が帰って来た。

「おう、お前良く似合うぞ。さあ、私の可愛い奥さん。一緒に町を歩いてみんなに見せ

びらかしてやろう」

夫はそう言つて、腕をさし出した。彼女も腕をくんで新婚らしい気分で行へ出た。

その後を見送つてマダムは言った。

「可哀そうに。あの可愛い子に、あんな寝衣を注文するなんて、今晚きつと又痛めつけられるんだわ。……」

(続く)

△訳者註▽

本稿は、七月号の本誌に、一部、抜載された、マリアンヌの手記(黒いペチコート)の、実際に於ては第一部に当る部分であります。読者諸氏の御要望もありますので、一応許される限りの描写力を持って完訳してみたいと存じます。宜しく御高読の上、編集部宛に御意見御批評を戴けたら幸甚に思います。各部毎に、二回ずつ、十回で完訳の予定で、既に前回の、第二部の一回を除いて、後、八回です。御支援の程御願ひ申し上げます。

△マリアンヌの手記▽

- 第一章 痛められし桃の実
- 第二章 黒いペチコート
- 第三章 赤いペチコート
- 第四章 文部大臣の専属室
- 第五章 狂い泣く大交響楽

続・潰滅の前夜 (完結篇)

△「潰滅の前夜」(私は悪いことをしません)は本誌31年7月号並に8月号に、「続・潰滅の前夜」(晦冥の悲歌)は32年3月号に、「同じく」(惑乱の犠牲者)は32年4月号並に6月号、8月号に掲載▽

土 路 草 一

多穂子の調教

「何に！ 逢坂が捕まった？」

高木は逢坂辰一が検挙されたという報告を聴くと思わず、眼をむいて、声を荒げたが、

「しようない奴だ、へまばかりやりやがって……」

リーレの刺すような冷たい視線を感じると噛み捨てるように部下の失敗を罵倒した。

女上官であるリーレは家畜候補リスト、即ち、調べ上げた東京の美女一覧目録にチェックしていた手を留めて、殊更作ったような渋面で、

「此の際早く、口を利けなくしたほうが、よさそうね」

と事もなげに云う。

「……………」

高木は流石に、永年自分の片腕として駆使していた部下を、自らの指図で抹殺することに、人間的な躊躇を感じて言葉が途切れるのであった。

「本国の外国事情研究所からも云って来ているのよ、此

の際、敵・味方の区別なく、人間及施設を問わず、我々の攻撃計画に有害と認められるものは即刻抹殺せよ、と、大事の前の犠牲と考えて逡巡は許されませんよ。」

感情の介在を許さぬビジネス・オンリーの言葉を投げつけられて、高木は厳しい自分達の使命を改めて認識するのであった。

「早速、お言葉のように取りはからいましょう。」

従順な言葉に似ず怒ったように、口を一文字に結んだ。その時、電話のベルが鳴った。

課長が取り上げて、

「うん、そうか、ちよっと待ってくれ」

と受話器をリーレに差出しながら

「多穂子を捕獲して来たそうです。緑川君からです。」

リーレの瞳に、きらっと妖しい笑みが走った。

「どうも有難う、御苦勞様でした。はいはい、そうね、私が行くわ。」

電話を切ったリーレは

「一緒に下検分してみませんか？」

と高木を誘った。

多穂子は、スモーク・ブルーのピラミッドライン型、オーバーコ

ートの儘、後手に手錠を嵌められ、頬を二重の布で縊れる程きつく締められ、凋れた花のように床に崩折れていた。

「手数を掛けましたね、貴女の手腕は高く買いますよ。」

とリーレは如才なく百合子をねぎらってから、待ち望んでいた獲物の前へ椅子を引寄せる。

「とうとう来たわね、顔をお上げ！」

布の下で唇を噛んでいるのであろう。多穂子はかたくなに俯向いたまま、心の動悸を必死に押えていた。

「顔を挙げるんだッ！」

助手の一人が柔らかなような円味を帯びた腮を掴んで引起す。多穂子は詰りの眼眸を張った。

「私の招待が気に入らないらしいわね。でも遅かれ早かれ、お前は此処へ来なければならなかった動物なんだよ。」

冷酷な言葉が赤い唇から吐き出された。ややもすれば挫けそうになる眼と眼の戦いに負けまいと清新な乙女はむきになって眉をつり上げた。

「もう少し経てば、ペロのように私に感謝するようになるわよ。」

ふと不審の色を見せた多穂子に

「そうそう、ペロってのはね、お前の姉のことなんだよ。犬猫と同じ動物が伶子なんて、人間様並の名前を持っているのは、おかしいじゃないの、お前だって、此処へ来た以上、多穂子なんて名前は、もう要らなくなったのだから、家畜にふさわしい呼名を私が付けてやるよ。」

多穂子の胸中を寒々と朔風が吹き卷いた。先日、相木と一緒に此処を訪問したとき翠妃の口から出たペロと云うのは姉の呼名だったのか？ それは思いもよらないことだった。あのやさしい姉が、美の化身のような姉が、犬猫のように呼びすてにされているとは。妹にとってはまだ見ぬ家畜の世界ではあったが、姉の苦悩とこれから

の自分の運命とを慮って、白い指先をわなわなと震わし、もどかしげに轡の下から潰れた呻きを上げた。

「姉に逢いたいのかい？ せかなくともいいよ。どうせ、二匹共、私の愛玩品にしてやるんだから、いつかは逢えることになるよ。その前に、お前の品質検査と適合試験をしなければならぬ。」

意志の通らぬ乙女は心の平衡を崩されて、縋るように抒情の清眸を悶えさせた。それを眺めたリーレは楽しげに眉宇を緩めて、

「さあ、家畜の姿にしてやろうね。」

と助手に眼で合図する。

多穂子は吊り下っている二本の小さな錠に両手の拇指を別々に嵌められてから、後手錠を脱された。

自由になったかの思いで、急いで猿轡を解こうと思った時、カラと滑車の廻る音がして、拇指がぐぐっと上へ索かれた。よろめきながら、腰が上り、膝が立つ。吊鎖は更にじりじりと緊張を続けて、多穂子が伸びきる迄停まらなかった。

「よし」

声が出た時は、多穂子の足の拇指が僅かに床についているだけだった。全身の体重を爪先で支え、しかも、身体を垂直に保っていないければならぬ。

拇指吊り。初々しい処女は自分の身体の重みを、開いた両拇指に受けて「う、うっう」と始めての責に度胆を抜かれた悲鳴を籠らせる。

「余計なものを着けているからだよ、今軽くしてやるよ。」

耳許で、そんな言葉が聞えたかと思うと、助手は多穂子の手首を金色に彩っている小型の腕時計を取りはずす。真珠の指輪を抜きとって、ぽいと傍の助手に抛る。イヤリングをちぎり、髪を探ってヘヤーピンとリボンを床へ投げつける。もう一人の助手は、揺れている多穂子の赤いシューズを蹴り落す。オーバーの衿に手をかけると

ボタンを挽ぐようにぶつぶつと開く。中からローズ・チエックのセパレーツがあらわれる。フアスナーがさあっと引かれる。

垂れ下っている鉤に、服とコートの袖口を引掛けて紐を索く。するすると布地は腕を離れ、吊鎖を通して上へ抜けていった。スカートがぱらっと下へ落ちる。ごつい男の手がストッキングのフチへかかったかと思うとくるくると薄皮をむくように剥けていった。多穂子は身も世もあらぬ思いというのだろう。次々と手際よく引きむしられて、露出してくる自分の有様に、乙女心は羞恥で打ちのめされた。

「いや／　いやです／」

不明瞭な舌の哀訴を繰返し、ひたぶるに身を振って跳いた。だが、動けば指関節が極度の痛みに疼き、とても堪えられなかった。

スリッパが滑る。ブラジャーのゴムが伸びた。そして、ああ、遂に無垢な花は、生れながらの麗質を異人の鑑賞の眼の前に曝す。知性も理性も認められず、気高い裸身を単なる一個の愛玩物品として……。

多穂子の品質調べ

「轡をとっておやり。」

リーレは亀られた感情を押えて云った。多穂子は自由になった口一杯、新鮮な空気を頬張り貪婪に肺へ送った。

「家畜には、こんなもの不要だから取ってやったのよ。」

女主人は床にあらばっている下着やスカートを、ヒールで踏み躪じる。総ての女がそうであるように、食よりも尊く思う衣裳、身を飾り彩るのが女の本能であろうが、多穂子にしてみても、大事にしていたオーバーであり、セパレーツなのだ。財布をはたいて買った布地であり、腕を揮ったカッティングなのだ。そして毎日ブラッシングし、ペンチンオイルで丁寧に汚れを拭いていたのである。

それが、昔の召使の足で、塵芥の如く踏み躪られる。下着類にしても、今朝着替えたばかりの、アイロンの効いた清潔な品々なのだ。それが、靴底で、くしやくしやに踏みつけられている。

「どう？　空気が肌にあたる気分は――。さっぱりして気持がいいだろう？　まあ、少し寒いかもしれないけれど、直ぐ慣らしてやるわよ。」

多穂子は歯を喰い縛って返事をしなかった。屈辱もあったろうが、指に受ける痛みが時間と共に高まってきたのだ。額に脂汗が滲み、眉目が寄り、苦悶の皺が口辺にこびりついていった。

「苦しいのかい？　こんな責めはまだまだ序の口なのよ、でも、昔のよしみで下してやってもいいことよ。」

多穂子の心の中は意地にも唇を結んで返事をしまいとする。だが肉体は既にその気力を失って、乾いた息が弱々しかった。

「いつ迄、ぶら下っていようと、お前の勝手だが、返事ぐらいしたらどうだい？」

高木が威嚇の言葉を吐きつける。多穂子は肉体の苦痛に圧されてか、唇を開かない。

「鞭が欲しいのか／」

高木の疳癪玉が破裂して、額に青筋を立てながら鞭を振り上げる。リーレは慌てて留めた。

「一番バッテリーは私にさせるものよ。」

そんな言葉のやりとりが耳に入ると急に肌が竦んで人間的な体面が急速に動物的な恐怖に変わっていった。

「お、お願いします。」

と潤れた声が喉仏を痙攣させた。

「私はお前の所有者なんだよ、お前の生命も躰も気の向く儘、処置出来る飼主なんだよ。御主人様、お慈悲で御座いますから下して下さいませとお云い／」

社会から隔絶されて一時間も経っていない家畜には、その言葉は屈辱の旋風だった。多穂子の胸はかっとなえる。咽喉元まで出てきた言葉は舌の先で止って呪咀の瞳を放つ。

「自分から痛い思いをしようという人だね、馬鹿な牝だよ、でも私は鞭を揮えて楽しいことは楽しいけれど……」

ケンのある眼を細めながら、リーレは鞭を振りかぶる。

びしっ／

第一の鞭は微瑕のない明媚な肌に惨烈な響きをたてる。十幾年か柔かい被布で育くみ慈しんで来て、今、撩乱と咲き香り始めた肌に激しく鞭が炸裂する。

「あああ／」

悲痛な金切声が途って、繊細な筋肉が皮膚下で痙攣した。しかし情容赦なく引続いて兇暴に振り落ちる鞭は、間断なく発止々と……。

「ああ／ ああっ／」

肩が、背が、腰が、びくっぴくっとな引彎って、なだらかな曲線が鞭を受ける毎に躍動する。

「許して……云いますから……許して下さい、お……じ……ひです……から……」

無理もないこと乍ら、撫子のひ弱さは、台風のように荒れ狂う革鞭に脆くも打砕かれて、絶え絶えに、息の下で屈服する。

「もっと、皆にわかるように、はっきりと云うのだ。」

既に自分のとりまく多数の眼を意識する羞恥は吹き飛んでしまっていた。感覚のなくなった指と弱やかな肉体を労わりたかった。

「は、はい、ご、しゅじん、さま、御慈悲で御座います。下して下さい。」

吊鎖が緩められる。その儘、崩れそうになる身体を、荒くれた助手が支えて後手にする。そして足鎖を嵌めて、御主人様の足元に引

据えた。

「まぬけ／ 自分で自分を苦しめるだけじゃないんだよ。お前が柔順でなけりや、姉の躰も責められるんだ。せいぜい最愛の姉を苦しめ、喚かすがいい。その点、ペロは利口だったよ。お前のことを考えて素直な一級品になったものね。」

美貌はがくがくと首を垂れた。「そうだ、姉はこの苦しみ能耐えて頑張っているのだ。真暗な絶望の中で——。私には研一さんがきつと助けに来てくれる希望がある。暫くの辛抱だ。辛抱するのよ。」多穂子の胸にリーレの言葉は、このような反省を与えた。リーレは、足下に蹲っている多穂子の肩の隆起を鞭の柄で叩きながら、

「いい肉質だわ、鍛えて締めたら、品評会では特選ものよ。」

と高木を見返える。多穂子はやっぱり、処女本能から身をすさる。高木はその尻を蹴って腿を踏みつけ、乳房をぎゅっと握って固さを調べる。

「あっ／ いたい／ かにんして下さい。」

高木はそんな言葉に頓着なく、二の腕を掴んで、ぐいと振じあげる。関節の調子を見るのだ。

「あっ／ 痛い／ ああっ／ 痛いからやめて／ やめて下さい。」

前屈みになった身体をいざって逃れようとする。だが、家畜を扱った慣れた飼育課長の靴は腿を蹴って腹を突く。そして熟達した手捌きで髪を捌いて顔を引起すと、いきなり頬へ平手打をくれた。

「あっ／」

頬に火花が散って、身悶えもならず、美貌の心は恟々と絶望の深淵に沈んだ。

「じたばたするな／ お前の品質を調べているんだ。飼主さんに進んで躰を見せるのが家畜の義務だ。どうか、醜い身体ですけど、隅々迄よく調べて下さいと云うのだ。」

高木はわざと怒りの顔を見せて、純真な乙女の心をおびやかす。

「云えないのか！」

額がぐっと押しつけられる。首が背へ曲って、ぎいと骨が軋むようにねじれて息が停った。脅威が全身を占め、多穂子は、うわずって鸚鵡返しに言葉を綴った。

「私の醜い身体をお気の済むようにお調べ下さい。」
女主人はざまア見るといった顔付を露わにして、摺伏した新しい



家畜を見やる。

「研一さん！早く！早く救けに来て頂戴」
多穂子は只一つの望みを研一に托して、今はもう観念した臉からぼろぼろと涙を滂した。

研一の決意

研一は日天産業の階段を力なく降りていた。大阪からの荷物は配達されていなかった。YY運送の配達済の通知書を見せると係は首を傾げて「通常、荷受けは給仕がやることになってるので、受取れば帳面に記載されますし、又別に仕入先からの出荷通知もある筈はないのですが、それが全然帳簿には無いのです。」と日付を繰って「此のころは六太がやっていたのだが、？」と呟いた。ところが、その大野六太は既に日天産業を辞めていた。住居を訊ねると「それが同じ給仕仲間と一緒に借りていた下宿屋を引払って、今は何処にいますのだから解らないのですよ。」と口を添えた。

研一は虚しい足取りで売店へ寄って、電話のダイヤルを情報局へ廻した。

「都田か、日天産業の方は駄目だった……」

と話し出すと全部迄云わせず

「大変なんだ！ 多穂子さんが攫われた！」

と勢いこんだ声が受話器からきんきんと撥ね返って来た。

「な、なにっ！」

かあっと頭に血が上って思わず言葉が乱れる。

「アパートに住まわしてある部下の報告で昨晩から帰らないと云う。緑川洋服店へも出ていない。昨夜、帰途をやられたらしい。」

「しまった！ 送って行くのだった。」

「それに局長が先刻、総理邸から帰って来て君を呼んでいるのだ。」

直ぐ戻ってくれ。」

「よし！ 行く。」

研一は、がちやんと受話機を叩きつけるように置くと女店員の非難めいた視線を尻目に駆け出していった。

局長室から出て来た研一は、ぷりぷりしながら

「録音テープだけじゃ証拠不十分だと云いやがる。甲二十一号の苦心を何だと思っているんだ！」

都田に憤懣をぶちまける。

「国際関係の緊迫化が原因さ、相手がY国となると下手に出りや戦争物だ。」

日ならずして日本を攻撃してくるY国だとはつゆ知らない二人の会話は怒ってはいいても穏当である。

「外務省あたりの手温い交渉に任せるなんて云われた日にや、拐れた女は皆、処分されてしまうぜ。」

「今でも遅いくらいだ。総理の近辺から此方の意図が相手に洩れな

いとも限らない。」

「もう猶予出ない！ 緑川百合子は日本名だ。日本人として検挙しよう。」

「待てよ、そうしたら相手は完全に防禦態勢を整えてしまうし、それに今後の情報が入手出来ないことにならないか？」

研一は怒ったように遮って、

「多穂子さんがいなくて、どうやってキヤッチするんだ、多穂子さんが……」

と頭を抱えて、搔き巻く。

「その気持は解かる。併し、焦せてはいけない。今度の場合、一人一人芋蔓式に捕えて追いつめてゆく手は駄目なんだよ。」

「慎重にきめ手を廻して一網打尽か？ それにや物的証拠が必要なんだよ。テープじゃ駄目だとすると、もっと決定的な強力なものを握らなくちゃ。」

研一は唇を緊めて、熟考する。都田は黙然と煙草を喫った。タフ・マンの脳裏に愛しい恋人の面影が点滅した。麗貌を苦しげに歪めて……。多穂子さん！ 痛めつけられているのだろう。泣き喚いていることだろう。甲二十一号の報告した状況が幻影となって臉にちらついて来た。冷徹な諜報員の心にも、人間の悲哀が充ちて、激しい焦慮が胸を巻いた。

「よし！ 潜入だ！」

「なにっ？ 彼処へ潜りこむって云うのか？」

都田は、呆れてこいつ本気なのか？ と同僚の顔に眼を凝らす。

「うん。被害者の持物を盗み出すか、証拠写真だ。」

「馬鹿なことを云うな！ これだけのことを敢行している敵さんだ。並大抵の陣構えじゃないぞ！ 君は顔も知られている癖に無暴なことを云うんじゃないよ。」

「見知らぬ顔でも警戒嚴重なのは同じことだよ。虎穴に入らずんば

虎児を得ずってところさ。」

「本当にやるつもりなのか？」

「うん。」

研一は固い決意を眉にひそめてはつきりと答える。

「どうやって入る？」

「逢坂辰一を叩くんだ。内部構造を喋らせてみる。来いよ！」

研一は先に立って留置場へ下りて行った。

ペロは馬に着ける、横視防ぎの眼帯のような、固いビニール帯を装着されて、小馬車の轡畜に仕立てられていた。

眼帯は、両耳脇から二つの眼尻を蔽って前方へ突出で、視界を限定し、脇眼、横眼を禁じている。又、横を向こうにも、頭骸を緊めている革の輪と口を裂くような別製の轡から、手綱代りの紐が伸びて、強く後へ引かれているので進路だけを直視してなければならぬ。車は二頭、或は四頭立で、専ら来賓の見物用に使われている。家畜は装飾した華美な索革を肩と腰に巻きつけられ、ふくよかな胸のシンボルに金鈴を吊るされ、足首にも小さな銀鈴の数珠を繞らし、後手に嵌めこまれた索棒を握る。

今日は二頭立だった。

ペロの相棒が、六太の手に依って隣へ括られて、悲しく嘶いた。

ペロは、その気配で一級品らしく駿馬の態勢を採った。

「ルホーターさんが御気分がすぐれないので車を駆りたいと仰言るのだ。御気嫌を損ねないように、二匹共、全力を尽すのだぞ。」

六太は入口に女主人の姿を認めると、そう云って、家畜達の鼻面を把って車の位置を直した。

「どうも有難う。」

上級者の犒いの言葉を聴くと、六太は一礼して出てゆこうとする。

「あ、大野さん！」

とリーレは呼びとめて、

「暇だったら一緒に乗らない？」

「はい、よろしいのですか？」

上級者の信を得た思いで振返える。

「ええ、話相手があったほうがいいの。」

六太は遠慮がちに乗りこんだ。

「馭者を頼むわ。」

打鞭に邪魔にならないようにリングを通して曲折している手綱を張って、六太はひゆうと空鞭で轡畜の耳許の空気を切った。

リン、リンと妙に鈴が鳴って、轡が廻り始める。

「もっと早く致しましょうか？」

「片方は新品だから、足馴らししてからの方がよくってよ。」

足首の銀の鈴輪がリズムにのって、シャンシャンと鳴る中を、転がすような乳首の金鈴が間奏する。ペロは腿を水平に挙げ、訓練された駿足の足捌きで速駆けていたが、どうも隣の足がそれに合わないのだ。

女主人の言葉を聴く迄もなく、嘶いた時から新品だなとは感じていたが、これでは自分の肩にばかり重荷がかかってくる。この程度の速さではまだ良いが、全速になったら総てが自分に懸って、倍の苦痛を受けねばならない。ペロはいらいらして来た。

「ちよっ！」

廻らぬ舌を廻して、眼帯の視角でどうやら覗ける仲間の下半身を窺う。十分に熟れた腰部である。艶やかな腿である。数少い上玉の部類であることは解った。だが無駄な脂肪の削られてない肉付である。

新しい轡畜は、もう疲れを出して、足の運びがたどたどしい。

「弱いね。私にばかり引張らせるつもり？しっかり走ってよ！」

ペロの苛立ちが、次第に憤りに変わってゆく。身に付いた家畜語、

即ち声の高低、アクセントで示す獣語を放つ。

「あ、う、あ、あ、あ、う」

だが相手には通じないらしい。

「しょうがない、鞭を覚悟で歩調をおとして、重みを覚らせてやらなくちゃ」

ペロは躓いたふりをして速度を緩める。途端に隣の鞍馬はよろめくように足を縛して

「う、うん」

と息張った。

勿論、鞭は飛んで来た。

ぴしっ／　ぴしっ／　続けざまに二つの背を懲戒する。

「新品が遅いものだから、こいつが辛いのを知らせたのですよ。」
古参家畜の意図を見抜いて、六太調教師が上司に訴えた。

「ふうん、成程ね。じゃ、馬場で一責めしようじゃないの。」

小馬車は廊下を曲って調教馬場へ乗入れる。前面に峻嶮な登りコースが見えてくる。ペロは弾みをつける為、速度をあげようと腿を深く折ったが、ぐいと手綱を引かれる。隣畜に力捌きを教えようと馭者が許さないのだ。

「もっと前屈みになって、足先を踏張って、そらっ／」

ぴしっ／　リーレは軀を乗出して新馬の調教をする。ペロの上耳に、ぜいぜいと激しい息づかいが聴えてきた。漸く、車は坂道を登りきる。拭いもあえぬ二匹の純良の肌は、飛湍となって汗滴を流していた。

次は下りになる。家畜は反り返り、足裏で車の重量をセーブしながら、ずずっ、ずずっと降りて行く、馭者は家畜の動作に合わせてブレーキを適度に操る。中途が緩いカーブになっていて、その角に姿見大の大鏡がある。家畜達に自身の哀れな恰好を見せる為のものだ。

「どんな女なんだろ？」

ペロは自分にばかり苦勞をかける隣畜の顔を見てやりたかった。

が……だんだん近づいて、相手の姿が視野に入ってくると、家畜の、能面のような無表情が、ぴりりと感情を流して、探るような眼付に変わり、確かめるように眉を立て、最後に、ああ／　と眦を裂いて驚愕した。

「多穂ちゃん／　多穂ちゃんだったの、あ、ああ／　とうとう貴女も駄目だったのね。なんと哀れな／　姉妹して煉獄に繋がれ、業苦に悶えねばならないとは……」

絶え入るような絶望感が喉々と心の中を吹いた。思考は剥ぎとるように宙に消え、代って何か解らぬ強烈なものが脳体を襲い、がんと乱打し始めた。ごうと頭芯が鳴り、視覚が虚空で薄れ、耳膜はわあんと音を拒絶し、号泣が喉の堰をきる。

狂う一步手前とは、こんなことをいうのであろう。

しかし、一方、多穂子の方は違っていた。人間としてのプライドは死を恐れぬ憤怒に変じた。全身を貫いたレジスタンスは火の玉のように爆発した。猛りたって、肩を揺さぶり索具を振り解こうとする。足を挙げて振ぎろうとする。馬車はがたがたと横に動揺し、乗客は振り落ちそうになる。そして、伶子にもそれは伝播した。朽ちかけた心は、雪崩を打って鳴動した。

「ぐわあお／」

動物的喚声を上げて、轅をへし折るように身体ごと柱にぶつける。めりっ／　木柄に踵が入ったようだ。

「ペロ／　ペロ／　こいつめ／」

ぴしっ／　ぴしっ／

六太は手綱に取り縋りながら打据えた。併し、そんな制止を聞かばこそ、狂暴になった二匹の鞍馬は車輪を蹴り、車体を横倒しにしようとして索棒を拗る。近くの男達が慌てて駆けてくる。が、ちゃん、鏡

が銀灰色に飛び散って碎けた。

「ペロ！妹を殺してもいいのかい！」

リーレは癪高く叫んだ。伶子の心はすうつと氷に触れたように冷えた。

「姉の顔を焼き潰してやるよ、多穂子。」

妹の惑乱した頭腦が、がくりと怯む。

“いけない！ 私の我儘は姉さんを苦しめることになるのだ”

二匹は一瞬、互いの立場と境遇に分別を戻して、全身から力がついていった。ぐいっと手綱を引かれて、仰向きになった美しい姉妹の顔から大粒の涙が溢れ落ちる。そして地を裂くような悲哭が響いた。

「ペロ／＼もう一度調教の仕直しだね。約束通り、お前の暴れた罪は多穂子にも充分お裾分けしてやるよ。」

リーレは暫くしてから云った。

鏡の毀れた今、二匹はお互いに顔を見交す術とてなく、首を垂れる。

「駢足！全速！」

峻厳な革は、狂ったように、姉妹の肩に、背に、腰に炸裂を開始する。ききつと車軸が軋り、めまぐるしく床が流れた。

「積る話もあるうから、轡を脱し、手を取り合うくらいはさせてやろうと思っていたが、これじや当分の間は別居だね。その中、ゆっくり、多穂子を仕込んでやるさ、逢えるのは二匹の励み具合に依るんだってことをよく胸に刻みこんで置くんだね。」

姉妹は半年ぶりで逢ったのだ。身も心も危懼で摩り減らした末の邂逅なのだ。それも鏡の面を通しただけで……。革の鉢巻きや鼻輪や唇を金具で引開けた。人間の顔とも思えぬ惨じめな顔形で瞬瞥したに過ぎないのである。

今とて、脇視の禁ぜられている瞳はお互いの跳び交う脚しか見る

ことが出来ない。言葉を封じられた口は犬のように吠えることだけしか出来ない。肩が触れ合う程並んでいながら……。そして又、幾層倍かされた心配を胸に抱いて、幾週か、幾月か、逢うことが出来ないのだ。

「妹の家畜名を何と付けようかね、ペロ、広東にいた時、よく私が叩き出した野良猫の名前は何って云ったっけ？」

姉の心は、もう煮えなかつた。

「野良猫の名で呼ばれるであろう妹、慣れない苦痛を耐えてる可哀想な多穂子、でも、頑張るのよ、私の総てを尽して庇ってやるからね」

悲嘆の底ではあったが、何やら胸に、戦いに臨む時のような斗志が湧いていた、

リーレは、必死に馳せている。同じ血を分けた二匹のみやびな均齊肉を眺める。占有権を取得した喜びと嗜虐の楽しみが満面の笑となって、含み笑いが洩れた。

「……」

靴が臀部を蹴り、鞭が肩を貫いた。

リン、リン、リン、リン、

世にもまれな美貌の姉妹は、花の吐息を嵐にし、讃えられた筋肉の組成を崩し、ナイーヴな脚を馬脚にし、汗びっしりになって喪心の境で哀れにも鈴を鳴らしながら駈けていた。

潜入の成功

都田は一心にテレビ受像機械を睨んでいた。

見張りが幾人も事故を起すので、苦心の末考へついたのは、樹間に秘そかにテレビカメラを据付けて、丸い建物の気配を刻々キヤッチし写し撮ることだった。巧みに疑装したカメラアイに今度は敵もまだ感づいていないらしい。

画面に変装した研一の姿が映じた。舗道で立止るとマッチを擦り、煙草の煙をゆったりくゆらせた。心を落着ける為なのだろう。そして、手を肩の上で振って、さりげなく決行を合図すると大股に、門内に歩み入って行った。

都田はスクリーンから親友の姿が消えると、急に、凝っていた不安が潮のように盛上ってきた。

いけない！ 彼とは再び目見ることが出来ないのではないだろうか？

虫の知らせと云うか、点火された疑惑は燎原の火のように、いたたまれない気持ちに燃え広がってゆく。

「待て！」と通じる筈のないテレビに呼びかけなくなつて、せかせかと立上つて部屋を歩いた。壁際迄行つては、椅子迄引返す。右手で後頭部を掻いたり、顎を撫でたり、そして片手をポケットへ突っこみながら、又壁際迄歩く、

よし！こうなつたら相木の云う通り、緑川百合子を検挙しよう

都田は、もう待っていらぬ気持ちになつた。決心すると逮捕状を貰うため勢こんで飛び出していった。

一方、研一は何喰わぬ顔でエレベーターを降り、地下の関所迄は逢坂辰一の身分証明書でどうやら通つて来たが、幾曲りもしている廊下でちよつと途惑つていた。逢坂は流石に女達のことには白状しなかつたし、書かせた地下の路図も、あまり信用のおけるものではなかつた。

下手に扉を開けて藪蛇になつては拙い。研一の心は、ぴいんと弦のように張りつめて緩まなかつた。廊下は両側に幾つもの部屋口を持つた、何の変異もないコンクリートの通路である。

研一は勝手知つた者のような足取りで進んで行った。頭に刷りこんだ逢坂の地図を辿りながら右折する。すると其処は白い壁で行き止まりである。やっぱり！ 研一は改めて、自分が今置かれている

立場に思わず緊張した。幸い人影がない。研一は通りすがりに見た洗面所迄引返すことにした。トイレットなら怪しまれずに済むだろう。此処で待機だ。と臍を決めて、彼は水音を立てながら、そつと廊下を窺っていた。

靴音がして、声高に笑いながら男が二人、こつちへやってくる。外から帰つて来たらしく、オーバーを纏った背の高い男達だ。研一は内心、しめた！ と思つた。外出帰りなら此奴達の後を行けばいい。

二人の男は洗面所の手前の扉を開けて入った。潜入者は間を措いてノツプを廻す。が、途端に啞然とする。通路だろうと思つたのが、案に相違して物置らしく、がらくたが積まれてる部屋だった。見廻したが、今入つて来た扉の他に出入口は無い。それなのに入つたばかりの男達の姿がないのだ。

「ふうん？」 研一は隠し戸のあることを推察したが、何処だか、どんな仕掛だか解らない。

成程！ 仮に警官隊が押入つたとしてもこの先の通路は不明だ。並んでいる部屋を調べるだけが関の山だ。外部からの搜索の眼を此処で打切ろうとする巧みな算段か？

研一は用意周到な敵の構えを知つたが、さて、道を開く手段を知らぬ以上、どうしようもない。ままよと、彼は又気長に待つことに決めて、がらくたの陰で息を殺した。待つ程のことはなく、若い男が転ぶように飛びこんでくると床の隅に首を出している毀れかつたガス管の栓を捻つた。

普通なら出来ないことである。焔炉のない管の栓を捻れば単にガスだけが噴出するのだから。ところが、床が音もなく動いて、下に通じる階段が現われた。男は足音も荒く駆け下りて行く。研一は素早くその後へ躍り込んで跡を追つた。

廊下の突き当りに部屋があり、扉があつて、抜け出ると其処に黒

々と鉄格子の入口があった。そうだ、特殊家畜調教所の門なのだ。伶子や多穂子や其の他、幾多の女達が、後手の素肌を空気に晒らせながら、怒濤の恐怖で潜らされた門なのである。

門衛が黒い制服で頑張っている。

研一は、先に入っていた若者の素振りを真似て、足早やに証明書をひけらかして通り過ぎる。門衛が何か云ったが、さも急いでいるように、手を振りながら制止して足を速めた。そして、その視界から逃げようと廊下を曲った途端、研一は愕然と眼を睨らない訳にはゆかなかった。

見たのだ。甲二十一号からの報告を現実のこの眼で見たのだ。若く、はちきれそうな美女が四、五人、ぴしっ、ぴしっ和白肌に鞭を受けて、悲鳴を挙げながら追われてゆく姿を――。

研一は、ともすれば佇立しそうになる膝頭を運び、ぐっと声を呑みこんで通り過ぎた。

力又一の推進器

「掃除しましたら、車のシートの下からこんなものが出ました。」
高木の部屋へ入った若者は、手にした短波送信器を差出す。可奈子のプローチの下に隠されてあった小型の通信器具なのだ。甲二十一号が処分に困って突込んだものなのだが、高木はそれを眼にする
と事態の重要性を感じた。



「何号車だ? いづから掃除しないのだ!」
「三号車です。二十日間くらいシートは取って見ません。」
「なに! 二十日も抛り放したと! 馬鹿! 直ぐ運転日誌を持ってこい。」

高木は最近続いて起る事故に苛立って、声を爆発させた。

「心配することないわ、後四・五日で私達のものになる国ですもの、今更奴等がどんなに騒いでも後の祭りよ。」

緑川百合子が落着はらって慰める。

「だが、奴等が攻撃の企画を事前に知って防衛配置をしたとしたら、我軍の行動が困難になる。」

蟻の一穴をも塞がねばならない。一天地六の大勝負を前にして、

高木は千慮の一失を案じ、不測の発生を恐れていた。

「車の中で、そんなこと喋りました？　でも、シートの下じや声が通らないわ。」

「併し、捕獲中の家畜が持っていたものなら？」

「スパイって訳ね。そいつが持っていたとしても、攻撃のことは幹部だけしか知らないのよ。私達が喋らなければ洩れる筈がないし、仮に、洩れたとしても、この短時日の間に奴等はどうか置が出来ると云うの？　それに私達の情報網にはまだ自衛隊が戦斗態勢に入っただなどという連絡がないし、治外法権の此処を簡単に調べることが奴等に出来て？」

百合子は婉然と樂觀的な笑みをほころばす。

「悩まなくともいいわ。それより家畜を叩いて鬱憤を晴らしたほうが、よくなくって？　私は洋裁を仕込んだ店子に、畜生の基本でも教えて来ますわ、御一緒に如何？」

と多穂子を弄ぶことに誘う。

「まあ、後にしましょう。」

高木は苦々しく皺を刻んで、机に向った。

調教馬場の一隅に小さな池がある。

その他を水源にしてトラックを遮ぎる壕が馬場を一周して池に戻っている。

水温はいつも摂氏二十度を保つように調節されている。家畜の水
中訓練をやるのに寒冷に過ぎることを避けたのだが、と云って、人

間が泳ぐ夏の海水や冬の温泉プールの温みがあるというのではなく、飽くまでも家畜の調教を主体として計算した温度であり、文字通りの微温的な冷水であった。

百合子は池にカメラを浮べる。常夏の国に見る丸太を刳り抜いたような型の小舟で、顛覆を防ぐ為に片側に平行して浮木がついている。ところが、驚くべきことに、このカメラは、浮木と舟体の間に推進器を備えつけている。

推進器とは、即ち、白い捕われの家畜である。腰鎖を上部で留められて、後手を脱される。家畜は足をスクリューにし、腕をオールにして小舟を走らせるのである。

百合子は身軽に小舟に乗り移る。

「お前は泳ぎが好きだったわね、海水浴だなど一人で無駄に消費していたエネルギーを有効に使ってやるんだよ。好きな水泳でこの舟を走らせ、家畜の務めが果せるなんて、こんないいことはないだろう？　ふふふ」

多穂子は水の冷さで、歯をガチガチ鳴らしていた。寒暖に慣れていない肌は衣裳を剥ぎとられただけでも震えがとまらないのに、水に浸けられると骨髓迄凍りついて、適令期の優肌は、ぶるぶるっと切れ間なく収縮を続けていた。洋裁師匠は尖端に針の植った竿を、美麗な弟子の臀部へ刺し透す。

「そら！　泳ぐのよ！」

びくっと、痛みと畏怖が純真な乙女の芳しい心を支配する。ぼしやっ／＼腕が水を掻いて、バタ足が舟を揺すった。

「その調子、その調子。速度が鈍ったら、この鎖を引くからね、いいかい、試めすから覚えて置くのよ。」

手にしている家畜の鼻鎖を引く、それは鼻輪から水中の輪を通して船頭の手許に及んでいる。だから、手操られれば、推進器の鼻口は水中に没し、呼吸を閉塞してしまうのである。

「あ、あぶ！ あぶっ！ あぶ！」

多穂子の口は水中に没して、したたか水を胃の腑へ流し入れる。豊かな髪は藻草のように水中で揺らぎ、ふっくりした掌は苦しげに飛沫を擲んだ。

「わかったわね。」

百合子は恍惚として微笑む。多穂子は充滿した怖れで、力の最大領域で水を掻いた。百合子はゆったりと坐席に凭って足を投げ出しながら、チューインガムを噛み転がす。そして、楽しそうに口にハミングをのせる。凡てが順調にいつているからだ。

銀座の店は旅行すると云い置いて来たが、日本攻撃が済む迄、戻る気はない。目星しいものは大体手に入つたし、あとは見当をつけている獲物を強引に略奪すればいい。日本占領後は相当な地位が約束されているし、百合子のハートは満足感で充足していた。

舟は亡るように進んでゆく。

多穂子は水車のように娯やかな腕で水を掻き、優美な足の甲で水面を蹴っている。しかし手足は氷のように凍てついて、無感覚に廻しているだけだ。

喘ぎ詰まる胸の襲の中で、愛しい研一の面影を描く。しかし、それも瞬間、姉の哀れな映像が重なってくる。そして、自分の思ってもいなかった惨じめな姿容、なんと悲惨な、なんと汚辱に充ちた境遇であろう。麗しい眉目が皺って、水面に涙滴が流れ去る、心の萎えは、手足の緩みとなって沈んだ。

「遅くなったわよ！」

行人を眩惑させた腿に惨烈な痛みが刺さり、鼻孔が彎れてがぶつと水を呼吸した。

面影も汚辱も呼吸と共に溺れ消えて、絢爛たる家畜は美しい陰翳を水間に躍らせながら、推進器の役目に狂弄した。

研一の失敗

橋の上を調教の終った一群が索かれて行く、最後尾に位置していた可奈子は、ちらと百合子を眼端に捕えると、おやと探りの双眸を張った。

水面から覗かれた儀畜の横顔に見覚えがある。「あっ！ やっぱそれが多穂子であることを確認すると、思わず傷心の吐息が洩れた。」

相木さんは何をしてるんだらう？ 私の報告が届かなかったのかしら？

激しい焦慮が焰となった。

が、その頃、当の研一は馬場の入口に身を潜めていた。

展開されてくる数々の地獄風景に、悲愴な感情が大波となって胸を潰していた。既に隠しカメラで幾場面かを写し撮っていたが、多穂子か伶子か、可奈子に逢ってから抜け出そうと探しあぐぬいていたのである。

「おい、誰か探しているのか？」

不意に馬場から女達を引具しながら出て来た男に声をかけられて、さあっと脳髓が引緊った。どうしよう？ うまく云い逃れないと……研一は嵐のように騒ぐ胸を圧さえて、ままよとばかり糞度胸を決めて云った。

「うん、緑川さんだ。」

「緑川さんならボートに乗っていたと思ったな、行ってみな！」

調教師は何の不審も抱かなかったらしく振り返って、池の方を指した。その時、可奈子は研一を認めていた。列外へ出て注意を惹く、研一も感付いて、眼で領いた。

家畜の群は、こずかれながら、眼前を通り過ぎてゆく。突然、可奈子が躓いたように膝を折った。

痛そうに唸りを殺して、蹲った。

男は駆け寄りざま、鞭を揮って、

「立て！」

だが、可奈子は片足を立てるのだが、一方の足となると、さも痛そうに力を抜いてしまう。足首を捻坐したような素振りである。

「足首を傷めたらしいじやないか、俺が後で届けてやるよ。」

研一は甲二十一号の意図を計って、言葉の演技をやってみる。幸いにも、それはすらすら運んで、

「だらけてやがる。じや、頼んだよ、六号厩舎へ抛りこんできてくれ。」

男は、いまいまして舌打ちしたが、急ぎの用でもあるらしく云い捨てて、手鎖を研一に預けた。研一は甲二十一号を追立てる。スパイはスパイを馬具置場へ誘導する。入って扉を締めてしまうと可奈子は大きく口を開く。舌袋を脱ってくれというのだ。

研一は素早く取り除いて

「御苦労さん、いや、御苦労さんなんてもものじやないな、ひどいこんなではないと思ったよ、辛いだろうな、許してくれ！」

研一は心から云って頭を下げた。

「仕方がないわ、気の毒な方達を救い出す為ですもの。」

と可奈子は明るく笑ってから

「でも、よく入りこめましたわね。」

「うん、だが、そんなことは後でいい、その後の話を聴かせてくれ。」

研一は甲二十一号の裸身を眩しいもののように眼を外らせて云った。

「ええ。」

可奈子はその視線を意識して恥らいを肌に見せながらも、緊張した面持で、家畜の実体、機構、目的から幹部、手先の名前等を手早く語った。

「ふふん、大野六太はY国人か？」

「ええ、伶子さんは六太に大分虐められたらしいわ。」

そして最後に東京攻撃の企画を語る。研一は脳天をハンマーで殴られたように驚天した。

「そいつは大変だ！ よし、直ぐ手配しよう。」

と懷から消音拳銃を出して

「こいつを渡して置くから非常の場合頼む。」

「ええ、でも貴方は？」

「僕はもう一丁ある。」

上衣の裏を見せる。裸の可奈子は身につけることは出来ないの馬具の中に隠した。

「では今暫くの辛抱だ、頑張ってくれ、厩舎へ連れてゆくよ。」

「お願いします。」

と云ってから、可奈子は窘めるように

「多穂子さんを連れこまれてしまつて、相木さんの失敗ね。」

「うん。」

研一は悄然とする。

「可哀相よ、緑川百合子に責められていたわ。」

「すると、先刻のボートに乗ってたのは？」

「そうよ、多穂子さんはボートを泳ぎながら引張っているのよ、冷たい水の中で……」

「ええ？ この寒いのに……」

研一の心は押し拉がれて、苛責が怒濤になつて嚙んだ、多穂子さん、かんにんしてくれ、直ぐ救い出してやるから、ふと可奈子の肌が鳥肌立っているのに気付いて

「君だって、随分寒いだろうな、十二月だつてのに裸にして置くと、Y国人達は鬼畜に等しい。」

「慣れると平気。でも、多穂子さんは慣れていないから辛いでしょ」

う。

二人は部屋を出る。馬場の入口迄戻った時、研一の足は滑る。受難の恋人に一言、力づけたかった。脆弱な乙女心を慰め、励ましの言葉を掛けてやらなかったら朽ち果ててしまうかもしれない。そんな懸念が恋する者の胸を占めた。

可奈子は振返る。沈痛な顔色から男の心情を汲んだ、そして、注意しながら馬場へ足を踏み入れた。ああ、この時、研一が心の衝動を押えて、瞬時の逢瀬を思わなかったら、彼の勝利に終っていたかもしれないなかったのに、運命の皮肉、いや、又、それが諜報員たる相木研一の宿命であったとも云えるであろう。

研一は橋上に立つ。この世で唯一人の愛しい女が知覚を麻痺させた肉体で懸命に漕いでいる小舟の近づくのを待った。百合子は悠然と舟縁に凭り、パイプホルダーから紫煙をあげながら、新品家畜の健斗を賞翫している。ソフトな肌は冷水に濡れて、純白に光沢を放って死力を尽して水しぶきを挙げていた。

哀れさ、惨じめさ、そんなものは、もう、多穂子の思考の圏内には無かった。只、ばちやっぱちやっと他人のもののようになった腕を廻しているだけ、辛さ、苦しさも、全身から消え去り、しんしんと骨芯を責める冷気だけが意識の底に潭い、そして、それも眠いように稀薄になってくる。

研一は胸を締めつけられ、声を嚙んで、嵐のように漲満してくる憤怒に耐え、掌を拳にして眦を剝いた。可奈子は馬場へ入ってくるリーレを見付ける。慌てて鎖を引いて歩き出した。

が、その時、既に遅かった。気配を感じてか、見上げた百合子の瞳が、研一の瞳とぼったり出合ってしまったのだ。あらっ？ 洋裁師の眼に不審の色が浮ぶ。変装の研一が、ちよっと見分けがつかなかったのだ。研一は、逃げるべきか、対決すべきか迷った。が、逡巡を許さない場合がある。逃げた処で追われるに決っている。研

一は咄嗟に身を躍らすと小舟へ跳び降りた。

がくん、と舟が揺れる。

はっとたじろぐその脇腹へ、ぐいと拳銃を当てて「云う通りにしろ！」

と低くどすの利いた声を叩きこんでいた。

見上げた寂寥たる多穂子の瞳に、凜々しい恋人の面差が映って、ぱっと歓喜が胸をどよめかす。併し、それも瞬時に過ぎなかったのだ。研一が躍りこむ態をリーレは見ていた。

舟が岸边に寄った頃には、両側から屈強な男達が、ぐるっと研一を取囲んでしまった。

「お前は誰だ？」

「……………」

鋭い誰何にスパイは答えなかった。ちえっ、あっけない幕切れじやないかと自嘲が声にならない呟きを鳴らし、心の底では悔恨が渦を巻いた。

「相木研一と素直に云ったらいじやないの。」

リーレは貴やかに笑いながら、男の間から濃艶な容姿を現わす。銀色に眩ゆく光る短銃を腰に擬しながら

「飛んで火に入る夏の虫とはこの事ね、さあ、ハジキをお捨て！」
研一は潔くこれまでと敗北を覚った。今更、藻掻いても逃げ出せる道はない。改めてこれからの対策を考えよう。ピストルをぽんと水中へ投げこむ。

「流石ね、潔いわ。」

リーレは部下に命ずる。男達は捕虜に群って腕を捉えた。手錠を嵌めて女上官の足下へ引据える。

多穂子は悲愁の眼差でこの有様を見上げながら「ああああ」

可憐な咽喉を慄わせていた。

盲目の邂逅

研一は三日、四日と休む間もなく責め続けられた。リーレの云い草に依れば

「お前は日本の男だから、日本の責め方でやってやるよ。」

と松葉いぶし、石抱き、吊り、駿河問、うつ責、等、日本刑罰史上に残る責めを代る代る行われたのである。

自衛隊の軍備及配置兵力を云え、誘導弾の製造工場の所在及生産能力、B軍供与の原爆の量及所在、情報機関の組織及機能等――

入れ換り、立ち換り、所謂、波状的に問い訊す。彼の神経は連日の加虐に完膚無き迄に叩きのめされ、正常な起き伏しは失われて、リーレの足指を舐めて許される毎日だった。

その日も研一は拷問室に引出された。

スポーツで鍛えられた逞しい身体は、無惨な苦斗にも耐えていささかの衰えも見せていない。彼自身の心の中に、日本人としての自負と諜報者としての心構えを失っていない証拠とも云えるであろう。筋骨隆々と盛り上った肩、張った胸、筋の強さを思わす強靱な脚、それが女にみまほしい白さなのだ。加えて、きりりと緊った相貌、濃い眉の下で意慾的な煌めきを発する瞳、すっきりした鼻梁、一文字に結んだ意志的な唇、それは識見の高さと行動力の強さを謳って緩まない。

多穂子が心を打ち込むのも無理がないわ、とリーレは心に妖しいときめきを感じた。

「研、よく頑張ったわね。でも、もうお前に訊く必要は無くなったよ」

リーレは研一を坐らせて云った。研一はいつもなら脱してくる轡がその儘なので、黙って見上げる。

「東京攻撃が明日中に実施されるのよ」

研一ははっと毗を裂く。折角貴重な情報をキヤツチしながら捕われの身となった自分を悔む。

「はゝゝゝ」

男のような哄笑を浴せて、自分の勝利を誇示する。

「だから今日は恋人との別れをさせてやろうと思つてね、別れと云うのはね、今生の別れ、というのには、お前なんぞは飼育したって、餌代が丸損だから屠殺するのさ」

覚悟していたことだけど、研一の心に囂々と戦慄の風が吹いた。

リーレは頬を綻ばせながら

「でも、家畜として、生涯、私の玩具になって過すと誓うなら、命を延ばしてやってもいいよ」

揶揄うように云ったが、俯せている若人の眉宇が彎れているのを見て

「まあ、とっくり考えるんさ、だが、今は恋人に逢わせてやろうと思つてんだから、お礼をしなさい」

研一は多穂子に逢いたかった。その心を押えきれなかったが為に、こんな境遇に陥ってしまったのだから……併し、こんな奴にお礼を云うのは屈辱感を煽りたてる。

「お辞儀ぐらい出来ないのかい？」

異国の女は、いきなり床の鏝を通っている犠牲者の鼻鎖を索いた。

「う、うつ！」

鼻柱の痛みに、研一は呻き、自然、鼻を床に密着させて、お辞儀スタイルを形作る。

「素直じゃないわね。仕方がない、多穂子を鳴かせてやる。フィアンの苦痛に嘶く声が、恋人の鼓膜にどう響くか、見ものね」

と助手に愛玩品をとってくるように指図しかけて

「ついでにペロも連れて来るのよ」

と命ずる。研一は心が痛んで半身になりかけると不意に眼隠しを

される。

「あっさり、見せちや、面白くないからね」

驕慢な声が小細工する。間もなく、乱れた足音が研一の耳膜を打った。

「膝立ち！」

二匹は片膝立ちに坐らされたらしい。静かな気配から察すると二人共眼隠しをされているのではないだろうか？ 研一はそう推察した。その通りだった。伶子も、多穂子も眼を覆われて、其処に誰がいるかも知らなかったのだ。

ぴしっ／ 予告もなしに飼主の鞭が雅致のある柔肌へ降った。

「あっ／」

ぴしっ／ 冷酷な革は、片一方の同じ血を脈打っている乳白色の背に絡みつく。

「あ、あっ／」

二匹は不意の襲撃に嚙の舌を竦めた。

「どうだい？ お前の聴きたかった鳴声はどっちだか解ったかい？ 間違えるとおまえを打つよ、よく考えて答えな」

リーレは研一の耳朵を叩きながら云う。

恋人の悲鳴、それも、柔肌を迫害されて叫び上げる声、世の一般男女は恐らく聴いたことはないであろう。

「判断がつかないのかい？ じ



や、もっと永く鳴かせてみよう」

ぴしっ／ ぴしっ／ ぴしっ／

若肌を連打する鮮烈な鞭音が鋭く反響し、

「あ、ああ／ あっ／ ああ／」

と、絞り出てくるような悲鳴が尾をひいて研一の鼓膜の中に飛び込んできた。

研一の心は攪乱される。百合、カーネーション、ガーベラ、牡丹、それ等花々に例称されても、劣らない白眉の姉妹の泣声、それも一方は、生れて以来始めて愛した女、どっちでもいい、鞭を留めさせなければ……

研一の口が噤って、

「あ、う、う」

やっぱり、女は敏感である。その声を耳に入れた多穂子は、瞬間、其処にいるのが恋人であることを感知していた。

声を頼りに躰と鬢りながら

「あ、ああ／」

と悲しげに鳴いて、自分を訴えた。研一の胸も寥々と萎む。誇りも自負も花粉の如く吹き散って

「多穂子さん／」

口の中で言葉を包んで、愛しみだけを全身に表情しながら、見えぬ婚約者に向って身を摺り寄せる。若人は芳わしい女の愛の体臭を嗅いだ。あと一息、躰

の温もりが触れ合うのだ、と、身を投げかけた途端、脇腹を強く蹴られて

「むっ！」

と息が詰って顎を埋める。

「あ、あっ！」

蹴転されたらしく、女体の床にぶつかる鈍い音と悲鳴が伝った。

リーレにしてみたら全く素敵な見せ物であつたろう。恋人同志の精神と肉体を思いのまま賜ることが出来るんだから。

「そう簡単に抱き合わせる訳にはいかないわよ。私の持物である以上、私の意志に依って喜劇にも悲劇にもしてやるのさ」

研一は鼻面を索かれて、リー

レの靴で頭髪を踏み躪られる。そして、ずるずると床を挽かれてゆく多穂子の身体の音と轡の下から洩れる啾哭を耳にすると、不覚にも眼頭が湿って鼻梁を熱いものが通り抜けた。

三 疎みの責

「見納めよ、お互いによく見たらいい」

研一は微動も出来ぬように頭、首、手、胴、足ときっちり固定された直立の姿勢で眼帯を脱された。光線の眩しさに瞼を瞬って、許された直視の瞳を睜った。

ああ、正面の台上に、片足をゴム紐で吊られて立っている伶子の



足下に、乱れた多穂子の艶やかな黒髪があつた。膝立ちで、やはり身動きのならぬ蠱惑の顔が涙で濡れて、姉のすらりとした脛の傍から恋人の安否を覗いていた。これが最愛の女との逢瀬そして、今生の別れともなり兼ねない別離なのだ。心の慟哭が喘ぎを詰める。

「さあ、十五分だけ時間をやろう、家畜になるか？ 死を選ぶか？ どっちにしても人間を捨てることなんだけど、此処に三十発装填した銃がある。これが三十秒毎に発射する。最初は足下からだが、発射毎に銃口は上へ動いて、三十発目がお前の脳味噌にぶちこむように仕掛けしてあるのよ。まあ、ゆっくり考えることね」

とイニシチアテーヴをとった傲岸で、次に片足吊りの伶子に向う。「お前の足下に多穂子がいる。姉の足で蹴って、早く家畜になれと教えてやれ！」

伶子だけが眼隠しをされた儘だ。真暗な盲目の世界で妹を求める。

「あ、あ、あ」

と意味のない声で万剋の想いを示したが、ふと足首のゴムが引かれてゆくのを感じられた。ぐいぐい引張られて、脛は後へ曲ってゆく、すると今度は、じりっと、熱痛がその足のふくら脛を襲う。

「あ、あつい！」

伶子は力を張って、吊り上る足を留める。ゴム紐は伸びて、強力な牽引力が足首に加わる。ややもすれば、伶子の力は負けそうになって、脛の熱痛が倍加してくる。

「あ、熱っ！ あっ！ うっ！」

ぎりっと歯を喰いしぼり、前へ引戻そうと渾身の力を籠める。髪が粘って、額に垂れた。

突然、ゴムが緩む。ペロの足は後への牽力を脱された反動で、強烈な勢で前へ突き出される。それは、まるでサッカーのボールを蹴上げるように可愛い妹の顔に跳ねた。

「わあっ！」

多穂子は火の出るような痛さに呻った。

上向けない妹には姉がそんな仕掛けで蹴りつけているとは知らない。いくら命ぜられたからと云って、最初からこんなに強く、と姉不信の念が湧く。だが、伶子にしてみれば心で泣いていた。可愛い、只一人の愛し育んだ妹を、誇りの美貌を、我と我が足で蹴らねばならない。

多穂子ちゃん、許して！」

探索される毎に、いくらかでもその力を弱めよう、加減しようと思ふのだが、強熱を脛に当てられると忽ち神経が焼けて、うんと息張って力が漲ってしまう。そして見計られてゴムの力が消えるのだ。姉の足は勢いづいて、又妹の頬にぶち当たる。伶子の心は千々に乱れた。自分が責められるより辛いのだ。研一の外らすことの出来ない眼は、姉妹の脳乱の立場を見ていた。

何と云う非人道的な扱い方。何と云う惨烈な心の傷ぶり方。これが人間心を砕く一方法なのか？

ダアン！ 囂然と銃が鳴る。ひゅっ！と空気を裂いて、弾丸は研一の足を掠めた。多穂子は痛さを忘れ、ぐあつと驚愕の眼を見開いて、恋人の方を凝視める。

三竦みの責めとでもいおうか？ 一人が一人を氣遣い、一人が一人の立場を案ずる。そして一人の斗いが一人を責め、一人の苦悶を増しているのだ。リーレは心地よさそうに妄念の虜となって眺める。椅子を引寄せて多穂子の傍に坐るとシユーズを、胸で支えて、踵をぐりっと拗じる。

「う、うっ！」

呻きを楽しみながら腹部を突く。

ダアン！ 弾丸は研一の肩先を飛び去る。

男の心は、ふっと臆した。死が充実したものになって迫って来たのだ。

「う！うう！」「わあっ！」「むむ！むっ！」

各人の口から吐き出る呻きが、それぞれの惨憺を砦にして響いた。

「ふゝゝゝ。葬送曲ね。研、よく聴いてお置き！」

ダアン！ 計測された銃の弾丸は、頬桁を破り去る。

「むっ！ むめっ！」

後幾秒かで死が来る。額にぬらぬらと脂汗が光り、口は呟言のような不明な喚めきを吐いた。刻明に昂ぶってくる心臓、颯風のように迅まってくる肺臓、そして眼に映ずる最愛の女の竦みきった顔。研一の心は阻止出来る限界を越えていた。高い識見も秀れた手腕も、彼の魂を押し沈めることは困難だった。

ダアン！ 弾丸が耳朶を射ち貫いた。

「わあっ！」

一瞬、額面が赤く、被ったかに思えた。

多穂子も、もう泣いていなかった、最期の際の虚脱と云おうか、蒼白になった顔で瞬ろぎもせず注視している。だが、音とともに、視線はぼたと伏せた、心で神に祈っていたに違いない。

「あと一分よ、どう？ 家畜になるかい？」

例の情愛の片鱗だに無い声が、研一の鼓膜に伝わった。タフ・マ

ソの瞳に、灯の揺らぎに似た戦きが走り、哀願が宿った。心は木の葉の如く、くるくると舞い上った。

「あ、ああ！」

利けぬ口は、ついに陳情を述べる、激しい心の相剋ではあったが……

「家畜になるのね」

研一は光りを無くした眸で頷いた。

「ははゝゝゝ」

リーレは高らかな凱歌を鳴り渡らせた。

「洗礼よ、お舐め！」

定着機から脱され、引据えられた膝前へ、女主人はべっと唾を吐き捨てる。

研一の心は屈辱で濡れた。

「さあ！」

君臨した女の脚は白哲の首筋を踏まえる。

ホモ・サピエンス（理性の人）が地球に現われて以来、進化の一途を辿って来たその脳髓が、今、家畜にまで退化を強要されているのだ。

「ルホーターさん！」

その時、高木が幹部らしくもなく、取乱して飛びこんで来た。

「どうしたの？」

女上官は咎めるように振返る。

「攻撃が、今から三時間後と、本国から通信が入りました！」

「えっ！それじゃ、直ぐ外出している連中を呼び寄せなくっちゃ」

「えゝ、それに待避準備もありますし、直ぐ来て下さい」

研一はぎくりと肩を聳かす。ぎらっと眼底に燐光が煌めいた。彼の意識に祖国愛が甦ったのだ。そして奥深く低迷していた諜報精神が、忽ち活動を始める。助手に後仕末を頼んで、Y国人二人は足音も荒

く出て行った。

家畜三匹は一人の助手に追捲くられる。地下の国は急にぎわめて、廊下を通る足音は皆駈足だ。家畜は全部厩舎へ詰められるのか、横道からも一群がやって来た。

「頼むよ！」

引率していた助手は、用に追われてるらしく、相手の返事も待たず、自分の連れていた六匹の家畜を此方の助手に預けて走り去る。その群の中に甲二十一号が居た。研一は立ち並ぶ。そして、眼を見交して深く、合図した。通路を曲る。家畜の他に人影がなかった。今だ！ 本来の諜報員にかえった相木は、くるっと廻転すると、自分の運命をこの一事に賭けて、激しい頭突きで助手の腹部へ体当たりをくれる。

「ぐっ！」

腹を抱えて、くの字になる男に立ち直る隙を与えず、続いて、渾身の膝頭を突き上げる。

「むっ！」

男は脆くも悶絶して朽木のように倒れる。可奈子は、その喉笛をとどめを刺すように、ぎゅっと踏みつけた。やった！ 研一は思わぬ勝利に一応安堵したが、てきばきと次の行動に移る。

不自由な手で、助手のポケットを探り、手錠の鍵を取り出す。苦心して可奈子の枷を脱す、自分のも脱って貰う。男の身体から衣服を剥ぎとって、手早く纏う。助手の屍体を引摺って物影に隠す。その間に甲二十一号は他の犠牲者の桎梏を取り除いていた。

伶子と多穂子は、わあっと泣き叫びながら抱き合っていた。他の女達にしてもそうだ、互いに手を取り合いながら泣いている。

「研一さん！」

多穂子は相木の胸に縋りついて来た。研一は、温った滑らかな肩をやさしく撫でてやりながら、

「まだ、これからだ。さあ、頑張ろう！」

と可奈子を振向いて、

「可奈子さん。君は既舎の人達を解放してやってくれないか、僕は伶子さんと多穂さんを連れて、脱出口を確保する。待ち合せ地点は先刻の部屋だ」

研一は闘魂をきびきびした言葉に見せてそう命ずると、二人を連れて馬具置場へ引返す。隠して置いた拳銃を懐にして、姉妹を引立てている助手を装って、そろっと廊下を歩き出した。

資源幹旋会包囲

話を都田へ移そう。

都田は直ちに洋裁店を襲った。併し其処は藻抜けの殻であることは読者が先刻御承知である。都田は手遅れに唇を噛んだが、念の為、靴を全部調べて見た。

あった！それも東京攻撃の重大通信だった。都田は驚愕した。取るものも取り敢えず、そのまま素飛んで帰って上司へ報告した。直ちに緊急会議が開かれた。が、その結論は研一の帰りを待って、確実な証拠に依って検討した上で態度を決しようということになったのである。

それなのに、予定時日を過ぎても研一は帰って来ない。もう一日、もう一日とテレビを睨んで待ったが、潜入した諜報員の姿は遂に現われない。とうとう彼の努力も失敗となったと覚らざるを得なかった。

遂に、局長も立つことを決心した。国民を戦争へ引込むか、否か、Y国が戦争を計画していないとしたら、彼一人の死だけでは済まされない問題である。併し、彼は部下を信じた。死装束に身を固めた彼は、丸い建物を襲撃することを命じたのである。

自衛隊と連絡をとり、敵の出方に依っては砲を以って一挙に粉碎

しようと、戦車を後方で待機させて、先ず拳銃だけの警察隊が、ぐるっとY国資源幹旋会を包囲したのである。

時、正に昭和三十一年十二月××日午前五時――

が、併し、天はいずれに組したか？知らぬが、既に彼等一味は地殻の中へ深く閉じ籠って、本国から飛来するロケットの炸裂を待っていたのである。

「局長！Y国大使館に向った別動隊からの報告が入りました。建物に残っているのは、日本人の召使だけで、大使以下館員の姿は無いそうですあります」

局長は大きな眼をぐりっと剝いた。

「何にっ！すると、こっちの行動が洩れたか？よし、都田！」

と太い声で呼んで

「お前、乗りこんでみる！」

「はっ！」

都田は緊張した面持で命令を受けて、肩を闘志で怒らせ、腰の拳銃をしっかりと握りしめて、入口に立向う。降るような星空の下に、蛸のような足で支えて建っている丸い建造物へ向って、一步、又一步、凍てた道を踏みしめて近、て行く。門灯と玄関だけ残して、灯りを総て消した窓は、黒々と静まりかえっている。

刺すような寒気の中で、ぶるっと都田は武者震いが出た。

相木、今俺も行くからな、生きていてくれよ！

心が叫んで、眉を挙げ、丸い頂上をもう一度睨んだ。

その時。

あっ！蛸の足に載っていた球体が徐々に沈み始めるではないか。支柱の間へ、ゆっくりではあるが、エレベーターのように下って行く。

都田は思わず、運んでいた足を凝縮する。

やがて、球体は地上に着いた――と思ったのも束の間、それは更

に下降を続ける。そうだ、地の中へだ。水爆の強烈な放射能を恐れ、地上から隠蔽する為だ。

呆然としていた都田は、はっと手を振って隊員達に前進を合図する。ざざっ！と軍靴の音が、平和な外苑の舗道を響かせて押寄せる。ちかっと、球体の上部で何かが煌めいたように思った。とあの途端。サーチライトの光芒が、さあっと流れて、街路は昼のように浮び上り、ダダダッ！と機銃の掃射が隊員達を四囲に襲った。「わあっ！」

幾人かが、その弾丸の洗礼を真向から受けて、路上を血で染めた。

「バズーカ、前へ！」

都田は溝に伏せて、大声で命じていた。

その間にも、ダダダッ！と相互の機銃は鳴り続ける。俄かに、騒然と後方がざわめき、戦車のキヤタピラの廻る音が響いた。すでに球体は、半円となって没してゆく。

バズーカ砲隊が並木の端に進出したときは僅かに球面の上部を見せているだけで、今まで狂ったように鳴り響いていた機銃は嘘のようになり静まりかえっていた。

話を研一に戻そう。

研一は空鞭を揮った。前方から人が駈けて来たからである。怪しまれてはならない。殊更邪怪に二人をこずくように追立てた。

「ペロか？」

それは六太の声だった。伶子は習性になってしまった服従のポーズを形づくる。

「家畜は全部、檻へ入れるように指令が出た筈だが、今頃何処へ行くのだ？」

六太は不審気に研一に訊く、偽りの助手は覺られまいと顔を伏せた儘

「ルホーターさんが連れて来いと云われましたので」

「おかしいな？ ルホーターさんが自分で云って置いて？」
と覗き見える横顔に、あっと声をたてた。研一はすっと拳銃を引抜く、これ迄と、半身になって、ぐいと突きつける。

「大野君、眠って貰おうか？」

六太の顔は月面のように血の気が退く。膝が小刻みに痙攣しているのが、はっきり見えた。

結

末

甲二十一号は計器操作室の隣室へ忍び入ると、辺りを見廻しながら、自分の第二臼歯の充填物を抜きとる。白い粉末が特殊の防水の薬包紙に包まれて詰っている。微量にして、数十人の生命を奪う合成の毒薬なのだ。

潜入員は幹部を殺さない限り、脱出は至難と判断したのだ。傍の緑茶の中へばらばらと混じた。

操作室では、沈んで行く建物に比例して、逆に浮き上って映ずる外部の戦闘模様をテレビ受像機で眺めていたリーレが、緊張した眼差で壁時計を見上げる。

午前五時四十七分。正に東京攻撃三分前だ。ほっと緊張の息を抜いて、手許の湯呑に手を伸す。

東の空が茜に染まる。夜が白み始めたのだ。所謂、東京潰滅の前夜が……。

東雲に輝く空は、直ぐ巨大な爆煙が塗り潰し黒い落下傘部隊に覆われるだろう。太陽の指向する西の方角からは、砲声が殷々と砲しY国の艦隊が海面を圧して襲って来るであろう。

そしてY本国では次のような光景が展開されているに違いない。ロケットが発射台に立っている。計器盤のライトが赤く光り始め

新作切腹写真『女体自決悦虐図』(略号(えつ))

△血紅使用極鮮明実演切腹モデル写真△

大判判印画紙(タテ十八糎ヨコ十二糎) 焼付 七枚一組 千 円

うら若きモデル嬢が自らの腹部の柔肌に刃を当てて、一文字腹に十字腹に、或は又、臍の上と下二筋に、きりりと割つさばいて苦悶の表情も真に迫った切腹実演のフोट。苦痛に喘ぐ緊迫した表情、自らの手で我が腹を切る恍惚の表情など、すべて血紅を使用して一段と凄惨さを加えました。女体切腹フोटの決定版としてマニアの方におすすめる女体自決悦虐図。尚、従前代理部より分譲していました切腹写真は目録品切を機会に全部打ち切りとなりましたので悪しからず御諒承願います

【新版】女体緊縛フोट ◎分譲◎

R組 四十組 (印画紙の大きさ 9 x 13 cm)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二四〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円

R 1	柔肌と荒縄 (須川令子)
R 2	海浜の緊縛 (萩千恵子)
R 3	床間の飾り (佐賀美智子)
R 4	高手小手 (花坂道子)
R 5	海老縛り (萩千恵子)
R 6	後手猿轡 (須川令子)
R 7	後手足縛り (村田那美子)
R 8	鏡うつし (伊吹真佐子)
R 9	股間しばり (須川令子)
R 10	鎖縛晒責 (萩千恵子)
R 11	股間縛正面 (伊吹真佐子)

る。ビーコン始動、テレメーター始動、ガス圧力上昇、ミニトラック始動、切断装置よろし。シャイロ起動、変換器よろし、発電機よろし……ライトは緑色に輝き出す。

「Xマイナス一分、注意せよ。Xマイナス一分！」

電圧がチェックされ、ロケットのタンク内圧の測定が終る。

発射準備完了。レコーダーが動き出す。

「十、九、八、七……」

ライトは全部緑になった。

司令が息を籠めて、怒鳴る。

「発射ッ」

噴出する蒸気、眩しい閃光、大波のような噴煙と共に、ロケットは力強い唸りをたてて暁闇の空へ、日本攻撃の先駆として、昇騰して行くのだ。

都民は何も知らない。暁の深い眠りの中で、旬日に迫った正月の娛しい遊びを臉に描いていることであろう。

だが、今、東京攻撃は始まろうとしている。悲嗽を号泣に変える潰滅に向って、前夜は正に明け放たれようとしているのだ。

△後記△

(終り)

永い間、御愛読、有難う御座いました。

こういう風に書こう、ああいう風に運ぼうと種々腹案があったのですが、身辺の事情の為、今回で一応完結することに致しました。

その故か、急いで終りを纏めたような感があり、読者の皆様に不満足だと叱られそうですが、何卒御許し下さい。

いずれ、牀が空きました、編集部の御許しが出ましたら、稿を改めたいと思つて居ります。尚、又この拙い作品に対し忌憚無い御意見御批判を賜らば大変有難く存じて居ります。

R 38	後手首縄縛 (加賀利江子)	R 39	乳房下緊縛 (村田那美子)
R 37	仰向悦虐責 (川端多奈子)	R 40	肉体美誇示 (伊吹真佐子)
R 36	和装責め (藤田節子)	R 41	お灸責め (春日、伊吹)
R 35	手足逆吊り (伊吹真佐子)	R 42	後手猿轡 (萩千恵子)
R 34	首縄股間縛 (坂口利子)	R 43	松樹しばり (村田那美子)
R 33	股間従縛り (中富綾子)	R 44	コルセット (中塚文子)
R 32	薄羅の緊縛 (加賀利江子)	R 45	股間しばり ("
R 31	くさり責め (伊吹真佐子)	R 46	手足緊縛 (萩千恵子)
R 30	松樹後手縛 (村田那美子)	R 47	後手しばり (加賀利江子)
R 29	変型しばり (萩千恵子)	R 48	御開帳 (萩千恵子)
R 28	高手小手 (加賀利江子)	R 49	くさり責 (川端多奈子)
R 27	逆海老責め (伊吹真佐子)	R 50	折檻の魅力 (須川令子)
R 26	股間縛後手 (中塚文子)		
R 25	後手吊責め (伊吹真佐子)		
R 24	逆さ吊り (伊吹真佐子)		
R 23	椅子責め (佐賀美智子)		
R 22	強烈梯子責 (伊吹真佐子)		
R 21	帆立縛 (萩千恵子)		
R 20	いたぶり (春日、伊吹)		
R 19	足揚梯子責 (伊吹真佐子)		
R 18	緊縛横臥 (厚狭春江)		
R 17	立木しばり (村田那美子)		
R 16	トイレ縛り (須川令子)		
R 15	猿轡の魅力 (伊吹真砂子)		
R 14	開股しばり (川辺砂登子)		
R 13	尻立縛り (萩千恵子)		
R 12	女学生縛り (須川令子)		

新人モデル登場!

津森静子嬢の新作

今回本誌モデル陣に加った新人津森静子嬢のニュースタイル

R 51	雁字搦目 (津森静子)
R 52	股間緊縛 ("
R 53	のぞき見 ("
R 54	引き裂き ("
R 55	後手しばり ("
R 56	猿ぐつわ ("
R 57	苦悶の表情 ("
R 58	あきらめ ("
R 59	強烈しばり ("
R 60	トップモード ("

責められる女、責められる場面八態

北原純子画『風流女体アラベスク』(略号)

大中判印画紙 (タテ十八糎 ヨコ十三糎) 焼付 八枚一組 八百円

一、嫉妬の炎

自分は唯一の愛人だと思っていたのに、彼には自分にかくして、こんな美しい隠し女があったとは恵美子の物差しを持つ手は思わずブルブルと慄えた。

二、新妻鑑

新婚の夢まだ覚めやらぬ若妻はピチピチと張りきった鮎のような全裸の肉体に、ひしひしと乳房に喰い込む腰紐を掛けられ後手高小手のまま寝具の上に仰向けに転されている。

三、深夜の侵入者

「何をするのよッ」うつ伏せになった顔を左へ廻したとき、腰巻一つの姿で後手に縛られ猿ぐつわで噛まされた姉の姿があった。妹の太股がまるで生物のように跳ねて男をはねのけようとした。

四、古寺の怪

「ウウウ、ムムム……」噛まされた猿ぐつわの間から娘の呻き声が洩れる。ゆらゆら揺れるローソクの火に照らされて尙も

五、雪中の折檻

仏の権三は、その名前に似ぬ凄惨な形相で女の頸すじを下駄のままで踏みつけた。二十二、三の小股のきれ上ったいい女だが降り積った雪の上へ、腰巻一枚で後手に雁字搦目に縛られてころがされている。

六、ガール・フレンド

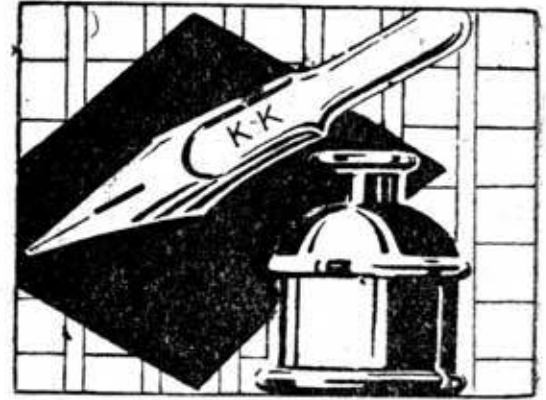
今日は珍らしく家には誰もいない。大学生の森川はガール・フレンドの緋佐子を誘って、ストッキング一枚の裸に剥いて柱に後手に縛った。箒を持ち出して両足首に括りつけて……

七、ズベ公のリンチ

首から足首までグルグル巻きに麻縄で縛られ猿轡をかまされたミチは、全裸のまま浴室のタイルの上に放り出されていた。

八、縁側の夕顔

庭の泉水では蛙が鳴いている縁先にぽっかりと白く浮かび上った夕顔のような全裸の縛られた女、



読者通信

七月号、一輝亭雑誌は素晴らしい読みごたえがあり、マゾ及び輝美愛好者の私にとっては、自分の今迄望んでいた事そのものずばりで何度も読み返し、たとえ様の無い興奮を覚えました。一輝亭は私の様なマゾ輝美愛好者にとっては正に天国です。本当にヘコになる事が出来れば、地位、名誉、財産等は何もいらぬ極楽です。この極楽にいつ行ける事やら、毎日悩んで居ります。読者の皆様でマゾ、サジの殿堂、一輝亭を築けたら、待望の夢が実現されます。何とかして一輝亭を作り度いものです。勿論、私はヘコを希望します。このヘコを使ってやろうと云うお頭様は、お知らせ下さい。又、作家

の内田武雄様、今後共、益々ヘコを活躍させて下さい。遊戯場での活躍や、又、冬場のヘコ生活も六尺輝一本の旧式なものにして下さい。ヘコを希望する男。

(豊橋市船渡郵便局止比良沢)

活潑な読者通信を拝見し御同慶にたえません。多くの同好の士の居られることを知って、大いに意を強くしました。しかし、小生の現実の生活は平凡な退屈極まるもので、奇巧を耽読することによって僅かに自ら慰めていきます。小生同様の、いわば恵まれない立場の方も少なくないと思うのですが、互に文通でもすることが出来れば大きなプラスになるのではないかとと思います。小生自身は軽度のサディストで、従ってマゾ的な女性の方と文通して戴ければ幸甚に存じます。(横浜市神奈川区斎藤分町一五七杉本光司)

「K・K」も、早や通巻百巻を迎えんとして居りますが、素晴らしい特集を期待して居ります。八月号で「切腹随想」を書かれた藤山秀緒さんへ。何時も苦情ばかり申し上げている小生ですのに、貴女が御怒りにならないでハッキリとし

た「女腹切観」を述べられました点、本当に頭が下りました。今後共一層の御活躍をお祈りします。本月号は表紙、内容共にチョット低調気味でした。土路草一氏の「続・潰滅の前夜」は益々佳境に入つて、完結編が持たれてなりません。土路氏の巧みな文章には感心させられます。星光一氏の「探偵小説の縛り場面」こう云った角度からの再検討も意義深きものと思います。御労作とは存じますが読者のために尙一層がんばつて下さい。矢桐氏の「アブ・モード・オイル・スクラップ」これは毎月続けて欲しいと思います。K・Kも此処の所、少しマンネリズムに陥つて来た様子。百号記念号当りから、そろそろ一大飛躍を遂げて戴きたい。(東一郎)

奇巧八月号、ワア！ 凄い！ 凄いい！ 何処から読んでいったらよいかと迷いました。本文の中から感想を述べます。「旅廻りの責め場面から」を一気に読み切つてしまいました。星光一氏に頭が下がります。挿画の北村ミツオ氏の筆、ワンダフル！ この様な場面の画を今後お願いします。本田氏の「マリヤ観音」は、本田氏のみが

描ける素敵な責描写で、挿画も全くとまりません。腰巻マニアの一人として今月号は豊富で嬉しい。牧高志氏の「腰巻のアンケート」はとても参考になりました。文章もうまいと思いました。和装教室の白金紅次氏の小説も興味深い。「魔女裁判に関するノート」の挿画は内容も素晴しくかたずをのみます。滝れい子さんの口絵の益々ファンになってしまいました。今後も時代劇のよい画を描いて下さいませ。私の提供の映画写真につき、諸先生から耳の痛い程批評を戴いて、提供するものもつらくありません。八月号は記事も挿画も豊富で断然素晴らしい。七月号で批評を書いて下さった岡山の長井氏へ、喜んで戴けて提供者として、この上ない喜びであります。編集長様から貴方の伝言を頂きました。御希望の「江戸千両幟」のスクリーンを提供してもよいと思います。又、お譲りしてもよいと思います。嵯峨さん映画の記事を書いて下さい。貴方の記事の載らない奇巧は一番淋しい、是非、是非！

(楓月太郎)

小生は本年二十六才で、御誌の大ファンです。全国の女装ファン

及びサドの女性とお友達になりた
いと切に希望致します。今まで美
しく化粧して自縛して、自らの心
を慰めて居りましたが、理解ある
御誌の同好の方とお友達になつて
色々なプレイをして頂きたいと思
います。他人に縛られた事は、子
供の頃、以後は全然ありませんの
で、同性の前では恥しくて自信が
持てないのかも知れません。です
から、出来得ればサドの女性の方
に縛られるのが理想なのですが、
必ずとは申しません、秘密を守り
其の方面の認識の深い方とお友達
になれたら幸甚と存じます。参考
までに、小生の女装自縛の写真を
同封致します。フラッシュなしで
セルフタイマーで写ったものです

(神戸 高峰君雄)

七月号を頂戴致しました。今月
は四馬孝様の『美への冒険』が大
変美しく好きでした。滝れい子
様は、六月号の『潰滅の前後』の
ような描き方のものがよろしいで
すね。私も東様の仰せのように、
七月号の伊藤晴雨先生の画が好き
でした。私は切腹の画が殊に下手
です。お手本にしたいと思つ
ています。K・K誌の印刷はさし
えが非常に美しく出ますので、私

は何時も感謝しているのですけれ
どそのかわり活字の誤植が多いの
で残念でなりません。此の分では
本に付いて一々説明に廻る必要が
ありません。先週の日曜に『東京のお
兄さん』が帰ってまいりましたの
で映画『道』を観に行きました。
ところが、暗がりでもポニーテール
のお嬢さんから時間を尋ねられま
した『スイマセン、今何時かしら
?』とね。それが不思議なんです。
服装は洒落たカッターにストラック
スなんです。兄は声はどう考え
ても男の人だと云いました。私は
女性だと主張しました。未だにど
ちらか判然といたしません。でも
そう云えば何だか、スクリーンの
明りを受けた横顔が少年みたい
に凛々しかったような気もいたしま
すが余り考え過ぎたせいかユメに
見ました。私は何でもユメに見る
くせがあるのですから。今度は
一つ自分が振袖若衆にでもなるユ
メを見たいものだと思つて居りま
す (京都 北原純子)

千葉、浜田佳子様へ、八月号の
読者通信拝見致しました。休刊以
前の「奇ク」殆んどを所持してお
りますから、何年何月号と御指定

下されば失礼ですが差上げます。
尚、軽いマゾの女性の方の文通を
お待ちしております。

(千葉栄市)

始めて御便り致します。小生二
十七才になる男性です。小生は男
同志の友愛に憧れる。ホモ傾向者
です。最近やつと復刊号を知り、
天にも昇る嬉しさを早速愛読しま
した。これから又、元のような生
甲斐のある日々を過ごさせて頂け
ると思います。とても勇気が出
てまいります。思えば休刊後、固
い絆から切離された物淋しさに、
例えようのない悶々の毎日の生活
これは同好の方々なら、小生の心
をよく御理解下さると存じます。
小生は片田舎に住んでいますので
「奇ク」を唯一の心の柱と頼み、
空想に耽けることだけが、小生に
とつて、せめてもの心の慰めとし
夢に見る楽しいホモ同志で、「マ
ゾ」「サド」に興味ある方との親
交を希望しております。そして真
に悩みを共に解消して下さる人の
御出現を待ちあぐんでいます。い
ろんなプレイも共に研究し、共に
楽しみたいと念じております。又
目下カメラ撮影に、モデルを探し
ていますので、友愛的にモデルに

なつて頂ける方、いろいろなポ
ズの研究もしたいと思つていま
す。から、よろしく御願ひします。
ホモ傾向者の方でマゾ、サド、
そしてあらゆる研究を実際にプレ
イしてみたい方、是非お友達にな
つて下さい。お便りお待ちしております
ります。今後共、何分よろしく御
願ひ申し上げます。

(岡山 白根敏夫)

私は四十六才の男性ですが、男
性の責めに興味を持っています。
最近、特にこの種のものが多いよ
うですが、どうかもっと沢山盛り
込んで下さるよう御願ひします。
分譲写真にも男性のものをどしど
し作つて頂きたいと思ひます。少
々年をとり過ぎていますが私等で
よかつたら、いつでもお役に立ち
たいと思つています。七月号「内
田武男」氏の「一揮亭雑記」は素敵
でした。次号を期待します。最近、
知り合った友達と色々な責めをし
ますが、いつも私は責められる一
方なので、マゾの男性の出現を期
待しています。怪我のないよう注
意して、思うままに責められ恥し
められたいと思う人はありません
か、最後に本誌の発展を祈りつ
つ (横浜 H・T 生)

六月号の「浣腸器具考」は大変に参考になり、我々浣腸マニアに取って誠に良い記事と思います。先日、あの文の中に有りました「ホットウオーターポトル」と名付けて有った器具は、近所の露店にて多分新品と思いますが売って居りました。文中には外国製品の様子に書いて有りましたが、国産かも知れません。丁度、現金の持合せがなく取りに帰り、一時間程後に買いに行くと思いましたが、大変残念に思いました。色はピンクがかった赤色、丁度普通の水枕よりやや小さく、同色のゴム管、約一米程、シ管、其他附属品一切付でした。或は奇巧の読者の方が買われたのかとも思いますが、あの器具は薬局などでも見かけないものでした。販売店など御存知の方はお教え願いたいと思います。私は今まで色々の器具を集めて居りますが、珍しい器具等を売っている店が有りましたら誌上に発表して下さい。私はゴム製医療器や浣腸器等を種々集めるのが好きで現在、エネマ・シリンジ一個、硝子製三十CC浣腸器一つ、二十CC二個、並びにいつぞやの誌上に

も投書されて居りましたが、脱腸帯マニヤの方の文を読んだから、私も小柳式脱腸帯両頭用一個、普通のもの一個、痔バンド一個、夜尿帯一個、等を集めました。男性である我々は、浣腸をして月経帯を当てるわけにもいきませんので私は浣腸をして痔バンドを使用します。そうするとかなり長時間持ちこたえる事が出来ます。拙い文ではありますが、色々の器具の使用感等も少々書きとめて居ります故、又お便りさせて頂きます。

(京都市上京区 吉井光雄)

千葉、浜田佳子様、仙台市、花村ミチ子様、お便り下さい。(東京中央郵便局私書箱一三二三号)

我が愛読するKK七月号に私の投書を發表して頂いた所、早速方々の乳房責め愛好家からお便りを頂きましたが、残念乍ら女性の方からのお便りがございませぬ。お便りを下された乳房愛好家の方々と色々のデータを交換したりするM・Tクラブ(Mはmilky Tはlank)を作りたいのですが、どうも男性から婦人にM・Tクラブにどうぞとは言にくいので、女性の方からのお便りを頂いてから

甲斐仁参案『涙のダイヤモンド』(略号 四馬孝画)

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

胃の洗滌

彼等に手取り足取りされた娘は真白い肉体を梯子の上に仰向けに固定され、両腕は後手に梯子の下で縛られ、両足首はそれぞれ梯子の棧に縛りつけられた……ゴム管の端についた漏斗からは、幾杯もの水が次々と注ぎ込まれ、胃が水で一杯になるとゴム管を引き出し、梯子を逆さ

ヒマシ油責

マダムは娘の手足を奇妙な椅子に縛りつけさせた。尻当てのない骨ばかりの罪の椅子に全裸のままで坐らせられた娘は………
△詳細解説は本誌七月号及八月号に掲載してあります。▽

おすすめるより仕方ないと思います。女性の方も是非お便り下さい。心楽しみにお待ちします。北原純子先生、滝れい子先生、誌上より失礼ですが種々御指導下さいますようお願い致します。私の勤務する所は産婦人科医院故、女性に接する機会が多くいやが上にもM・Tへの想いが募ります。KKに御活躍の先生、M・T責めの読物やグラビヤを是非お願いします(熊本県、奥山医院内 石橋昭七郎)

月岡映子様、七月号で私への読

者通信嬉しく拝見いたしました。早速誌上で私の愚感と思つて居りますが中々暇がなく折を見て試みたいと思ひます。然し女性として敢然とおしめに対しての意見を發表下さる事は本当に心強く思つております。今後もしどしど發表下さい。多くの女性の中にはこの様に興味を持って居られる事と存じますが矢張り積極的な男性にひきかえて女性には消極性なる故に發表といった点に躊躇されているのだと思ひます。何よりも淋しい事です。女性の奮起を期待してやみません。私は出来れば直接文通願つ

て意見の交換をしていただけたらと願って居ります。文通も又楽しいものです。
(S・A生)

私は本誌につきほんの三、四カ月程前に拝見しましたほんの初心者ですが、案外世にはサジストやマゾヒストの方のおられるのを知り意を強うしました。と申しますのも、私もサジズム、マゾヒズムに興味を持っております者です。しかし、これ迄にそのようなことを経験した事ありませんし、又機会もなかったので出来ませんでした。が、このようにして同好の皆様と呼び掛けの出来ることは大変うれしいと思っております。是非このようなことにつき皆様の御指導を頂き楽しくプレーを致して参りたいと思っております。東京都内並に近県の方とは文通に又、御目にかかる事も出来、一層豊かな毎日を送ることが出来るものと思ひます。又、その他の地方の同好の方とは文通だけでも出来れば、それでも大変結構だと存じます。どうか世間知らずな私であります。が、よろしくお願い致します。尚六月号に掲載の服部みどり様、貴女の様な素晴らしい肉体所有の方に何とかして責められてみたいと思

っております。殊にボーイフレンドの方は何と幸福な方なのでしよう。私も一員とされたいと思ひますので一度お手紙でもして下さいませんか。鷹野めぐみ様、六月号の記事拝見しましたが、もっとよく知り又、責められても見たいと思ひます。幸いにもお便り頂けたらうれしいと思ひます。
(東京都目黒区富士見台一五三五 佐藤義三郎)

七月号の読者通信にて東京ZYさんの「広い東京に小生の心の友が居りませんか、あくまでプレイとして男性に：云々」との所に目が止まり、ZYさんに心をよせたいと想って居ります。そして連絡方法ですが、或る喫茶店の電話番号を借りての連絡方法はどうでしょう。例えば、或る喫茶店の電話番号(83局四〇七九)を読者通信にてお知らせする。そして小生が毎月(七月、八月、九月)十日と二十日両日の午後〇時から一時まで、或る喫茶店の電話に近い席をとり、レジさんに小生が大野であることを名乗り、ZYさんのお電話をお待ちする。あとはZYさんが或る所から小生の居る或る喫茶店の電話番号を廻し、大野を呼

びだし、あらためて会う場所を決めるのです。そしてあとは、「プレイとして男性に云々……」のつづきと致したいものです、この様な連絡方法は、いかがでしょうか。良ろしかつたら、毎月の十日と二十日両日の午後十二時から一時にはかならず、気長くしてZYさんのお電話を、お待ちしております。
(東京の大野気長より)

浜田佳子様、8月号の貴女の読者通信の御希望、不思議に心がひかれましました。まあ誰か他の方で御希望に添って下さる方が居るだろうと思つて居りましたが、どうも気にかかりますので私も通信せずには居れなくなりました。復刊前のバックナンバーは分解して作品別にしましたので作品そのものを指摘して戴かないと御希望に添えません。そして貴女がマゾ女性とすることですが、マゾにも種々あり判断に迷いますが、もし「アリスの人生学校」または「被虐の家」でしたら貴女ならお願ひしてもいいと思ひます。(私は三十才代、奇巧は最初から保有してあり妻子ある会社員です)もし私に便りすることがあるなら、貴女がマゾとして特にどういう傾向の被虐を好

むか、(作品を指摘して下さいれば簡単にこちらで送付できる作品の選別が出来が)また同居者の状況(後で恨まれて抗議されては困る)をお知らせ願えれば幸いです。私もマゾ傾向ですが妻が不感症的なマゾなので実質的にはサジズムなのかも知れません。もしこれを機会に貴女と御文通でございましたらどんなに生活に張り合いがでることでしょう。か、それが楽しみです。(7月号のKK一ファン)

△編集部より▽
この通信に、「私の住所を発表するのは勘弁して下さい。その代り編集部を経由して下さい。されば私の所へ届くと思ひます。」と書かれてありましたが、このような文面が最近多くなりましたので一言お断りしておきます。以前手紙の転送をしておいた事もありましたが現在では一切幹施は致しておりません故御諒承下さい。

○ 東京H様、7月号の通信拝見しました。小生健在です。相変らず流暢に大きな興味を失いません。一生そうだと思ひます。H様のような同好の方と御通信出来る事を切望しますが、中々よい方法がありません。御説のように私個人と

してはホモ的な感興は一切ありませんので同性の浣腸には余り興味もありませんが、浣腸というものを介しての意味から矢崎氏の文章も読んで居ります。私等は、H様もそのようですが、臀部周辺に対する女性の羞恥、従って浣腸を与える側から見れば女性自らが自分の浣腸フェチズムを自覚して逃れ様としながら屈服してゆく過程が作り出すエロティシズムに興味を持つ事を意味するようです。従ってこの点、性的欲求に苦しみながらも貞節を守ろうと努力して居る未亡人を屈伏せしめる事に対する世上の感興と類似するもので特に異常なものとは思われません。奇ク誌上に現れる浣腸の表現には三つの形式がある様です。即ち第一はホモ的なもの、第二は、肛門直腸、大腸の感覚を主としたもので、どちらかというと、このタイプでは肛門より直腸や大腸に重点がある。従って妊娠との連想や切腹等内臓フェチズムと関連してきている様です。第三は小生等が感ずる上述の形式で、臀部肛門及び浣腸フェチズムを縦とし女性の意志を蹂躪する精神的サジズムが横となるタイプです。この型でサジズムが肉体的なもの、つまり縄

でしぼる、打つ、そして浣腸という様な型に発展することもあるでしょうが、小生個人にとっては女性の肉体に与える暴力は全く興味がないばかりか幻滅です。人間の精神機能とは不思議なもので色々な人間が居るものです。小生にとつては、その様な図よりも美しい若夫人や令嬢がベッドの上に着衣のままでも向うをむいて横になって居る。その前で医者が浣腸器の準備をしている、という様な画の方がどんなに魅力的かもしれません。H様如何ですか。奇クもその様なタイプの画や文章で浣腸を扱うなら興味を持つ多数の読者があると思います。色々の人々の浣腸を受けた時の様子、感情、感想等を簡単に書いて貰ってアンケート形式に集めても素晴らしいし、浣腸の医学的歴史、西欧風俗に出て来る浣腸の話や現在日本や外国でどんな浣腸器がどんな風に使われているかの解説、或いは文章絵画に現れた浣腸の話等を集めてはどうでしょう。一番可能なのは色々の人達手近い人達からでも、浣腸の体験人を浣腸した体験、人が浣腸されるのを見た体験を集めては如何ですか。H様、御奮闘下さい。小生の調査、研究体験、について語り

たいものです。その他にも同好の方、誌上に名乗り出て下さい。

(久里須照雄)

貴誌が復刊後順調に毎月発行されていることは大変うれい事と思っております。旧刊(三十年三月特大号)の中の「残酷なる女性たち」(二九六頁)のサーカスの練習の所に「器具を用いて不自然

な姿態を要求する加虐が特に米国では好まれているようだ」とのことですが、それについて新しいアイデアともいうべきものに偶然にも出会ってしまったのでお役に立つかも知れぬと思ひ御報告します。私の友人が事故の為先日負傷しましたので入院の見舞に行きました。その室にもう一人、女の入院患者が同室しておりました。その姿

女体緊縛フォト

G組 大中判印紙画焼付

各組1枚	一枚
五枚	一三〇円
十枚	六〇〇円
	(送共)

G1	鉄鎖と柔肌 (高瀬 忍)
G2	股間縛正面 (高瀬 忍)
G3	海老晒し (萩千恵子)
G5	羞紅の椅子 (菅登紀子)
G5	量感の帯 (伊吹真佐子)
G6	アイデア (萩千恵子)
G7	叫喚の森 (伊吹真佐子)
G8	全裸目隠し (村田那美子)
G9	優すがた (花坂道子)
G10	開股一番 (萩千恵子)
E組	(9x13cm 印画紙焼付)
ES1	ヌード緊縛集 (佐賀)

ES2	三枚一組 全裸悦虐集 (須川)
ES3	四枚一組 腎 羞 (佐賀)
ES4	三枚一組 酒宴の弄者 (佐賀)
ES5	二枚一組 脱がされる娘 (須川)
ES6	五枚一組 あわや寸前 (佐賀)
ES7	二組一組 剥れたズロース (佐賀)
ES8	五枚一組 乙女のすべて (花坂)
ES9	七枚一組 七枚一組 女学生の縛り (須川)
ES10	二枚一組 緊縛のベッド・シーン (佐賀美智子)
	六枚一組 三三〇円

が余りにも異様でしたので、この手紙を書く気になったのです。その患者は両足を完全に真一文字に開かされたまま特殊なベッドに固定されて居りました。女の年令は見たところ十八、九才でした。附添は母親らしき人が一人附添っていました。その女患者のベッドは頭の方がやや低くなっており普通より大分寸法が短いようです。画がうまく書けませんでしたので文章で説明しますと、ベッドの裾の方に八の字に開いた鉄板があり、その上に内側をスポンジで張った革のゲートルともいうべきものが取付けてあります。その上に丁度両足がのるように仰向けに寝ますと革ゲートルでスッポリと両側から足を包み四ヶ所に取りつけてある尾錠をしめます。足首にベルトを取りつけ、鉄板の先についている滑車を通して砂袋を下げます。これで頭の方が下つていきますので体重を利用して完全に両足を別々に引張ることになります。砂袋の重みがありますので自分の力では股をせばめる訳にはゆきません。この女患者は先天性股関節脱臼で入院しているのですが、もっと小さい内ならば簡単に治るものが、年がいつているので、こうして股を百八十

度以上に開き、それから骨を完全に入れてから股をもとの様に戻すのだそうです。私が病院へ行ったのは、この女患者が入院して一週間目だそうですが、一週間の間に約百九十度以上に股が開かされたわけです。用便は附添の人がさせていました。もっと日数を掛けて開いたのなら痛みも少いそうです。一週間で開かされたので夜もうなり声を出していたそうです。

(創刊号よりの一ファン)

私の部屋は文学書が三つの本棚に入りきれず積み上げられている小説をものにしたかと思つて早や十年になり、今もものにしたか。一して見せるの意欲は変らない。一つの小さい本箱は鍵が掛り、母も弟も、ましてや客も見事の出来な本がぎっしりと詰っている。此の中のものはいりきらないといつても外に積み上げる事は許さない。鍵をかけ忘れて、もし人目についた場合、私への信用は大きく変わるだろう。ひたすらに文学の研究をし、ネオンの巷に足を向けた事もなく、私の童貞を誰も疑わな

はムツとして私の前に立止った。しかし私の説明は上等兵初め同年兵たちに或る種の教育をなしインネンをつける糸口を断つてしまつた。三十才を過ぎた今もその信念は変わらないし身の清さも変つてはいない。そうした私ではあるが、自己の意志以外から頭に浮び上る考えがあつた。女性の白肌の美しさへの思慕、此れは甘えたいのだから自分の女性への思慕と切替えられた。が、自由を奪われた女性の美しさ——。と想いが走ると、これが自分の考えか、と戸惑つてしまつた。こんな想いは十五、六才の頃からであり、早熟な私であつたのだ。だからサックを大地に叩きつけて何事もなく外出した私は北京の街角に見るクーニヤンの支那服に見とれたものである。太股をチラリと覗かせる裾割を見送つたものである。それは性の対象としての女性ではなくて、美を持つ女性への思慕であり。一旦性の域へ入ると理性を持つ人間に帰つていた。最近では女性の下着に女性の白肌を感じる様になり、或る意味で正常に戻つて来ている。(奇ク読者以外はやはり異常であろう)かつては古雑誌を漁り、その内容の中に責絵があると買い、スク

ラップしたものである。これは奇クに参考資料として送付し止めて以来、女性の下着と変り、同写真を楽しんでいたが、此の頃はカタログを送つてもらう様になつた。しかし現物を送つてもらう勇氣はない奇クあての小説を書きかけてはボツにする私は、将来の小説家となつた私を予想して自分を尊ぶからである。しかし、かく文を起したのは下着をアツセンしてほしからである。そして京都の奥村弘子様の仲間入りをしたいし、池田ふみ子様と仲良くしたいからである。池田様、奥村様、最初編集部を通じて住所を知り合い、御都合をして下さいませんか、私の願ひのかなう事を祈つて初めて書いたこの文を終わります。

(兵庫 上田英雄)

○ 横浜のK・S氏へ、小坂多美枝です。本誌へも永らく御無沙汰して居ります。文通をお望みでしたら御応えします。住所氏名は編集部へ御紹介下さい。(小坂多美枝)

○ 浜田佳子様、八月号に於ける貴女の通信拝見致しました。私とて貴女と同じ様な事を致してしまいました。が、又或る程度取り揃える

事が出来、二、三欠けてはおりますが貴女の希望は大体そうだと思います。又その他の資料もありますので、よろしければ御目に掛りたいです。いろいろ都合の点や、その他の件について指示して下さいれば従います。それからこちらは紳士の行動を取り貴女の御迷惑となる様な事は致しませんから御便り下さる様御願ひ致します。なお私の住所は二月号の読者通信に出ています。花村ミチ子様、突然貴女に呼びかけ致し失礼とは思いましたが御ゆるして下さい。八月号に於ける貴女の通信を拝見致し、すぐ様筆をとっている次第です。私は東京在住の一ファンですが文通だけでも御願出来たらと思います。私はサドマゾ両面に興味のある一青年ですが、貴女がすぐ来いと云うならば、すぐにも伺いたい位に思っています。又、資料を御目にかけたりいろいろ伺ったりお知らせしたいとも思いますので是非お便り下さるよう御願ひします。

(東京、土屋生)

○ 今度完結の「潰滅の前夜」は題材の新奇、内容の目新しさからしても、恐らくこの種読物としては最高水準であるに違いない。サデ

イストとしてKKの中に飽き足らぬ読物も少なからぬところ、大判時代にさえも曾て無いとまで興奮させられたのは、果して自分だけだろうか。伶子、可奈子、それから誰、それから……、彼女達ののけぞった腹の曲線から、びつたり合わせた腿の赤い鞭痕を想像するだけでも楽しい。全く、作者の土路草一氏に敬愛と感謝の念を禁じ得ない。それだけに、かつての「クリスチーナの受難」の如く絵入りの単行本としてまとめたのだきたいのである。昨年の七、八本年の二、四、六、八、九月号ととんでしまったのでは、折角の力作も迫力を減らしているではないか。無論、編集部でも既に企画済かもしれないし、この文が着く頃には発表もされているかもしれない。そうなっていることを祈りつつ、又多数の共感者の存在を信じつつ、あえてこの筆を執った次第である。(神戸、山村光治)

○ 始めてお便りさせて頂きます。先日或る古本屋の店先で奇クを発見し、何気なく開いてみた所、今まで小生の求めていたのに全くおあつらえ向きの本なので早速買い求め深夜まで読みふけりました。

まだ、とびとびに二、三冊しか読んでいませんので読者通信などに出来るものではありませんが、敢て一筆とりました。小生はマゾヒストのはしくれとして同好の一員に加えてくれれば光栄と存じます。小生は女性の下着、特にズロースやパンティイなどの下ばきに心ひかれます。更に進んで、これらの下ばきを直接はかれる女の方のお尻に敷かれたらどんなに良いだろうなあと夢みています。私をこんな目にあわせてやろうと言われる若い女性の方がありましたらお知らせ下さい。(京都、S・T生)

○ 八月号拝見いたしました。拙い文をお載せ下さいましてありがとうございます。あの頁でわねうございしました。あの頁でわねうが心のたかぶりを覚えましてのは、ひとえにあの素敵に優美なカットのかけで、丁度花の香にむせびながら羞らにうづく乙女心を抱いて甘美な夢に身をまかせているかの様な何ともいえないやさしさにかざられていたからです。文の方がはるかしくなる位カットの美しさに魅せられてしまいました。私は怪奇趣味は決して好きではありませんが、いろいろの企画を豊富に取り上げて下さる御誌を

今後愛読いたしたいと思ひます
(東京都神田小川町・原由貴子)

○ 初めてお便りいたします。私は昨年の秋頃から愛読する一女性です。私は奇クの存在を知ったときには、こんな本もこの世にあったのかと思ひ、私が求めていたものはこれだとさることでございました。私は女でありながら、こういった本をよく読むのですが、奇クを手にした時程の異常な感激は今まで味ったことはございません。雑誌に載っている緊縛フォトを見ていますと、急にほしくなりましてが、しかし、家事の手伝いをしてる私にはいとお小遣もままになりませんので、少しづつでも買いたいたいと思ひます。どうかその節はよろしくお願ひします。末尾ながら貴誌の御発展を祈ります。

(奈良県南葛城郡・寺本葉子)

○ 千葉の浜田佳子様、仙台市の花村ミチ子様、是非とも文通をお願いいたします。小生は二十七才、二十七年十月号以降の愛読者、(福岡県糸島郡前原町高祖、矢木修助)同じく千葉の浜田佳子様へ(千葉県印幡郡酒々井町上岩橋、磯山喬)